
ブラットオブソディアック

駕籠の鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラットオブゾディアック

【Nコード】

N1516F

【作者名】

駕籠の鳥

【あらすじ】

昔戦争が起こった。戦士と魔法使いの戦いだ。その戦争は終焉を迎えたが新たな戦が始まる。それが心境戦争である。主人公たちはどう立ち向かいどう変わるのだろうか・・・

始まりの唱・契約（前書き）

この作品は某ゲーム会社を題材とした非完璧オリジナルです。
キャラクターはオリジナルで、単語は使用しています。

始まりの唱・契約

プロローグ

某1000X年、世界は魔術を使う魔導師の軍と兵器を使う兵士軍との戦争、対立戦争が起こっていた。魔導師達は自然の力から生み出される獣、自然生還獣を操り己の魔術を駆使して戦っていた。それに対して兵士軍は最高技術と言われる錬金術から作られた武器、錬製兵器で戦っていた。魔導師軍を仕切っていたのは大魔術師カルディア。兵士郡を仕切っていたのは、大剣士エグナ。エグナは戦いの天才とは言われてはいたが、カルディアは、参謀の天才と言われていた。いくら戦いの天才でもカルディアの戦いによる畏にはかなわなかった。いくら最高技術の錬金術を駆使しても自然の前には歯が立たなかった。しかし、エグナは混信の一振りで魔導師軍の4/5を削った。この技が後に最高剣術奥義「天空龍牙神殺斬」と言われることとなった。兵士軍はその後30分も満たないうちに、カルディアの「ダークネス・デス・アルテマ」によって滅んだ。対立戦争は魔導師の7/10を犠牲にはしたが、勝利した。この大戦争の後、一つだった世界は「表の世界」と「裏の世界」の二つに分かれた。魔導師達は裏で、残った兵士軍は普通の人々と一緒に表へと移った。そして、カルディアは兵士軍を倒した英雄となった。また、エグナも戦争には負けはしたが勇敢なる英雄となった。二人の英雄の名は世界中に知れ渡った。対立戦争が終わって約600年が経ち、魔導師達の数多くは力が衰えていた。その結果、力が衰えた魔導師達は裏の世界から表の世界へと移った。それを知った力のある元・兵士軍達は表の世界へと移った。しかし、この二つの世界から一つの統一化を許さない者がいた。それこそ神・オーディーンである。オーディンは戦争の神。そこでオーディーンは仕掛けた。「12人の戦

士を選んで12人の戦争を。」と。その12人の戦士を選ぶのはオーダーディーンのもつ鏡「神鏡」によって選ばれるのだ。その12人は戦士は「ゾディアックの戦士」と呼ばれるのであった。しかしゾディアックの戦士にはルールがあつたのだ。そのルールとは、「ゾディアックは魔導師と兵士から選ばれる」というものだ。これこそが、ゾディアックによる内戦『ゾディアック神鏡戦争』。略して神鏡戦争である。神鏡戦争は10年に一回行われる。そして今回が・・・10年目・・・。

第一章 始まりの時

第一章 始まりの時

朝の静けさが、妙に気になったりするAM：5：00。

注文もしてやいないのに俺の目蓋の時計が起きるとも言っているのか、目が覚めた。

自分の体に愚痴っているのは黒木蓮^{くろぎれん}である。青のかかった髪に、コバルトブルーの瞳。何かと青が関係している。

「ん……。んん……」

蓮は時計を見る。AM：5：00。

「5時……。チツ、いつもより2時間も早いじゃねえか」

かといって寝ようにも寝れねえしなどと言って、カーテンを開ける。もう冬もまじかに迫る季節だった。外はもちろん暗い。

「ん」。しかたねえな。・・・アレでもするか」

そう言っただけ蓮は、自称仕事場の地下に行った。地下には本や資料がぎっしりだった。彼は一人暮らしである。しかし、資料は彼の物では無い。それは養子として蓮を迎えてくれた父・貴良^{たかよし}のである。

「しかし、親父も余計なものを残していったなあ。何せ魔術の研究の資料なんて」

そう言うと蓮は手を翳^{かざ}した。そうすると、なんと本や資料が飛んで

いくのである。そう、なんと彼は・・・魔導師なのだ。次から次へと資料が整理されていく。

「うし。やっと終わった」

と呟く。彼は上がろうとする。上がる時に彼は気づいた。机の上にある二つの本を。一つは『対立戦争と残劇』と書いてあった。彼は簡単にさつと開く。その本は800年前の大戦争・対立戦争のことが書いてあるものだ。この本は魔導師にとっては当たり前の歴史だと言わんばかりに本を置いた。彼はもう一つの本に目をおいた。その本には見覚えの無いタイトルが書いてあった。そのタイトルとは『ゾディアックと神鏡戦争』と書いてあった。蓮はその本に興味を持ちリビンググに持っていった。

「神鏡戦争ねえ・・・」

彼はそう呟き、読み出した。

「神鏡戦争それは選ばれし12人による12人だけの戦争。12人は魔導師と元・現兵士による戦争で、12人にはそれぞれ・・・」

“12人にはそれぞれ「剣士」・「槍士」・「弓士」・「魔法使い」・「獣使い」・「錬金術師」・「吸血鬼」・「狂戦士」・「破壊士」・「騎馬士」・「銃剣士」・「長刀使い」というクラスが存在する。12人の戦士にはそれぞれパートナーと武器が授けられる。ゾディアックは神鏡を手に入れて、オーディーンの手に入るだけのために戦う。オーディーンの手に入るものは、神の手に入るものである。”

「選ばれし戦士よ。今こそ立ち上がる時！・・・か」

蓮はその本をだいたい読み終わった。ふと時計を見ると6時半を差していた。

「いつもは朝軽いが・・・今日はちゃんと食べるか」

蓮は台所に立つ。なんだか妙にエプロンが似合う。朝の支度がだいたい終わるともうすぐで7時。

「そろそろあいつら来るな・・・」

あいつらというのは俺の幼なじみであり、よい親友なのだが・・・。
“ピンポン”チャイムが鳴る。来たな。

「蓮兄いー！おはよー！起きてるー？」

このような挨拶の仕方はあいつだろう。

「珍しいー。蓮兄が起きて、朝ごはんの支度してる・・・。熱でもある？」

目を丸くしてこの上ない驚き方をしているのは、白城雅菜。
赤髪で、深紅の瞳。赤に関係のある女の子だ。

「あるはずが無い。あつたら今頃布団でダウンしている」

目だけで彼女を見る。彼女は俺の側におり、料理を見ている。

「あはっ！確かにそうだね！」

いらだつような満面の笑み。しかし、彼女には良く似合っている顔だ。彼女は学校で一・二位を争う美人である。頭は抜けてはいるが、運動神経だけはずば抜けて良かった。「その運動神経を活かして、うちの部に入らない？」など運動部からはスカウトが多かった。結局彼女は陸上部に入った。うちの陸上部は弱い。それなのに入っている。なぜか？それは・・・。「部活の日数少ないもん！」などといいやがる。なんだそりゃ？それが彼女の性格である。

「ほう。珍しいな。明日は夏になるんじゃないか？」

そうやって入ってきたのは、沼地龍。ぬまじりゅう

「馬鹿っ！んなわけあるか！龍兄！そんなことで一日だけ夏と冬が逆になるか！」

「確かに、お前の都合でそんな革命が起きれば驚きだな」

イラつく口調で話しかけている龍兄は、黒髪なのだが深紅と蒼の瞳なのである。成績優秀、頭の回転も速いが、運動神経はどちらかというと悪いほうだ。しかし、面がいい。性格はいい（俺以外）、だからとにかくモデル。龍はフライパンを見ていた。

「うまそうだな」

ボソリと言う。

「やらんぞ。だいいち食っただろ」

「分かっている。うまそうと言っただけでほしいとは言っていない」

やっぱり龍兄は嫌いだ。ところで何故俺たちが兄妹のように兄などと言っているのか気になる人もいただろう。それは、俺達は幼なじみではあったのだが、3人とも一つずつ違っていたので、そう言っているだけなのだ。龍は台所から離れてソファーに座わる。座った後、テーブルに目をやった。その時テーブルにあった本に気づいた。龍はその本を手に取りタイトルを見ながら蓮に聞いた。

「蓮、この本どこで見つけた？」

蓮は、手を止めて本を見て作り始め、作りながら答えた。

「親父の研究室。整理してたらたまたま見つけてさ。さっきまで読んでたんだ」

龍の顔が曇る。続けてまた聞いた。

「お前の親父さん・・・、貴良さんはその部屋で何を研究していたんだ？」

蓮が不思議に感じながらも答える。

「魔術と魔法だけど・・・。どうした？」

「龍兄、なんか知ってるの？」

と雅菜が聞く。

「貴良さんは魔術・魔法のすべてを知っていたんだ。お前達是对立戦争くらい知っているだろ？」

真剣な声で聞いてきた。

「それくらい知っているけど何？」

雅菜が聞く。

「それに何ですべてを知っていたってことになるんだよ」

蓮が聞く。

「最後まで聞け。あの大戦争の後に始まったのが神鏡戦争。魔導師と兵士の殺し合い。この戦争だけは禁断なんだ。なぜなら、神鏡は本当に合ってその力は絶大だからだ。そしてこの戦争は魔導師と兵士にのみしか対象にならない。普通の人を知ってはいけない。でも、貴良さんは知ってしまった。一部の魔導師と兵士にしか知らない現実を。この戦争を知るとはすべてを知ると同じこと。だからこそ言い切れる」

龍が言い終わってすぐに

「じゃあ、何で龍兄が知っているんだ？そりゃ、龍兄も雅菜も魔導師ってことは俺も知っているけど、雅菜も俺も知らなかったじゃないか」

支度も終わりに朝食を運びながら言った。

「さっきの話聞いていなかったのか？」

む・・・、どの話だ？こいつが話した話は多すぎる。正直分からん

ので素直に聞いてみた。「どの話？」ハアっ、と深いため息をつく龍。

「だ・か・ら、知っているのは一部の魔導師と兵士だけってところだよ！」

「だから何？」

さすがの冷静な龍も頭にきたよう。

「こおのアホ！だから……」

龍が言おうとしたら

「だから俺はその一部の魔導師だからに決まってる！」でしよ？龍兄」

雅菜が割り込んできた。龍は、うつ、などといって半歩後退する。雅菜はこのような読みは鋭い。

「へえ。何で？」

感心しながら聞く。

「なんでもだ！さっさと食べ！朝練遅れるぞ！」

見ると7時半。

「ヤベッ！」

蓮は急いで朝食をたいらげた。その時間約30秒。ほとんど神業である。その後3分で全ての支度を終わらせる。

「じゃつ。行くか」

3人は玄関を出る。蓮の家は学校から20分のところにあり、朝練は8時に始まる。蓮達の通う黒帝学園は特殊で、最初の授業は9時に始まるのである。3人は校庭でいつも別れる。

「頑張つてね。剣道部エース」

雅菜は手を振り蓮に言う。

「おう。ちゃんと仕事しろよ。学園総生会長」

蓮は答えた後、龍に言う。

「俺は好きでやってるわけではないが、仕事はちゃんとする」

学園総生会長。実名、黒帝学園総合生徒会長。それは文字通りである。龍は先生に頼まれてやっているのである。そうしていつものように別れた。蓮は武道館に入る。

「よう、蓮。いつもの通りギリギリだな」

玄関で出会った奴に言われた。

「まあな。駆は今日遅いな」

出会った奴は翼駆。^{つばさかける}俺の親友で剣道部の副主将。

「ちつと、寝坊してな」

「珍しいな。まあいつか。早くしねえと主將にどやされるぞ」

蓮がそういうと

「ど・・・、どやされる？何だそれ？」

駆があっけからんとした顔で聞く。

「ん？ああ、どやされるっていうのは・・・」

「どつかれる。もしくは怒られるってことよ」

二人の後ろから女性の声が聞こえた。ギクリと二人は驚き、恐る恐る振り向いた。そこには眉をピクピクさせ仁王立ちしている女子生徒がいた。

「へえ、いい度胸ね。私の前でゆっくりしているなんて」

「い・・・いや、そんなわけじゃないけど美里は戻らなくてもいいのか？」

蓮が体を震わせながら女子生徒に聞く。

「ん、そうね。まずあんた達を叱ってからかな」

笑みを浮かべている。

「あ・・・う・・・」

「さあ！来なさい！」

「「いやあああああ」

二人の叫びが木霊した。先ほどの女子生徒は柳田美里^{やなぎだみさと}。剣道部の主将である。

「あんた達は強いんだけどね。普段がこうだから」

と美里はため息をつきながら言った。

「今後注意することいいね？朝練始めるよ」

彼女に笑顔が戻った。朝はいつもの通りに終わった。正午、12時15分。午前中の授業が終わり、食堂や購買に人が集まる。蓮達3人は屋上で昼食を食べていた。

「うちの学校って食堂・購買・弁当制だけど弁当持ってくる人少ないよね」

3人しか居ない屋上でから揚げをほおばりながら雅菜が言う。

「まあ、普通はいないだろう。俺達は持ってくるが」

「お前らもあんまり変わらんぞ。俺の作った弁当食いやがって」

蓮が静かに怒る。それもそうだろう。弁当は小さく可愛い弁当ではない。しかし、中年おじさんが持っているような弁当でもない。

弁当というよりお重に近かった。

「作るのも大変だが、持ってくるのも大変なんだぞ」

蓮がまた静かに怒る。

「それはありがたいと思っている」

龍が手を合わせて言う。嘘つけなんとも思っていないくせに。

「そーそー、蓮兄の弁当美味しいもんね」

「雅菜おだてても何も出んぞ」

「分かってるよ」

蓮と雅菜の会話に龍が入る。

「蓮、雅菜。話があるから今日は早く帰って来い。2人とも今日は部活無いだろう？」

龍兄の顔は真剣だった。こんな顔をする龍兄は怖い。

「ああ・・・分かった」

「うん・・・分かった」

2人同時に答えた。午後の部が終わり駆と話していた。

「この学校5限で終わるのはいいんだけど1つの授業が1時間って

のはきつい」

駆が愚痴をこぼす。

「休憩が少ないせいだろう。きついのは。何せ5分も無いからな」

「そうだ。カラオケ行こうぜ！蓮！」

駆は跳ねるように前に出て言った。

「悪い。今日は用があるからまた今度な」

申し訳なさそうに謝る。そっか、とため息が駆から漏れる。

「わあったよ。また今度な。絶対だぞ！」

指を蓮に差し言う。わあったってなんだ？

「ああ………」

蓮が返答する。そして学校を出た。話ってなんだ？俺と雅菜だから魔術のことだよな。なんか儀式あったかな？もしかしたら朝のことか？などと考えながら家に着く。家に着いたとき2人はもう居た。しかも着替えてやがる。何者だこいつら。いくらなんでも早すぎる。

「遅かったな、蓮」

龍が言う。あんたらが早すぎるんだよ。

「すまない」

一応謝っておこう。後が怖い。雅菜はともかく龍はブチギレすると家一軒どころか町一個がぶっ壊れる。一度ぶっ壊したからな。

「で、話ってなんだ？」

1つしかないソファーは何故か雅菜が使っているので座布団に座ることにする。

「うむ。話というのは今朝のことだ」

そらきた。よく考えなくても分かることだと後で気がつくことになる。

「朝のつて、なんとか戦争ってやつ？」

しかないだろう。

「・・・ああ」

ふむ、ならちゃんと聞こう。

「これは真面目な話だからちゃんと聞いてほしい。神鏡戦争は今まさに始まるうとしている」

俺と雅菜は目を丸くした。俺達の周りだけ時間が止まった・・・ように思えた。

「龍兄、今なんて言った？」

雅菜が止まった状態で聞いた。

「神鏡戦争は始まろうとしていると言った」

なんのジョークだ。一つも笑えん。

「10年に一度起こるこの戦争は今年が10年目になる。今現在で存在している戦士は5人。その5人は後の7人を待っている」

「だからって俺達に関係していないだろう」

「いや、関係している。俺達3人はすでに戦士として決まっている」

「何でそんなことが分かるの？」

いつのまにか俺と雅菜は立っていた。

「……まだ気がつかないか？お前達右腕をまくってみろ」

そんなことで分かるものか。そう言いながらもまくってみる。

「何これ？」

2人の右腕には文様が浮かんでいた。蓮の腕にはうお座の文様が、雅菜の腕には乙女座の文様が青白く光っていた。

「龍兄、これは？」

蓮が聞く。腕を龍に見せながら。

「戦士の証だ。俺にもある。ほら」

龍がまくるとさそり座が刻まれていた。ずっと自分の文様を見ていた雅菜が呟く。

「うお座に乙女座にさそり座……。これって星座？」

なるほど。十二星座というのは英語でゾディアック。だから、ゾディアックの戦士か。

「そろそろ来る」

「何が？」

雅菜が聞く。

「パートナーと古代道具」
アーティファクト

ゆっくりと顔を上げながら言った。大丈夫かこいつ。すると庭が光りだした。

「魔方陣？」

確かに目の前にあるのは雅名の言うとおり魔方陣だ。しかも召還魔方陣だ。何か呼び出すつもりか？しかし、真ん中の文字が違う。普通なら や や みたいなのがくっついていて感じるはずなのに中央には乙女座のマークだと？

「………雅菜」

「ん？何？龍兄」

「真ん中に立ちこれを詠め」

そう言つて渡したのは・・・紙かい！いや・・・重要なのはその内容か。書いてあるのは、古語呪文か。雅菜は詠めたかな？龍から紙を受け取る雅菜。

「わっ！古語呪文か。私苦手なんだよな」

それは知っているぞ。

「ん。・・・でもこれくらいなら詠めるかも」

マジで！いや、ツツコムところはそこではない。かもってなんだかもって。

「よし。」

緊張する。こんな空気は嫌い・・・でもない。雅菜は深呼吸をし、ゆっくり目を開けた。

「異次元から来し、戦士の剣よ。今ここに主である我が契約する。契約を破れば私の魂を与えん。炎よ、舞い上がれ。風よ、狂え。水よ、万物と共になれ。森羅万象我と共に。契約・シュラーク・スピリトス発動！！！！」

なんてことだ。一文字も失敗せずに言いきつた。神も驚くだろう。

雅菜が言い終わると魔方阵が赤く光だし、杖が出てきた。

「雅菜それをもて」

「え？うん．．うん。」

オイオイスんなりとうんと言っな。少しは疑え。雅菜が杖を手にする。

「痛っ．．．！」

どうやら右腕の．．アレが痛いらしい。

「今ここにゾディアックの戦士に魔法使い・白城雅菜を迎え入れようと思う」

いきなり言い出すんだ龍兄。

「雅菜よ、お前は神鏡に選ばれた戦士となった。お前に戦う意思はあるか、ないか。」

なっ！．．．．．そういうことか。

「え？．．．．．うん、いいよ。やってみたいなと思ってたところ」

おいおい。そのときの返事を聞いて龍はうかない顔になった。

「．．．．．そうか。では！戦士雅菜をクラス・魔法使いとして認める！」

龍は手を揚げた。なんじゃそりゃ。

「じき来るぞ。雅菜のパートナーがな」

言った3秒後、雅菜の目の前にカードが現れ地面に落ちた。雅菜はカードを手を取った。

「それがパートナーカード。召喚の呪文を唱えることで主に対して合っているパートナーが姿を現す。パートナーにはクラスによってそれぞれ能力が違うが、主がそれをカバーする。ただそれだけだ」

なるほど。それが神鏡戦争の戦い方か。

「蓮」

なんだ？俺に用があるなら一言で終わらせるな。

「次はお前の番だ」

はいよ。今度庭に出ていた魔方陣の中央にはうお座の文様が書かれていた。魔方陣の中に入る。なんというか、水の中に居る感じがして空中で立っている変な感覚だ。蓮は雅菜と同じことを30秒で仕上げた。もっとも雅菜は2分かかっていたのだが。魔方陣から古代道具が出てきた。剣？それはコバルトブルーの色をした剣が出てきた。手にとってみる蓮。ズッシリと腕にくる。だがいい感じだ。蓮も雅菜のように契約を交わす。ただ違っていた所は“かまわん。さっさとこのくだらない戦争を終わらせるのみ”などと言って契約したところだった。蓮の前にもパートナーカードが落ちる。カードを拾う蓮。

「スローダー S R O W D E R”・・・。剣士か」

パートナーカードには剣を持つ騎士、そしてS R O W D E Rという

文字などが記されていた。気づきはしなかったが、魔方陣は蒼く光っていたらしい。周りが蒼い。

「蓮。どけ。次は俺だ」

あんたは終わったんじゃないのかよ。龍兄。

「俺も今日出たんでな」

魔方陣が出る。龍も蓮と同じように終わらせる。魔方陣から出てきたのは黒い槍だった。龍の場合聞く必要もないので契約を終わらせる。龍の前にパートナーカードが落ちる。それを拾う龍。しばらく見た後、2人を見る。

「二人とも契約は終わったな」

終わったには終わったが疑問点が一つある。

「終わったが、この剣や杖、その槍とかはどうすんだよ。こんなの持ち歩けねえぞ。」

龍はジレツとした目で見る。何なんだその目は。

「問題無い。このアーティファクトは便利でな。『帰れ』と唱えるとアクセサリー化し、『出でよ』と唱えれば実体化する」

『帰れ』隣で声がする。隣を見ると雅菜がやっていた。雅菜のアーティファクト古代道具は指輪になった。

「わー、すっごーい！」

そんなことで感激か。しかし重いな、この剣は。『帰れ』しまっておこう。

「2人とも疲れなかったか？」

ああ疲れたよ、ツツコミに。龍はクスツと笑う。何だ？気持ち悪い。

「中に入ろう。今日はもう遅い。見ろ、もう6時だ」

ああ、まだ6時だ。まったく遅くない。だから、夕食の支度でもするか。

「ああ、そうだ。蓮、今日は泊まらせてもらっぞ」

「何！？」

急に言うな。なぜそうなる。

「今日は俺以外帰らんなのでな」

そついうことは早く言え。龍兄が止まるならもしや……。

「何？龍兄泊まるの？じゃあ私も！」

やっぱり。雅菜も1人暮らしたからかまわないかもしれないが……。

「ハア、分かったよ。いつものところ使ってくれ」

観念するしかない。そして次の日からまた別の生活が来るとは俺はまだ思わなかった。

第二章 敵と仲間

夕食を終えて、食後の紅茶を飲んでいるときのこと。

「2人にもう少し話しておくことがある」

紅茶を言い終わった後に飲む。

「ん？この紅茶美味しいな。ブランドか？」

「残念。市販のレモンティーだよ」

しかも格安。お得品さ。

「で、話って何？」

雅菜が紅茶を飲みながら聞く。雅菜の顔は幸せそうに見えた。それだけだ。

「この後のことについてだ」

それしかないだろう。胸元のネックレスが光る。

「今現に存在しているゾディアックはついさつき8人になった。いや、もしかしたら9・10人はいるだろう。おそらく他のゾディアックは活動している。もしかしたら襲われるかもしれない」

いや待て。戦争はまだ始まっていないんじゃないか。

「この戦争は2人の戦士が決まった時点で始まっている。だからပါတナーカードとアーティファクトは放さず持っている。いいな？」

ああ、わかった。よく分かったよ。だからしつこく聞いてくるな。

「それではね……！！！」

部屋の空気が張り詰める。結界（家）に忍び込んだ敵がいる。人数は……1人か。

「来たな」

みたいだな。

「敵？」

当たり前だ。3人は庭に飛び出るように出た。周りには誰もいない。

「ここだ！馬鹿ども！」

上のほうからの声。敵は屋根の上に悠々と立っていた。

「そんなところに立てるとはな。元兵士軍か？感じがそつだ」

「まあな。俺は元兵士軍弓兵隊長の藤波黄河^{ふじなみこうが}の息子。藤波亜砂斗^{ふじなみあさと}だ」

何を自慢したいのかさっぱり分からん。

「弓兵隊……。クラスは弓兵か？」

何と！

「その通り。3人はきついかもしれないが、『出でよ』」

すると亜砂斗の手の前に弓が表れ、亜砂斗は弓を握んだ。同時に龍は古代道具を出していた。

「お前らはそこで見ていろ」

「でも龍兄は槍なんか1度しか使ったことないんじゃないや・・・」

確かに雅の言うとおり龍兄は槍は遊びで1度しか使ったことがない。

「モーマンタイ。そのためにパートナーカードがある」

はてどういうことだろうか。この時点で分かる人30秒以内に電話をくれ。

「エプケ・オーレ」

召喚魔法か。

「でて来い。槍士！」

召喚魔方陣が出る。するとどうだろう。魔方陣の中から黒の長髪で瞳が紅と蒼。そう龍の女性版みたいな人物が出てきた。なんでもありか？

「主！アーティファクトを！」

龍は彼女に向かって槍を投げた。彼女は見事にキャッチした。槍士は槍を刺せる程度に一瞬で間合いを詰めたとき、槍士に向かって矢が飛んできた。

「槍士！後ろ！」

槍士はすかさず振り向き矢をはじいた。後ろを向く。そこには誰もいなかった。

「チツ！弓士！矢のタイミングが早すぎる！」

返事が無い。いや聞こえないだけか。それだけ遠くにいるのだろう。

「今日は挨拶程度だ。次会ったら必ず殺す」

こちらをにらむ、しかし恐ろしいのはあっちではない。

一番怖いのは龍兄だ。蓮の思ったとおりだった。龍の目は人間とは思えぬ眼、鬼や悪魔のような眼だった。亜砂斗はそれを見てひるんだ。

しかし、蓮と雅菜は背筋が凍った。亜砂斗は逃げた。それもそうだろう。あんな眼を見たら鬼も逃げ出すのではないかと思う。

龍兄はその眼で「やれるもんならやってみろ、タコ」とでも言ったのだろう。俺なら多分チビル。

「何しに来たんだ？あのタコ」

あんたは知らないだろうな。その眼の怖さ。3人はリビングへ戻る。

「風呂は入ったのに……。もう一回入ってくるわ」

と龍が言い残し風呂に入りに行った。

「蓮兄どうだった？」

「何が？」

適当にかえす。

「さっきの戦い」

すごいとしか言いようが無い。

「だよね」

そして、沈黙。さっきの戦いを見て疑問がいくらか出た。後で、龍兄に聞いてみよう。

「もう寝るね。蓮兄」

「いやまだ寝るな」

自分でも感じる。むちゃくちゃだ。

「何で？」

「いいから」

こんな言い訳で分かったと言えるはずが……。

「わかった」

オイオイ。

「ふ」

龍がリビングに入ってきた。

「どうした？2人して黙り込んで」

タオルで頭を拭きながら聞いた。ちゃんと脱衣所で拭け。

「龍兄、聞きたいことがある」

「どうした蓮？珍しい」

「神鏡戦争についてだ」

この言葉で真剣な顔つきになる龍。

「何が聞きたい」

「神鏡戦争の目的・内容・理由は分かった。ただ分かんことは戦い方だ。さっきの戦いで龍兄は古代道具を槍士に渡し、槍士に戦わせた。これでは自分が古代道具を持っていることは意味が無い。それならパートナーが持っていればいい。さっきの戦い方では二度手間じゃないか？主が古代道具を持っているのには訳がある。違うか？」

龍はニヤツとした後、

「さすが蓮だ。戦いに関しては鋭いな」

それはどうも。

「確かに蓮の言うとおりだ。その疑問に答えよう」

ムカツクなその言い方。

「この戦いにはいくつかの戦い方がある。一つは俺と槍士のように戦い方はパートナーに任せ、自分は後ろで援護という援護支援型。この型は一般的な戦い方だ。さらに一つは自分は前に出て援護はパートナーに任せる主力攻撃型。よくあるのはこの二つ。後は、前後関係無く一撃一撃が重く、戦い方が多様できる出力戦略型。守りを固め、カウンターを狙う守備反撃型。この型は守備最強となる。最後はパートナーと共に前へ出て戦う速攻攻撃型。この型は攻め最強となる。以上がこの戦争の戦い方だ」

なるほど理解した。

「蓮兄、私に寝るなつてもしかして」

「ああ、この話を聴いてもらうためだ」

「ふん。じゃあもう寝ていいの？」

「ああ。しかし早いな。まだ10時半じゃないか」

10時半。普通なら少し遅いか調度いいくらいなのだが、健全な高校生としては早いのではないだろうか。

しかも明日は土曜日だ。うちの学校、つまり黒帝学園はものすごく

珍しく、文武よりも生徒論で、土・日は学校どころか部活も休みとなる。

その割にはテストなどの試験の点数はトップクラスなのである。周りには15もの学校が存在する。その中で5位に入る学園なのだ。少し話はずれたが、つまり明日と明後日はフルで休みなのだ。次の日が休みなら遅くても構わないのだろうか。

「うん。でも日課になってるから。じゃ！お休み！」

雅菜は笑顔で手を振りながら別室に向かった。

「それでは俺も寝るかな」

龍がソファから立ち上がり言った。

「早いな」

目を合わせずに言った。

「まあな」

それだけを告げて龍も別室へ行った。一人残った蓮は考えた。

神鏡戦争のこと。古代道具、パートナーのこと。これからのこと。

この間に時計の針の秒針の音だけが響き渡った。こんなことを考えても仕方がないことは分かっていた。

ただ単に考えないと落ち着かなかったのだ。落ち着かないと平常心を保てなかったのだ。

しかたがないと思い立ち上がる。向かったのは地下。地下の研究室を封印しようと考えたのだ。

『いいか蓮。父さんは大いなる発見をしてみせるぞ！』

蓮の中に貴良の言葉が浮かび消えた。その瞬間、蓮の目から涙がこぼれた。

蓮は泣くことが全く無い。泣いたことがあるのは今日で3回目。

父の死と今日……。2回目は秘密である。蓮は涙を拭い呪文を唱える。

「時間を操り時の精。心を閉ざし鍵の精。今一度全てを閉ざし開く時まで封を解かん。封印・アクト スピリトス発動」

封印の魔方陣が現れ、扉を封印した。

「……親父……」

いつもより早いが俺も寝よう。

朝一番早かったのは……。俺（蓮）だった。

意外すぎる。現在時刻6時。昨日といい今日といいおかしいな俺。リビングに向かう。暗い。当たり前か。暇なのでパートナーを呼び出すことにした。

「エプケ・オーレ」

暗い部屋が緑色に光る。魔方陣から出てきたのは鎧兜に全身西洋の鎧姿の人物（？）が出てきた。

「あゝ。できれば、鎧は取ってくれないか？顔が分からんとどうしようもない」

「失礼」

透き通った声が聞こえた。女性のようだ。鎧兜を取る。言葉が出なかった。コバルトブルーの髪。蒼い瞳。美しすぎた。

「すみません。主。すぐに気づくことが出来ませんでした」

目を奪われていたが、その言葉で我に戻った。

「い・いや。大丈夫だ。それよりもずっと着ているつもりか？それ」

鎧を指差しながら聞いた。ずっと着ていては疲れるだろう。

「あつ。いえ。これは基本状態なので。元に戻します」

基本の状態が鎧姿なのだから元に戻すというのはおかしいわけなのだが、今はいいだろう。

彼女が着ていた鎧は普通の服へと変わっていく。

「武装魔法か」

武装魔法とは武器を別次元に保管し、自由に出し入れできる高等魔術である。

武装魔法は魔法より剣術の方が得意の者がよく使う魔法の一つである。

ちなみに、蓮もこの魔法をよく使う。蓮は近距離用の魔法が得意で、近距離戦なら敵なしらしい。

話を戻したい。

「剣士は、魔法得意なのか？今の武器還送は高等魔術じゃないのか

？」

「いえ。私のクラスは主の知ってのとおり剣士です。魔法・魔術は使えません。武装魔法はデフォルトです」

なるほど。神鏡も意外に親切なことをする。

あんな鎧を着ていたら疲れることを知ってのことだろう。もし違うなら・・・考えることも、めんどくさい。

しかしながら美しい。普通の私服姿も綺麗だった。今回は特に用は無いので色々と聞くのも悪くは無いだろう。

「剣士は・・・」

「主。私のことはスローダーとお呼びください。」

「あ・・・ああ」

さて、どうしたものか。話が少しも続かない。それにこのような固い性格は苦手だ。しかし、軽すぎるというのも得意ではない。適度のほうが好ましい。

“ガラッ”戸の開く音。

「お！お前もパートナーを呼び出したか」

龍がすっきりとした顔で入ってきた。天の恵みだ。いつもは悪魔かと思うのだが、今は天使と思ってしまった。

龍はスローダーをまじまじと見た。ツツコミどころ満載だが今はそんな状況ではないのでやめにする。

「へえ。あんたが剣士か。いいパートナーを引き当てたなお前」

「あの……主この方は……」

「ん？ああ。そいつは沼地龍っていつて、俺の幼なじみさ。安心しろ龍兄は俺達の仲間だから」

「……了解しました。龍、お願いいたします」

スローダーは龍の目を5秒ほど見た後、全てを認識したかのように頷いた。しかし、固苦しい奴だ。もう少し柔和にいればいいのに。

「おう。よろしくな。俺のパートナーは後で紹介する。とりあえず用が無いみたいだから下がったらどうだ？」

「はい。そうすることにします。それでは主」

スローダーは一礼した後光と供に消えた。やれやれ。これから慣れるまで大変だな。しかし……

「朝……。早いんだな」

2人は廊下に出て戸を開けて言った。闇から来る風は冷えた吐息をかけていた。

「ん？まあな。遅いのは姉御殿くらいさ」

「桜さんが？」

桜とは……言う必要も無いが、話からのとおり龍のお姉さんだ。

昔、小学校に上がるまで面倒を看てもらったのをまだ覚えている。

「桜さん……元氣か？」

「ん？姉御はいつでも元氣さ。今は魔法協会に勤めていて、滅多に帰ってこないがな」

「魔法協会に？どこの部だ？」

龍は遠くを見ながら思い出話を語るみたいに言った。

「教育部さ。毎日見習いの奴らに基礎などを教えている」

「……そうか。でも……すごいよな、お前らの家族って。親父さんは戦闘部門の部長だろ？で、おふくろさんは確か……」

「管理職部の副部長さ」

「そうそれ。で、沼地一族って確か英雄カルディアの血縁なんだろう？」

「たいしたことじゃない。それにカルディアの血縁なら雅菜の家計、白城一族もそうだからな」

「雅菜の家計が？」

「分家だがな」

「分家？」

龍は視点を一切変えずに頷いた。

「ああ。沼地家の分家さ。しかし、魔導師としてはむしろこちらの方が上回っている。沼地は権力が強いだけ。白城の方が優秀な奴らは多いから、最高幹部も多い。白城の力は魔法協会も認めているのさ」

「そうか」

「・・・蓮・・・雅菜には言うなよ」

「何で？別に気にしないだろ。普通」

「雅菜は自分の家は本家と言われて過ごしてきた。魔導師にとって分家と本家ではかなりの差があつてな。分家は魔導師として大いなる成長してはいけないと言う暗黙のルールがある。しかし、雅菜の夢は大いなる魔導師になること。そのためにどんな厳しい試練を乗り越えてきた。だから、雅菜にとって分家であることは夢を崩されることと同じ。所詮分家の最高地位は幹部のみ」

「それじゃ。雅菜の親はどうなんだ？最高地位は幹部なんだろ？それなのになんで最高幹部なんだ？」

「まだ、分からんか？雅菜は・・・あの子は・・・拾い子だ」

「え？拾い子？」

「ああ。雅菜の本当の苗字は・・・さかのうえ坂上。坂上は本当の下さ。雅菜は魔法世界については賢い子だからすぐわかるのさ」

「……そうか」

「だから……な？頼む。黙っていてくれ」

「安心しろ。絶対言わない。雅菜が傷つくことは容易に予想できるさ」

「……そうか。安心した」

龍兄から悲しみが感じられた。

雅菜の事実。雅菜は拾い子。そんなことを知っていて黙っている辛さ。そして、分家という壁。本当の妹みたいに雅菜を見ていた龍にとってはつらいことは蓮にもすぐに分かった。実際、雅菜の事実を知った蓮にもかなりのショックが大きかった。声をかけられなかった。しかし、何を思ってそんな表情をしたのかは龍にしか分からないことだった。

「日が昇るな」

龍の視線の先には赤々とした空が太陽を待っていた。

さすがに冬の朝の風は心身ともに厳しいな。

戸を閉めよう。戦争前に風邪をひいては話にならない。戸を閉めてリビングに戻ろうかと思ったときに

「……あれ？龍兄・蓮兄・朝……早い……だね」

髪がボサボサで眠そうな顔をして雅菜が立っていた。足はふらふらと弱々しかった。ぶっ倒れそうだな。しかも何を言っているのか分からなかったな。

「う~~~~ん。・・・眠い。パートナー・・・なんか・呼び出さなきゃよかった」

どうやら雅菜は昨日別室に戻った後、パートナーを呼び出していたらしい。

聞いてみると昨夜は2時近くまでやっていたらしい。いくらなんでもかかりすぎだろうと聞くと、『だって。なかなか契約結べなかったんだもん』

だそうだ。なるほど。鈍くさい雅菜なら分かる気がする。まあ、いか。皆起きたんだし朝食の支度でも・・・支度は俺ばかりだな。今日ぐらいはどちらかに任せてみようかと思っていると

「朝の支度は俺がしよう」

これはありがたい。龍兄から言ってくれた。しかしどんな風の吹き回しだ？

「一宿一飯の恩義だ。そんなにビビルな」

そうか一宿一飯の恩義か。珍しいにもほどがある。逆に何かあるのではないかと思ってしまう。

雅菜も同じなのではないかと思って雅菜の方を見ると目を輝かせていた。

つまりお前は誰でもいいのだな。その性格がうらやましいよ。まったく。

はつきり言つが龍兄の作る料理は美味かった。おそらく俺よりも美味い。

『交代制でよく作るからな』ということだ。うまく作らないと父親に殺されるらしい。どんな父親だ？

龍兄の料理はバランスが悪い。和・中・洋と全て含まれていた。栄養は一切考えていないらしい。しかし、文句は言えない。味がいいのだから文句を言ったら罰が当たる。

『今日は俺用があるから』と言って龍は出かけた。

今日は土曜日だが、何故か分らないが臨時休校になっていた。

蓮と雅菜は何もすることなく今日1日は体を休めた。

夕食は『龍兄と蓮兄が作ったから私が作る』と言って夕食の支度は雅菜となった。

食後の紅茶を飲みながらふと思い出した蓮。龍が初めて見せた悲しい顔。まだ少し残っていた月光が悲しみを表しているこのような光を浴びて見せた悲しい顔。

あの顔は一生忘れないだろうと蓮は紅茶の水面に浮かぶ自分の顔を見ながら思った。

「蓮兄、どうかしたの？」

「ん？・・・ああ。なんでもない」

軽い笑顔を見せた後、紅茶に顔を戻した。『絶対言つなよ』あの時の言葉がまだ頭の中から離れなかった。紅茶を飲み干し、廊下に出て空を見上げる。無数の星達に混ざって満月が何を伝えたいのか分からない光を放っていた。

「どうかしたか？蓮」

「・・・龍兄」

「満月か・・・・。綺麗だな」

「ああ。・・・龍兄、雅菜は？」

「風呂だ」

確かに浴室からシャワーの音がする。その音に混ざって鼻歌が聞こえる。

「朝のこと考えていたのか？」

「・・・ああ。・・・龍兄、俺・・・」

「お前が気にすることは無い。忘れてくれ」

片手を上げてリビングに戻る龍。その背中からはやはり悲しみしか蓮は感じ取ることが出来なかった。

第三章 無表情の刺客

蓮達がこのように過ごしている時、黒帝市の隣町である三波町でもみなみちよう神鏡戦争が起こっていた。

その中でやたら強い戦士がいた。他の戦士をものともせず倒していった。倒していったとはいっても殺しはしなかったというよりも皆殺されるより先に逃げるからである。

その者は、暗闇に溶け込むような漆黒の髪。その反対で瞳は光のような金色の目。

珍しいつくりである。

そしてこの人物が蓮達3人の一番の刺客となるのだった。

「龍兄。今日ね、蓮兄に新しい魔法を教えてもらったんだ！」

3人の風呂上りの話である。

何もしなかったとはいえ、本当に何もしなかったわけではない。ほとんどの魔導師は休みの日になると鍛錬をする。技や術を磨いたり、魔法を覚えたりする。今日の雅菜は蓮に魔法を教わっていたのだ。ではその時へ話を戻すことにする。

朝食後はコーヒーを飲んでいた。

「龍兄。今日暇？暇なら魔法教えてよ」

「ん？ああ、すまない。今日俺用があるから」

「そっか。ならしかたがないね」

「・・・・・・・・。雅菜、俺じゃ駄目か？」

「え！蓮兄いいの！？」

一時期沈んでいた雅菜の表情に輝きが戻った。

蓮は3人の中で一番魔法や技・術が使える。蓮は1000以上もある魔法のうち最年少過去最高の300も覚えていて。しかし、魔力は雅菜に、技は龍に負ける。それもそうだろう。雅菜の魔力は最上級クラスなのである。魔力の最上級クラスは魔法協会副会長クラスとなる。そして、龍の技は各部長クラスとなるのである。

つまりこの3人は、ほとんど最強と言われている。というよりも3人が組めば最強チームなるので、誰も勝てなくなる。

「じゃっ！蓮兄よろしく」

「はいはい」

龍を見送った後、2人は早速鍛錬に取り掛かった。

「まずは肩慣らしだな。攻撃から守備・身体補助の魔法を使い。攻撃は五方に守備は全方向。身体向上は5分な」

「うひゃー。それ本当にアップ？きつくない？」

「たわけ。お前くらいの術者ならなんでもないだろう？それとも止めるか？」

「うつん。やる」

まずはどこまで成長したかだな。
どのような魔法を教えればいいか決められないからな。

「いくよ。蓮兄」

「ああ。やれ」

「炎の精霊^{イフリート}。全方向伍方に炎の柱授けたまえ。天神に従え。来やれ火
蜥蜴の炎。炎の豪柱・発動。さらに盾の精霊^{アラゲラ}。奇跡の盾を我に与え
よ。盾の数6天星。全方向展開。魔法壁・発動・・・うつ。魔力
展開。心身神経から身体へ。身体能力開放。5星継続。身体向上・
発動」

雅菜の目の前約5m先に五つの炎の柱が現れた後、魔法壁が6つ現
れ、雅菜の周りにオーラのようなものが現れた。このオーラが身体
向上中の状態である。魔力をはってその魔力を力に変える魔法であ
る。

「ふん。楽勝か。さすがだな」

「へへえ。どうだ!」

「普通だろ」

「そう?」

「そうだ。じゃあ、早速だが何の魔法を教えてほしいんだ?」

「ん」と。・・・雷の攻撃魔法。強力なやつ」

「雷？お前、雷系の魔法は苦手じゃなかったのか？」

「うん。でも力の強い魔法は雷だから。私の使える魔法って力が弱いでしょ？」

「別に力が弱いなら、小技と速さでやればいいのだが……。わかった。ならこんなのはどうだ？」

ラク・エレクトル
「雷の精。全方位に怒れる雷を。敵を貫く槍となれ。青き雷5天星。赤き雷8天星。黄色き雷10天星。7星継続。イグニション・発動」

呪文後、蓮の周りに青、赤、黄の雷が落ちた。その光景が7分続いた。

ここまでくれば察しかと思うが、魔法呪文で天星というのは数。星というのは分のことを指す。特別なのは天神という語句である。天神は数のことではあるのだが、数は自然や神に任せるというものである。

つまり、ギャンブルだ。

「今のが、イグニション？たしか中力高等魔法だよね？中力だから強さは期待できないんじゃない？」

「確かに。イグニションは中力魔法だが、数・方位・魔力の練りで強力魔法と同じくらいになるテクニクタイプの魔法さ。魔力の強い雅菜にはうってつけの魔法だとおもうのだが？」

「そっか。なるほどね。それじゃ、続きよろしく！」

「はいはい」

「で、ちゃんとイグニションはできたのか？」

「うん。なんとかね」

「まだまだ出力不足だな」

「む」

「ハハハハ。蓮は厳しいな」

「そうか？それはいいとして……。何でまだ俺の家にいるんだよ！さっさと家に帰れ！！」

「ん？……。ああ。気にするな。仲間だから別にかまわないだろう？」

「いや、そういう問題じゃないだろ！仲間だからなんだよ！何で……。」

「だまれ！！」

龍が叫ぶ。蓮は一瞬にして恐怖というものを感じた。人間凶器にかなうはずが無い。

「一緒にいたほうが作戦が立てやすいだろう？さらに、バラバラになれば半人前のお前たちに何が出来る？」

確かに、龍兄と同じところにいればこちらとしても楽だろう。やけに恐ろしい視線と手を祈るようにして今にも泣きそうな目。

例えるなら子犬の目というべきか。その目がこちらを見つめていた。そんな目で見えるな。精神が崩れる。そのようなことを視線で返すがそれでも見続ける

雅菜。

それ以上見るな。精神崩壊が始まるだろ。高度経済成長期に石油ショックが来てバブル崩壊のような崩壊が始まりそうだ。崩壊寸前5秒前。

3・2・1・0。あああああああ！！！！！！。

「わかったよ。戦争の間だけだぞ」

「それでよし」

くそ。雅菜に負けた。龍兄め、全て計算通りか？いつかぶっ飛ばす。

「蓮兄ありがと」

悪意は……。悪意は1つもないんだろうな？雅菜。

「とりあえず決まったということこれから飯の支度は交代制だな」

人に無理矢理におしつけて何が決まっただ。

支度の交代制に異論は無いが。思い出しただけでイライラする。

龍への不満を心で投げ飛ばしていると、音楽が鳴り出した。

「この着ウタ……。龍兄じゃないの？」

「ん？…本当だ。げっ！姉貴だ。30分ほど間を空ける」

「どれだけ話すんだよ。あんたらは」

「桜の電話は長いんだよ」

龍はあわててリビングから飛び出していった。

龍が出て行くとリビングは静かになった。テレビでも点ければよいのだが、見たい番組が無い。

「蓮兄ごめんね。無理に押し付けちゃって」

「別に雅菜が悪いわけじゃない。全てあの鬼が悪いのだから」

「鬼？……。ああ、龍兄か。悲しむよ龍兄」

「悲しまんさ。あいつはそんな奴じゃない」

「フッフ」

どうした？いきなり。

「いや。だってすごいなって。わかるんだね。そんなこと」

「お前だって何となくわかるだろ」

「まあね。……ねえ蓮兄」

「ん？」

「昨日か朝ね。龍兄と何の話していたの？」

「え……!？」

今の瞬間あの言葉が横切った。そう『雅菜には言つなよ』という龍の言葉だ。

「何も話していない」

「それ。嘘でしょ？」

「・・・何でわかった？」

「だって蓮兄は嘘つくのも隠し事も苦手じゃない」

「そうか。・・・いつわかったんだ？」

「昨日の夜からかな。蓮兄、紅茶の水面ばかり見てたから、何かあるのかなって。蓮兄は昔から考えたり何かあつたら水面をいつも見てたからさ」

そんな癖があつたのか俺は。

しかし、見ていないようで見ているのだな、こいつは。

「ねっ。教えてよ！龍兄と何を話していたのか」

「いや。駄目だ」

「何で？龍兄と約束したから？」

蓮はコクリと頷いた。

その瞬間、雅菜の顔が泣きそうになる。その表情を見て蓮は今の状況を考えると、話すより話さない事が雅菜を傷つけるのではないか

と。

「雅菜。話してもいいが、お前にとってつらい話にかもしれんがい
いか？」

「・・・うん。話してくれないよりいいから。それにいつかそんな
日が来るんじゃないかって思ってたから」

「思ってた？」

「ううん。なんでもない。気にしないで」

「そうか」

「うん。だから・・・話して」

「わかった。・・・雅菜・・・。お前の一族は龍兄のところの分家
じゃないらしい」

「え・・・。な・・・なんで？白城は沼地の分家だよ？」

「・・・お前は白城の血は無い。お前は…坂上の捨て子だ」

「え？」

この空気は重い。

おそらくハッキリ言い過ぎたと思う。左ジャブから右ストレートだ。
しかも、顔面に。

「そ・・・そっか・・・。。ありがとう。話してくれて」

俺は雅菜の後ろに立っていた。
雅菜の発したその言葉は波打っており、体は小刻みに震えていた。
蓮の心は苦しかった。おそらく俺は雅菜のこのような姿を見たくは無かったのだろう。胸が破裂しそうに痛い。

「蓮兄。・・・うれしかったよ」

雅菜は駆け出そうとした。

あのときに似ている。龍兄が後ろ向きにその場から去るように歩いていった時と。俺はあの時、龍兄に何もかけてやれなかった。止めることができなかった。体を動かすことも出来なかった。
俺はあの時後悔した。何故俺は何もしなかったかと。そしてわかったことがある。

それは“ やって後悔するより、やらなくて後悔するほうが苦しくつらいのだ ”ということである。あの時と同じ思いはしたくないなど思うよりも先に、蓮の右手は雅菜の左手首を掴んでいた。

「え!？」

雅菜の左手首を掴んだ蓮は、自分の方へと引つ張り抱き寄せた。その瞬間、涙という雫が空中に舞った。

「え!？・・・ちよっ・・・蓮兄!」

驚いた雅菜は、驚きの方が強かったせいか、腕を解こうとはしなかった。雅菜の肩は非常に小さかった。

「雅菜・・・。俺のパートナーにならないか？」

「え？」

「お前の夢・・・龍兄から聞いたよ。分家じゃ・・・出来ない夢・・・
・なんだろう？そんなに・・・泣きたいくらい悔しいの？叶え
られないのが」

「うん」

「なら・・・俺のパートナーにならないか？お前が分家という鎖に
縛られているのなら、俺が自由にしてやるから。お前が叶えられな
いなら俺が側にいて俺が叶えてやるから。だから・・・泣くなよ・
・」

その言葉を聞いて雅菜は涙を拭い、蓮の腕に手を添えた。

「蓮兄、わかってるの？魔法界でのパートナーは神鏡戦争のような
パートナーじゃないだよ。こっちのパートナーは生涯とともに過
ごすって意味なんだよ？」

「ああ。わかってる。そのぐらいの覚悟はある」

「本当に？」

「ああ」

「じゃあ、・・・華^{はな}ちゃんのこと？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「知ってるよ。蓮兄まだ捨てられないんでしょ？華ちゃんのこと。」

滅多に泣かない蓮兄が2回目に泣かした子捨てられる?」

「……確かに……。俺の心の底には華がいる。俺は華を……彼女を忘れることは出来ないと思う。あの時は華に引っ張られていた。」

俺は今まで龍兄やお前、華の引いてくれたレールの上を歩いていた。でも……華が死んで、俺はお前達のレールを歩きながら後ろばかり見ていた。未来を作れずに過去ばかりを気にして。

……でも……でもな。俺はもう作らなければいけないと思う。2人の作ったレールを外れて自分のレールを作らなければいけないと思う。

でも……それでも華は忘れることは出来ないと思う」

「うん。それで?」

「忘れることはできない。けれども俺はお前の夢を叶えてやりたい。だから俺のパートナーにならないか?」

雅菜は振り向き直る。

その目は青空のように澄んでいた。綺麗だった。

「そう。それでも華ちゃんのこととは忘れることは出来ないんだね?」

「ああ。華のことを忘れたら2回目の涙は嘘になってしまうから」

「そっか。……わかったよ。それじゃあ、蓮兄の側で夢が叶うのを待っているね」

「ああ」

蓮は雅菜を強く抱きしめた。

その話を聴いていたのがいた。そう先ほど姉・桜に電話をかけられた龍である。龍は扉越しに背を壁につけて聞いていた。龍は話を聞き終わると外に出た。

「蓮、それがお前の出した答えか。しかし、その答えはお前を苦しめることになる。雅菜をパートナーにしても、お前が愛した秋野華あきのはなという人物は一生お前の元には帰ってこない。苦労という重荷を乗せながらも、それでもお前は未来というレールを作り雅菜とそのレールを行こうというのか」

星達は泣いているかのように光っていた。

それにつられるかのように、一人の人物が塀から出てきた。

「！！」

「蓮！雅菜！出て来い！」

その声に呼ばれて蓮と雅菜が飛び出てきた。

2人は龍の横に並ぶ。

そこにいた人物は暗闇に溶け込むような漆黒の髪をしており、瞳は金色の色をしていた。そう。その人物とは隣の町・三波町で力を振るっていた人物である。

「こんなところにも潜んでいたか。ゾディアックの戦士が」

その声は冷たく、まるで氷河期やブリザードのようだった。

冷たく感じるのは声だけではない。

その金色の瞳から感じられる視線も人間を人として見ていないような視線だった。

「貴様はどこかのタコ男とは違い、名を名乗らんのだな。あの弓兵のように」

龍兄の顔はにやけていた。

やっと強い奴と出会えたという感じた。実際、強いのかはわからないのだが。

「弓兵？・・・ああ。あの雑魚か」

どうやらこの男もあの藤波亜砂斗と戦ったらしい。

しかし、この間にも無表情なのである。これほど無表情だともものすごく怖い。龍兄の形相の顔の次に怖い。

「あの弓兵とは違い、お前は出来そうだ」

「当たり前だ」

一体何処からその確信はくるのやら。

「それに対して・・・その2人は戦いに慣れてはいないのか？弱そうな・・・」

なんだかムツとくるが、その通りなので何も言い返すことは出来ない。

戦いといっても剣道の試合ぐらいで、このようなちゃんとした（？）戦いは始めてである。本当の戦場というのはこんなに緊張するものなのか？

しかし、そのようなことは言っていられない。戦わなければ。

「龍兄。ここは俺に任せてくれないか？こつとも言われて引き下げない」

龍は蓮の顔を見て頷いた。

「わかった。しかし、……しかし無茶はよせ。駄目なら俺が変わってやる。いいな？」

「ああ。わかった」

「蓮兄が行くなら私も行く」

「雅菜……しかし……」

「お邪魔虫は嫌だから」

雅菜の顔はいつに無く真剣だった。

「……わかった。行こう。雅菜」

「うん！」

「何をごちゃごちゃと言っている。誰でもいい。今ここで3人とも死ぬのだからな」

「五月蠅い。誰も死なないさ。お前以外な！」『出でよ』『エプケ・オーレ』出て来い！スローダーああああ！！」

蓮はものすごい勢いで跳んだ。
そして彼の手にはあのコバルトブルーの剣が握られていて、その直

後に彼の前に魔法陣が表れ、そこから飛び出るように青き西洋風の鎧を着た剣士が現れた。それを見たゾディアックの戦士は

「氷帝の剣・・・そしてあの鎧・・・剣士か」

と呟いた。

「行きます。主」

「ああ！！わかってる」

スローダーは自分の剣を持っていて、その剣を鞘から抜き、目にも止まらぬ速さで剣を振り下ろした。

蓮もコバルトブルーの剣を振った。一閃二閃と剣が戦士に向かっていく。

キーンという鉄通しがぶつかり合う独特の音が木霊した。そこには戦士の他にもう一人立っていた。

髪は黒色の短髪。目は金色に光っていた。戦士ともう一人の手には太刀というべきかわからないが、長刀が握られていた。

「昂。大丈夫ですか？」

「ああ」

蓮の隣にいたスローダーは口を開いた。

「太刀・・・。ということは、あなたが長刀使いですか？」

「いかにも私が長刀使いだが・・・何か？」

「簡単だ。お前が敵と分かれば私はお前を倒すだけだ」

なんだかパートナー通しの言い争いになってる。しかし、今はツッコムところではない。戦いに集中しなければ。

「行くぞ。長刀使いよ！主！」

「ああ！」

一閃、二閃と風のような速さで剣を振り回す蓮とスローダー。

それに対し昴という男と長刀使いはそれを受け流していく。

一旦間合いが離れ、蓮とスローダーは一気に間合いを詰める。2人は剣を裁いていく。

それに対して、昴という男と長刀使いは受け流す。

剣と刀がぶつかり合う度に、火花が飛び散るような切りあいだった。蓮とスローダーの剣裁きは速かった。まさにハヤテのごとくである。昴と長刀使いはそれを受け流す。

そう、まさに、柳に風、暖簾にこけおどしである。二つの剣と刀通しがぶつかり合い、蓮と昴、スローダーと長刀使いは同時にはじけ飛んだ。着地のときに砂煙が舞う。即座に剣と刀をぶつかり合わせる4人。

その時である。

「風の刀・発動！」

「大いなる雷・発動」

という呪文が聞こえた。その発信源は雅菜とそのパートナーである。発動後、三日月の形をしたものが複数飛んできて、上からはものす

「ごい雷が落ちてきた。普通の落雷とはわけが違つ。昴と長刀使いはそれを見破つたかのようにけた。もちろん三日月のようなものは全て避けられていた。」

「もう一回行くよ！マジシャン！」

「はい。主」

激しい雅菜に対し、パートナーのマジシャンは冷静である。

まずは雅菜が呪文を唱える。

「風の精霊^{シルフ}！風を切り裂く鎌となれ！30天星。風の刀・発動！」

暗闇の中からさつきと同じ風の刀が30出てきた。昴は自分の長刀で全てはじき落とした。

「なるほど……。主は風が得意なのですね。ではこんなのはどうでしょう？」

「暴風の槍・発動」

「え！！無詠唱！？」

敵の目の前に竜巻の突撃槍が表れた。敵のパートナーはそれかわした。

それを見ていた昴は、こちらに向き直り意外な言葉を発した。

「フン。飽きた。今日はこれくらいにしておいてやる」

なんという気分屋だ。お店だといつ開くか分からんじゃないか。困

った奴だ。まったく。

「しかし、マジシャンの主に比べて、スローダーの主。いい動きをする。名は？」

「黒木蓮。それより雅菜を侮辱するきか？」

「蓮か……。覚えておく。後、俺は弱い奴には興味は無い。それだけだ」

男は名を聞いて、そういい残し立ち去ろうとした。

「待て。聞き捨てらない言葉もあるが、こっちは名を名乗ったのにそっちは名乗らないつもりか？」

「林^{りんすばる}昂」

塀の上に上り月に背を向けて、名を名乗った。

蓮には月の光が昂のオーラのように見えた。

リン？中国人なのか？あの男は。昂は帰りざまに言い放った。

「お前達はいつまでそのような戦い方をするつもりだ？それではないつか死ぬぞ？その協会の犬。教えてやったほうがいい」

昂は龍を後ろ目で見て去った。

今は冬だというのに木枯らしが吹いていた。

「ふう」

雅菜は力が一気に抜けたように腰を下ろした。蓮もそれにつられて

腰を下ろした。

「でもすごいんだね。マジシャンって。無詠唱魔法できるんだね！」

「魔法使いですから」

雅菜はマジシャンの顔を見上げると、マジシャンは微笑んで見下ろした。

月を見ていた蓮に鎧から普通の服に変わったスローダーが歩み寄り、腰を下ろして背中に手をそえた。

「蓮。大丈夫ですか？」

スローダーの声は透き通っていたが、顔が今にも泣きそうだった。さぞ心配だったのだろう。

「ああ。大丈夫だ。というより、名前で呼んでくれたな。スローダー」

「えっ！？あつ！す…すみません！主！つ…つい！」

蓮の名前が出ていたスローダーはあわあわしだした。そんなスローダーも可愛かった。雅菜には劣るが。

「いや、いいよ。そっちのほうがいいから」

「そ…そうですか？わかりました。レ…蓮」

スローダーはそう言いながらうつむき顔を赤らめていた。蓮はそんなスローダーを見て微笑んだ後、龍を見た。

龍の顔は鋭かったが、蓮に見られているのに気づくと顔を緩めた。
こうして林昴と長刀使いとの戦いが終わった。
のだが、これから新たな戦いが始まろうとしていた。

新たな唱・魂の共鳴 第四章 獣王真中（前書き）

ここから物語りは急激に変化します。

ですから第二部というわけです。

第二部から血等多々ありますのでだめな方は遠慮してください

獣なら本能を働かせ。猛威を振るえ。皆から恐れられる王となれ。そう言われて生きてきた。しかし、私は愚か者。弱いのです。強くなりたい。そう願っていた

蓮、龍、雅菜、スローダー、マジシャンの5人は林昴と長刀使いとの戦いを終え、居間に入っており、雅菜以外は座布団の上に座っている。

雅菜はソファーに座っている。特等席なのか？そのソファーは？とりあえずそれは置いといて。

今関係あるのは林の残したあの『そのような戦い方』という言葉だ。確か龍兄から聞いたのは今までの戦い方であっている。

しかし、昴はその戦い方は間違っていると主張した。一体どういうことなのだろうか。と蓮に疑問に懷いているときの会話である。

「でもあの林昴と長刀使いつてたいしたことなかったね」

「それは違いますよ。雅菜。あの者達は本気ではありませんでした」

「えっ！？うそ！？」

「嘘ではありません。現に私と蓮の攻撃は全て受け流されています。反撃もせずですよ？ということは受け流す程度の敵と認識されたのです」

「確かに。認識されたかはわからないが、本気ではないとうことは本当だ」

雅菜の意見に対して、スローダーの反論。その補助のように蓮が付け足した。

昴と長刀使いは蓮とスローダーの剣を受け流してはいたが、反撃はしなかった。

さらに雅菜とマジシャンの魔法ですら避けていた。いくら長刀とはいえ、剣士の端くれ。剣士は真つ向勝負なら受けてたち、そして切り返す。というのが一般的である。

しかし、昴と長刀使いの戦い方は相手の失態を出させるように、こちらが守り、失態を犯すと反撃と出る。という後衛戦のやり方である。

マジシャンや弓兵のように後衛を得意とする戦士なら2人の戦い方は分かるが、近距離戦を得意とする長刀使いには圧倒的不利である。

「一体何を狙ってここへ攻めてきたのでしょうか？彼らには殺気が全くと言っていいほどありませんでしたし、どう見ます蓮？」

そのように訪ねたスローダーは長方形に作られた、高さの無いテーブルの右下（つまりスローダーの方から見て右の右）に姿勢を一切崩さず、見事な正座で蓮に聞いた。

そのような礼儀正しいスローダーに対して、隣にいる蓮は悠々と胡坐をかいて座っている。

「恐らく殺しに来たつもりだったのかもしれない。少なくとも最初出会ったときは、殺意はあった」

「なら、何故？」

スローダーは眉を顰めて首を傾けて聞いてくる。
蓮はスローダーに目を合わせず、首を横に振った。確かに、昂には最初の出会った寸前に殺意が充満していた。
目は鋭く、まさに闇だった。暗闇に溶け込むほどの闇。そのような鋭く胸に刺さるような殺気はいつの間にか消えていた。
何時消えたのかは、わからない。貪欲の闇は消し飛んでいた。何故闇が飛んだのかは分からないが、一番の謎はやはりアレだ。“何故殺さなかった。何故生かした”ということである。
わけの分からない蓮はテーブルに肘をつけ、頭を抱え込んだ。それを見たスローダーは質問の相手を変えた。

「龍。貴方は分かりますか？」

今まで腕を組んで、目を瞑ったまま話を聞いていた龍。
スローダーの質問でやっと目を開け、答えた。静かに、呟くように。

「昂という男……。蓮の言う通り始めは殺す気だったのだろう。しかし、奴は蓮のアーティファクトを見た瞬間に殺気が消えた。何故か分かるか？」

その質問に蓮は顔を上げ、スローダーは首を横に振り、マジシャンは微笑んだ。

「全然分からない。何で？龍兄？」

「……雅菜が聞いたか。まあいい。奴は蓮のアーティファクトを見たときなんと呟いた？」

「確か……。コバルトブルーの剣がどうか……」

「蓮。 重要なのは氷帝の剣なのではないでしょうか？」

「そのとおりだ。 スローダー。 氷帝の剣はあの対立戦争時に使われていた大戦士エグナの3つの剣のうちの1つだ」

大戦士エグナ。 大魔法使いカルディアとの戦いで負けた英雄。 彼の武器は幾つもあったが、代表といえる武器が4つあった。 炎帝の剣、雷帝の剣、氷帝の剣、史上最高の防御を誇る賢者の盾である。

これらのエグナの4つの武器を含む最高の武器10を武神という。 蓮のアーティーファクトの剣は武神の一つ、氷を生む剣・氷帝の剣だと龍は言っている。

「その武神だからどうしたというんだ？」

まだ、頭が混乱しているせいか、蓮の頭の回転は鈍っていた。 呆れたように溜息をつく龍。 しかたがないと思い説明しようと口を開いたとき、意外なところから説明が飛んできた。

「武神だから問題なのですよ。 スローダーの主」

「マジシャン・・・」

そう今までずっと微笑んでいたマジシャンである。

マジシャンだったせいか、あの龍がぼかんとした顔で呟いた。

「クスッ。 まあ、普通はそうなるでしょうね。 いいですか？ 続けますよ？」

「あ・・・ああ」

「武神だから問題ということは貴女にもわかりますね？スローダー」

「ええ」

「何で？」

「いいですかスローダーの主。武神とは神が持つのにふさわしい10個の武器のことを言うのです。つまり、武神は武器の頂なのです。武神を持つものは神にもっとも近い存在なのです」

「な・・・なぜ、そんなスゴイ物を俺がアーティファクトとして持っている？」

「個人のアーティファクトは神鏡が血に合ったものを与える。これがどういうことか分かるか？神鏡はお前の血で、氷帝の剣を与えた。つまり、お前はおそらくエグナの血縁」

「そ・・・そんなはずは無い！だってお・・・俺は無名の一族の血だぞ？」

冷静になって、とてつもないことを言った龍。

それを聞いて慌てふためく蓮。

それもそのはず、黒木に養子に来る前の蓮の一族は無名の家柄で、魔導師達を護衛するための一族だった。そのような一族があの大剣士エグナの血であるはずが無いと蓮は考えたのである。

「いや。それは違う蓮。お前の一族は無名では無く、わざと無名にしていた」

「え？・・・どういうことだよ。それ」

「お前の一族は魔剣士だった。エグナの血縁は全て魔剣士となっている。その血縁の名門は水戸・木乃葉・神楽・白火。そして、今は無き隠された名門、七瀬。」

対魔の技を使う魔剣士。その中の名門4家。その中で最強とされていた神楽。しかし、実際は違う。対魔4家と言われていた魔剣士。その4家にもうひとつ隠家と言われ伝えられなかった七瀬。この七瀬が強大な力を持っていた。

しかし、その力の強大さ故、七瀬は他の4家によって滅ぼされた。」

その日数1ヶ月。この名門襲撃はおよそ6年ぐらい前のことである。その滅ばされた七瀬の生き残り、それが蓮である。蓮自身はそのことを知らないという。

それもそのはずである。

七瀬は隠された名門かつ、この名門襲撃「けんげつはく剣月白」は語り継がれていないからである。

「そ・・・そんな・・・。七瀬が・・・」

「蓮兄・・・」

戸惑いを隠せない蓮。それを心配している雅菜。それを崩すかのようには話す龍。

「ショックだろうな。だが・・・それが事実だ。その事実を受けとめろ。蓮」

その言葉を聴いて、雅菜が急に立ち上がりきれた。

「そんなこと言わなくてもいいじゃん!!きつすぎるよ龍兄!!蓮兄は・・・」

「いいよ・・・雅菜・・・」

「レ・・・蓮兄・・・」

「それが事実なら俺はそれを受け止めるし、七瀬がどうであつたろうと俺は黒木孝良に養子として拾われた。だから今は黒木の人間だ。七瀬は関係ない」

「フツ。その通りだ蓮。お前はお前でいろ。七瀬蓮ではなく、黒木蓮として俺は付き合つてやるつもりだ。雅菜・・・お前はどうか？」

「あ・・・当たり前だよ!」

その一言が嬉しかったのか、笑顔になった。

それに気がついた雅菜は頬が赤くなった。

これで謎が解けたかというそれはNOと帰ってくるに違いない。そうアノ謎が残っていた。

「とりあえず七瀬のことは置いておいて、もう一つ謎がある。龍兄」

「ん?何だ?」

「何だ?・・・じゃない!俺らの戦い方が違つてどういうことだよ!」

「あ・・・それが」

雅菜の火照った顔は冷えていた。その状況で呟く。

「……確かに今までの戦い方は違う。いや、今までの戦い方で大丈夫だと思っていた。しかし、林昴という男の戦い方を見てわかった。今回の神鏡戦争は正式なやり方でいけないな」

「「「……」」」

3人は黙り込んでいた。

「蓮。雅菜。外へ出る。これからの戦い方を教えてやる」

「ああ」

そう言つて蓮は立ち上がろうとした。その時である。

「蓮。外へ出る前に私を戻してください」

「何で？」

「何で？ではありません！！いいですか。私達パートナーを出している間は魔力を消費し続けているのですよ！ずっと出したままでは・・・」

「何だ。そんなことか。それなら心配は要らないよ。俺らの魔力を甘くみるなよ」

スローダーは立ち上がり見ぶり手振りで説明していたが、蓮のそっけない返事によりもろくも崩れた。

さらに蓮の隣にいる雅菜も笑顔で首を縦に振っていた。

龍もスローダー達を背中にして、目だけで見て、ニヤリと、微笑んでいた。

その時、スローダーは初めて感じた。この人達はすごい主達なんだと。スローダーは、後ろから肩を叩かれた。マジシャンである。

「主達に甘えましょう。スローダー」

「・・・はい」

5人は居間を出て廊下を抜け、肌寒い暗闇へと出た。

緩やかな大人しい風がやけに寒い。寒冷前線でもあるのだろうか。雪がふつてきそうだった。小1時間前の戦いが嘘のように庭は、静かだった。

5人は正門から3mほど離れたところに立っていた。

「雅菜・・・寒くないか？」

「ん？大丈夫。耐寒の魔法をかけてるから」

「そうか・・・」

魔導師達には、補助的な魔法がある。

代表的なものは、耐熱、耐寒、身体向上、速度上昇の4つである。

魔導師達はこのような補助的魔法を使うことで、生活しているのである。

「いいか？蓮、雅菜。この神鏡戦争において必要な魔術がある。それが『魂の共鳴』・・・」

「魂の・・・共鳴？」

共鳴それは、“人の考えに同感し、賛成すること。振動数の等しい物体の一方が他方の物体の振動に応じて振動すること”ということ。

そして、魂の共鳴とは、自分の体に霊などを憑依させる交霊術であり、霊が人に対して賛成して憑依となるこの魂の共鳴は“共鳴”というのである。

魂の共鳴は、霊の位が高くなるにつれて、難易度は増す。靈感の少し強い人が見える不幽霊なら簡単なのだが、精霊クラスの霊となると難易度はかなり高い。

その精霊クラスの中でも、水の精霊・ウンディーネ、風の精霊・シルフ、火の精霊・イフリート、地の精霊・ノームの四大勢霊とになれば難易度も上級クラスであり、魔力消費も激しい。

ましてや、今“共鳴”させるのは、四大精霊を超える神霊である。神霊は神に近き精霊である。そのような精霊との魂の共鳴の難易度は最上級クラスである。

「魂の共鳴はお前たちの知っているとおり・・・」

「ちょっと待て。神霊クラスの魂の共鳴だと？そんな魔法は出来ないぞ」

「わ・・・私も・・・」

「刻印を使えばいい」

現代の魔導師達には、協会から刻印と呼ばれる、魔法によって造られた刺青が与えられる。刻印には膨大な魔力が蓄えられており、刻印には模様として呪文が書かれている。

その呪文は最上級クラスばかりである。その強大さ故に、普段は協

会の上位の者しか扱ってはいけないものとされてきたのだが、この神鏡戦争では、刻印の使用を許されているのである。

龍は首にかかっているネックレスに手を置き、アーティファクトを取り出した。

龍のアーティファクト、黒き漆の槍。

その槍を片手に握り、片方の手で、内ポケットに潜めていたカードを取り出し、パートナーを呼び出した。

「どうしました？ 龍」

「ちょっとな。早速で悪いが、魂の共鳴をやるぞ」

「はて？ 今度の神鏡戦争は、魂の共鳴はいらなかったのではないのですか？」

「予定が変わった」

「・・・そう・・・ですか。かまいませんよ」

槍士は、微笑んで答えた。そのことを確認すると、龍は、普段は魔法で見えない右腕に刻まれた文字の刻印をあらわにした。不気味なほどに刻まれた黒き文字の刺青。

インベリアールム
「開門」

龍のその一言で、右腕に刻まれた黒き文字の刺青は、紺碧色に光だし、ガラスのように碎き割れたかと思うと、紺碧の刻印は龍を守るかのように、複数のサークル状となって回りだした。

龍はその文字のサークルを振り払うかのように、腕を横に振った。サークルに亀裂が入る。亀裂の端は槍士の首めがけて、飛んでいく。

他の文字たちも端を追いかける。

目的地はいつの間にか着いていた槍士の首輪。文字は首輪にたどり着くと、鎖となった。その鎖によって龍の右腕と槍士の首が繋がった。

その後、龍は鎖を手に巻きつけ、フンツ、と鼻を鳴らし、槍士を空中へと飛ばした。

その瞬間信じられないことが起きた。

龍は手に持っていた黒き槍を槍士の胸に向かって突き上げた。空中で逃げようの無い槍士。黒き刃が・・・刺さった。

「ちよっ！龍兄何してるの!？」

そのような雅菜の言葉に龍は一瞥を与え、唱えた。

「魂の・・・共鳴!」

発動の合図なのだろう。

龍と槍士はその状態のまま、竜巻に飲まれた。吹き荒れる剛風。中からもれてくる旋風。周りの木々たちも悲鳴を上げ、耐えている。窓ガラスは歯を鳴らし、竜巻は枯葉と砂を巻き上げる。

この竜巻の正体は、魔力の漏れ。そのような魔力の漏れで出来た竜巻が、敷地内の結界をはがそうとする。この結界が崩れれば、町は大惨事となる。

はがれてゆくまで後10秒というときに、竜巻が弱まっていく。上空から少しずつ下がっていく、暴れる風。人の高さぐらいになったとき、その姿を現した。

黒き瞳と漆黒の髪。体つきは龍そのものであったが、槍士の武装を纏い、体中には刻印。それは龍であり龍でなかった。

「龍兄・・・そ、その姿は?」

目を見開き、龍に指差しながら聞いた蓮。その返事は冷静だった。

「自分の体を媒体にして、パートナーを完全再生させる。これが魂の共鳴だ」

「完全再生？」

さつきの竜巻で腰が抜け、座り込んでいる雅菜が聞く。龍は頷き話を続けた。

「そう。元よりコイツらパートナーコイツらは現実に存在し、命をたつた後、神を守る者・セイントガーディアン聖なる守護者として神に使える者達。そして戦争になると、地上に降りてきて、体を古代道具に、魂を霊体として主の前に現れる。そして、その主の体を媒体とし、元の自分を完全に復活させるということだ」

「それが・・・完全復活？」

龍は無言かつ無表情で頷く。

アウルスアーレム
「閉門」

呪文を唱える。

龍の武装は、小さな光の粒となり、解除された。

その小さな粒が集まり出来たものは槍士。槍士は微笑んでいた。その異様な光景にあっけからんと見ていた蓮と雅菜。それを見た龍は溜息をつき、話しかけた。

「5人とも中に入ってくれ。いや・・・蓮、雅菜、パートナーを戻

せ。これ以上の召還は不要だ」

「それだったらさつき居間で戻しても良かったんじゃないか？」

「いや重要だ。魂の共鳴はお互いが理解しない限りできない。それをパートナーにもわかってもらいたくてな」

「・・・なるほど」

そう理解した蓮と雅菜はそれぞれのパートナーを戻した。

3人は居間に戻り、今後のことについて話していた。今は午前1時。今日に限って3人とも眠くは無かった。

「今わかつている戦士はうお座、乙女座、さそり座、いて座、みずがめ座だな。・・・後七人」

龍は2重の円を書き、線と線との間に、上をおうし座とし、星座のシンボルマークを書いた紙をテーブルの上に置き、うお座、乙女座、さそり座、いて座、みずがめ座に丸をつけていった。

「今後注意しなければいけない存在は、『破壊者』と『狂戦士』か？」

「・・・いや、その2人は問題ない。攻撃力ではトップだが、理性が無いからな。戦略を駆使して戦えば問題は無いだろう。後は、主をなんとかすればいいのだからな。それより問題といえば・・・『騎馬士』と『弓士』か」

蓮の質問に対し冷静になって答え、その答えに蓮が驚いた。

「ハア！？弓士！？なんで？あいつそんなに強くなかっただろ？」

「それは前の戦い方の場合だ。魂の共鳴では違う。弓士は四大騎士クラスだからな」

「四大・・・騎士クラス？」

「そう。白兵戦の主力。剣士、槍士、弓士、騎馬士が四大騎士クラスとなる。本物の戦場を戦ってきたコイツらは戦いのプロ。近距離最強の剣士。間合いを取れば敵なしの槍士。弓の遠距離、短刀の近距離、2つの武器を扱う弓士。速さは最速、頭上からの攻撃の騎馬士。この神鏡戦争において敵にしたいくないやつらだ」

「・・・なるほど」

「でもそのうちの剣士と槍士はこっちに居るんだから大丈夫だよな」

「・・・それも含めて明日にしよう。今日はもう遅い」

そう言つて3人はしぶしぶ寝室に入った。

孝良が大金を使つて立てた蓮が誇る家には強大な庭がある。

その庭には木が数本並んでいる。蓮の寝室の窓ガラスからはその木々が見える。

蓮の家の木は枯れることが無い。魔法をかけて、一定以上葉が落ちないようになっている。そのような不思議な木があるというのに、NEWSにはならない。

なぜか。それは蓮の家の周りには一軒も家が無い。さらに坂の上にあるため人も通らないような場所にあるからだ。さらに言えば、魔

導師にしか見えないように、魔法をかけてあるのだった。

窓ガラスから、木漏れ日が入ってくる。涼しげな風に葉を揺らし、木漏れ日を踊らせる。目が覚めた蓮はゆっくりと体を起こす。

「……………ンッ……………」

背伸びをする。体は起きても頭は起きない。

現在の時刻 8:00。

布団をたたみ、押入れにしまふ。

机の上においてある2枚の写真に目がいく。

1枚目は孝良と蓮の写真。2枚目は七瀬のときの写真。

「おはよう。父さん。みんな」

写真に挨拶を交わし、居間に向かう。TVの音が聞こえる。

「……………」

襖を開ける。そこには定番の男が座っていた。龍だ。

龍はせんべいを片手にわけのわからないテレビ番組を見ていた。

龍はふすまでたっている蓮に気づいて、片手をあげて挨拶をした。

「ん？よう。起きたか」

「……………ああ」

「朝食作っておいたぞ」

そんなことを言ってダイニングにあるテーブルを指差した。

ダイニングと言ってもあるのは4人座れるのがギリギリのスペース

にあるので、ただ置いてあるだけだ。

朝食、昼食、夕食になれば居間に持つてきて、食べるというのが習慣となっていた。

蓮は眠気眼で朝食を食べていた。成長したのだろうか、朝食のバランスは良くなっていた。白飯、目玉焼き、ほうれん草のおひたし、シヤケ、豆腐、味噌汁ときた。

「……………」

物静かな朝食。聞こえてくるのはTVの音と時計の針、外からの風の音である。

「……………つかれたか？」

「……………。いや、別に」

「……………そうか」

TVを見たまま聞いてくる。蓮も静に返す。沈黙とまたなる。

「ごちそうさま」

手を合わせ、拝むように言った。

使った食器をキッチンへと持つて行き、洗い始めた。

さっきの音に水の流れる音が追加された。しかしただそれだけだ。

「紅茶飲むか？龍兄」

「ああ。頼む」

「了解」

食器を洗い終わり紅茶を煎れテーブルに置く。
蓮も龍も紅茶を飲んでいたとき、襖が開けられる。
そこに立っていたのは普段は可愛らしい赤髪の少女なのだが、寝起きは髪もボサボサで別人の雅菜だった。

「・・・おはよう。蓮兄。龍兄」

「おはよう。眠そうだな」

「・・・ンツ・・・眠い。顔・・・洗ってくる」

そう言った学園一美少女は居間を横切り、廊下の突き当たり浴室の部屋の隣の洗面所へと入っていった。

それを見届けた蓮は時計を見る。

時刻9:00。

沈黙は蓮が起きてから1時間ほど続いていた。軽快な足音が聞こえる。雅菜だ。

「いやー。やっと目が覚めた。おなか減った」

元気になっていた。寝起きと目が覚めたときのテンションは天と地の差がある。

しかし2人は驚かなかった。慣れているのである。

「朝食ならダイニングだ」

「ん？あつ！本当だ。ありがとー龍兄」

雅菜は飛び切りの笑顔でダイニングへと向かい、朝食をテーブルに持ってきてあつという間に食べ終わった。食べ始めてから終わるまでの時間は3分。

3人が紅茶を飲んでいた・・・ちなみに蓮と龍は2杯目である。

「今日2人はどうするんだ？」

「あー、俺は掃除」

「私は友達と買い物。龍兄は？」

「そうだな。・・・図書館でも行ってくるかな。・・・それより蓮」

「ん？なんだ？」

「掃除ってこの屋敷全部か？」

「ああ。そうだが？手伝わなくてもいいぞ。慣れているから」

「・・・そうか」

3人は紅茶を飲み終わると、蓮はエプロンに三角巾の掃除服、雅菜はラフな可愛い服、龍は渋いダンディ服に着替え別々に行動し始めた。

龍は正門を出て、図書館へと向かうために緩やかな坂を下りていった。

黒帝市が誇る三大建築のうちの一つ黒帝市立黒雛図書館は黒帝学園から南西700mほどのところにあり、県内一の貯蔵をしており1〜5階にかけて本が並んでいる。その本すべてを把握しているもの

はない。

龍は小説類を読んだあと、とある1つの本を手にとった。その本は星座に関する本だった。

「12星座・・・ペガサス・・・オリオン・・・」

そう呟き1時間ほど色々な本を読みふかした。

黒帝市の三大建築は黒帝市立黒帝学園、黒帝市立黒雛図書館、センタービル93である。

センタービル93は高層ビルがちらほら見える黒帝市のなかで最も高く、10階にかけて飲食店からいろいろな店が並ぶショッピングセンターである。後の20～50階にかけてはなにがあるのかは知らない。

龍はそのセンタービル93へ向かっていた。

日曜日だけにセンタービルへとつづく大通りは人が多い。大通りの大噴水の前で多くの人が休んでいる。

龍にとってその光景はどうでもよかった。

ただ人が歩いている、休んでいるということだけで何も感じない。ただその日は違った。龍はセンタービルの方向から来る女性が気になったのだ。女性は茶髪で身長は雅菜と同じくらいだ。

その女の人とすれ違う。香水なのかほのかにジャスミンの匂いがした。

龍は目で女性を追っていた。その時に女性はハンカチを落とした。

龍はハンカチを拾う。桜色でカウスボタンの絵柄のハンカチだった。

「落しましたよ」

「あら。ありがとう」

「いえ。別に」

センタービルへ向かおうとしたときだった。

「あなたね。最年少魔術協会幹部って人は」

「!」

目を見開いて振り向く。女性には微笑んでいた。

「驚きみたいね。・・当たり前だけど。ここではなんだから、向こうにいかない？」

女性の指は学校近くの丘を指していた。

女性と龍は商店街を抜け、丘へとついた。移動しているときも嫌な雰囲気だった。

「さてと。まずは自己紹介からかな？私は桂美香^{かつらみか}。魔導師よ」

「・・・・・」

「あら？無視？普通は名乗ったら名乗り返すのではなくて？それとも教えられなかったのかしら？どうなの？」

「・・・よくしゃべる人だ。姉さんに劣らないな。・・・。沼地龍。俺の名だ。あんたの知つてのとおり協会幹部だ。で、なんのためにここへつれて来た？こんな話ならここでもなくてもいいだろう？」

「意地悪な人ね。わかってるくせに。何のために結界を張ったと思うの？」

そいつ桂美香なる女性は裾をまくり、青く光る・・・アレをみせた。しし座のマークだった。

「・・・戦争か」

女性は頷く。

「いいだろう。さつさと終わらせてやる」

即座に龍は武装した。

「あら、無詠唱で魂の共鳴できるのね。・・・さすがね。」

「・・・」

「じゃあ、私も。・・・魂の共鳴」

桂美香は、マントをはおり、ライオンのたてがみ鬣のマフラーの装備でいかにも百獣の王といった感じだ。

「じゃあ・・・始めましょうか。死合を」

美香は不気味に笑っていたが、龍は動じなかった。

ケルガナ・オーリア
「百獣の軍制」

美希は体が全て入るマントの右側を広げた。

そこに彼女の体は無く、そこに見えるのは黒い空間のゆがみだった。その黒きゆがみから獣の形をした黒い物体が現れた。

「・・・影か」

「そうよ。どう？私の影獣たちは？」

「フツ、最高だな。ライオン・・・トラ・・・グリズリー・・・バツファロー・・・多いな」

彼女は右手を挙げた。

獣達はその合図で一斉に龍に襲い掛かった。

龍は連突き、切り上げ、横払い、そして回転。槍術を駆使して黒い獣たちを薙ぎ払っていった。獣の爪、牙を避け突く。そんなことを15分ぐらい繰り返していた。

「やるね。でもまだまだあ！！」

次から次へと獣たちを繰り出す。その獣たちを紙切れの如く薙ぎ払う。

（クツ。きりが無い。しかしあの古代道具・・・ものすごい魔力だな。いっこうに減らない）

襲われて避けては薙ぎ払う。その繰り返しをやっていたのだが、急に獣たちの動きが止まった。

「あなたぐらいになるとわかるでしょ？私の古代道具のこと」

「ああ。武神を持たないパートナーには複数の古代道具が与えられ

たりする。・・・その余裕・・・まだあるな？」

「さすがね。そう例えばこれ」

そういつて具現化したのは鉄爪。

鉄爪を着けた瞬間に桂美香は消えたと思ったら、急に龍の前に現れた。

龍はそれを見切りとつさに避けた。

「あぶなっ」

「よくよけたわね。・・・いけ！」

彼女は後ろに飛びのき獣たちに合図を送る。獣たちは、また龍に襲い掛かる。先ほどの荷の前である。

「ええい！面倒くさい！まとめてぶっ倒す！」

「槍士がそんなことできるのかしら？」

「できる」

龍は槍を頭上で回転し、風の音が強くなったとき龍自身も回り始めた。

風が舞い上がり造られていく。そうして出来たのは龍を中心として龍を包み込む竜巻。その巨大竜巻をその状態のまま槍の先端に乗せる。まるで槍から竜巻が発生している光景である。

「ハアアアア！！風殺！！ロウテム・ホロウガデン龍隴白槍！！！！」

龍は槍を横に薙ぎ払う。竜巻は地を這いながら槍を追う。獣たちは地を這う巨大な風の蛇に飲み込まれていった。そして1回りし竜巻は消え去った。草が生い茂った丘は土しか見えなくなっていた。

「そんな・・・私の獣たちが全部？百万もいたのに」

（百万もいたのか）

「そう・・・それがあなたの・・・その白い槍の名ね。」

龍が竜巻を発生したとき槍は白になっていた。太陽の光を反射してダイヤモンドダスト並みに輝き美しかった。

「ハア、ハア、ハア」

「なら・・・これならどう？」

美香はマントを首輪の状態に戻し、鉄爪を着けた。

「いくよ・・・キメラの爪」
キメラ・クロウ

美香はさっきの通り俊足で消え、龍の背後に周った。龍はそれを察知し槍を薙ぎ払った。美香は薙ぎ払われた部分だけ揺らめいた。

「・・・残像か！」

そのことに気づいたときには遅かった。

“ザクッ”

その音で十分だった。

龍の背中には爪で引掻かれた傷。

その傷からは紅い水、血という水しぶきが飛び散り、紅い雨となって地面に降り注いだ。

“カハッ”

口の中に血が上ってきた。それをきられた勢いで吐く。

いわいる吐血。背中が焼けるように熱い。膝を付いているため、背中から生暖かい液体が流れてくる。服は紅く染まり、一滴ずつ地面に落ちる。目がかすんでくる。

「ッ……」

「どう？痛い？痛いでしょうね。でもすぐに回復しちゃうのよね。私たちなんかそんなダメージをくらったら3日はかかるよね。パートナーの中でも四大騎士クラスとマジシャンの回復力は以上と聞いたわ。……うらやまし。でも、四大騎士クラスの中でも槍士は一番回復量が遅いらしいわね」

「やっぱりあなたはおしゃべりだな。いくら遅いと言っても以上なのは変わらない。完全回復完了だ」

「へへ。そんなもんなんだ。なら確実に息の根を止めないといけなのね」

「出来るかな？あなたに」

「やってあげる 行け！」

そういつて彼女の古代道具『ケルガナ・オーリア百十の軍制』から出てくる獣たちは龍に襲い掛かる。しかも、今度は小型のスピードの速い獣が混ざっていた。

ロウテム・ホロウガデン龍の『龍隴白槍』は軍隊専用の軍人武器だが、それだけに発動まで

に時間が掛かる。発動すれば小型の獣に皮を剥ぎ取られることは一目瞭然だった。

「どうするの？さっきのアーティーファクトは使えないわよ？」

「問題ない」

そういつて龍は獣達と距離を置いた。そして、槍に手をかざし呪文を唱えた。

「隠された力・突撃^{ランス}槍。いま我の前にその姿を現し、我に力を与えよ」

風が吹く。霧が出てくる。丘一体は濃い霧に覆われた。その霧が晴れていく。

視界がはつきりとなり、桂美香は龍の姿を捉えた。龍はただ突くことのみに適しているであろう突撃槍を持っていた。

「それはランス？ランスでは獣達を一掃するのは難しいのではなくて？」

龍は雲の少ない空を見上げ、空高く跳んだ。

「あらあら。空に逃げては逃げ場が無いのではなくて？何を考えているのかは分かりませんが、まあいいわ。・・・奴の真下につきな」

美香は獣たちに支持を出し、龍の真下に集めさせた。

「これでTHE・ENDね」

「どうかな。俺は策があるから上に行ったのだぞ？これがどういうことを指しているかはわかるな？」

「！まさか！皆散らばりな！！」

「もう遅い！！我がアーティーファクトを食らうがいい！！ボルテクス・デ・ランティス爆発を伴う突撃の槍！」

一直線に下降する龍。

そのスピードはかなりのものだった。空間に白い線が描かれ、白い線は地面に激突する。その瞬間、起きたのは爆発。爆炎が獣たちを波のように飲み込んでいく。そして全滅。黒い塊は見事になくなっていた。

「なっ！」

黒鉛が霧状となって消えていく。

そこに龍は立っていた。彼の周りは爆弾でも落ちたようにクレーターとなっていた。

龍は桂美希に向ける。

「くっ！」

後退。それがなにを記していたのかは、言わなくてもわかることだろう。龍の目は敵意に満ちていた。その殺意のある表情で話した。

ボルテクス・デ・ランティス「爆発を伴う突撃の槍は槍がぶつかったものを爆発させる槍。地にぶつければ、地が爆弾となる。」

「なるほどね。それならより早く一掃できるわね。・・・答えなさい」

「何を？」

「何故・・・何故四大騎士クラスがそれだけのアーティファクトを持つてるの！四台騎士クラスはその力故にアーティファクトは1つのはず！」

「簡単だ。四大騎士クラスだからだ。四大騎士クラスは対立戦争で活躍した四人の騎士。やつらはいくつもの同種の武器を扱っていた。それらの武器がアーティファクトになってもおかしくはないだろう？」

「クツ・・・ということは・・・あんたのパートナーは・・・もしかしたら」

「そう。我がパートナー・^{スレイヤー}SPEYERは、唯一一人のカルデア軍の騎士。女槍士・ディラムンス。彼女は3つの魔法武器を扱い、エグナ軍と戦った四大戦士」

「・・・なるほどね。ディラムンスならそれだけの槍が扱えて当然か。・・・あんたのパートナーがあのだいラムンスとわかった以上長引かせるわけにはいかない。ここで一気に倒す！私の最強のアーティファクトを使ってね」

「・・・そうか。ならこちらこそそうするか。なあ、獣使い・ライガよ」

「わかってるのね」

「ああ。これほどの獣を操れるのはただ一人だからな。伝説の獣の王ライガ。だろ？あんたのパートナーは」

「ええ。長話もなんだわ。さっさと殺しちゃいましょう。いくわよ」

桂美希はマントも爪も戻した。そして、ガントレットへ手を伸ばした。

「出だよ。……破壊を求める合成獣！！」

黒い幾つもの球体が表れ、合成していく。そうしてできたのが、30mくらいの巨大な獣だった。

三つ首、獅子の鬣、鷹の翼、蛇の尾、ライオンの体。
そうまさに強化版地獄の番犬である。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAA！！！」

雄叫びを上げる合成獣。町に聞こえるはずなのに結界で聞こえない。地面は揺れ、空間が悲鳴をあげる。

「……化け物め……」

龍の頬に汗が流れる。

疲れの汗ではない。目の前にある光景に対しての冷や汗だ。息を呑む龍。10秒が1、2分に感じられる。

（『龍隴白槍』では駄目だ。アレは軍隊専用の軍人武器じゃない。これを相手にするにはやはり対人専用の対人武器でないと……や

はり『爆発を伴う突撃の槍』か？ものはためしだな』

先に動いたのは龍。一気に踏み切る。キマイラケルベロスは強力な召還軍人獣だが、でかいだけに動きは遅かった。

（もらった！）

「ハアアアア！！ボルトクス・デ・ランティス爆発を伴う突撃の槍！」

キマイラケルベロスの足を突く。

足は爆弾と化し、全体を破壊していく。爆発が終わったところには、黒い塊となっていた。

「終わったな」

「あら？そう？」

桂美香はショートボブの髪を手の甲で持ち上げ、微笑んでいた。龍は黒い塊を即座に見る。黒い球体は自分で動き、元の化け物の形に戻っていった。

「なっ！」

「残念だったわね。この子はね、あんたたちと同じ。強力な回復力を持ってるの。だから完全に滅却しないと死なないわよ」

「そういうことか。・・・厄介だな」

それはいきなりであった。キマイラの手が龍に激突していた。吹き飛ばされる龍。体中の骨がきしみ、悲鳴をあげ、何本かが折れた。

しかし、異常なくらいの回復量で何とかなった。

（やはり・・・アレ・・・でないと駄目か）

「一気に終わらせな！」

そう支持し、キマイラに乗る美希。

ケルベロスは口から植物を雨の如く大量に吐き出した。その植物とはトリカブトである。トリカブトの毒にやられれば、それで終わらだろう。

龍はその毒の雨を避けて進む。そして一気に空中へと移動し、キマイラの背中の上へと行くことが出来た。もちろん美希は驚愕の顔を隠さなかった。

「完全滅却しなければならぬのなら、ディラムンス最強の槍を持つて倒す！ディラムンスが愛したこの黒き槍でな！！」

「黒き槍！まさか！」

「これで終わりだ！！死を司る酷使の槍！！」
カナドボルグ

龍は槍を下一直線に突き出す。

黒き槍がキマイラケルベロスをつく。

その瞬間、黒き光が龍と共にキマイラケルベロスを包み込み、跡形も無く破壊していた。その光景を目の前で見ていた美希。彼女はひざまずき弱々しく呟いた。

「そ・・・そんな・・・わ・・・私の最強の古代道具が・・・こんなにも簡単に破られるなんて・・・」

「確かにあんたの『破壊を求める合成獣』は強い。対軍道具としては上位クラスだが、出すときを間違えた。あれは力が強い分スピードが遅くなる。だからこそ動きの早い槍士や騎馬士には向かない。対人では意味が無いんだ」

龍は獲物を納め、美希に歩み寄った。そのときの美希の瞳は涙という水が溢れていた。

「これなら出さなきゃよかった。・・・兄さんに合わせる顔が無いなあ」

美希は涙を堪えながら、空を向き言った。

「兄さん？」

「そう。本当はね、選ばれたのは私じゃないんだ。本当は兄さんなの。なのに、私は絶対勝つから任せて！って言っちゃった」

「なるほど・・・しかし、まだ終わってない。あんたにはまだ2つアーティファクトがあるしパートナーもいる」

「そうだね。・・・でもアレが無くなればあんたには敵わないよ。さっさと終わらして。・・・お願い」

そのときの美希の顔に龍は戸惑った。このまま終わらしてしまってもいいのかと。

美希の顔は悔しさと悲しさが混じったものだった。そして最後の言葉「お願い」というのも。その言葉は龍の胸につき刺さった。

「・・・わかった。いいんだな？」

「・・・うん」

顔を隠して頷く美香。その仕草はまるでではない少女そのものだった。

「カナドボルグ 霊視・死を司る酷使の槍」

霊視・・・それは主本体を傷つけず、主の中に入っているパートナーに直接攻撃できる主のみもつ特殊な技。

黒き槍が美香の胸に刺さる。そしてパートナーは美香の体からはがれ、光と共に消えていった。
硬直し続ける美香。龍はそつと手を差し伸べる。美香はそれに気づき、顔を龍に向ける。

「あなたはパートナーを失った。失った以上危険です。教会へ行って保護を受けてください」

美香は横に首を振った。

そして、今にも倒れそうな弱々しい声で言った。

「それは出来ない。協会には兄さんがいます。今いけば兄が恥さらしです。そんな兄さんを見たくありません。どうか、お願いです。私は戦争が終わるまで隠れてますから見逃してください」

「協会へは行きたくないのですね？なら私の今泊まっている家はどうです？私も協会の人間。こんなところであなを置いていつては示しがつきません。どうします？」

「・・・」

美香は少し考えた後、龍の顔を見ながら言った。

「お邪魔でなければそちらでお願いします」

「はい。喜んで」

龍は笑顔で答え、手を差し伸べた。

美香は手を添えたまま座っていた。どこかの恋愛物語のワンシーン
みたいである。

しかし、この後困るのは龍でなく蓮だということをこのとき龍は気づ
かなかった。

第五章 血の鮮血

助けてください。今の束縛から。救い出してください。この地獄から。誰も傷つけないのに傷つけてしまう。許してください。こんな私を。何をしたら私はこの罪を償うことができるのでしょうか。

雅菜は服に着替え、勢いよく玄関を飛び出した。それを見ていた蓮は苦笑いである。

正門前で元気よく手を振り、そのまま龍が降りて行った坂を下った。雅菜が向かっているのは、学校近くにある公園である。

その公園の規模はそんなに大きくは無い。砂場で幼稚園児が楽しく遊んでいたりする小さな公園である。雅菜はその公園のベンチに腰掛けていた。

現在時刻午前9：00。

今は友達を待っているようだ。

「おい。雅菜あー」

「あ！和かずみ美いー」

遠くのほうで彼女を呼ぶ声がする。

雅菜はそれに気がつくと手を振り走っていく。

雅菜を呼んだのは、かりおかかずみ仮岡和美。雅菜の同級生で親友である。

和美は高校生になってからの知り合った。彼女は隣の三波町の中学から来たのだという。

趣味などが同じということですがすぐに仲良くなれた友達である。

「今日は何処に買い物に行くの？センタービル？」

「うん。今日は隣の和泉町のショッピングセンターまで行く予定」

「なら、電車だね」

「うん」

和泉町は三波町よりも大きく黒帝市近辺の町では一番大きい町である。

つまり黒帝市は和泉町と三波町に挟まれた市なのである。

2人は黒帝駅から乗り込み、和泉享保駅いずみきょうほうまで乗ることにした。一駅150円である。

ちなみに和泉享保駅の次は大和泉駅で町の中心はこちらのほうに近いが、ショッピングセンターには和泉享保駅のほうが近かった。

「そういえばさ。このごろ何処にいるの？家に電話かけても繋がらないし」

「ああ。そっか。言っていなかったね。今ね、有る事情で黒木蓮先輩の家にお邪魔してるんだ。」

「黒木蓮先輩って2年生の！？」

「うん。で、その事情で沼地龍先輩とも一緒にいるの」

「沼地龍先輩って3年生の！？」

「う・うん。そうだけど」

雅菜は学校では龍と蓮のことを友達の前では先輩と呼ぶ。先輩と呼ば
べという龍の命令だ。しかし、3人だけなら兄でいいらしい。

「いいな」

「なんで？」

「なんで？じゃないよ！黒木蓮先輩と沼地龍先輩って言ったら、黒
帝学園のアイドル3人衆じゃん！蓮先輩は剣道やってる姿がかっこ
いいし、龍先輩は生徒会長やってるときとか素敵だし、大体どちら
か2つに分かれるほどよ！今じゃファンクラブだってあるのよ！そ
んな人達と一緒にいるってすごいことよ！」

「そ・・・そうなの？龍先輩はもててることは知ってるけど、蓮先
輩は聞いたこと無いよ？」

「何言ってるの！蓮先輩は隠れファンが多いの！だから噂が漏れな
いのよ！ちなみに私は龍先輩ファンなのよ」

「へ、へーそうなんだ」

今まで見たことのない表情に雅菜はたじたじだ。

ショッピングセンターに行くまでの道のりを蓮と龍がどうかなど
と和美に熱く語られ、雅菜はハイハイと答えながら、半分流してい
た。

ショッピングセンターに着くと話は一転し、商品へと変わった。

和美はアレだコレだと店を回って、雅菜はそれについて行き商品を見
ていた。華が有るというのはこういうことだろうか。2人の美少

女が笑顔を撒き散らしながら、買い物をしていた。とても目に優しくかった。

昼食の時間になり、近くのハンバーガーショップでの話である。

「ねえ、雅菜」

「ん？何？」

「私から誘っておいてあれだけど、午後から用事があるのね。だから今日は終わりにしていい？」

「用事ってデート？」

雅菜はからかうように微笑みながら聞き返す。

「ち、違う！違う！家族の用事。デートだったらどれだけいいことか・・・」

「まず和美は彼氏いないものね」

「な！あ、あんだね！」

「フッフ・・・冗談よ。冗談」

「も、もう。あんたが言っていると冗談に聞こえないよ」

「ゴメン、ゴメン。いいよ。行ってきたよ。私は黒帝市に帰るからさ」

「本当にゴメンね」

2人は駅のホームで別れ、雅菜は黒帝市へ、和美は和泉市へと向かった。

黒帝市に着き、中心街を抜け、町はずれの黒木邸に続く坂へ行こうとしていた。歩きなれた通学路を歩き、この後、蓮兄の手伝いでもしようかなあと思っていると後方から低音の冷たい声がした。

「君が白城雅菜か」

「!?!」

雅菜はのほほんとした顔を引き締めて振り返る。

そこにはスーツを着たショートボブの男性が立っていた。

雅菜が注目したのはその眼だった。

「オッドアイ・・・」

オッドアイは片方の目の色が違うというものだが、彼はまさしくそれだった。右目が紫、左目が赤である。

「あなた誰？一体何者？」

男性は“ニヤリ”という表情を見せ、こう言った。

「やれやれ。白城のお嬢さんがわからないのか？魔導の名門・大野を」

「大野・・・魔力眼を持つと言われていて、魔力では最強を誇る家

計……。もしかしてあなたのオッドアイなのは……」

「そう。この紫の眼がそうさ。しかも、『純血』のな。この魔力眼のおかげで普通の魔導師の倍は生きることになっている。こちらは飽き飽きしているのだが……」

「だから何？何が言いたいのか？」

「まだわからんか。ならばコレでどうだ？」

そういつて男性は右の裾をまくる。そこにはやぎ座のタトゥーが刻まれていた。

「……。ゾディアックの戦士……。なるほど。そういうことね。つまりあなたは神鏡戦争で死にたいのね？」

「いや。むしろ逆だ。このような面白いゲームに参加できたことを嬉しく思っている。何せ私が飽きていたのは平凡な日常だからな。しかし今は違う。私がいるのは生死問わ^{デット・オア・ライブ}ずの狭間だぞ？面白いとは思わないか？私は290年生きてきた。後20年ほどしたら死ぬ。このままではつまらない人生だったと悔やむだろう。そのとき神がくださったのは、この神鏡戦争というわけだよ」

「私はあなたのように平凡な生活がつまらないと思った日はありません。私は平凡かつ普通の生活で満足していました。さらに言えば生死問わ^{デット・オア・ライブ}ずなんてものには興味はありません。私は血が嫌いだ。血は見たくない。私にとってこの神鏡戦争は無意味に過ぎないのですから。今すぐに私の前から消えなさい。そうすれば見逃します。10秒の数え終わって、いるようなら、私はあなたを倒します」

「答えを出すのに10秒もいらぬ。今すぐに出してやる。答えは・
・NOだ」

「そうですか。ならしかたがありません。地獄の淵に送って差し上げます！」

「上等！」

雅菜はアーティファクトの指輪に手をかけようとした時、彼は右手を上げて犬に『待て』のサインをしているかのような体制になった。

「君はルール魔術基準も忘れたのか？ここは人通りが少ないが、一応通るのだからマズイのではないか？」

「・・・それは“第五条 一般人に正体及び、魔術を見せること禁ず”かしら？ここを通るのは魔導師だけだから心配は無いのだけど・
・いいわ。場所を変えましょう」

そう言つて向かったのは山。山というより森林に近い所である。

「ここなら問題無いでしょ？」

「確かに・・・なら始めようか死合いを・・・」

雅菜はマジシャンを召還し、アーティファクトを取り出した。

「ほう。君のパートナーはマジシャンか・・・私の吸血鬼にはうつてつけの敵だな」

「いいかげん君なんてやめてくれないかしら？不愉快でしょうがな
いから」

戦闘態勢に入った雅菜。その質問に答えようとしない男。雅菜が男に対して苛立ちを覚えたころ、男は意外な行動に出た。両腕を大きく広げてこう言い放った。

「我、大野來稜おおのらいりょうが誓う。ここにいる魔女を殺し、あなたに力の血を与える。神よ、我に力を！」

そのわけの分からない行動に雅菜は思った。

（この人はいろんな意味で危ない。頭のどこか逝ってる）

「あなた一回病院行ったほうがいいよ。頭だいぶやばいから」

「これから死に逝く者に心配される必要はない。話し合いも飽きた。さっさと殺るぞ。出て来い、ヴァンパイア」

來稜の横に出てきたのは黒いマントを羽織った赤い瞳の青年だった。彼に霊的な気配はなかった。そこに何かいるという感じだ。

生きていないようなそれがこちらをジッと見つめている。雅菜は大野來稜という人間より、ヴァンパイアのクラスとしてきたパートナーのほうが悪ろしかった。

「マジシャン・・・あのパートナー・・・」

「ええ。霊力がとても大きいですね。生前は能力の大きいものだったのですね」

「まあ、いいわ。さっさと終わらせましょう。いくよ、マジシャン」

「はい。主」

雅菜はマジシャンを体の中にいれ、杖を構えた。

それに対して来校はヴァンパイヤを中に入れた後、とたんに背中に黒い翼が生え、空中に舞い上がった。

「空を・・・飛んだ・・・。それがあなたのアーティファクト？」

「いかにも能力は吸血鬼化。貴様など我が爪で切り裂く」

「あらあら。自分のアーティファクトの能力を喋るなんて、あなた大丈夫？」

「問題はない。これはアーティファクトの能力ではなく、『吸血鬼』のクラスに与えられた能力なのだから」

「あら？そう？じゃあ、いくわね。氷の粒手！」

雅菜が無詠唱で呪文を唱えると、空間が歪み拳大の電が来校を襲う。来校は手を振り下ろす。氷の粒が全て見事に砕けちった。

「今のは？」

不思議そうに首をかしげた。

「早くてわからなかったかな？」

「いいえ。でも、奇怪だったからつい、ね」

「ほう。実に興味深いね。だが・・・次で終わりだ！」

一瞬にして來稜は消え、後ろ方で轟音が轟く。

それに気づいた雅菜は障壁を展開し、前方へと跳んだ。

3本の赤い閃光。紅い閃光は爪の形を残したまま、空中を裂き、地面を抉り、土を弾き飛ばした。そこには3本の爪の後が残っていた。おそらく、鋼鉄でも砕くでもあろうその爪の閃光は恐ろしかった。しかし、それは雅菜と蓮以外の話である。この2人には龍ほど恐ろしいものは無いのだ。

「これは驚いた・・・。『魔法使い』のクラスなら避けることなど出来ないとおもったのだが・・・」

「だてに魔導師をやっていないわ。魔術だけじゃなくて戦闘の修行もかかさない。それこそ基本中の基本じゃない？」

「確かに・・・少しは・・・楽しめそうだな！」

來稜は空中を駆ける。今にも鋭く尖った爪を振り下ろし、敵の身体を切り裂こうとする。雅菜は熟練された戦士のように身を屈めて、來稜の下に着く。

「ボルテック・ライ！」

呪文を唱えると青白い球体が現れ、その球体から雷が落ちる。

その数10。

直撃かと思われたが、來稜は翼で身を隠し防いだのである。それを見た雅菜は理解した。あの翼はかなりの硬度を誇り、その硬度は剣よりはるかに高かった。

「クッ・・・！」

「今の攻撃は良かった。しかしその程度では我が翼は破壊できない！」

両者は通り過ぎ、さつきとたち位置が逆転した。

「そう・・・それがあなたの・・・」

「その通り。これが我がアーティファクトアルガナ・クレイトス吸血の翼の能力、空中飛行兼最強防御壁である！」

「強力な盾。厄介ね。もっと火力を上げないと駄目ってことね」

装備としてローブを羽織っている雅菜はローブの内側から魔法書を取り出した。

「うーんと。どれがいいかな？」

「たわけ！遅いわ！」

來稜はまた空中を駆ける。爪を振り下ろす。

しかしその閃光はとっさに現れた盾により防がれた。

「ムッ！魔法壁！」

「そつ。AUTOタイプだから呪文を唱えなくても大丈夫。んこれにしょ」

魔法書は紫色に光り、文字は赤く発光し始めた。大気中の魔力・マ

ナが吸い取られ、地面が揺れる。

「竜王の焰獄^{えんごく}！」

「なっ！それは火の種族最強の！」

気がついたときは遅かった。

大気中のマナは集まり、くねらせ、炎となり、竜の形をした巨大な炎となっていた。

さらに來稜の下に火柱が走り、來稜を包み込み火の玉となった。その玉を竜が飲み込み大爆発を起こす。

その一撃で半径100m範囲は焼け野原になっていた。

そのような大爆発を受けた來稜はボロボロで翼は灰のように風化した。

「あらあら。さすがにこれは耐えられなかったみたいね」

「クッ」

「あなたゾディアックで一番弱いんじゃない？」

「そう思うならこのアーティファクトを見てからにしておらおう。
ブラットウウス
・血の杯！」

そう言って出てきたのは黄金の杯。中のものは見えない。

しかし奴が口にしたときそれはわかった。

血だ。

口から紅い液体が出てきている。杯の血を飲みきったとき、來稜は瞳が変貌していた。

その瞳はまさに狂い肉を求める狂犬、悪魔の如し。

來稜の瞳は深紅に染まり、猫のような水晶体であった。
それは人の目ではなくなっていた。

「狂乱化……。あのアーティファクトは吸血鬼封印という枷を外す鍵だったのか」

雅菜はボソリと呟く。

「今の私を狂戦士と一緒にするなよ。今の私は理性がある。ただ、殺したい気持ちは変わらないけどな……。死ね」

來稜は大きく腕を振りかぶる。その破壊力はさっきの数十倍はあった。

そこにはなにもかもが無くなっていた。

「逝ったか」

「いいえ。やはりあなたは変わらないまま。弱いままよ。」

「！」

來稜はすぐさま後ろを見るが、やはり遅かった。

雅菜はアーティファクトの杖の能力を発動し、魔術を放った後だった。

現に來稜は地面から出てきた鎖によって縛られていた。

「私のアーティファクト終焉を司る杖は魔術の力を倍増し、魔力を
ウイニングロット
一時的に跳ね上げる能力。これで終わり。じゃあね」

雅菜は笑顔で男を見送り、呪文を唱える。

デスティカ・ブレイク
「刺殺の破壊」

その呪文と同時に、地面から槍、剣などの武器が現れ、来稜を串刺しにしていく。

来稜の手足は機能を失い、体中に穴があいている。

止めを刺すように来稜の上に複数の斧が現れ、来稜の体をズタズタに引き裂いていく。

それで2人の戦いは終わった。雅菜はマジシャンを引き剥がす。

「マジシャン・・・私・・・人を殺しちゃった・・・」

雅菜の声はナミ打っていた。

「これは戦争。仕方が無いのです。あなたが殺っていないければあなたが殺られていました」

「で・・・でも・・・」

「彼を殺したのはあなたではありません。私です。ですからその瞳に溜まった水を拭いてください。」

「うわ~~~~ん!!!」

雅菜はマジシャンに寄り縋り、泣きじゃくった。

16歳の少女には人殺しというのは荷が重すぎたのである。

マジシャンは母親のように雅菜を宥める。しかし、マジシャンは気になることがあった。それは雅菜が「刺殺の破壊」を繰り返したとき、性格がいつもの雅菜と違っていたのである。

雅菜は絶対に人殺しはしない。

しかし、今回はしてしまった。

何故か？それこそが坂上家を没落させた理由に繋がるのである。

知っていても詳しくは知らない3人の過去そして過ち、秘密。

知ってしまったのは今の関係が崩れる。

この関係が崩れることを恐れている3人。

しかし、とある1人のゾディアックによりこの関係は崩れていくのである

第六章 運命の日

この日夢を見た。とある剣士の物語。大きな戦争だった。憎悪と悲しみから出来た大戦争。臣下は剣士を尊敬し力を貸した。しかし、裏目では違っていた。剣士はいつでも命を狙われていた。剣士のことを良くないと思っている者も沢山いた。剣士は全て知っていた。知っている上で仲間を信用していた。剣士は仲間の為に、仲間は地位の為に戦った。そのすれ違いで剣士は敗れた。しかし、剣士はそのことを誇りに思っている。

そんな剣士にも心残りがあった。それは自分を一途に慕ってくれた弓兵と国についてだ。国はどうなってしまったのだろうか。弓兵は自分に慕って幸せだったのだろうか。などと考えながら永遠の眠りに就いた。剣士が最後に見た光景は夕焼けによって紅く照らされた平原と自分の3種の剣が刺さった丘だった。

そこで蓮の目が覚めた。朝食を終え、図書館に行く龍と買い物に行く雅菜を送り出した後、蓮は三角巾、エプロン、マスクという清掃姿で2階の掃除を始めた。

2階の部屋は書物庫で月に一回掃除する。

本の埃を落としながら今のまだ残っている夢のことを考えていた。一生記憶に残るであろうあの光景。剣士の安心しきった表情。そして3種の……。

「あれ？」

手を止める。

3種の剣でたった1つだけ見覚えのある剣があった。それは中央にあった西洋風の剣である。蒼い塗装に両刃の聖剣。

「そうだ……。あれは武神であり、今の俺のアーティファクトの氷帝の剣じゃないか。なら残りの2種3本の剣は……」

炎帝の剣と雷帝の剣しかない。

いくら龍の方が成績が良いとはいえ、蓮も学年3位の实力を持つものだから理解は一瞬で出来た。

あの夢はエグナの過去。そ

のことから連想できるのはスローダーの正体は大剣士エグナということになる。そしてエグナが心配していた弓兵は1人しかない。エグナの側近の男弓兵・ムスクである。

「もしそうだとしたらこの戦争ちよつと厄介だな。後であの悪魔に聞くか」

その後、テキパキと掃除をこなす蓮。

昼食を摂り、居間と和室の掃除をし終わると呼び鈴が鳴った。

「はいはい！今出ますよ」

掃除姿で玄関に立つ。扉を開けた。そこに立っていたのは龍だった。

「おっ！出迎えご苦労さん」

「……。さあてと掃除、掃除」

「あー、待て。紹介したい人がいる」

「紹介したい人？」

「ああ。・・・どうぞ」

龍は彼女を誘うように誘導する。入ってきたのは桂美香だった。

「こちらは桂美香さん。で、こいつがこの屋敷の主の黒木蓮です」

「桂美香です。よろしく」

「あつ、どうも」

美香は深々とお辞儀をする。それにつられて蓮もお辞儀する。そして龍を連れ出す。
連れ出すと顔を近づけ小声で話し始める。

『龍兄。あんな綺麗な女の知人がいるなんて聞いてないぞ』

『当たり前だ。さっきゾディアックとして戦ったばかりだからな』

『オイオイ。それ危ないか?』

『大丈夫だ。俺が倒したからな。さらに言えばここで保護することになった』

『そ・・・そうか。・・・って今何て言った?』

『俺が倒した』

『そこじゃない!その後!』

『保護すると言った』

龍はムツ、とした顔で蓮を見る。

蓮はそれで発覚した。冗談ではないらしい。

『はあ！ぶざけるな！そんなの協会に任せれば・・・』

『五月蠅い。どうせ部屋は空いている。別に1人増えてもかまわんだろ？』

龍という般若が降臨した。こうなれば蓮に勝ち目は無い。普段から勝ち目は無いのだが・・・。

『あ・・・うん。了解』

頭を掻きながら桂美香に話しかける。

「えーっと、美香さんでしたっけ？とりあえず上がってください」

「えっ、あつ、はい」

蓮は美香を居間に招待し、座らせ、お茶を煎れた。

「どうぞ。紅茶でよかったですか？」

「はい。いつも紅茶なのでありがたいです」

笑顔を見せた。そ

れはユリが咲誇っているかのようだった。

何を話していいかわからず3人は無言で紅茶を飲んでいると、学園一の美女が帰ってきた。

「ただいまー！あれー？お客さん？」

雅菜の第一声。

居間に入って3人と顔合わせをする。

雅菜は扉の前で止まっている。

男2人は見覚えがあるが、一箇所だけ異空間が存在しているかのよう
うに清楚な女性が座っていた。

「・・・」

「ん？ああ、お前にも説明しておかないといけなかったな。彼女は
桂美香さん。ちよつと殺りあつてな。この屋敷で保護することにな
った」

「ふん」

雅菜は蓮を見る。タスケテと目で訴える蓮。それを見た雅菜は、

「蓮兄の許可は取ったんだね！よろしくね！美香さん！私ね、白城
雅菜！」

「フフフ・・・。元気なお嬢さんね。よろしく」

ゴンツ、という何かがぶつかった音がした。

見ると蓮がテーブルに頭をぶつけていた。雅菜は目を丸くして。

「蓮兄、どうしたの？」

「い、いや。なんでもない」

というのは嘘で蓮は信じていたのだ。

（雅菜なら断ってくれる）

と。

しかし実際は逆だったのでこけたように頭をぶつけたのだ。

（しかたない。観念するしかないな）

「では、あなたの寝室へ連れて行きますので、付いてきて下さい」

「はい」

笑顔全開。

直視なんて出来ない。

すれば理性の神経があるのかはどうかは知らないが崩壊しかねない。顔を赤らめて、視線を逸らしていると横から冷気が飛んできた。雅菜が冷たい視線を送っているのだ。背筋が凍った。

あの雅菜が初めて見せた冷酷な表情。鬼だ。龍兄以上の鬼がそこにいる。殺される。と思った瞬間、頭をブンブン振って赤らみをとった。

その時雅菜は笑顔だったが、後ろに見えるオーラ的なものは鬼を連想させた。

それは“美香さんに何かしたらどうなるかわかってる？”と訴えかけてきた。

（コ・・・コワッ）

蓮の体温は一気に下がり、^{マイナス}の領域に達していた。顔が青ざめたまま、美香さんを寝室へ連れて行った。

蓮は顔が青ざめたまま、廊下を歩いていた。

美香は頼りの無い黒木邸当主の背中を見つめながら歩いていた。

「…クスッ」

蓮の後ろでそのようなものが聞こえた。

「？」

蓮は後ろを振り返る。

美香は口元を手で押さえて、笑っていた。

蓮にとってその行動は訳のわからないものだった。率直に聞いてみる。

「どうかしたんですか？いきなり・・・」

「クスクスクス・・・、ご、ごめんなさい。貴方たちが初々しいのでつい、許してちょうだね」

「いえ、それはかまいませんが、何故初々しいと？」

「だって相思相愛なんて久々にみたから、懐かしいなあってね」

「は、はあ。・・・なんでわかったんです？」

「貴方たちの態度を見ていればわかるわ。そんな感じだったんですもの」

そのような会話をしていた。庭にある池が月を照らして、神秘的な庭園を作り出していた。

「あら、綺麗」

「でしょうね。この池に映る月は格別ですから」

「貴方の趣味で？」

「いえ、親父です。親父は『自然の綺麗さ』が好きだったので。この庭園はそんな『自然の綺麗さ』を親父なりに作り出したものなんです。雅菜も龍兄もそして俺もこの景色は好きですから」

「・・・そう。素敵な方だったのね。貴方のお父さんは」

「はい。とてもやさしくて素敵で俺の理想でしたから」

「そう」

蓮と美香はしばらく縁側で立ったまま、池に映る、揺らめく神秘の光を見つめていた。

「あっ！やっと来た。遅かったね。蓮兄」

「まあな。庭を見ていたんだ」

「へへ。あの『月の庭園』を？」

「ああ」

「月の庭園？」

定番の位置に座り、話していてそのような慣れない単語が出てきて美香は首を傾げた。

そこに今まであまり喋らなかった龍が説明し始めた。

「ええ。あの池は月が移ったときに神秘なる庭園みたいにあるということで、雅菜がつけたんです。そのネーミングセンスはどうかと思いますけど、あの庭園は私も好きですから」

「む、龍兄、それそういうこと？」

「そのままの意味だ。気にするな」

「するよ。ねえ、蓮兄」

「いや、俺に振られても・・・」

「素敵ね」

「庭が、ですか？」

美香が3人を見ていてボソリと呟くと、蓮がその言葉を拾い聞き返した。美香は首を横に振り続けた。

「いえ、貴方たち3人が。羨ましいわ」

そのようなことを言われて3人はどう返したらいいかが分からなくなり、顔を向き合った。

「気にしないで。独り言だから・・・。あら？もうこんな時間？」

3人は時計を見る。

時刻は11時になろうとしていた。

「私はもう寝ますね。お先にしつれいします」

「おやすみなさい。美香さん！」

「ハイ。おやすみなさい。雅菜ちゃん」

そう言つて美香は今を後にした。

「では、俺も失礼するかな」

そういつて龍も出て行つた。

「・・・私ももう寝るね。明日学校だし。おやすみ、蓮兄」

「ああ。おやすみ」

そして今には蓮ひとりとなった。

「そういえば、明日は学校だったな。・・・ん？明日は確か・・・」

何かを思い出したように蓮は呟き、寝室へと向かった。

「どうです？あいつらは？」

美香の後に今を出て行つた龍は美香に追いつき、呼び止め縁側に座らせそのようなことを聞いてきた。美香はさつきも見た池を見つめながら答えた。

「おもしろいわね」

「でしょうね」

「でも、あれね」

「あれとは？」

「不思議な力があるわね。あの二人」

「まあ、雅菜はどうかは分かりかねるが、少なくとも蓮にはあるな」

「それはどういった力？」

「秘密です」

「本当、意地悪な人・・・」

「そのような性格なものですからね」

「まあ、いいわ。今後見守っていくとするわ」

「それが一番ですよ。『獣使い』の主^{マスター}」

それが二人の最後の会話だった。

そのまま二人は各自の寝室へと入り、眠りについた。最後の龍が眠りについたのは次の日だった。

夢を見た。今度は剣士の過去ではない。現実でもない。暗闇の世界。そこに蓮はいた。何処を見渡しても闇。そのような絶望を覚える世界に蓮はいた。

『ここは何処だ？』

自分に問いかける。わかるはずもない。自分はただ眠っているのだ。起きればこの世界は消える。しかし起きることが出来ない。なにかに捕らわれているように。

『どうなっているんだ。一体』

何も考えることの出来ない頭で振り絞る。

しかし、何も浮かんでこない。

蓮なりの抵抗をしていると、蓮の目の前に一枚の大きな鏡が現れた。大きさで言うと蓮より少し大きい。その鏡から紅い何かが見れる。紅い何かは人の形をしていく。蓮にはその人が見覚えのある人物になっただけだった。

『雅菜？』

いや、ちがう。雅菜はあれほど背は高くない。雅菜だった人影はしだいに形を変えて、ある人物になった。

『俺？』

そう、そこには蓮がいた。

しかし、蓮であってはすでない。

鏡の蓮は赤髪だった。

瞳も紅。

紅の蓮と蒼の蓮。
同じであって違うもの。

『誰だお前・・・』

『お前だ』

『何？』

『もう一人のお前』

『何を言っ
てやがる』

『信じる、信じないはお前しだいだ。しかし忠告として聞け。運命の齒車は回りだした。そして・・・扉は開かれた』

紅の蓮はそれだけを告げて鏡とともに闇に消えていった。蓮は走って追いかける。しかし追いつかない。

『おい！そういうことだよそれ！おい！』

蓮は布団をはじき出した。朝の木漏れ日が揺れている。鳥の鳴き声がさえずっていた。

現在の時刻は五時半。

蓮はまた早起きをしてしまった。

「一体・・・なんだったんだ？」

そのような疑問しか残らない変な夢。

暗いはずま間でみたもう一人の自分。

そしてあの瞳……。

どこかで見たことがある隠れた殺気の視線。 対魔剣士だった過去の自分。

「痛っ！」

急に起こった頭痛。

忘れていた過去を思い出そうとすると来る激しい頭痛。

この頭痛が嫌で小さいときに封印し、忘れた過去……。

しかし、今度の夢は明らかに過去に関係する何かだろう。

それが何に関係するのか、もう一人の自分は一体なんだったのか、いくつもの考えが浮かんでくる。

しかし、蓮の思考は『それ以上追及するな』と蓮に訴えかける。

これ以上考えるのは無駄と悟ったのか考えることを止めた。

「今は朝食の準備が先だな」

蓮は心残りがあるまま寝室を後にした。

やけに盛り上がった朝食後、紅茶を飲んでいる4人。 そんなとき蓮が聞いた。

「なあ、龍兄」

「なんだ？」

眼をつぶり紅茶を飲んでいる龍。 流す気まんまんだな。 と蓮は悟ったが一樣続けた。

「今日中間テストだっけ？」

「そうだが？どうした？」

「いや。確認」

「そうか」

蓮は納得し、紅茶を飲んでいると雅菜が騒ぎ出した。

「えっ、ええーーーーー！今日中間テストなの！？」

「そうだが？もしかして忘れていたのか？雅菜」

軽く流す龍。

（この男は身内が大変なのにスルーかよ！）

「うん。そのもしかして、って落ち着いてる場合じゃない！勉強してないよ」

「ありやりや、それ大変だな」

「でしょー！どうしよう蓮兄い！」

「どうしようといわれても・・・」

困ったように返す蓮。

どうしようもないんだからしょうがないよねーと思っていると雅菜が続ける。

「龍兄も蓮兄もなんでそんなに余裕なの?!」

「い、いや。授業聞いていれば分かるから勉強しなくても大丈夫・
」

「二に同じ」

「うう。どうしよう」

「雅菜ちゃんは勉強苦手なの?」

「うん。10で例えるなら20だよ」

「倍になってるぞ」

「てか、龍兄。言葉少なすぎ」

フツ、と鼻で笑われた蓮。癪に障るがほっておく。

「しかたいよ。今の状態で挑むしかないよ。始まるまで勉強していれば390は取れるだろ?」

「390ならなんとか・・・。ハア、今回も200位ぐらいか・・・」

「勉強してないお前が悪い」

「りゅ、龍兄・・・」

390・・・普通の学校なら200位というのはおかしい点数のはずなのだが、黒帝学園においては例外なのである。なにせこの学園の入試を受けるには最低平均点数82と驚異的な点数が必要となる。ちなみに100位をきる生徒の点数は460以上ばかりで学年10位クラスは480～500の点数を採る秀才・天才ばかりなのだ。

「そう言っている。お二人は大丈夫なのですか？」

「もちろんですよ。俺は学年1位ですし、その蓮は学年3位ですから」

「あらまあ。すごいだね」

「たいしたことないですよ」

という具合に、雅菜はほぼ半泣き、龍は余裕の笑み、蓮は雅菜を心配しながら登校した。

1階の階段で龍と別れる。3年生は1階にあるのである。ちなみに2年生は2階、1年生は3階である。

そしてここは2階A～Fまであるクラスのうちの蓮達の教室2・Dである。

蓮はいつものように友達と挨拶を交わす。

席に着くと蓮の親友である駆が朝の雅菜状態によってきた。

「蓮。今回のテストどうだ。俺は今回やばいよ。訳解らねえ」

「俺はいつも変わらないけど、お前にしては珍しいな」

「そうなんだよ。どうしてかな？」

「知らん」

駆の今にも泣き崩れる声を聞いて女子生徒が寄ってきた。

「相変わらず冷たいね」黒木は。しかし、翼あゝ。今回は黒木に順位負けたか？2学年2位がこれとはねえ」

「ム、それなら柳田お前はどうなんだよ」

「ん？あたし？あたしはね。いつもと変わらずよ。クラス35人中18の予感よ」

と腕を組み、笑顔で言った。

蓮には関係ないとノベル本を取り出し読み始めた。

そして学生にとっての地獄行事テストは始まった。

ピリピリとした雰囲気の中始まったのだが蓮にとって定期テストというものは壁ではなく、通過点とっているので開始30分で全ての回答を終わり、外を見ていた。

5教科が終わり、全員下校となった。

部活はない。

その理由はただ一つ。全教員による採点戦争のためだ。

部活をしていると採点が遅くなるという学園長の意見でテスト終了後、教師どもは採点のみしか行わない。

そのことで黒帝学園のテスト返しは次の日になる。

そして帰って来た3人はそれぞれどうだったか聞いて寝た。

そのとき美香は笑顔で聞いていた。

次の日は強制的に5教科となる。

テスト返しが終わった6限目は生徒同士による反省である。

自分の点数を言い合う者、点数を見て没落する者、思ったより良くて皆が復活する者、人それぞれの使い方しだいだ。

蓮にとっても気になる時間でもあった。自分の順位はどうなのか。それ一本なのである。

「蓮！どうだったよ！俺以外とよかったよ。助かったよ」

と脱力感のあるため息を聞いていた蓮は。

「よかったな。で、点数は？」

「よくぞ聞いてくれました！翼駆。今回の点数は……。なんだと思う？」

「さつさと言え。その間がウザイ」

「ちえ。つまらない奴。497だよ」

「そうか」

「お！よかったじゃん！やっぱりあんたやるね」

蓮の一言は同クラス的女子友達の柳田美里によってかき消された。

「当たり前だ！お前とは頭のできが違うんだよ！」

「そっか、そっか。そりゃごもつともだね。あ！ちなみにあたしは

446だから。みんなに聞いたところ。やっぱり18位だったよ」

「お前のは興味ない！しかし、一つ聞いていいか？」

「なにさ？」

真剣な顔に聞く駆。きよとした顔で聞き返す美里。

「俺以外に高い奴は？」

「あゝ、ハイハイ。それだったら万年1位の奴以外はあんたより高い奴はいないね。後はその眠そうな奴しただいね」

「そうか。で、お前はどんなだよ。蓮？」

「・・・」

蓮は無言のまま5枚の紙切れを取り出す。それを見た駆は失望した。

「うひゃゝ。こりゃすごいわ」

現国100。数学100。外国語（英語）100。世界史98。科学100。合計498。

「あ・ああ。蓮のばかあゝゝ！」

と言って駆は教室の隅にうずくまった。それを見ていた美里は。

「あゝあ。ありやすぐに戻ってこないね。蓮、あんたあいつに強力なストリート食らわしたね」

「みたいだな。で順位だが。今回も桜野さんが1位か？他のクラスは？」

「ん？そつだよ。他のクラスの奴らにも聞いたけど満点は桜野恭子一人。498はあんた一人みたいよ。で497はあいつ含めて2人みたい」

「なるほど。なら俺が2位か。しかし美里。お前、情報集めるの速くないか？」

「フッフッフ。あたしにはね、この学園に情報網は沢山あるのさ」

「そ・・そうか。」

美里に情報伝達これでかなう奴は多分いないと確信する蓮であった。

そして帰宅後、4人は集まりテストの現状を教えあった。

「で、どうだった？」

「俺は久々の2位だよ。498点だ」

「私は239位。432点。トホホ」

「なるほど。俺は満点だ」

「嫌味か」

「当たり前だ」

と3種3用答えはそれぞれだった。

言えることは龍は全て100で、満点の3学年1位だった。

それを嫌味たらしく言うところは蓮が龍に対して嫌うところだった。それを聞いていた美香はそれぞれの答えを真剣に聞いていた。

まあ、そんな喜劇を繰り返す4人だが、次の日にあんなことが起こるとは誰も思わなかった。

今日は水曜日なのだが、学園の創立記念日なので学校は閉鎖となる。そんな9時過ぎの朝とひと時。春の心地さが身に染みることが出来る。そんな時の会話である。

「さて、今日はどうする？」

「なんでもいいじゃねえのか？」

「修行でもする？」

「あら、修行？頑張つてね。今日、私は予定があるから」

「珍しいですね。どうかしたんですか？美香さん」

「たいしたことじゃないのよ。蓮くん。買い物だから」

「そう・・・ですか」

そして、美香は出て行った。

夜9:00。

朝に出て行ったきり美香は帰ってこなかった。7時や8時なら分か

るが、9時は遅すぎる。外は月も隠れて、風も吹かず、声も聞こえず、町は不気味と化していた。

「いくらなんでも遅すぎないか？」

「確かにそう・・・だね。遅すぎるよね」

「大丈夫だろう。彼女も大人だ。心配ない」

「でも、このごろ物騒だつて聞け。最近、三波町は殺害事件が起きてるらしいし」

「殺害事件？」

「ああ」

昼のことである。

蓮は買い物に隣の商店街まで暇つぶしに行っていた。買うものをすべて買い終え、帰るときだった。主婦たちが固まって話していたらしいと。

「なんでも、ここ3日間で5人だそうだ。」

それについては龍が興味を持ったので蓮に質問攻めである。

「被害にあった人は？」

「一般人。女子供関係なく」

「武器は？」
(エモ)

「斧とかみたいだな。なんにせよ、体が縦に大きく切られたみたいだし」

「縦だったら刀でも出来るんじゃないの？」

「それが横にも広がってるらしい。刀ではそう上手くいかないぐらいいに」

「なるほどな」

「どうかしたの？龍兄？」

「それはもしかしたら破壊者かもしれん」

「破壊者だって？」

「無差別破壊。奴の特徴だ。自分の主人以外は全て破壊するからな」

『破壊者』。

12のクラスの中でもっとも近距離の攻撃に優れ、壊すことしか知らない荒くれ者。防御は一切しない。そのため体は異常なくらいの固さなのである。防御に最も優れているクラスでも『破壊者』の攻撃を食らえば、死に等しいのである。つまり白兵戦にもっとも優れている『剣士』でも勝つのは厳しいのである。

「そんなやつがいるのか？この神鏡戦争に？」

「ああ」

「だ・大丈夫かな？美香さん」

「確かにな」

「俺ちよつと見てくる！」

「待て！蓮！」

玄関を勢い欲飛び出す。

正門まで走ろうとしたとき、正門の前に巨大な何かが立っていた。辺りは暗くてよく見えない。

「待て！蓮！慌てる・・・な・・・？」

「え？なにあれ？」

蓮につられて龍と雅菜も飛び出した。

2人が眼にしたのは蓮と正門に立っているものだった。雲が流れていき、月が姿を現す。月光によって巨大な何かがわかってきた。それは魔導師とそのパートナーだった。

「ぶ・・・ブレイカー」

「「！」」

発言したのは龍だった。

蓮と雅菜はブレイカーを凝視する。いかにも破壊者に抜擢されるほどの巨漢だった。

「ほう？その男。一発でわかったか」

「当たり前だ。それほどの巨体は『破壊者』と『狂戦士』ぐらいだ。しかも、ここら辺でよく聞くのは『破壊者』だからな。すぐにわかるさ」

「なるほど。絶賛したいのは山々だが、そろそろ始めないとプレイカーが暴れるのでね。始めていいかな？」

「かまわん」

龍はすぐさま武装した。また、破壊者の主人も武装した。ほとんど同じタイミングだった。

「とりあえず自己紹介だけはしておくよ。私は、白火帝^{しらびみかど}。君たちの紹介はしなくて結構。これから死ぬ者の名は聞いても仕方がないからな」

「白火……。あの魔剣士の名門か」

「それだけしっていればいいだろう。さっさとこい」

「無論。参る」

龍は地を蹴り、帝との距離をすぐさまに縮めた。

そして心臓めがけ一突き。

終わったかと思われた。しかし、それは思われただけだった。実際は槍ははじき返されていた。

キンツ、鉄と鉄がぶつかり合う音が黒木邸の庭に木霊した。

「なっ！馬鹿な！はじかれた！？」

「はははは。当たり前だ！我が『破壊者』の能力を忘れたか！？」

「しまった。奴の能力は『鋼鉄化』だったか」

鋼鉄化。

守りが比較的弱いものに当たる特別スキル。

自分の体を鋼鉄のように硬度を上げて、自分はひたすら攻撃し続けるという攻撃が特化したものだ。

「何やってるんだよ、龍兄！」

蓮は龍に叫び、アーティファクトを取り出した。

それは蒼い塗装の両刃剣ではなく、赤い塗装の大剣だった。

「炎帝の剣か！」

驚いたのは龍である。龍は炎帝の剣を見た瞬間に後ろに飛び退いた。

「いくぞ！ブレイカアアアアー！」

「来るなら来い！スローダーよ！」

蓮は天高くジャンプし、自分より背が高い片刃の剣を振り下ろした。切った。しかし、それもかすり傷にしかならず、帝を退けただけだった。

「嘘だろ！この剣かなりの切れ味あるぜ！それもきかねえのかよ！」

「どいて蓮兄！物理攻撃が駄目なら魔法で！」

そう言つて蓮は魔法障壁を足場に作り、蹴った。もちろん障壁はガラスが割れるような音をたてて、割れた。

「アイシクル・レイン
大地の氷床！から氷床の茨！」

杖を振る雅菜。

杖の先端から冷気が飛ぶ。

雅菜から帝まで広範囲で1直線に大地が凍った。

しかし、帝は上へ遠のき凍りづけから逃れた。しかし、肝心なのはその後である。

凍った大地から氷の茨が絡みながら上へと目指す。

茨は氷の山となり、先端は鋭利な槍となった。

しかし、そんな手も『破壊者』に通じるわけがなく、帝は斧を振り回し山を崩した。

「そんな。ならこれならどう！フレイムアロー炎の矢！」

雅菜の前に炎で作られた矢が現れ、帝に向かって矢が一齐射撃した。全矢命中だった。

しかし、煙の中から出てきたのは蓮につけられたかすり傷だけだった。

「ま・魔法も効かないなんて・・・」

「退け。俺が殺る」

「さつき龍兄の攻撃効かなかったじゃないか！」

「アーティファクトの能力を使えば問題ない」

「当たらなかったどうなるんだよ！一度つかつたらもう効かないぞ！」

「わかつている。だから維持でも当てる！」

一撃必殺のアーティファクトの能力。

しかし、そんなものでも欠点はある。

それは“相手がゾディックならなら一度使えば、それ以上は効力は無くなる”というものである。

簡単に説明すると一人に一回きりということである。つまり一発で当てなければ自分の死は高確率となる。

龍は黒き槍を構える。体制を建て直し、一瞬で範囲をとった。

「死を司る酷使の槍！」
ガナドボルグ

突いた。確実に突いた。

ガナドボルグ死を司る酷使の槍は必死が決まっている呪いの槍。呪いの槍を受けた物は死から逃れることは出来ない。

しかし蓮が見たものは帝の鎧から出た槍に突かれた龍の姿だった。

「ふははは！見誤ったな！槍士よ！我が鎧は武器から出来ている鋼鉄の鎧！鎧の一部を解除すれば武器を具現化できるのよ！」

「りゅ・龍兄iiiiiiiiiiii！」

「い・いやああああああ！」

蓮は雄叫びを上げ、雅菜は絶叫した。それも同時に。

「フン。こんなものいらぬ。返してやる。で、次はどっちだ？」

龍は投げ飛ばされ、蓮が龍をキャッチした。

雅菜はすぐさまに近づいた。龍の腹は槍で貫通し、大量の血を出していた。

口にも血が溜まっているのか唇からは血が流れていた。

重傷の龍だがとっさに避けたのか急所は外しており、まだ息があった。

龍の血を服やら顔やらについてつひま跪く蓮。龍を見て泣き崩れる雅菜。

「雅菜。治療を頼む。お前なら出来るだろ。俺は敵を討つ」

「！」

蓮は雅菜に龍を預け、ボソリ、と呟いき立った。

「ん？次はお前か？剣士。その男同様に殺してやる。しかし、厄介な男だった。いや・・・、一番厄介だったのはあの桂美香という女だったか」

「え！」

雅菜と蓮は目を丸くした。奴の言っている桂美香というのは朝元気にでて行った女性なのだから。

「なんだと!？」

「ん？その反応・・・。お前たちの知り合いだったか。あの女はウザかった。すぐに殺したかな」

それまで冷静だった蓮は帝の言葉にキレた。帝に面と向かった。

「じゃあ、何か？貴様はなんの力もない女性を殺したってのか？」

「ああ。我がゾディアックと言ったら抵抗したんでな。殺した。それがどうした？」

「き、貴様あああああああ！」

激情。

蓮は今まで以上の雄叫びを上げて、魔力を放出した。

紅くまがましいほどの魔力。それを感じた帝は後退した。

「れ、蓮兄。その髪・・・」

魔力を放出した蓮の髪は紅く染まり、瞳は紅蓮と化した。

「ま・まさな」

「！龍兄！今しゃべっちゃ駄目！傷口が開く！」

「ま・雅菜。蓮をとめろ。封印が解ける。早く」

「・・・それは出来ないよ。蓮兄でなくても私もやってるよ」

「な！何を言っている！協会代行者として命令する！白城雅菜よ！黒木蓮を止めよ！」

全身血みどろにも関わらず、龍は精一杯に叫んだ。しかし、龍の目の前の少女は龍にとって意外な言葉が出た。

「いい加減にしなさい。沼地竜」

「なっ！遊んでいる場合か！世界の一大事になるかもしれないんだぞ！」

「それくらいはわかっていきます。それより、貴方は誰に向かってそんな口を聞いているのです？表の私に、ですか？」

「い、意味がわからん。何もんだ。あんた・・・」

「私ですか？私は、魔法協会最高幹部の白城雅菜ですが、何か？」

「！」

龍が驚くのも無理もなかった。

魔法協会最高幹部は協会社長・魔法協会長の次に偉い立場なのである。

少女はその最高幹部だという。

「噂では、若き女性が最高幹部になったと聞く。では貴方が本当に？」

雅菜の前の最高幹部とはある事件で殉職した。

その1カ月後、協会は最高幹部を選定する議会が行われた。議会の結果、雅菜が選ばれたのである。

「ええ。その通りです。・・・黒木龍」

「は、はい」

「貴方の命令は却下。今度は私が貴方に命令を下します。……黒木龍、貴方はそこで見ていなさい。体を動かすことは許しません。安静にし、彼の戦いを見ていなさい」

「……仰せのままに」

雅菜幹部の命令は簡単なものだった。

“そこで蓮の戦いを見学している”というものだったが、龍は腑に落ちなかった。いくら重症とはいえ、指を銜えて待っているというのは、協会のものにとって屈辱にしかならなかった。

しかし、最高幹部の命を背けば処分が下る。

龍はそのことをよく理解していた。だから、手出しは出来ないのである。

「それでいいのです。貴方は利口だ。その知恵は逆に裏目にでますよ。誇りに思いなさい。貴方は幹部でもされたことない私の命を聞くことが出来たのです。大丈夫。彼ならすぐに終わらせてくれます」

雅菜は倒れている龍の頬に触れながら笑顔で言い放った。龍はその姿をみて安心したのか、瞳を閉じて眠りにつこうとしたのだが、痛みが強くて眠ることができなかったのでそのままでしょうと思った。

「では、私も行きます」

「！危険です。お戻りください！」

「大丈夫です。龍。私も彼と同じなのですから」

「は？」

龍は目を丸くした。

彼の前にいる少女は何を言っているのか良くわからなかったのである。整理しようと努力していると、目の前の少女に異変が起きた。髪が長く、蒼く染まり。瞳もまた青く染まったのである。

「ま・・まさか・・！蒼魔天使そうまてんし！」

雅菜は紅くなった蓮のところに近寄る。

「お待たせしました。紅空こうくう」

「そんなに待ってない。いけるか？蒼月そうげつ」

「はい」

雅菜は笑顔になる。

その理由は彼女しか分からなかった。しかし、これだけは分かった。

蓮は帝しか見ていないことに。当の本人は驚愕のあまり後退していた。

「ぐ、紅蓮鬼神くれんきしんに・・・蒼魔天使だと！」

彼が驚くのは無理もない。

何故なら、紅蓮鬼神も蒼魔天使も今は失われた力なのである。

『忘れ去られし秘法・紅蓮鬼神』

『失われし秘宝・蒼魔天使』

二つの力はその強大さ故に遙か昔に、一人の魔術師によって封印されたのである。

その封印が行われたのは約1000年前。封印された2家は血筋と共に紅蓮鬼神と蒼魔天使を封印してきた。そして蓮と雅菜はその家計の末裔。まっえい

紅蓮鬼神と蒼魔天使は2人にとってもう一人の人物なのである。

「スローダー」

「ハイ。主」

「いけるか？」

「もちろんです」

たった数日しかないのに蓮とスローダーは息が合う中になり、お互いの考えが分かるようになっていた。蓮の質問にスローダーは、ニヤリ、と微笑みながら答えた。

「紅空。私は？」

「今回はいいよ。俺とスローダーで十分だ」

「そう・・・ですか。では、いつてらっしゃい」

雅菜は少し悲しそうだったが、笑顔で戦士を送り出した。

「魂の共鳴・・・いくぞ？ブレイカー！」

蓮は魂の共鳴をし終わると、手を頭上に上げた。

まるで、空中で地面から剣を抜くような手の形を残して。

「出でよ。炎帝の剣よ」

蓮の周りに炎が現れ、蓮を中心にして回り始め、蓮の手に集まり、一歩の大剣となった。大剣を振り下ろす蓮。振り下ろした勢いで剣から火の粉が降り注ぎ、風となって地面を裂いた。

「一発で終わらせる……。スローダーに負担はかけられない」

「何を甘つたれたことを！」

帝は斧を振り回す。

旋風で空気が割れていく、それを正面から受けて流す蓮。旋風の中を紙一重で交わしていく蓮。たちまち間合いを詰め、切りかかる。

振り下ろされる大剣。それを受けようとする鋼鉄の巨人。

“ビシヤ”

振り下ろされた大剣は巨人を切った。

巨人の体に大きな切り傷、そこからあふれ出る大量の赤い液体。致命傷だった。

「その傷では、もう動けまい」

「な・なぜだ？何故切られた？私は？」

「簡単だ。私の力はお前の力を凌駕しているからに決まっているだろう？」

「凌駕したところで、この能力はアーティファクトクラスの力を持っているはずだ！何故そのものが破られなければならない！」

「一つ教えてやるよ。紅蓮鬼神の正体を、な」

「いいのですか？それを知れると不利になるのでは？紅空」

「こんな奴に知られたところで問題はない」

「私の正体は・・・魔法世界最高峰の魔道書『メルセデキ全てを書き記した魔書』だ。貴様の能力を消すことなど容易い」

「な・・・なんだとおおおお！」

「これでいいだろう？では、終わらせようか」

蓮は大剣をゆつくり上げた。それを見て帝は慌てた。

「ま・待て。待ってくれ」

「美香さんがそう言ったとき、貴様は待ったか？」

「クツ、なら我がアーティファクトを使用するしかあるまい！くらえ！武器を凌駕した鎧！」
グラメキテス

帝の鎧が全て解かれ、数多の武器が蓮を襲う。軍人用武器・B＋クラス。

「やはりその鎧が貴様のアーティファクトだったか。なら、私も行こうか。」
イフリル
火竜を招く呪の剣！霊視！」

大剣は豪炎を纏い、振り下ろされ、爆炎を上げる。

武器は吹き飛ばされ、帝は内にあるブレイカーの魂を切られた。対人用武器・A＋クラス。

イフリルを振り下ろし、帝が居たところは巨大なクレーターとなつて全てを焼ききつていた。そして、庭は下に戻っていく。蓮が場所転生の魔法をかけたのだ。

「解除」

一言で蓮とスローダーは引き剥がされた。地面に足をつく。

着こうとしたのだが、足に力が入らなく倒れてしまった。そして、蓮は元に戻っていた。

「スローダー！」

「ハアハア、大丈夫です。ハア、蓮。少々体に、ハアハア来ただけです。休めば元に戻るの、ハアハア、よろしいでしょうか？」

「ああ。ありがとう」

「では」

それを言い残し、スローダーは消えた。

光り輝くシャンデリアのような光を残して。

蓮はスローダーを見送った後、龍の元へと向かった。その後、蓮は元に戻った。戻った雅菜が続いた。

「龍……兄……」

「蓮兄……龍兄」

「……やれやれ、この中で一番弱いのは……俺か。強さだけはお前らに勝っていると思っていたんだがな」

「すまない」

「お前は知っていたよ。蓮」

「えっ！そうなの？！」

「ああ。協会からのお墨付きだ。教会に入っていれば、その力を封印していたところだ。よかったな。フリーで」

微笑みながら蓮に言いかける。

その言葉に不意をつかれたのか蓮は驚いていた。

そんな蓮をみて龍は首を縦に振った。その後、表情を変えて雅菜に對して問いただした。

「しかし、雅菜。お前に対して俺は何も知らなかったぞ。蒼月のことも最高幹部のことも」

「ごめんなさい。だって、そのこと龍兄さんに言ったら今までの関係じゃなくなると思ったから……。今の生活……。壊したくなかったの」

雅菜は手を前で揃えて、俯きながら反省していた。兄さん……
のは動揺から来ていることは蓮にはすぐにわかった。
そのような光景を見ていられなくなり蓮は口を挟んだ。

「龍兄、」

「それくらいわかってるよ」

「えっ？」

「はっ？」

雅菜と蓮の声が共鳴した。

目を丸くする二人。

それを見て立った後、砂を払い落とし、微笑む龍。

「じゃあ、俺に黙っていたことで二人にはペナルティーな。雅菜は明日の朝の食事を豪華にすること。蓮はこの後、紅茶を入れた後、雅菜と共同でスイーツを作ること」

「そ・・・そんなのでいいの？」

「ああ。それで十分だよ」

龍が笑った。あの冷静な龍が笑ったのだ。それは信じられないくらいありえないのだが、今は幸せそうな3人の邪魔をしてはいけないので、作者的にこれにて第2部終了。

終結の唱・運命 第七章 天馬と獣

1章 天馬と獣

ここらで一つ話をしよう。とある馬乗りのお話。

遙か昔、ブリテンにとても優秀な馬乗りの青年がいた。

その青年は馬と話をする事が出来た。

幼少の頃から馬乗りは上手かった。

そんな青年は馬乗り以外に槍も達者だった。騎馬槍兵としてはブリテンでは適う者はいなかった。

しかし、彼は兵ではなかった。

戦争は嫌いだった。

とある一人の騎士と出会うまでは。いや、出会ったとしても戦争は嫌いだった。ただ、戦争が起こることに対しての考えが変わったのだった。

彼はとある戦争で両親をなくし、故郷さえもなくなった。残ったのは自分の命と愛馬のサラブレッドだけだった。だから彼は戦争を嫌った。

彼は旅をした。

その旅路の途中で、とある剣士とであった。

その名はエグナ・カルデフィート。後の英雄となる人物だった。

彼は、エグナと色んな話をした。戦争のこと、自分の詳細など。そして剣士は言った。

「私と一緒にこの世界を変えてみないか？戦争でしか解決できないどうしようもないこの世界を」

青年は問った。

「それは戦争で解決するのだろうか？なら拒む」

と

「嫌いでもかまわない。ただ、私はこの世界を変えるために戦争を、いや革命の戦いを魔術師達とやる。それで世界は変わると信じている。戦争がなくなる世界に」

青年はその言葉に折れた。

そして、エグナ軍の騎馬隊隊長となってエグナをサポートした。そして、彼は愛馬とともに朽ちた。世界が変わることを信じて。そして世界は変わった。戦争無い世界へと。神の怒りが来るまで。

運命が、いや3人の関係が変わった夜が終わった。

3人がギクシャクしてもおかしくは無い。

しかし、この3人もだてに生きてはいない。

龍、蓮、雅菜はそれぞれを認めているのだ。

こんなことで3人の絆は崩れることはなかった。

しかし、代わりに桂美香が死んだ。

そのことは受け入れることは3人には出来なかった。

そんな朝の話。

「2人ともご苦労だったな。まさか蒼魔天使と紅蓮鬼神が蘇るとは思いもしなかったが……。まあ、それもいいだろう」

「しかたないだろう？あの時はああするしかなかったんだから」

「そうだな。しかし、2人ともあの力を使いこなせるようになっていたのか？」

「まあな」

「うん」

「・・・以外だ」

2人を侮辱するように、龍は日本茶を啜る。

イラッ、とした蓮だがそこはいつものことなので無視をして、日本茶を啜った。

その光景を両手で湯呑みを持って啜りながら見ている雅菜。

「でも、美香さんには悪いことをしたな」

龍はみんなが今一番聞きたくなかった名前を口にした。そして静寂。

「そうだな。亡くなったら帰ってこないからな」

「かわいそうだよね。美香さん」

暗くなっている居間にとんでもない嵐が飛んできた。

「なになに？私の心配？うれしーなー！3人とも暗くならない暗くならない！」

「・・・はっ？！」「」

3人は目を丸くした。

それもそうである。死んだはずの桂美香がそこにいたのだから。しかも性格が一変して、3人は目をこすった。

蓮は美香を指差しながら聞いた。

「ゆ・・・幽霊？」

「んなわけあるか！」

本気で殴られた。^{マジ}

殴られた蓮は度肝を抜かし、雅菜は泣き出し、龍は軽いため息をした。

「雅菜ちゃん、心配かけたね。ゴメンね」

「よか、よかったあー」

「しかし、どうして生きているんです？破壊者に殺さたのでは？」

龍が聞く。2人はうんうんと頷く。

「身代わりはね。実は3人の前に居たアレ身代わりなんだ。性能はいいんだけど、性格が逆になっちゃうのが難点よね」

難しい、と呟きながら腕を組み困った顔で、説明しだした。驚愕を隠せない3人であったが、急に雅菜が笑い出した。

「フ・アハハハ。なんですかあーそれ。おかしいー」

それに驚いて声を出したのは蓮である。

「ま・雅菜？」

「でも・・・」

「でも？」

「よかったぁー、生きていて」

「ゴメンね、雅菜ちゃん」

「まあ、なんだ。美香さんも生きていてよかったはいいが、そろそろ登校しないとまずいぞ？」

「げ！？もう7時半かよ！今日は早いっての！何で言わなかった！龍兄！」

「言うタイミングがなかったのな。話が途切れたので今切り出しただけだ」

「蓮兄いー、龍兄いー、先いくよー」

「ああ、今行かせてもらおう」

雅菜は廊下において、体を回転させてスカートをひらつかせながら、立ち止まって手を振り言った。龍はそれに対し、ゆっくりと立ち上がり鞆を手に持ち、玄関へと向かった。それに出遅れたのは蓮である。

「あつ！雅菜！お前、いつのまに！待てってえー！龍兄も速すぎだ

る！こらあー！すみません。美香さん、後のこと頼んでいいですか？」

「ええ、いいわよ。いつてらっしゃい」

蓮は急遽立ち上がり、慌てふちようで美香に頼み、それを美香は笑顔で返した。

そして、蓮も龍と雅菜の元へ向かった。

「蓮兄い、遅いよ？」

「な！お前な！」

「アハハ、嘘々、龍兄先行っちゃったよ？」

「あの野郎！待て！こらー」

「フン。もたもたしているお前が悪い。先いくぞ」

「誰のせいだ！」

喜劇を繰り返して、仲良し魔導師3人組兼学生はもう一つの戦場へと慌ただしく向かった。そして、黒木邸に残ったのは美香一人だ。

「やっぱり面白い人たち。クスッ、羨ましい。・・・うん、今日もいい天気。よし！こうなったら徹底的にやって驚かせようっ」と

どこかの若奥様のように3人を見送り、青い空に出ているヒマワリに背伸びして、家事をするのだった。

ぎりぎり登校で間に合った3人はいつものように校庭で別れて、そのまま授業を行うのだった。

そして、ここは蓮がいつも授業を行う2・Dの教室。

蓮は教室でいつものメンバーで休み時間を過ごしていた。

そう、蓮と駆と美里と桜野恭子である。

柳田美里と桜野恭子は無二の友人である。ちなみに蓮と駆は高校からの親友である。

4人が仲良くなったのは1年の夏からであり、同じ部活なので美里から蓮と駆に話しかけるようになり、その後、桜野恭子のことを紹介したらしい。

蓮と駆は正反対の異色コンビとクラスで評判だった。

学校での蓮はクールで龍みたいで、駆はハイテンションのムード盛り上げ役、家での雅菜である。

そんな組み合わせだから女子は話しくいらしい。ただし、男子からはよく話しかけられた。しかも初めての第一声は、

「お前らよくつり合ってるよな。性格正反対なのに」

である。そんなときは大体蓮が答える。

「つり合うさ。こんな性格は誰かが止めないといけないのだろう？なら正反対のほうを抑えやすいというものだ。それに意見もよくあうからな。絡みやすいんだよ」

と。それで大抵の男子は納得するのだが、一部の男子は

「疲れないか？」

と聞き返すのだが、

「別に。逆にやりがいがある」と

いうと納得する。

そんな7月のある日、同じ部活でよく話す女子が近寄ってきた。それが柳田美里である。その第一声が

「あんたたち面白い？」

である。2人は驚いた。そんな風に聞かれたのは初めてであつたからだ。

それから3人はよく話す仲になった。そして4人になった。ちなみに4人はクラスからこう呼ばれている。『天才異色仲良し4天王』と。

「疲れた〜。ねえ誰か肩揉んで」

「俺は却下！誰がお前の召使いみたいなことするか！」

「やってやればいいだろう？それに肩揉みは召使い以外でもよくやるぞ？」

「ならお前がやってよ、蓮」

「断る。そういう系統は苦手だ。食事なら作ってやるが」

「どうしたの？美里ちゃん？昨日何したの？私で良ければ揉もうか？」

「ん。ありがとー、きょううち。やつぱりきょううちはやさしいーねえ。それに対して男2人はどうかねえー。てか、蓮、あんた料理でkindだ。男なのに」

「男」家事は出来ないという概念は捨てたほうがいいぞ？こっちは1人身だ。家事が出来て当たり前だろう？それに今は居候2人もいるからな。家事も出来ないときついぞ？」

「2人？ああ、1年生の白城雅菜と3年生の沼地龍先輩だろ？」

「そうだが、よく知ってたな。駆」

「そりゃそうさ。噂になってるからね？」

「噂？」

「そうだよー、きょううち。2年の黒木蓮の家にその2人が通ってるっていう、う・わ・さ。あれ本当だったんだねえー」

「そうなの？蓮君？」

「ああ、本当だ。今家には来ないほうがいいぞ？いろいろ五月蠅いからな」

「そう？賑やかでいいと思うけどなー」

こんな風にお友達ムード満載なのか台風がやってきた。同じクラスの浜岡という人物である。浜岡は第一の盛り上げ役で、しょっちゅう五月蠅い男ナンバー1である。翼駆は3位。

「おおおおい！みんなああー大ニュースだ！」

「浜岡あーうるさいよ？少しは静にしなよ」

「柳田あー！それどころじゃないんだぜ？！これは本当にビックニュースなんだって！」

「はいはい。で、そのニュースって？」

「そう！そのニュースとは！我らのクラス2・Dの黒木の家若い女が居るって噂！」

「それ1年生の雅菜ちゃんじゃないの？」

「それが違うんだよー桜野さん！1年の白城はみんな知ってるよー。白城以外にいるんだってよおー」

「そうなのか！蓮！初めて聞いたぞ！」

出た。駆の十八番。

興味があると急にテンションが上がるスキル。
こうなると五月蠅い。それを蓮が一番よく知っていた。

「どうなんだよー！蓮！それ次第じゃ俺たちの絆に亀裂が入るぜ！」

「本当にどうなの？蓮？」

蓮はノベル本を閉じ、周りを目線で一瞥し、答えた。

「駆。今の言葉が本当なら、俺たちの絆は浅はかなものだったみた

いだな。・・・その噂は本当だ。ちょっと訳あり、でな。しばらく家の居候になることになった。このことは家にいる初めの居候たちの許可も取ってある。・・・それが何か？」

周囲の空気が凍えた。

クールかつ無表情で『それが何か？』だ。

凍りつくのも無理はない。その氷結された教室を暖めたのは駆である。

「じよ、冗談だつてー。蓮、俺たちの絆はこんなことで崩れるわけないだろおー。アハハハ」

「冗談には聞こえなかったが、まあ、いい。とりあえず離れてくれ暑い」

「はいよ」

さすが駆である。蓮のことをクラスで一番蓮と多くいる分、彼の扱いはお手の物だった。

そして休み時間がおわり、昼食となる。

「おい、蓮。今日も屋上か？」

「いや、今日は学食だ。残念だったな」

「へへ珍しいもんだな。お前が学食つて」

「食い扶持^{ぶち}が4人になったからな、ここで抑えんときついからな」

「じゃあ、今日は一緒に食わないか？」

「ああ」

そして、駆は20分、蓮は30分で学食をたிரらげた。

ボリユームの高いAランチを頼んだ2人。

普通は40分以上かかるだがこの大間食の二人には簡単なものなのだ。

そして此処は2・Dの蓮の近くの机。いつもの4人で集まっていた。

「でさー、昨日の特番すごかったぜー。あんなスリル一回でも経験してみたいぜ。大体さー、この・・・」

どうやら駆は昨日の晩に見たTVのことで盛り上がっており、美里はやれやれといった感じで聞いていた。恭子は真剣な面持ちで頷いていた。それに対して蓮は何かノートに書き込んでいた。それを見た駆が聞いた。

「なあ！蓮も見ただろ？昨日の特番！」

シャープペンシルをいそいそと走らせていた蓮はその動きを止めてまたシャープペンを走らせた。

「いや、見てないな。第一こっちは面倒を見ないといけない身だからな。1年中暇なお前と一緒にされては困る」

（第一昨日の晩はそれどころではなかったからな。もうあんなのはごめんだな）

「ねえ、あんたさ、無愛想すぎない？なんかに興味ないわけ？」

「ないとはいいがたい。だが、聞くがその興味に対して満面笑顔の俺が駆のようにTV番組の話をしていたらどうだ？」

「うえ、よしてくれよ。蓮が俺？無理無理無理、想像できましえん」

「確かに・・・無理だね。そんな日にはあんたに一切近づかないよ」

「私は別にいいけど・・・（ボソッ）」

「ん？きょうつち何か言った？」

3人は蓮のそのような姿を想像して身震いでも起こしたのだろうか。拒否した。1人を除いては。

「だろ？俺はこのままのほうがいいんだよ。それに駆になるのはこっちがごめんだ」

「アハハー、いうなあーこの色男は」

結構怒りを込めて言い放つ駆。

怒りという弓は蓮の冷たい態度という盾によって凍え砕けた。防ぐ盾ではなく壊す盾になっていた。

「
」

美里は何かを言いたいようだったが、ずっと黙っていた。そう内に秘めているなにかを我慢でもしているように。

午後の授業を終え、蓮、駆、美里の3人は道場へと向かっていた。蓮にとってこの光景が懐かしく感じた。なにせ昨晚の光景があまりにも濃いため忘れていたのである。授業を行って、3人で道場へ向かい、そして汗を流し、帰宅する。学生の仕事忘れていた。蓮はそのことを今日、初めて実感した。

「蓮、どうしたの？ぼーっとして？」

「えっ？い、いや、なんでもないよ」

「本当かあ　？お前以外に抜けてたりするからなあ　」

「大丈夫だよ、駆」

ジト　とした表情で駆は蓮を覗き込んだ。蓮は笑顔で返答する。

「あんたさあ、私たちだけといるときと、学校の顔違うよね？普段でもそんな顔すればいいのに、疲れない？」

「よく言われるよ。でも仕方がないだろ。なんか定番になってるんだから。癖だよ、癖」

「ふうん、変な癖。・・・まあいつか！さ！早く部活始めるよ！」

気がつくとも3人は道場に着いていた。美里は元気に言い放った。

「はいはい。わかってるつての。いちいちうるさいなあ」

「そんなこと言つなよ。美里らしいじゃないか。今いくよ。主将殿」

そして2 3時間の部活が始まった。
とても長いようで短い青春である。

まあ、今日は以外に部活は軽くやれと顧問に言われたので1時間で終わったのだが・・・。

夕暮れの光の漂う教室、無人で普段の残り香があるこの2・Dの教室に蓮は居た。

なぜなら部活の休憩中に『部活が終わったら2・Dに行つてて、話しがあるから』と呼びだしをくらったからだ。

「

」

その呼び出した本人は遅いのである。

多分、シャワー室によつてから来るのだろつと蓮は思った。自分もそうだからだ。

「女子はシャワーも長いのか？」

蓮は窓側の席に座つていて、夕日を見つめていた。

まだ、部活動をしている者、笑顔で友達と話している者、いそいそと今頃になつて帰っている者、教室の窓からはそんな当たり前の日常が続いていた。

普段何気なくそんな光景を見ていた蓮も今日に限つて今この光景を見れて良かったと感じるのであつた。

しかし、その光景が見飽きてきた頃だつた、1人の女子が入ってきた。柳田美里本人だつた。

「呼び出しておいて遅くないか？」

「ゴメンね。シャワー長くなっちゃつた」

「だろうとは思ってたがな。・・・で、話って何だ？」

「隣座っていい？」

「かまわん」

「ありがと。よいしょっと。・・・夕日・・・綺麗だね」

「そうだな。・・・で、話って何だ？」

「う、うん。・・・こんなこと蓮にしか相談できないから・・・」

2人は教室の窓から夕日だけを見ていた。せつかちな蓮は美里に聞いた。美里は夕日を見つめながら切り出した。

「俺だけ？」

「うん。・・・あ、あのね。私好きな人がいるの」

『好き』の言葉を聴いて蓮は不振な笑みをこぼし、小悪魔のように聞いた。

「ほう。お前の恋愛の話か。実に興味がある」

「もう。いじわる」

「フフフ。すまん。許せ。で、好きな人がいるからどうした？ただその報告か？」

「……そうじゃないんだけど……。とりあえず聞いてほしいんだけど……。いい？」

「ああ。とりあえず聞いてやる」

蓮はいつもの表情に戻すと紅色に外を光らす夕日を見つめなおした。美里もまた夕日を見つめながら話し始めた。

「あの人はね……。いつもは騒がしいんだけど、ふと見せる表情とかがね……。優しいんだ。それにね、私って頭が悪いからその人に良く聞くんだけど、そのときも優しいんだ。しかも、そのときだけ私を見ていてくれる。」

それがとつてもうれいんだよね。部活だって私が尊敬したいくらい強いし、しっかりしてる。あ、でも蓮も尊敬してるよ。それでね、つい最近、その人のことが好きってことに気がついて、それからその人に会ったたびに緊張しちゃってどうしようもないんだあ」

美里は『その人』のことをとてもうれしそうに話していた。蓮は美里の話を聞いていて一人の親友の顔が浮かんできた。

「俺に話ってそれだけか？他にあるんじゃないのか？」

「……。はあ、やっぱり蓮には敵わないなあ。でも、なんでそう思ったの？」

「なんとなくだ」

「クスッ、なにそれ……。あのね、蓮にお願いがあって呼び出したんだ」

「願い？」

「うん。お願い」

「なんだ？」

「駆に生きてって約束してほしいの」

「生きて？・・・なぜだ？そんなの約束しなくても大丈夫だろ？てか、好きな人って駆か」

美里は夕日を見ていたのだが、蓮のその言葉で俯いた。そして、不安そうないまにも泣き出しそうな声で言った。

「駆がね、私に聞いたんだ。『俺が死んだらどうする？』って。・・・でもそんなことは冗談の定番って思ったから、『死んだらってまた冗談？』って返したんだ。

そしたらね。駆なんて言ったと思う？『冗談じゃないけど・・・そう思ってるんだったら安心して死ねるかもな』って言ったんだよ？私は『何それ』ってそれでその会話は途切れて・・・私・・・不安になって・・・あんな悲しそうな顔見てたら・・・苦しくなって・・・後悔してるの・・・だから・・・ね？蓮。お願い」

蓮を見た美里の顔は涙ぐんでいた瞳に涙を浮かべて、ふくよかな頬に伝わる雫に蓮は『ああ、わかったから、泣くなよ』と抱きしめながら答えるしかなかった。

校庭で2人は別れた。下校中ずっと駆のことを考えていた。

「駆は冗談なら笑っているはず、いつも冗談でしたっつてにこやかでクラスを盛り上げる奴だ。でも、根は素直な奴だからすぐに顔に出るんだよな。そんなあいつが悲しそうな顔？ただ事じゃないな」

地面を見つめながら、独り言を呟いていた。それを聞かれたのか、後ろから馴染みのある声がした。

「俺がなんだって？え？」

「！」

「お！珍しいね、お前がそんなに驚く顔をするとなね。おれがいたのがそんなに意外だったか？」

「お前帰ったんじゃないのか？」

「帰ろうとしたさ。でも、いくら待っても来ないんだから、様子を見にきたらお前がくっつい顔して歩いてるからさ。声かけたわけよ」

「・・・そうか」

「なに？どうしたの？お前らしくないじゃん」

今日の蓮がいつも以上におかしかったので心配して、俯いている蓮の顔を覗き込んだ。それに対して蓮は顔を上げて聞いた。

「お前、美里に『冗談じゃないけど・・・そう思ってるんだったら安心して死ねるかもな』って言ったの本当か？」

蓮の言葉がかなり意外だったので、駆は目を丸くした。
その表情から驚愕がわかるほどだった。

「・・・・・・・・・・。本当だ」

「！」

一番驚いたのは蓮だった。

蓮は駆からその言葉が一番聞きたくなかった。

その驚きのあまり蓮は駆の胸倉を掴んで扉に打ち付けた。

「なんでだ！なんで嘘だつて言えない！なぜいつものように冗談だつていけない！あの時の美里は後悔してんだ！それでも冗談じゃないって言い切るのか！」

蓮が駆に怒鳴ったのはこれが初めてである。

いつもは校内で冷静沈着の蓮は怒ることがないからだ。
ましてや、大親友の駆に怒ることは考えられなかった。

「言い切る！」

「なに！？」

「知ってるよ。あの時から美里が後悔してるのは。俺と話しにくいみたいだったから」

「なら・・・」

「本当のことだから仕方ないだろ！」

駆は蓮の手を思いつき振り払った。

「お前だって知ってるだろ!？」

「何を、だよ!」

「魔導師は死から逃げられないことを!」

「なっ……。お前今なんて言った?」

「魔導師と言った。俺はお前と同じ魔導師なんだよ!」

「え、でも……」

『魔導師』その以外な単語に蓮は戸惑ってばかりだった。自分の親友が魔導師と知った時そうなるのも当然である。

魔導師とは、己を隠す者。一般人にその正体を知られてはいけない。

知られたときには協会から派遣者が来て始末をつける。これが裏社会のルールだ。

だから、駆が魔導師ということを黙っていたのは筋というものだった。もちろん蓮もうすうすは気づいていた。

しかし、認めたくなかったのだ。駆が魔導師ということを自覚したくはなかったのだ。

それを知れば死を覚悟して付き合っていかなければならないのだ。そんな生活に蓮はなりたくなかったのだ。

「わかったか?俺がいつ死んでもおかしくないのは?」

「……………」

頭が真っ白になり、混乱する蓮。驚愕の事実。

「　　いいか。これからは敵になるかもしれないからな。……でもそれでもいいなら……。学校ではいつも通り接してくれな。急に変わると、ばれるかもしれないから……」

駆は背を向けた。『ばれるかもしれないから』そんなのは言い訳だ。駆もそんなことはわかっていた。ただ、それしか浮かばなかったのだ。

「じゃあ、な」

駆は駆け出す。蓮は叫んで駆をとめた。自分に言い聞かせるように。

「駆！じゃあ、約束しろ！美里を泣かすな！わかったか！」

「……………ああ。……約束だ！蓮！」

駆は足を止めて、振り向き笑顔で笑った。

駆の後ろに沈もうとした夕焼けが駆の笑顔を美化した。

そうして、2人は別れた。約束という言葉の絆を結んで。

長い長い屋敷前の坂を登る。暗くなった目の前の世界に一つの光があった。

黒木邸だ。

6時前なので、龍兄も雅菜も帰ってるのだらうと思い、門をくぐる。横開きの扉を開ける。

「ただいまー。つて、え？」

悪寒がした。屋敷がおかしいのではない。ただ、自分の前に立っている何からくる殺気から感じているのだ。

そう、自分の前には悪鬼が立っていた。

睨み付ける瞳は人々を脅かせ、般若の形相はすべてのものを凍えさせるほど。

そこに現黒木邸最凶にして怒らせれば絶対不落の要塞と化す人物が立っていた。

「りゅ、龍兄、どうした？そんな怖い顔をして」

蓮の声は震えている。

おそらく目のまえにいる鬼を見て平然としていられるのはスローダ
ーたちのような人外ぐらいだろうと蓮は感じた。

「・・・蓮。今何時かわかっているのか？」

「な・・・何時つて、まだ6時だろ？」

「6時？ほほう。貴様の体内時計は1時間も狂っているのか？それ
とも貴様のその目が狂っているのか？」

「へ？1時間？」

玄関に掲げられている壁時計を見る。

午後7時10分。

途中の公園が示していた針は5時半と蓮には見えたのだろう。
実際は6時半だったのである。

「あ・・・あれ？おかしいなあ・・・。6時くらいになっておもったのになあ。途中の時計が壊れてたのかなあ。それに遅れても何の問題もないと思うけどなあ」

恐怖のあまり蓮は惚けたというより壊れた。

「ほう？貴様、今の現状をわかっていて何の問題もないと？もしかしたら、帰る途中で襲われたと思った俺らがおかしいのか？それに咲ノ宮公園の時計は正確だ。言っておくが今日・・・お前が飯晚だぞ？それでも何の問題も無いと言い切るのか？」

「すみません。本当にすみません。」

頭を下げる蓮。

頭上から殺気の籠った視線が送られてくる。
それに耐えられず、謝った。それで許してくれるほど龍は甘くない。

「そうか。謝罪の気持ちはあるんだな？」

「はい」

「なら、それに報いる仕事をしてもらおうか」

「そ、その仕事とは？」

「ん？戦争が終わるまで、飯番はお前だ。7時までに支度を終えていること」

「それでいいならお安い御用だけど、もし戦いに巻き込まれて、遅

れてきた場合は？」

子犬のような視線を龍に送りながら聞く蓮だったが、龍はたやすく蓮の期待以上に硬い守りではじき返した。しかも笑顔で。

「そのときはお前のパートナーに聞けばいいだけだ。それで本当ならしかたない。」

「でも、パートナーは主の召還以外は出れないのでは？」

たしかに、戦争中のルールはそうなのである。

龍もそれを知っているはずだ。

そうやって安心している蓮にとって最悪な言葉が出た。

「しらなかったのか？ パートナーは自由自在に現世（い）に出てくれるんだぞ？ ただ、主の負担が大きいから出てこないだけであって、それがルールではない」

「な・・・なんだよそれ。」

わかったよ。そうする。で、今

日はもう出来上がってるんだろ？」

「ああ」

居間に入る3人。

食卓がいつもと違っていた。

蓮は何が違うのかすぐに分かった。茶碗や皿がいつもより多いのだ。その数いつもの倍。

「なあ、龍兄。今日はやけに食器が多くないか？」

「そういえば言うのを忘れていたな。今日からパートナーも食事をとらせることにした」

「なんで？」

「なんでもいくら霊体でもお腹がすくんだって、でも向うで何か食べてるはずなんだけど、此处で食べたほうがいいだろうって龍兄の配慮だよ」

「へえ、あの龍兄がねえ。明日雨？」

「蓮兄、怒られるよ」

耳元で囁く雅菜。それが一番の配慮だなと、ふと思った蓮だった。そうして蓮はお詫びとして夕食を奮発させられた。しかも6人分。夕食の時のことである。

蓮、龍、雅菜は驚かされた。見た目は欧州風なのに、箸の持ち方は完璧なのである。

パートナーは万能とは彼らも知っていた。しかし、これほどとは思わなかったのだ。

蓮達は改めてパートナーのすごさを知った。

さらに彼らが驚いたことがあった。

おそらく一番驚いたのかもしれないと蓮は思った。

それは何に対してではなく、誰に対してだった。

今晚、マジシャンはフードを取った。

被っていると食べづらいというのが理由である。

フードを取ったマジシャンは欧米系の青年だった。

「どうかなさいましたか？マスター？」

「えっ？あつ、うん。ま、マジシャンの正体にびっくりしたただけ、女の人の声だったから」

「……。それはそうでしょう。声変のルーンを使っていたから」

「やっぱりか」

「」

「ルーン？」

三種三様の反応だった。

龍は予測していたかのように。

蓮は黙っていた。

雅菜はなんなのか分らず首を傾げた。それを龍は見逃さなかった。

「ルーンとはルーン文字といわれ、ゲルマン語の表記に用いられた文字体系であり、呪術や儀式に使われる。さらにルーン文字にはゲルマン共通ルーン文字、北欧ルーン文字、アングロサクソンルーン文字の3タイプがあり、魔導師、魔術師、魔法使いの使うルーンは北欧ルーン文字だ。ちなみに、北欧神話のオーディン、ケルト神話のセタンタ・・・まあ、“クランの猛犬”^{クレー・フリーン}だな、そいつらが使ったというのが有名だな。

ルーンを主として文字詠唱をする輩もいる。基本的には“ルーン”は、書き記さねば使えない。だから、使う奴は少ないのだが・・・」

龍の説明が止まる。雅菜はともその続きが気になった。

「だが？なに？」

「難しいからこそ巨大な力を使うことも出来る。あのカルデアは空中でルーンを描いて大魔術を使ったとも言われている。ルーンは刃の硬度や切れ味を良くしたり、自分の声を変えたりといった物に加えることでさらによくする“強化”みたいな弱小魔術ならたいしたことはないが、無から有を作る力、つまりカルデアの『ダークネス・デス・アルテマ』のような大魔術は世界を破滅に導く恐ろしいものになる。だからこそ、“大魔術ルーン”は禁止されている」

「ふん。そんなに大変なものなんだ。そのルーン？てもの」

「ああ」

沈黙が続く。それを打ち破ったのは蓮だった。

「ルーン詠唱なら俺も使えるぞ」

「「「「えっ！」「」「」」」

蓮と龍以外の声が重なった。

蓮が古代に使われ、遙か昔に消えてなくなった古代詠唱が使えることに驚いたらしい。

現在古代ルーン詠唱を使うものは1人もいないと考えられていたのだから無理もない話である。

「そういえばそうだったな」

龍はそれを知っていたようでたいした反応はなかった。

「龍兄知ってたの？」

「知ってるもなにも、昔から蓮は使っていたし、何せビリオンとも言われる魔法全てを使える紅蓮鬼神が眠っているんだ。使えて当然だ」

「
」

沈黙が続いた。『紅蓮鬼神』という単語を聞いたとき、皆の箸が止まった。

昨日の晩のことが思い出されるような禁句だった。

「龍・・・それは・・・」

「いいよ。スローダー。龍兄の言っていることは本当だし、それを否定するつもりもない」

「しかし、あなたは・・・」

悔しくないのですか。

その言葉を言いかけようとして、蓮はスローダーに向かって手を広げた。

まるで、『それ以上は言うな』と体で表しているようだった。

「まあ、アレだ。言い過ぎたか。すまぬ。許せ」

「謝るな。あんたが謝ると余計に怖いわ」

蓮は龍に向かってニヤリ、とした顔で答えた。

「あんたは威張って俺らに愚痴を出してるほうが落ち着く」

その言葉で皆救われた。そのことで笑顔を取り戻し、いつもの雰囲気になった。それは彼等らしい食卓だった。

P・M・11:00。

皆床に就き蓮もまた布団に横になって天井を見上げていた。隣の部屋の雅菜の寝息が聞こえてくるようだった。

さすがに蓮の斜め隣の龍の部屋からは何も聞き取れることはないだろう。

雅菜の部屋に行けば聞くとは出来るだろうが。布団に入りながら考えていた。

もちろん考えていたのの一つしかない。親友の駆についてだった。

自分は知らなかった彼の正体。そして、今の自分の立場。いろんな考えが交差しながらも、解決方法はなかった。何も解決もしないまま、彼はその重い^{まぶた}瞼を下ろした。

次の日、彼にとって今後この戦争の中で一番辛いことがあるともしらないまま……。

「ん……んん」

冬の朝の寒さと朝日の眩しさで目が覚めた。

「5時か……。このごろいつもこの時間だな」

着替えなおして洗面所で顔を洗う。

いくら眠くてもこれで目が覚める。人間ある意味便利だなと思う蓮。

「今日の朝飯はどうするかな。時間もあるし、ちょっと気合いいれて作るか」

昨日の晩から蓮が飯の支度をするようになった。

たいてい彼が作るのだが今回は違う。

これからはパートナーの分も作らないといけなくなったので、手間は今までの倍はかかることになる。しかし、文句も言えないのでそのままにしておくことにした。

「まだ、お仏壇の世話になるのはごめんだからな・・・」

蓮が台所で頑張っている間、一人の男が入ってきた。

「お、頑張ってるな。関心、関心」

などと実際思っているのか疑いたくなる発言を放った男は一つしかないソファ―に身を下ろした。

その後に続くように沢山入ってきた。

「おはようございます。今日は早いんですね。レン」

品格があり、清楚を漂わせたスローダーが入ってきて蓮が朝食を作っているのに気がついた。

「ん？まあな。とにかくすわれよ。立ってるものなんだからさ」

「はい。では、お言葉に甘えて」

5つあるうちの自分の座布団に正座で座り、朝食を今かと待ちわびていた。

スローダーたちパートナーはどのように生活するよう龍にいわれ、自分たちの主からもそういわれたので、そのように行動するように決めたのだという。

「いいにおいですね。朝からこのような香りに導かれるとは悪い気分はしませんね。主、おはようございます。……。ご苦労様です。蓮」

龍のパートナーであるスピヤーもまた礼儀正しく挨拶をした後、自分の座布団に座った。

「ああ、おはよう」

龍はテレビをみながら答えた。それではせっかく挨拶してくれたのに愛想がないのではないかといったかったがやめることにした。

「あら、皆様、御早いですね」

丁寧かつ挨拶なしなのは昨晚驚かされたマジシャンだった。そして相変わらず遅いのは雅菜だった。

「ん……。さすがだな」

「ああ、さすがだ」

新聞を読みながら、料理を作りながらの会話だった。

この会話にパートナーたちは首を傾げた。

そこで、先手をきって話しかけたのはスローダーだった。

「レン。何がさすがなのですか？ 私たちにはさっぱりなんですが・

・・」

「ん？ああ、そうか。スローダーたちは知らないのか雅菜のこと」

「は？マスターがどうかしたのですか？」

「んん？あいつ朝弱いからさ、起きてくるのが本当に遅いんだよ。だから『さすが』ってこと」

「はあ、なんだかお二人には迷惑をかけているようですね。すみません」

そして、噂をすれば当の本人が入ってきた。いつものように。

「おはよう、みんな～・・・はいね～」

その形相は人間ではないかのよう。口調は可愛らしいのだが顔が言葉にあっていなかった。蓮と龍は見慣れているが、他3人は始めて見る顔だった。

「ま・・・マサナ。一体どうしたのですか？」

（おお。驚いてる、驚いてる）

マジシャンの声は震えていた。

更にスローダーもまた震えていた。

さすがに冷静なスピヤーはないだろうと思ってみると・・・。予想外だった。あのスピヤーが目を丸くして、震えていた。

人間外をも脅かすとは、雅菜の寝起き、おそるべし。と蓮は思った。

「別に気にすることないよ。雅菜はいつもそうなんだ。機嫌悪いからあんまりなんでもするなよー。多分、お前らでも無傷は無理だ。雅菜。さっさと顔洗って来い！」

「りょーかい」

「了解」

4人の見事なシンクロ。

ここまでそろつと気分がすっきりする。雅菜はふらふらと幽霊のように洗面所へと向かった。今までずっと新聞を読んでいた龍が読み続けたまま喋りだした。

「フツ……。エランド達にも恐れられるとはな」

「エランド？」

「使い魔……。スローダーたちのことだ」

「ああ……。なるほど」

「ぶはー。おっはよー」

「おっ！ やつと来たか。朝飯にするか」

蓮はお盆に朝食を載せてもってきた。

やはりエプロンが似合うなと実感する5人であった。

どちらかというと静かな朝食が始まった。

食器たちのぶつかる音が強調される……。はずだった。

「蓮……。醤油とつてくれ」

「ほらよ。そこなら取れるだろ？」

「まあな」

「龍兄！それ私の！」

「ん？そうか……。」

「まだあるんだから大丈夫だよ、ってスローダーそれソース！醤油は龍兄の前においてあるやつ！」

「えっ？あつ……。どうも」

「リュウ。このサラダはこんなにあじっけのないものなのではないか？」

「ドレッシングをかける。ドレッシングを」

「なるほど」

蓮の目の前で起こっているのは大勢でしかあじわえない朝食大戦争がくりひろげられていた。隣でその光景を見ていたマジシャンが小声で蓮に聞いた。

「レン、いつもこんな感じなのですか？」

「いや、いつもはもっと静かだよ。あつ、でも変わんないかな。なにしろもう1人……。」

そうここに本当にいなければならない人物が1人いないことに今更気づいた。

神鏡戦争中に龍と戦って負けた桂美香という人物がここにはいなかった。

「って、美香さんはどうした？」

「？なにを言ってるんだ？美香さんならイギリスだろ？」

「は？」

「は？じゃない。美香さんは昨日からいなかっただろ？」

「あ」

そう昨日はそれどこではなかった。

駆のことで頭がいっぱいで見えていなかったのだ。

「ところでなんで？」

「お兄さんからの呼び出しがあっあんだよ。今頃はイギリスのウエルズだろうよ」

「そうなんだ」

拍子抜けである。

そんなこんなで朝食、ティータイムを終えた6人。
龍と雅菜は先に行ってしまった。

マジシャンとスピアは消えていた。

主の負担を減らすために空間に帰り、ついていったのだろう。実際、実体化した状態で歩いているとあるいみの負担である。

片付けも終わり、準備を終えて、蓮は玄関にいた。

スローダーは蓮の後ろに立っていた。

ずっと立ったまま蓮を見ていたスローダーが口を開いた。

「学校にいくのですか？」

「ん？そうだよ。2人とも行ったのに俺がいかないのはまずいだろ？」

「……そう……ですか」

「……。スローダーはどうする？」

「私は守護する者です。貴方が行くのでしたら、私も行きます」

「ん。そうか」

その時のスローダーの目は凜としていて、戦いるときに見せる冷静なスローダーだった。

その顔を見た後、靴を履こうとしたとき、清流のような声に蓮の行動は止まった。

「何かあったのですか？レン」

清らかだからこそ、その声は頭に響いた。

「！な、何も無いよ」

「それは嘘です」

どうしてこう簡単に言い切るのか。自分のときだけ……。なぜ？
雅菜のきもそうだ。なぜなんだ！

「貴方は心が綺麗だ。だから嘘をつくことが苦手なのです。声では嘘をついていても行動に出ている。顔に出ている。心が乱れている」

「――」

「昨日かえってからおかしかった。人の話は聞いていないし、貴方らしくない失敗も多かった。皆それに気づいている……。何があつたのです？何が貴方を揺らしているのです？」

凜とした表情なのだが、蒼き瞳は主を心配していた。凜としているのは本音が聞きたかったからだ。

そして蓮はそれに耐えられることはできなかった。背を向けながら白状した。

「俺には親友がいるんだ。翼駆と柳田美里って言うんだ」

そんな当たり前のことをスローダーは静かに聴いていた。

「2人いるんだけど、昨日の放課後に美里に相談されたんだ。美里はもう駆が好きなんだと言われたんだ。俺はそんなの告白すればいいだろう言つつもりで聞いていた。でも、そいつの一言で変わった」

「……それは一体？」

「美里は駆に“俺が死んだらどうする？”って言われたらしい。初めは冗談だと聞いていた。美里はもう一言加えたんだ。“冗談じゃないけど・・・そう思ってるんだったら安心して死ねるかもな”と言われたんだと。もちろん俺は疑問に思った。そしたら下校中にそいつにあつたんだ。そいつにとつちめんだんだ。そしたらあいつは・・・」

「あいつは？」

「俺は魔導師だ”って言われた」

「なっ！」

それでスローダーは察してくれた。

魔導師とは生と死の狭間で生きているもの。その現実には残酷な話だった。

「もう1つあるんだ。・・・神鏡戦争が始まって俺は少なくともあいつらに関わらせまいと思っていた。・・・でも・・・それも無理かもしれない」

知らず知らずのうちに蓮は涙を流していた。

手を顔に押し付けて涙を止めようとしたが無理だった。涙は土砂降りのように出てきていた。手を顔に押し付けたまま話を続けた。

「あいつが魔導師なら巻き込む可能性が高いんだ。もし、巻き込まれて死んだりしたら俺、美里に申し訳なくて！」

激泣してる蓮。

流れて出てくる涙を押し殺そうと手を押し付けていた。蓮が滅多に

泣かないことをスローダーは、雅菜から聞いていた。

スローダーはずっとその光景を見ていた。すると体が自然に動いていた。

目から流れ出てくるものを必死に押し殺そうとしていた蓮。

顔の隣から細い腕が伸びているのがわかった。

その細い腕は優しく、柔らかく蓮の体を包み込んでいた。

「す……スローダー！」

蓮の顔は真っ赤になっていて、涙も止まっていた。

その代わりに心臓が大きく脈を打っていた。いつぞやの日と同じだった。あの時は雅菜と蓮で、しかも立場は逆だったため、雅菜の気持ちはわからなかったが、今それを思い知った。

「大丈夫です」

「えっ？」

「大丈夫です。貴方は強い。力や技ではなく、心が強い。力や技がとれほど優れていようと心が弱ければそれも衰える。しかし、心が強ければ己の技量も超えてしまう。貴方は騎士……いえ、戦士として最も大切な強い心を持っている。その心は決して崩れることはないでしょう。大丈夫です。その心を持っていれば、友人だけでなく全ての人も救えるでしょう」

スローダーの声は清らかで、優しくかった。

不安も何もかもが飛んでいった。

彼女は空間からいつも蓮を見ていた。

雅菜や龍でさえ気づいていなかった。いや、気づいていたが何も言うてくれなかったのだ。いつも身近にいた。それでも、助言という

より相談というのはしてくれなかった。気づいてもあまり言ってくれなかったのだ。今日のように。簡単に言うと自分の利益にならないものは口には出さなかったのだ。それらは彼らも本望では無かった。それなのに何故言わなかったか。それは協会の“掟”だからだ。蓮はそれを知っていた。それでも蓮は言っただけだった。しかし、彼らは掟を破らなかった。掟を守ったからこそ蓮は重荷を背負ったのだ。その重荷を取り除いてくれたスローダー。今で蓮は気づいた。自分にとって本当に必要なのだと。それでは雅菜は？それが疑問に思った。だが、今は考えるより先にやることがあった。

「本当にそう思うか？」

「はい。間違いありません」

スローダーは手を離し、蓮はそれを確認して立ち上がりスローダーと向かい合った。

面と向かったスローダーは本当に綺麗で1少女の顔だった。

初めてあった日の夜を思い出す。あの時と違い彼女は穏やかだった。

「スローダー」

「はい」

「ありがとう。楽になったよ」

「えっ、あつ、い、いえ。ち、力になれてなによりです」

笑顔を含んだ礼にスローダーは赤くなりながら答えた。その光景はとても微笑ましかった。

「それじゃいくか」

「はい。レン」

2人は玄関を出た。

1日進むにつれて寒さは厳しくなっていく中で、2人は意気揚揚と歩いて行った。

校門に着く。もちろんスローダーはいない。門を出たら消えていた。今頃は空間にいるのだろう。

校舎を見る。廊下には先生や生徒が歩いている。校庭やグラウンドを見ると、登校中の生徒や朝練を育む生徒たちがいた。学校は賑やかだった。

「よっ！今日は少し早いじゃないか！うん。感心関心」

背中を平手で戦きながら駆が騒いでいた。

「何を言っている。今日は俺が早いのではなくてお前が遅いだけだろうが」

「ありゃ？そうか。まあ、いいのではないか！」

軽快な声で歩いていく。ここまでくると逆にスッキリした。

「相変わらず五月蠅いなお前は。今回はどうした？いつもより遅いじゃないか」

昨日の雰囲気はどこ吹く風か、2人はいつものように戻っていた。

「ん？まあな。昨日は仕事をしてたからな」

「仕事？何してたんだ？」

「おいおい。それを聞くのはご法度だろ？俺の正体を知っていて聞くか？ふつー」

「ああ。・・・なるほど」

駆の正体。彼は魔導師だ。ならば仕事というのは魔法関係でしかない。

駆はハア、と深いため息を吐いて呆れ顔になっていた。

「どうした？いつものお前らしくないじゃないか。お前がそれじゃ調子くるうつて」

「フ。なに、考え事をしていただけだ。俺はいつもと変わらんよ。貴様の五月蠅い話に付き合ってたやるよ」

「おーおー。出た。いつもの減らず口。お前はそうでなきゃな」

駆は止まっていたが、歩き出した。

ちなみに止まっただのは駆がため息を吐いてからだ。

2人は歩き出した。先に歩き出した蓮が振り返らず一言言った。

「ありがとう。駆」

「気にするな」

2人は2 - Dへ^{ホームランド}と向かった。

クラスメイトたちに挨拶をし、一息つくつと席に座ろうと思ったとき、美里が声をかけてきた。

「やっと来たか。あんた達に連絡がある」

「なに？」

「今日から部活休みね」

「やリー！」

「何故だ？」

休みと聞いて喜ぶ駆と疑問に思う蓮。

「なぜってそりゃ……。あー、知らないのか例の事件」

「事件？」

「そ。隣町とこっちの町の殺人事件。知らないの？」

蓮と駆は互いの顔を見て向き直り、首を横に振った。

「そつか。じゃあ教えてあげる。結構噂になってるよ。殺害された人はまつぶたつになっっているんだって。おそらく斧かなんからしいけど……。しかも人の犯行には見えないらしいよ。現場はくちやくちやみたいよ。それがこっちの事件」

「こっち？同じ犯人じゃないのか？」

「うん。こっちはなんでもお構いなく殺してる。あっちは町のチンピラばかりみたいよ」

「チンピラ？なんじゃそりや。喧嘩売ってやられたのか？」

「さあ、知らない。でもこっちの町の殺人事件はぱったり止まっているの」

「止まってる？」

「うん。昨日から」

「昨日……」

昨日は蓮たちが破壊者を倒した次の日である。
もし、破壊者がやったのなら戦争に関連している可能性があった。

「あ。そうそう。事件はまだあったんだ」

「はあ？どんだけあるんだよ！」

やや呆れ顔の駆に対して真剣だった蓮はずっと美里の方を向いていた。

「それはどんな？」

「さすがに蓮は心配みたいだね。こっちの事件なんだけどさ。昏睡

事件なんだけどさ。2日前からなんだけど、町中のどこかで弱りきって、倒れてる人が沢山いたんだって。2日前より1日前のほうが多いそうだよ」

「うわー。日に日に増えるのか」

「わからないけどね。2人とも気よつけてね」

「おう！」

「ああ。・・・そうだ道場は開いてるか？」

「えっ？開いてないけど、どうしたの？」

「部室に忘れ物だ。カギ」

さらりと流して蓮は手を前に出す。まるで主人のお手のように。

「そっか。遅くならないようにね」

美里は鍵を渡した。

SHのチャイムが鳴る。

皆、各席に着いた。

長かったり、短かったりした4時間目を終えて昼食となる。蓮は弁当箱をだす。今回はお重ではなく、普通の弁当箱だ。“個人のほうが融通が利く”という龍の意見で、戦争が始まってからそうなった。

「今日はどうするんだ？」

同じく弁当を持った駆が聞く。

「悪い。今日は用があつて無理だ」

「そうか。ならいいや。じゃ、また後で」

「ああ」

駆は他の輪に入つていった。

蓮は2階に向かつていた。黒帝学園は4階建てで2階に3年生、3階に2年生、4階に1年生となっている。2階に下りようと曲がり角を曲がつたとき、雅菜と出会った。

「あ。黒木先輩だ」

「雅菜。今からどこに行く？」

「中庭。たまには外で食べようかなーって。先輩こそどこへ？」

「沼地先輩のところ。話しがあつて」

「ふーん。じゃ、私も行きます」

2人は3年生の廊下を歩いてゆく。

上級生の目が気になるが、合わないといけなかった。

3・Eの教室前。蓮が上級生に話しかける。

「すみません。沼地先輩をお願いします」

「ああ、いいよ。おーい！会長！下級生の美男美女が呼びだぞー！」

クラスメイトに呼び出された容姿端麗、成績優秀、学園の天才の完璧なる生徒会長が奥から現れた。
「フエクトヒューマン」

「誰かと思えばお前たちか。どうした？」

「先輩。話がある」

「……」

学園の一番端にある屋上へ続く階段を上ってゆく3人。

鉄の扉を開ける。

冬に近いせいか、だんだん寒くなってきた。3人の口から出るホワイトブレスはゆったりと空を歩いていた。

いつもの定位置に3人は座り込んだ。

3人は弁当に手をつけた。龍が口を開く。

「話って何だ？」

「あんたはどこまで知っている？」

唐突に言われたので驚いた。目的語がないので、難しく思えるが、龍には戦争のことだとわかった。

「なんのことだ？」

「惚けるな。殺人と昏睡事件。黙っていただろ」

「は？」

「は？知らない！こつちとあつちの殺人事件と、こつちの町の昏睡事件だよ！知らないとは言わせない！あんたは……！」

「があーっ、と暴走した牛のように言う蓮。それを天才なる闘牛士が止めた。」

「待て。それは本当の話か？蓮」

蓮にとってそれは意外でしかなかった。

監督役として任された龍が知らないというとは思わなかった。

蓮は今朝、美里から聞いたことを話した。

龍は黙って聞いていたが、雅菜は頷いたり、驚いたり、して百面相を見せてくれた。

何かと面白いがいまはそれどこではなかった。

「なるほど。殺人事件の方は破壊者と狂戦士だな。だが、昏睡事件はわからんな」

龍は考えていた。本当に知らないのだと改めて知った。

「わかった。報告ご苦労。昏睡事件は調べておく。隣町の教会でも行ってみる」

教会。隣町にある大聖堂のことだとすぐにわかったが、何故行くのかわからない。

「何故に協会？」

「教会とは共同団体だからな。とりあえず気をつけろよ。狂戦士は厄介だからな」

「ああ」

「りょーかい！」

3人は各自の教室へと入っていった。

放課後の鐘が鳴る。全部活動休止になったため、生徒は速やかに下校していた。

さらに、先生たちも先早に帰っていくのが見えた。

そのころ、蓮は剣道場にいた。忘れ物を取りに来たのだ。

「お！あつた、あつた」

蓮が持っているのは小さな箱だった。

「これを忘れるなんて」

蓮はあたりを見回す。道場には蓮以外誰もいない。

「少し自主練していくか」

袴にはきなおし、防護を着けていたら後ろから声が聞こえた。

「鍛錬でもするのですか？」

「まあな。 そうだ。打ち合ってもするか？」

「いいでしょう。貴方とは打ち合ってみたかった」

そうして、蓮とスローダーは2時間ほど打ち合っていた。
打ち合いの結果、7：3で蓮の負け。
シャワー室から出てきた蓮はスローダーを待っていた。

「早いですね。レン」

シャワー室から出てきたスローダーが言った。スローダーの髪は若干練れていて、綺麗さを際立たせた。

「まあな。髪、ちゃんと拭けよ。拭き終わったら帰るぞ」

道場の時計は6時を差していた。

「大丈夫なのですか？」

「使い魔を送ったから大丈夫だよ」

「そうですか。ですが、さすがに帰らないと・・・」

スローダーの目は心配していた。龍が怒ると訴えかけていた。

「そう・・・だな。もう帰ろうか」

スローダーは安心したようにホッ、と安堵のため息をつき、賛成した。

道場に鍵をかける。

外は暗くなっていた。門を出ようと一步步いたとき2つの魔力を感じた。

「「！」」

「スローダー！」

「ええ。エランドの魔力です。1つは……この殺気と負の魔力からして、狂戦士バーサーカーですね。後の1つは……清らかで美しい魔力と剣気……騎士の類ですね」

2人は駆けてゆく。

魔力の起点はグランドだった。グランドの中央には巨大な壁と馬に乗った戦士がいた。

巨大な壁は斧を振り回し、馬の戦士は大刀で受け流しながら、かわホースライダーしていた。騎馬士の馬は以上だった。

嵐と思われるバーサーカーの斧激をなんなくかわしていた。

いくら乗り手が騎馬の名人でも、馬が悪ければ避けれるものも避けれない。

幾多の戦場を越えた馬だからこそ、なしえる速さだった。

あの馬は神性の特性でも受けているのだろうか。

2人が着いたときから300。ホースライダーの大刀はバーサーカーに300もの突き、切りを与えていた。

驚くべきことはバーサーカーの守りだった。それだけ受けてなお、バーサーカーは無傷だった。

エランドたちは2人には気づいていたが、標的として狙わなかった。狙ったのなら最後、自分の命はないのだから。

ホースライダーとバーサーカーのえもの武器がぶつかり合い、2人の間合いは離れた。そして、止まったのだ。それと同時に知らない詠唱が聞こえた。

トレースオフ ユニゾンオフ トレースオン
“ 同調完了。 共鳴終了。 開放開始 ”

その呪文は聞いたことがなかった。

幾多の魔法・道術を覚えた蓮でさえ分からなかった。

目の前の騎士の体が白く輝きだし、とある人物が現れた。

「か・・・駆！」

「よう。蓮。 お前も選ばれし戦士だったか」

「なんで？おまえ・・・」

「話は後だ。 あのデカぶつの開放が終わる前にケリつけねえとな。ライダー！」

「承知していますよ。 後、カケル私は^{ライダー}騎乗兵ではなく、^{ホースライダー}騎馬兵ですよ」

愚痴をこぼしながらも、ホースライダーは駆けた。

一陣の風となつて。

しかし、一陣の風も出だしが遅すぎた。

^{バーサーカー}最凶の壁と主の分離は終わっていた。鉄どうしのぶつかり合った音が響き渡る。

「チツ、いけ！」

「ハッ！」

駆の支持の元、ホースライダーは駆けた。
しかし、相手も馬鹿ではない。

バーサーカーの主は手を前に差し出し、呟いた。

「殺しなさい。バーサーカー」

「
-
！」

ただの叫びが以上だった。

大地が揺れ、大気が怯えた。

バーサーカーもまたホース・ライダーに向かつて、跳躍した。

それを見て、真下に入り大刀を構える。斧と大刀がぶつかり合い、
地面が円形状に壊れた。その後も、斬りあいを繰り返す2人のエラ
ンド。速さと力の勝負だった。

「駆・・・いつたい・・・いや、聞きたいことは山ほどいや、海
ほどあるが、最初に聞く。あの“トレスオフ同調完了。ユニゾンオフ共鳴終了。トレスオン開放開始”
ってなんだ？聞いたことないぞ」

「なんだ。代行者に聞かなかったのか？この戦争には3つの進化体
系があるんだ。1つは今のお前のエランドの状態、“具現化”だ。
エランドという霊体を実体化させて、戦わせる戦闘スタイル。2つ
目が“魂の共鳴”自分の体にエランドを入れて、自分自身の体で戦
うスタイル」

「ああ。それなら知ってる」

「なんだ？そこまで知ってるのなら話は早い。3つ目は“開放”だ。

魂の共鳴によって自分とエランダのシンクロ率が100%になったときにできるこの戦争中の最終形態。

“開放”は霊体ではなく、自分でもない。過去のエランド本人が戦う復元化スタイル。つまりだな、開放状態にすることで、過去のエランダの力を100%使える。1つ目2つ目はそれにたどり着くまでの準備段階なのさ。

過去の投影なんだから性別も何もかもが、過去と同じになる。最終段階になったエランダは強い。っとそろそろ俺も参加しないといけなくなってきたか」

そう言つて駆はホースライダーのもとへと跳躍した。激戦だった。斬りあいはずこさを増していて、グランドは死の戦場となっていた。その光景を見ながら、蓮はスローダーに質問した。

「さっきの話は本当か？最終段階がどうかつてのは」

わたしたち

「はい。本当です。エランダはもともと霊体です。主の魔力がないと存命できません。そして、魔力を奪う代わりとして実体化し、主を守るのです。私たち自身にも魔力はありますが、実体化していないと意味ないのです。それを基にして第1段階があります。第1段階では、私たちは1020%の魔力、つまり力が出せないのです。そして、第2段階の“魂の共鳴”は2070%までの力を出せるのですが、70%も出してしまうと、主の体に負担をかけるということです、50%しか出せません。

それを考えると今のホースライダーのちから魔力は100%を超えています。おそらく主の魔力もふまえているのでしょう。彼は今あの大戦争と同じくらいの力、いやそれ以上を出していることになりましたね」

「そうか」

目の前で激戦している2人のエランドはかの大戦争と同じ力を持っているそれだけで運にはすごいことと思えた。

対立戦争はかなりの脅威と言われている。

アーサー王のカムランの戦いを筆頭に幾多の英雄が駆け抜けた戦争などほんの小さなものだと言われている。

英雄の戦争は“国”ではない。

しかし、対立戦争は“世界”だ。もちろん世界の各地には正体不明の傷がある。それも対立戦争の傷跡と考えられる。

しかし、人々はそんなことはない。と言い張る。

それもそうだ。

傷跡を残しているのは“裏”の世界であって、“表”ではない。

表の現象は裏世界が一部地域に発生したものだ。

表と裏。

それぞれの世界は鏡で、全てが反対となっている。裏で戦争があれば、表が平和だったりする。幾つかの例外を除いて。

その例外が神鏡戦争。

裏で起こったことが表で起きている時空間での矛盾。

それは裏を知るものしか知らない現実だった。

2人のエランドの戦いは30分程度続いている。

ホースライダーは自らの攻撃を食らわしてはいるが、バーサーカーには傷ひとつ、つかなかった。ホースライダーは、距離を置いた。

「何故だ！何故に、傷がひとつとてつかん！それだけ奴の防御力が高いのか！」

「それは違うライダー」

「何故そういえる！理由を言えカケル！」

「奴自身の防御力は高くない。奴自身では無い。何かだ」

駆はバーサーカーを凝視している。そのうちに後ろの女性に目を向けた。

「ええ。そのとおりよ。私のバーサーカーのアーティファクト『常識を翻す外甲の能力よ』
バックド・メイル

「常識を翻す外甲？」
バックド・メイル

「そうよ。本来は実際に存在しているものからのダメージは、そのまま相手の体に当たる。でも常識を翻す外甲はその常識を翻す。簡単にいうと実現している武器ならバーサーカーに通じないってこと」

反則である。あの巨人にはいかなる平気も効かないということになる。絶望を感じる発言だが、ホースライダーは苦とも思わなかったらしい。

「なるほど。実に厄介だが、しかしそれは武器・兵器だろう？ならそれ以外の兵器ならどうだ？」

「えっ？」

ホースライダーの前に魔方陣が描かれる。その習慣マナというマナがホースライダーのもとに集まってゆく。ホースライダーの周りに風が起き、大気は冷たくなってゆく。その突風の中に信じられないものがいた。

「ば、ばかな！」

スローダーが言放った。当たり前である。
その目の前に現れたものは――この世には絶対に存在しない生き物がいた。

「ゆ、^{ユニコーン}一角獣」

－ 幻想種。人々によって創造された。存在しない生き物たち。その力は全てを凌駕している。もちろんその魔力も半端ではない。大の魔法使いが1000人いても遠く及ばない存在である。西洋の竜、天馬、一角獣。中国の鳳凰、龍、麒麟。などがよく知られている。

「ライダーお前。幻想種を操れるのか！」

「カケル。それは愚問ですよ。私のクラスは“騎馬士”。馬ならどんな馬でも操れる。例えそれが幻想種といえど問題はありません。あの時代に騎馬隊は多くいた。しかし、私を超える者はいなかったと思いますが」

「フフ。なるほどね。確かにあの対立戦争でそれだけの乗り手は1人しかない。……エグナ軍・四天王のうちの1人、ライド・ボルケイトスね」

ライド・ボルケイトス。対立戦争で生まれた騎馬兵の英雄の名。高度な騎馬術を持っており、騎馬においては最強と言われた、騎馬の鬼だ。

しかし、彼の武器は……。

「おかしいわね。貴方の武器は方天戟ではなくて？」

「今それは気にすることか？この魔具避けられるか？いくぞ！
大^{アーティファクト}
地^{シルレロイド}を駆ける光の馬オオオオオー！」

一角獣が駆ける。

またたくまに光の砲撃となってバーサーカーに襲い掛かる。

大地が抉られていく。土はあまりの衝撃に石つぶてとなって周囲に落ちる。

「バーサーカー！逃げなさい！」

この攻撃は予想外だったらしい。

バーサーカーの主は叫んだ。

しかし、遅かった。

彼女が叫んだときにはバーサーカーは光の弾丸に貫かれていた。
爆煙が立ち上る。衝突したときに爆発がおきた。爆煙からホースライダーが出て来る。

「ふう。・・・こんなもんか」

異常だった。アレは最終秘密兵器だ。アレを食らっては生き残ることは不可能だろう。あの巨人を除いては。

「ば・・・ばかな！」

騎馬の最大の英雄は驚いた。なにせあの巨人は無傷なのだ。
彼の最大にして最強の奥義が効かなかったのだ。

「フッフ・・・アハハハ！そうよ！バーサーカーは無敵！まさに不死鳥なのよ！あの英雄と同じように！」

彼女は大笑いだ。表情がおかしい。目は遙か遠くを見ていた。逝っていた。

彼女はさまに狂戦士だった。

「不死鳥・・・英雄・・・オルトルか」

「ええ！彼はどんな死の境地でも蘇った！彼に勝てるのは幻想魔法
使えるマジシャン魔法使いのみ！」

彼女は上機嫌で高調していた。

沸騰した水のように。

それを聞いていたホースライダーは大刀を一回転させ、言放った。

「そうか。なら私も天敵ということか？」

「ハッ！何を言い出すかと思えば！何を聞いていたの！バーサーカー
の天敵はマジシャンだけと言ったはずよ！」

「やれやれ。冷静さも無くなったか。貴様は言ったはずだ。私の武器は方天戟だと」

ホースライダーは大刀を前へ突き出す。

大刀は光りだし、魔力を発していた。

シルレロイドは周りの魔力を奪う負の魔力に対して、今の魔力は周りに魔力を与える生の魔力だった。

大刀から発している魔力は熱かった。

魔力の熱は大気中の水分を気化させ、水蒸気を作っていた。

「私はもともと大刀を使っていた。しかし、私の代名詞はこの方天

戟だ。何故かわかるか？それはな。私が仕留めた幾多の魔獣はこの方天戟でやったからだ。なぜ私が大刀を使っているか分かるか？魔具は過去のエランド達が成した伝説によって決まる。そして、アーティファクトこの方天戟はな、あることにおいて特化した魔具だからだ！！」

「しまった！逃げなさい！！バーサーカー！！！」

「遅い！幻想を奏でる夢見の戟！」
フルレイン

ホースライダーは方天戟を地面へと突き立てる。

前方に向けて同じ方天戟が突き出ていった。

その速さを誰が見抜こうか。おそらく四大騎士クラスでないと避けることは不可能だろう。もちろんバーサーカーに避けることは出来ない。バーサーカーは無数の方天戟によって串刺しになっていた。

『幻想を奏でる夢見の戟』。ライド・ボルケイトスの代名詞である。幾多の幻想種を打ち取った魔戟。その伝説からフルレインは唯一人外を殺せる武器となっていた。

人間が有とするならそれ以外は無。つまり、フルレイン幻想を奏でる夢見の戟は無を打ち破る魔具なのである。

そして、バックド・メイル常識を翻す外甲の特性は“有無の変換”。有を無にする力。

しかし、逆を衝けば無を有にする力である。無にしか傷を負わせることが出来ないフルレインと無でないと傷を負う心配がないバックドメイルは相性がいいのだ。

「バーサーカー！！！」

女性は叫ぶ。しかし、その声は巨人には届かなかった。

駆は女性に寄る。

「あんたの負けだ。逃がしてやるからさっさと教会に……！！」

言葉が詰まる。

それもそうだろう。駆の腹に槍が刺さり、穴が開いているのだ。駆の後ろには小さな西洋騎士がいた。

「カケル！！」

飛び出したのはホースライダーだ。

しかし、その前に小さな西洋騎士はホースライダーの前にいて彼の心臓に突き刺していた。

ホースライダーは全てのエランドの中で最速を誇るエランドだ。しかし、小さな西洋騎士はその最速のエランドの速さを凌駕していた。

「フフ・・・アハハハハハハハハハハハハハハハ！！！残念だつたわね！！バーサーカーの魔具は^{アーティファクト}2つあるのよ！そして、そこにいるのがもうひとつの魔具、『呪われし円卓の騎士』よ！スラブ・ナイトはバーサーカーが負けて死んだ時に出る自動型対人魔具なのよ！」

ホースライダーは駆を見て消えていった。

「あ……あ……。ホースライダー!!!」

「さあ！その坊やを殺しなさい！」

円卓の騎士は槍を構え、跳んだ。

そして、駆の前に立ち槍を駆の心臓に向けて放った。
それで駆は死んだはずだった。青い騎士がいなければ……。

2人は目の前の戦いをじつと見ていた。
死しか見当たらない戦場を。

しかし、そんな戦いも時期に終わった。
ホースライダーはバーサーカーの呪われし円卓の騎士によって消えていった。

「さあ！その坊やを殺しなさい！」

女性の甲高い声が聞こえてきた。

「いけ……」

「しかし……」

「いけ！スローダー！！契約に従い我が命じる！！あの野郎を切り伏せろ！」

「……はい！！」

スローダーは駆けた。

円卓の騎士がただ速いだけなら、彼女は疾風だ。
彼女は1秒足らずで円卓の騎士のもとにたどり着き、騎士の槍を弾いていた。

しかし、それまでだった。騎士は彼女が来るのを読んでいたかのよう
に、弾かれた勢いで槍を手放し、彼女の胴を蹴っていた。

「なっ！」

彼女は有に100mは飛ばされていた。

それを、見届けてから騎士は槍を拾いなおし、駆に向けた。しかし、それもまた阻まれた。遠くの方で立っている男の魔法によって。

蓮はスローダーが蹴られたと同時に魔法を出していた。

「我は請う。我が御身を守りし、精霊よ。魔性の矢となりて者を阻め！」

古代魔法だった。

精霊を呼び出し、敵を薙ぎ払う必中の矢。

騎士はその矢を槍で弾いていた。その間に、蓮は魔法詠唱を行っていた。

「来たれ！シルフ！突風となり、極東の鎌を持ちて融となれ！暴風となれ！槍となれ！」

複重詠唱連続魔法である。

魔法は本来1つの魔法しか使用できない。しかし、蓮はそれらの過程を全てすつ飛ばして、3つの魔法を1つの詠唱に乗せた。

この高等技術は何百万何千万という魔導師の中で蓮にしか使用することは出来ず、魔法使いでも1人いればいいものだった。しかし、教会は蓮がそれを使えることは知らなかった。

竜巻の槍を騎士に向けて放った。しかし、騎士は意図も簡単に避けた。

「なっ！」

驚愕に包まれる蓮。意外ではなかった。相手は人外、^{エラント}それを超える魔具なのだ。

一個人の魔法を避けきれないはずがない。

騎士は一気に蓮との距離を縮め、脇腹を蹴り飛ばした。

「うぐっ……！」

蓮はスローダーの倍ぐらい飛ばされた。

「蓮！くっ！来れ！ウンディーネ！氷雨^{ひめ}の矢となりて我の敵を撃破れ！されば我に降伏を与えん！」

天空から鋭く磨き尖った氷が無数の雨となって騎士に降り襲った。

騎士はこれもまた簡単に避けていくが、この魔法はそれで終わらなかった。

それが、駆の仕掛けた罠だった。

駆が唱えた魔法は氷の雨と誓約。

前置の魔法が効かなかった場合のみ相手に巨大な呪^{しゅ}をかける高等上級魔法。

駆の最強にして最大の魔法だった。

呪はランダムで決まる。種類は幻想、石化、捕縛、病の4つである。そして、今回かかった呪いは捕縛。例えば神であろうと捕まえる完全捕縛の鎖。

「よし！」

「……あいつ……あんな魔法使えるんだ……」

「へーやるじゃない。でも残念。……解放。鎖を断つ鎌・ラック」

その声と共にキンと鎖が切られる音が下かと思ったときには騎士の槍は駆に刺さっていた。

「あ．．．ぐ．．．ごふ」

「駆――――！！！」

「貴様ああああ！」

青き騎士が吠えた。騎士は飛んだ。しかし、彼女の上を紅い何かを通った。

「えっ！」

紅い何かは騎士の体をぶん殴り、吹き飛ばしていた。
その人外の領域を超えた。何かは蓮だった。その髪は紅だった。

「紅蓮．．．鬼神．．．」

「スローダー。剣を貸せ」

「しかし．．．」

「速く」

スローダーをにらみ付ける鬼神。

その目は敵を睨みつけるような冷酷で、殺人鬼の目だった。
スローダーはその目を見た瞬間身震いがした。これがあの蓮なのかと。

「分かりました」

そうして取り出したのは炎の呪いの剣・炎帝の剣だった。剣を手にとった鬼神はすぐさま騎士に寄り、その刃を振り下ろした。今度は騎士は避けることはできなかった。

「あ、そんな、なんで？」

「アーティファクト
魔具を超える存在だからさ」

紅蓮鬼神は大剣を女性に向けて降りおろすが、刃先を鼻ぎりぎりのところで止めた。

「駆の意味だ。殺されなくなったら、さっさと失せろ」

「ひっ！」

女性は殺気を感じとり、怯えて逃げて行った。

「レ・・・」

「駆!!」

蓮は剣を投げ捨て、駆へと走り寄った。

スローダーの腕は空中にあり、何処にやればいいのか困っていた。然りたいのはやまやまだが、今はそれどころじゃなかった。

「駆!!」

「あ、・・・蓮。・・・大丈夫だった？」

「馬鹿！お前の方が重傷だろうが！今は自分のことだけ心配しろ！」

「・・・うん。・・・そう・・・だね」

駆の声は乏しく、いまにも無くなりそうだった。

「待ってる。今治療を」

蓮は駆の穴が空いた少し上に手をおき、治療魔法をかけた。

緑に光るその手はまるで神の手のようにだった。

傷はみるみるうちに治っていったかのだが、出血が多過ぎたのだ。駆の体温は下がったまま冷たかった。

「クソッ！血が足りねえ！」

「ねえ、蓮」

「馬鹿！喋るな！使い間を送ったからすぐに衛生班がくる！」

「うん。分かってる。でもね。意識がはっきりしているうちに言うておきたいことがあるんだ。もしかしたら、死ぬかもしれないし・・・」

「諦めんな！美里との約束どうすんだ！」

「うん。・・・それが俺の言いたかったこと。・・・ごめんね、蓮。約束守れそうにないや。でも良かったあ。大切な君を守れて」

「・・・馬鹿野郎。お前が生きていることで約束は守れたのに・・・俺ばっかりおいていくなよ・・・」

「蓮は優しいね。そんな君を僕は尊敬して・・・たん・・・だ、よ」

その最後の言葉を残し、輝かしく、希望に満ちていた光の瞳は閉ざされた。

「うあああああ！」

「レン・・・」

駆に擦り寄った蓮は駆に縋りつき、泣いた。

そんな中、一人の男が2人の前に現れた。

その男は藍色のフードを被っていたが、顔は見えた。赤き刺青が顔を覆い、陰質がちで印象ない男だった。

「大丈夫か！？」

「遅えんだよ！代行者！！」

蓮の顔はまさに鬼の如く。

その魔力は目に見えるほどで魔法使いでも鎮めるのは不可能だった。

（これが紅蓮鬼神の力か！！）

「連れて行くならさつさと連れてけ！！！」

「クツ・・・」

フードの男は駆を抱き抱え消えて行った。
グランドには、蓮とスローダーだけが残っていた。

「レン・・・」

「スローダー」

「はい？」

「もうこの戦争で怪我人は出さない。誓う・・・この戦争勝ちに行くぞ」

「・・・もちろんです！私の主に敗北は許しません！」

「ああ」

そして蓮はこの戦争を勝ち抜いて行くことを決めた。
そうして、神鏡戦争は後半を迎えた。

第八章 終幕と開幕

グラウンドを離れ2人は黒木邸へとむかっていた。
夕焼けが2人を照らしていた。

「大丈夫ですか？レン」

「・・・・・・」

「心配は入りません。カケルは強い。ですから、あのままくたばることは無いはずです」

「・・・・・・スローダー」

「はい」

「俺は間違ってしまったのだろうか。カケルが倒れたことは、あいつのせいだ。しかし、・・・・美里には悪いことをした。あのとき、あいつに恨まれても、止めて一緒に闘えばよかったのだろうか」

「・・・・それは・・その考えが間違っている。あなたは彼の威厳を守った。それは誇らしいことです。胸を張ってもいいはずだ。あなたの考えは全てを守ること。しかし、それは難しい。何故なら、貴方が守りたいのは善だけでしょうか？貴方の考えは矛盾ばかりだ・・・・仲間を守る。それは仲間でなければ確実に殺すと言うことだ。では・・・・敵と考えている相手が仲間ならどうするつもりですか？・・・・貴方の仲間保護意識は異様に高い。一体何が貴方を動かしているのです？まずはそこを見つけることです」

スローダーの一言一言が痛かった。

「そう・・・だな。・・・なあ、なんでお前は俺の考えは全てを守ることもなんて言ったんだ？俺お前に考えなんて言った覚えは無いけど・・・」

「聞かなくてもわかります。貴方はこの戦争が始まったとき、カケルとミサトは巻き込みたく無いと言った。それだけではありません。リュウが破壊者に殺されかけたとき、真っ先に敵に突っ込んだ。ミカの時も同様に。さっきもそうです。カケルの意思で生かしたと言っていました。それは誤魔化しでしかない。きわめつけは貴方の紅蓮鬼神だ。彼は貴方の心次第で出てくる。そして、貴方の心が乱れる時は・・・仲間や人の死だ。貴方は『死』に対して非常に敏感だ。死と貴方に何の結び付きがあるのですか？」

「・・・わからない。でも、道は見つけた。ありがとな、スローダー」

「えっ・・・あっ・・・い、いえ」

スローダーの頬は赤かったのだが、夕焼けでやからなかった。その微笑ましい光景に蓮は吹いた。

「む？一体今の発言に笑う要素があるのかわかりません。はっきりしていただきます！」

「別に。さ、帰ろうか」

「言いたいことはたくさんありますが、そうですね。その案には賛成です」

そうして2人は夕暮れの通学路を歩いて行った。

「ただいま」

「今帰りました」

蓮は緩やかにスローダーは礼儀正しく挨拶を済ます。

2人は真つ先に居間へと向かう。

居間には龍、雅菜、スピヤー、マジシャンが座って、お茶を飲んで
いた。

「遅かったじゃないか。買い物か？」

「いや、実は・・・」

蓮はみんなに説明した。さっきまで見ていた地獄絵図を。

「・・・そうか」

「そ、そんな、駆さんが・・・」

雅菜は今にも泣きだしそうだった。

駆の重傷と魔導師という正体に驚きを隠せないようだった。衝撃の
多いなか、冷静な人物がいた。龍だ。

「まあ、報告ご苦労。蓮も疲れたろう。今日の飯は俺が作る。ゆっ
くりしていけ」

「ああ。後ここの家主は俺だから、お前がゆっくりしていけと言っ

「のはおかしいがな」

「フツ」

龍は鼻で笑って、台所へと行き、調理を始めた。居間は静かになり、包丁の音だけが響いていた。

静寂になっている黒木邸。

蓮たちだけでなく、スローダーたちも暗くなっていた。

そして一番暗かったのは雅菜だった。

雅菜は馭によく世話になっていたからだ。

この暗黒とも言える空気を明るくしたのは蓮だった。

「クツ・アハハハハハ！みんなして何暗くなってるだよ！！べつに死んだわけじゃないんだから！大丈夫だよ。あいつ意外と丈夫だから」

笑顔だった。

一番辛いはずの蓮がこの空気をどうにかしようとしているのに、自分たちが暗くなっているのは駄目だと気付いた5人は元氣を取り戻した。

「そうですね。今どうかしないといけないのは神鏡戦争だ。馭のぶんも勝ちにいきましょう」

「ああ。そういうことだ。龍兄、雅菜。俺は勝つよ。あん
 たちにも負けない」

凜とした表情で二人を見つめた。それにつられて雅菜も凜とした表情で、龍は流したように続いた。

「もちろんだよ。私も負けないよ」

「はて、俺に勝てるかな？」

「でも、家では仲間だよな？」

「当たり前じゃん！今までそうだったんだからさ！」

「そうだなっと。飯だ」

お盆に料理を乗せてテーブルに置いた。和食だった。

「それではレン。お先に床に着きます」

「ん？あがったか。ああ、おやすみ。スローダー」

「はい。いい湯でした」

風呂上がりで顔がほてったスローダーは自分の部屋に向かった。

「さてと。俺も入るかな」

風呂から上がってきた蓮。

「ボディーソープきれたな。そろそろ買い出ししないとな」

まだ若干濡れた頭を拭く。

ドライヤーで完全に水気を飛ばした。

そして、蓮は向かった。雅菜の部屋に。確かめないといけないこと

があつた。

「雅菜ー。いるかー。話がしたいのだが、いいか？」

「えっ！？あつ！れ、蓮兄！！だ、駄目、いや、どうぞ！」

どっちなのかわらなかったが、とりあえず入ってみることにした。黒木邸は和風なのだが、雅菜の部屋だけは洋風だった。雅菜が勝手に改装工事を行ったのだ。

中央にあるテーブルに対面で座る。

「で、何？蓮兄」

「本当のことを話してほしい。何故騙していた。自分が最高幹部と
いうことを」

「べつに騙していた訳ではありません。これは私の義務です」

「義務を行うのは自分の意思か？それとも命令でか？」

「私は・・・私は最高幹部になった時点で自由はありません。た
だ、上に従うだけです」

「
」

わかつてはいた。

最高幹部。

それは肩書きだけ。実際は教会の長の操り人形マリオネットなのだ。
自由を奪われた籠の鳥のように。

「お前がそれでいいなら俺は何も言わない。だけどな。本当に聞きたいのはこれからだ。・・・何故俺にだけでなく、龍兄にまで黙っていた？それと、あの日の夜のことは嘘か？」

あの日の夜。

蓮が雅菜の夢を叶えると誓った夜。あれは嘘だったのか。それが一番聞きたいことだった。

「私の正体は知られてはいけない。それが教会最高幹部の掟だから。あの日の夜のことは申し訳ないと思いました。しかし、私は知らなければならなかった。貴方の気持ちは本物なのか」

「。そうか」

これもわかっていた。

破壊者と殺り合ったときに自分は最高幹部だと正体を開かした雅菜。

あの日からわかっていた。

あの日の夜は自分を試すものだ。

「聞きたいことはそれだけだ。あの日の約束は無しだな」

それだくを残し、蓮は出て行く。扉を開くときに聞こえた雅菜の一言。

「あの時、うれしかったのは本当だから！」

その一言は蓮にはとてつもなく胸を痛める刃だった。

「ハア」

深い溜め息。雅菜の部屋からすぐさま自分の部屋に戻ってきたのだ。交差して行く思いを抱えながら。

「大丈夫ですか？レン」

「スローダー」

障子を開く音が聞こえ、そこにはスローダーが立っていた。

「隣りいいですか？」

「・・・ああ」

スローダーは音を立てず正座した。

「レ・・・」

「なあ、少し出ないか？」

「構いませんが・・・」

2人は黒木邸の中で一番美しい場所の見える縁側に来た。

蓮は扉を開けて、足を放り出した。スローダーは律儀に正座していた。

「寒くないか？」

「いえ、問題ありません。それより何故ここに？」

「」

黙って庭を見る蓮。

話してくれそうもないので鼻で溜め息をつき、同じ庭を見つめた。

「　　。懐かしいな」

「はい？」

ボソリと呟いた蓮。

その言葉を聞きとろうとしたのだが、わからなかった。

「よく親父とこの庭を見たんだ。月光で輝くこの白砂を。
。落ち着くんだよここ」

「そうでしたか。・・・なるほど。私もここは好きです」

小動物を見守るような暖かいまなざしだった。

無風の夜。

月光が世界を青白く照らす。

「なあ」

「なんですか？」

「俺は弱いな」

「は？」

「さっき雅菜とケリつけてきたんだが、雅菜の最後の言葉がずっと抜けない。結局ケリ、つけられなかった。・・・弱い俺は」

「。そんなことはありません。貴方はケリがつかなかった。それは貴方の優しさです。優しさというものは弱いということではありません。優しさは強い証拠です」

スローダーの顔は真剣だった。
蓮にとつてとても頼りになり、落ち着いたのだ。

「・・・そんなものなのか？」

「そんなものです」

風が出てきた。髪が靡^{なび}く。

「入るか？風邪引くぞ」

「いえ、すみませんが、もう少しいます」

「。そうか。なら、付き合うわ」

縁側で庭と月を見ている2人。

この時間だけがゆっくりに感じられた。

蓮はずっとこうしたいと思った。

スローダーはどうだろう考えることもあった。

今だけ本当に時間を止めてほしいと願った。

しかし、それは叶わない願い。

戦争が終われば消えてしまうこの美しい世界。

例えばその美しさが消えることがあってもこの貴重なこの時間を大切にしたいと蓮は思った。

「レン」

「ん？」

「そろそろ入りましょう。本当に風邪をひいてしまう」

「そう、だな」

立ちあがり扉を閉める。2人は自分の部屋へと入っていった

。

夢を見た。今回はいつもの剣士の過去ではなかった。それは近いのだが、遥か遠く何処かにいつてしまった少年の過去だった。大きく綺麗な木だった。でも、実際の木は3mしかなかったが、若い少年には大きいと思われた。その小さな木の隣りにあるのは、村一番の巨大樹だった。少年にはその巨大樹は巨人にも思われた。巨大樹を見上げる少年。

「　。おいで」

誰かが呼んでいた。艶やかな、黒い髪を腰まで伸ばし、羽織を着た女性だった。

「母様！」

少年は駆ける。母のもとへと。女性は少年を抱き寄せる。

「おお。やっと見つけた。　は此所が好きだな」

「父様！」

父様と呼ばれた男性は、浴衣をきていて、古風だった。髪は黒いというより藍に近かった。目は細目だった。

「そりゃそうよ父さん。此所が嫌いな人はいないわよ」

「そーそー。こいつ毎日此所に来るんだぜ。まあ、俺も毎日とはいかないが、よく来るし。こいつほどじゃねえがな」

「姉様、兄様も来たんですね」

姉様と呼ばれる女性はポニーなのだが、清楚だった。母親と同じ格好だった。兄様と呼ばれる男性は父親と正反対の顔だちで、くつきりとした目付きで長髪だった。

「どうしたんです？みんなして。何かありました？」

「見当らなくてみんなして探してたの。 。後、敬語は止めてもいいのよ。家族なんだから、一族のしきたりなんて関係ないわ」

「そうそう。俺なんてお前より早く破ったぜ？」

「あんたは早すぎ。少しは を見習ってほしわね」

母親は優しく髪を撫でながら、兄は長髪の後ろに手を回してにこやかに話した。

「まあ、いいじゃないか。自由で」

5人は巨大樹を見上げた。白い靄のように景色が霞んで遠ざかって

行った。

朝の日差しが降り注ぐ前に蓮は起きた。
5時。

いつもより30分早かった。

「ん・・・んん」

ゆっくりと起き上がる蓮。

「今の一体・・・。知らない夢だったな。 懐かしい感じは
したけど・・・。」

しばらくすると龍、スピヤー、スローダー、マジシャンの順で居間
に入ってきた。

「なんだ雅菜のやつ。まだ寝てるのか？マジシャン、すまないが起
こして来てくれるか？」

「わかりました」

居間を出て行くマジシャン。
雅菜を起こすことは至難の業だ。

今頃雅菜の部屋では異種魔法戦が行われているだろう。が、しかし
マジシャンが起こしに行つてからたった5分で雅菜はマジシャンと
共に居間に入ってきた。

あの龍でさえ、驚愕を隠せなかった。

一体どんな魔法をかけたというのだろう。

後で聞いてみるのもいいかもしれないと蓮は思った。

学校に行くのが憂鬱になる。

駆のことを一番知っているのは自分だ。

あの現場にいて止めることができなかった自分がここにいる。
今思うと後悔ばかりが残っていた。

「やあ。どうしたんだい？そんな辛気くさい顔して」

「美里……」

「ありや？駆はまだか？最近になってあんたが早くなっただのに、
ねえ」

鞆を背中に回し、男より男性っぽい美里はにこやかに話していた。
そんな美里を見ていると駆が重傷ということも自分が止めることが
できなかった自分がいるということも言えなかった。

HRが始まり教師が入ってくる。

「おい。HR始めるぞーさっさと席つけ」

「先生ー馬鹿やって出て行った男子がまだ帰ってきませーん」

「ん？そうか。ほっとけ。しばらくしたら屍で帰ってくるだろ。生
きて帰ってきたら処刑な」

冗談なのか本気なのかよくわからない担任は以外と人気があった。
そんな教師に対してまともな生徒は

『ほつといていいのか？』

『ひでえ！死刑先刻だ！こりゃ駄目だな。南無阿弥陀仏』

などともっともらしいのだが、ノリだけで生きている生徒は

『うひょー！藤浪かけー！！誰か賭けしねえか！』

などと話していた。

そんな生徒がいるクラスの担任、みなふじりょうけ藤浪京輔。

（みんなはキョウとか藤浪とか悪魔と呼んでいる。）

そんな教師からぬ担任は出席簿を開き、今日の日程をはなした。

今日は土曜日だがどうやら前回の休みの繰越で今日は一日あるみたいだった。

「あー、日程の前に話しておくことがある。うちのクラスの翼駆が工事中の鉄骨に当たって意識不明の重傷だ。今は総合病院で入院中だ。誰か病院行つて腹に一発入れてこい。起きなかつたらよし。起きたら殺せ。以上」

出席簿を閉じて冗談か本気なのかわからないまま教室を出て行つた。その後『鬼だ!』などが教室内に轟いたことは言つまでもない。

午前中の授業を終えて、蓮は教科書をしまつと上から話しかけられた

「ねえ。蓮、学食いかない?」

「ん?そう、だな。たまには学食もいいな」

「でも、いいの蓮君?沼地さんとか・・・」

「大丈夫。今日は購買で買つて食べるらしいから」

3人は食堂へと入る人は意外に少なかった。

「へえ、少ないんだな案外」

「いつもこうならいいんだけどね。いつもは満員でさ、競争率高い

んだよね」

「へー、なんで今頃になって空いてるんだ？」

「さあ・・・？どうなの？みーちゃん」

恭子は首を斜め45°の角度で傾けた。そこで実力を発揮するのが、通称・黒帝の情報狐、美里だった。

「ん？ああ、ええつとね。私の情報だと。うちもうすぐで全寮制になるの知ってるよね？」

「ああ」

「うん」

そう黒帝学園は市外からの通学生徒が多い。

市外から来る生徒は長くて往復3時間近くかかる生徒もいた。

そういう生徒はアパート生活を許されているのだが、保護者から意見が出たのだ。

それなら寮にしたらどうかと。

理由は通学時間短縮と金銭問題だった。

学校はそれを承諾し、市に許可をとったのが約半年前のことで、工事は8月の終わりに始まりもうすぐで完成するのであった。

「そこでね問題ないから寮食堂だけ使用を許可されたから使用してみるみたい。みんなそっちに行ってるらしいよ」

「なるほど。んじゃ、食券買ってくるわ」

「よし！やっぱり誘っておいて正解だった！」

「ありがとう。蓮君」

美里はガッツポーズで恭子は笑顔で蓮を送った。

蓮は狐うどん、美里はラーメン、恭子はサンドイッチを食べていた。

「やっぱりこのラーメン美味いね。下手な屋台よりよっぽどマシ」

「み、みーちゃん」

「お前は静かに食えんのか？」

「あんたが静かすぎ！なんでうどん啜らないわけ！上品すぎ！！」

「たわけ。確かに麺類は啜ってなんぼのものが、啜らないといけないという規則があるわけでなかるう？なら、食べ方など人それぞれだ」

「うつ……。あんた今日いつもより頭キレてない？」

「それは違ふよみーちゃん。蓮君はいつもと同じだけど、標的が違ふだけ」

「そういうことだ」

3人とも食事が終わリトレイを戻し午後の授業を待った。

「はい。てことでHR終わるぞー。誰か翼の見舞い行くやついるかい？いるなら後で職員室来い。持ってって行って欲しいものがある。

後、一発入れて来い」

青ざめて行く教室を無視し、担任・藤浪は出て行った。

みんなちりじりに下校する。蓮、美里、恭子の3人は共に帰って行った。

ちなみに病院には行っていない。

担任の藤浪から禁止令が出ていたのだ。理由は仲の良い蓮たちが行くこととショックを受けるとのことだ。

藤浪は適当のようで生徒のことを分かっている。だからこそ、生徒からも信頼され、人気があるのだ。そんな帰宅途中である。

部活は調整ですんだので30分もかからなかった。

「あ、あたしここだから。ばいばい。みーちゃん、蓮君」

「ああ」

「おう。きょううち。襲われんなよー」

恭子と別れる。

美里は腕を大きく振って、蓮は手をズボンのポケットに手をつっ込んだまま。恭子は笑顔で歩いて行った。腕を下ろし、睨みつけるように言い放った。

「あんたさ、いつもその挨拶だね。味っ気無い」

「余計なお世話だ」

「はいはい。どうせ、お節介者ですよーだ。……」

拗ねたように言った後、遙か遠くにある夕日を見ていた。
その瞳には魂が無く、虚ろだった。声をかけようとしたが何を話せばいいのかわかり浮かばなかった。
そんな時美里が声をかけてきた。

「ねえ、ちょっと行きたいところがあるんだけど、いい？」

「。ああ」

そこで連れて行かれたのは、小さな公園だった。
そのベンチに座った。

「」

蓮は喋ることも出来ず、遠くを見て黙っていた。
ホワイトブレス
吐く息が白い。

寒いわけである。そんなに寒いのに雪は一向に降る気配はなかった。
山が近くにあるのになどとどうでもいいことばかり考えていた。
沈黙が続く。

沈黙を破ったのは耐えることができなかった蓮である。

「見舞い・・・行かなくていいのか？」

「私が行ったら辛いのは私自信だから。無理して笑顔でいる駆は見たくないよ」

「・・・そう、か」

「ここね」

「ん？」

「この公園はね。私と駆の思い出の場所なの」

その一言から彼女の記憶。大切な思い出を語り始めた。

。あれはいつの日だっただろうか。少女は父親と喧嘩し、家出をした。彼女には友達が少なかった。行き先も無く公園のベンチで途方に暮れていた。何処に行こうか。食事はどうしようか。少女は帰ることは考え

なかった。ただ今、明日をどうやって過ごそうかしか考えられなかった。夕日が沈んで行く。赤き景色が無くなって行く。このあとに待ち受けるのは何もない暗闇だけ。たった一人。それは少女にとって辛いものだった。夕日が半分以上が無くなっていった。そんな孤独のなか小さな手が少女に差し出された。その小さな手は少女と同じくらいの少年だった。少年は笑顔でたった一言少女にとって限り無い希望になった。少女の好きな言葉それが『笑顔見せないと、みんなつらいよ』だ。その時少女にとって少年は天使にも見えたという。それが柳田美里と翼駆の出会いだった。

「その後にあんたを紹介されたんだよね。高校に入ってからきよっちに合った。そう言えば最初にあんたに合った時もぶっきらぼうでさ」

「悪かったな」

「それが悪いわけじゃないよ。ただね。何もなかった。無表情になった時なんかとくに。つまらなそうで悲しそう。陰しなかった。あんたさ。過去に何があったの？」

「え？」

「だってさ。過去に何か無いとあんな感じはしないよ？最近になってよくわかった。ね、何があったの？」

とても悲しそうな美里の表情。

蓮にはそれが気付かなかった。

それもそうだ。蓮は考えることしかできなかった。

自分の過去に何があったのか。

自分には養子に行くまでの記憶が全くといってない。

そう、その時のことが消えているのだ。記憶を抜かれように。

「すまない。何も思い出せない。俺が養子なのは知ってるだろう？その養子の前の記憶が一つも無いんだ」

「そつた。寂しいね。……。ねえ、自分の記憶。探してみたら！きつと楽しいよ！……。きつと、ね。なんだかしんみりしちやった。もう帰るね。バイバイ」

そうして美里は公園を後にした。

帰宅する。

家は電気が着いていた。

蓮は自室に行き、制服から着替えた。すぐさま居間に入る。

「ただいま」

「あ、おかえりー」

「おかえりなさい。蓮」

居間には雅菜とマジシャンがいた。

「珍しいな。お前ら2人か。龍兄やスローダーは？」

「龍兄は生徒会、スピヤーさんは自分部屋にスローダーさんは・・・
・何処行ったのかな？わかんない」

「そうか。掃除は終わってるな。飯の支度、6時から始めるわ。つ
てことでスローダー探してくる」

「はいほ」

スローダーを探した。彼女の自室にはいない。

風呂にも縁側にも蓮の部屋にもいない。龍や雅菜の部屋にいたとは思えない。

残った場所といえば　　。

「地下か」

そこは神鏡戦争が始まってから封印した。

孝良の研究室がある場所だ。そして彼女はそこにいた。

「返っていたのですか？レン」

「ああ。見当たらなかったからさ、探していたんだ。屋敷中を探し
回って最後に来たのがここ。ところで何してんだこんなところで」

「屋敷の掃除をしていたのです。2日かけて最後が地下だったので

す。そしてこの扉を見つけました。いったい何なのですかこれは」

律儀なスローダーらしく細部まで説明してくれた。そこまで教えてくれなくてもいいのにと微かに思う蓮だった。歩きながら話し出す。

「ここ親父の研究室だったんだ。ただ、戦争が始まって封印したけどな」

言い終わるころには扉の前に立っていた。

「そうでしたか。なら、ここはやらなくていいですね。上に行きましよう」

「。いや、入ろう。確かめたいことがある」

「それは？」

「親父が研究してたもの。。雅菜たちに言ってくる。飯遅くなるって」

「わかりました。では待ってます」

蓮は階段を駆けあがっていった。

10分ぐらいたって蓮は降りてきた。疲れているようにも見える。

「遅かったですね。雅菜が反対しましたか？」

「いや、雅菜は早かったよ。でも龍兄に捕まった」

「.....それは御不運で」

「まあ了承はもらったから遅くても大丈夫だな。さ、行こうか」

「はい」

スローダーは一言返事で答えた。蓮は扉の前に立ち手を翳した。

グラーシア・オフケオーレ
「封印開放」

たちまち辺りは紅く染まっていた。鍵が開く音がした。

「行くか」

「はい」

2人は研究室に入っていく。

不思議なことに研究室は埃が溜まっていなかった。

「すごいですね。この部屋は」

スローダーは驚愕のあまり口があきっぱなしだった。

「どこが？」

「貴方は魔導師なのにこの部屋のすごさがわからないのですか?! この部屋は魔法を使うにはもってこいなんですよ! こんな魔力穴は見たことはありません! 貴方の父親は何者です!」

「さあ、魔法を研究していること以外は普通の人だったよ。魔力穴に魔力が溜まってるのは親父が実験して失敗。その後になんとし

た処理を施したからだろ。まあ、教会からは『魔法を使う異色世界人』って呼ばれてたみたいだけだな。うゝん、なんかいいかな」

蓮は本棚から本を取りだし一通り目を透した後しまうという動作を繰返していた。

スローダーは暇になったので研究室を歩き回っていた。歩いていると何かにぶつかって落ちた。

何かの資料らしかった。

その資料があつた場所は物が乱雑に置かれた机のうえだつた。スローダーは軽い溜め息をつき、資料を拾つた。戻そうとしたのだが資料に書いてあつたことが気になって詳しく見ることにした。

「・・・今は亡き魔法一族・七瀬の研究資料・・・」

「！」

ぼそりと言つたつもりだったが、蓮には聞こえたみたいですぐさまくいついた。

「スローダー！それを見せてくれ！」

「えっ、は、はい。どうぞ」

ほとんど奪いとつた感じで資料を手にした。資料を見た蓮は震えていた。

「やっぱりか」

「何がです？」

「親父が研究してたものさ。あの人は魔法だけじゃない。あの人は・
・あの人は今は亡き一族についても研究してたんだ。そうだ。一般人のあの人が魔法を研究していて教会から罰則を受けていない理由。それは教会に認められたからさ。親父にはもう一つ呼び名があるんだ。それが『賢者』。魔法使いを調べる者。そして、調べていた魔法使いが七瀬さ」

「なるほど。それはわかりました。そこで疑問が一つ浮かびます。『賢者』は魔法使いを追求するのではたよね。しかし、七瀬は魔剣士・魔導師ですよ？魔法使いではないのに追求するのですか？」

そう。七瀬は魔導師なのだ。決して魔法を極めし魔法使いではないのだ。

「いや、確かに七瀬は魔法使いじゃない。でもな。あの一族は特別だ」

「何故？」

「異能者だからさ」

「異、能者？」

「ああ。七瀬には産まれてくるときに特殊な瞳を授かる」

「特殊な瞳？」

「そのうち見えるさ。ひとまずはこつちだな。俺の記憶がわかるかもしれない。さてと早速中身・・を？」

「どうしたのですか？」

「やられた。あのジジイ。古代ギリシア語で書いてやがる。ふざけるなよ。解読するだけで時間かかるつーの」

蓮は研究資料の持つ手に力を込めた。

資料は手が置いてあるところだけクシャクシャになっていた。

居間に戻る。

ちなみに研究室は再度封印をしてきた。居間には全員いて食事が出ていた。

「あれ？食事……」

「雅菜が用意した。お前が忙しそうということだな」

「そう、なんだ。……ありがとう雅菜」

「うっん。いいの。さ、食べよ」

食事になる。みんないつもの場所に座った。

普段は騒がしい食事なのだが、今日は違った。騒がしいというより五月蠅かった。

「で、蓮。どうだった？なんかあったか？」

「あったにはあった。親父の研究資料があった」

「へーよかったじゃん。なんか分かった？」

「いや、全く。あの野郎、資料を古代ギリシア語で書いてやがった」

「お前が孝良さんのことをあの野郎というとはな。だが、何故古代ギリシア語で書く必要があった？」

「そつだよね。なんでだろう？」

孝良が資料を古代ギリシア語で書く理由。蓮にはそれが分かっていなかった。

「簡単さ。俺にたいする嫌がらせ。それと……教会のやつに見せないため」

最後の言葉は控え目だった。

雅菜と龍は箸を止めた。2人とも教会関係者だからだ。

「どういうことだ？」

「そつだよ」

2人から少し殺気が感じられた。

「そう怒るな。親父は2人のことは信用していたから。でも、他の輩は絶対信じていなかった」

「何故だ？」

殺気は感じられなかった。

「『賢者』だから。後、気付いたから」

「何に？」

「七瀬の秘密」

「秘密？」

「ああ。2人にしか話さない。他の輩に知られて実験なんかされると・・・血が汚れる」

「「！」」

龍と雅菜は目を見開いた。

それもそうだ。蓮は過去の記憶は無い。

だから、七瀬の血というものは知らないはず。

しかも、何かで七瀬の血が汚れると蓮は言いきったのだ。

「蓮・・・。お前・・・記憶が戻ったのか？」

「少しだけ。自分が誰なのかということと七瀬の特殊な瞳のことだけ」

「そう、か。なら」

「それ以上は深い。食事が終わってからでいいか？」

「ああ」

「うん」

「感謝する」

食事を再開する。沈黙の食事になるかと思えばいつも通りだった。さすがである。

食事が終わり、食後のティータイムとなり、先ほどの話の続きとなった。

「で、さっきの続きだが」

「わかってる。・・・」

「どうした？勿体ぶる必要もないだろう？」

「・・・どこまで言った？」

「殴っていいか」

「うわー！！待った！待った！落ち着いて！！龍兄！！！」

龍は握り拳を握り、鳴らしている。それに対して雅菜は止めに入った。

「ああ、思い出した。瞳のことだったな」

「ああ」

「うん。で蓮兄。何なの？特殊な瞳って」

「・・・呪力眼だ」

「「！」」

龍も雅菜も驚愕した。

「呪力、眼だと」

「そんな。でも、その眼は・・・！」

龍は硬直状態で雅菜は手を口の前に持っていた状態では震えていた。スローダー、マジシャン、スピヤーの3人は呪力眼がどういうものが何かわからなかったが2人の反応を見てなんとなく分かったように、ずっと黙っていた。

「呪力眼がどういうものか分かってるだろ？呪力眼は名前の通り呪力を見る。外の呪力、内の呪力、魔法の呪力全てを見ることが出来る。それだけじゃない。この眼は一步先も見る。呪力によってな。そして、退魔一族七瀬はその呪力を壊すことができる力を持つ。だからこそ魔剣士最強であり、魔導師としては恐ろしい輩なのさ。それは魔法使いと言われる者も例外ではないがな」

「なるほどな。それが七瀬の秘密なら他の魔剣士たちも滅ぼそうとする訳だ」

「なるほど。だからあの方は最高幹部である私にさえ黙っていたのですか」

2人とも穏やかになっていた。

「で、お前は使いこなせるのか？あの悪魔の瞳・呪力眼を」

「いや、わからない。実感出来て無いんだ。記憶が一部戻っても全てが嘘に思える。・・・信じられないんだ」

「『虚栄の心』か」

「なんか言った？」

「別に」

6人は各自の部屋へと戻っていく。

蓮は横になった。天井を見上げる。

自分よりも遥かに高いのに目の前にあるようにも感じられた。

「七瀬・・・か」

今は10時前。

日程の鍛錬を終わらせ、深い眠りについた。

「いい夢でありますように」

蓮の浅はかで深い願い。

そんな単純でも素晴らしい願いが叶えられることはなかった。

。彼が見たのはいつもの夢ではなく、地獄。

紅い。赤い。深紅い。

どこまでも続く赤。それは何の赤なのだろうか？

逃げて。避けて。ニゲテ。

早く。速く。疾走く。

聞こえる声は憎しみよりも願ひ。辛いしかしそれが理解らない。臭うのは血の臭い。そんな地獄絵図の中に少年はいた。何処かも解らず、何がおきているのかも曖昧。そして赤い景色を最後に少年の瞼は閉じれ真つ暗になった。

目を覚ます。

部屋が肌寒い。

蓮は布団の温もりを惜しみながらゆっくりおきた。今日は月曜日。

「うつ、……さっきの夢は効いたな。くそつ、気持ち悪い」

洗面所へ向かい顔を洗う。気持ち悪さは少しだけとれた。

「でも、何故だろう。さっきの夢……。なんとも思わなかったな。間違いなく『死』の夢なのに」

居間に電気がついていた。

「スローダーかな」

引き戸を開ける。意外な人物がそこにいた。

「ありや、龍兄か。いつも7時だろ？どうして今日は早い？」

「ただたんに目が覚めたただけだ」

「そっか」

蓮は台所に立つ。冷蔵庫の中身を確認する。中身は結構少なかった。

「うちも人増えたからな。とりあえず今朝は行けるな。こりゃ買い出しだな。」

蓮は材料を取りだし、包丁を握り、調理を始めた。

7時になりみんなが揃ったところで朝食になる。

「今日、買い出し行かないといけないからさ、誰か付き合ってくれない？」

「いいよ。私も買わないといけないものもあるし」

「俺も構わんぞ」

「「えっ!?!」」

見事なシンクロ同調

「む?なんだ?そんなに意外か?」

「当たり前だ」

「うんうん」

「何、簡単なことさ。暇だからな」

「「なるほど」」

「今日の蓮と雅菜はぴったしだな」

黒木邸の朝食は静かだ。

基本的に朝に弱い雅菜のせいだが、今朝の雅菜は調子が良いようで朝は五月蠅かった。

「でねー。増田が五月蠅くてさー」

「増田って、現国の増田か？あの人そんなに注意するのか？」

「あの方はすごいぞ。授業になると豹変する。臆病でもの静かじゃないと違ってたな」

「龍兄現国とってたっけ？」

「とるのが普通じゃないの？」

「3年生は語学で現国、英語、仏蘭西語、独逸語、ラテン語中国語のうち2つ選ぶようになってる」

「俺は独逸語と現国、仏蘭西語、英語だが？」

「バケモンか！」

学び舎の話になるとエランドであるスローダーたちは静かになる。何を話しているのかわからないのだ。

「そっぴゃ、スローダーたちは俺たちの学園知らないんだよな」

「はい。興味はありますが、行く必要は無いでしょう。なら、この拠点で構えておくのが必然です」

「そうかもしれないけどさ、いつもそう構えていたら疲れるだけだぜ？なあ、龍兄」

「ん？なんだ？」

「スローダーたちを黒帝学園に行かせることは出来ないかな？見学としてさ」

「そう、だな。手を打っておこう」

「サンキュ。てことだ。今度見にいよ」

「しかし・・・」

「いいではないですか」

「スピヤー」

「是非、お願いします」

「マジシャン・・・」

「どうすんだ？スローダー？」

「み、皆さんが行くというなら・・・お願いします」

「よし。ってことで頼む。龍兄」

「心得た。最善を尽くそう」

「決まったところで飯だな」

龍と雅菜と別れて自分の教室へ入る。

美里がメモ帳に何かを書き込んでいた。

「何書いてんだ？お前は」

「今日は早いね。別に。私が集めた情報を書いてるだけ」

「ほ。で何の情報だ？」

「ひ・み・つ」

美里は口の前に人指し指を持って来てあざ笑うかのような態度だった。

「おはよー。みーちゃん、蓮君」

「おはよきよっち」

「おっす」

午前の授業が終わり、昼食になる。今日も蓮は美里と恭子と食事していた。

「次なんだっけ？」

トンカツを口に咥えた美里が聞く。

「ん？日本史」

「げっ。かなるかー」

「かなる？なんだそれは？」

「加藤正木先生のことだよ。蓮君。女子の間でそう言われてるの」

「何故にかなる？」

「『かなり無理な説明する人』の略」

「まあ、あの人は無理な説明をするが、その略もかなり無理があるとおもっがな」

「女子ってそんなもんだって！」

「お前だけだ」

そんな当り前の話をしてしていると隣りから話しかけられた。2人組のようだった。

「合席いいかな？」

「どうぞ」

美里はその2人組を見向きもせずには答えた。
恭子も蓮を見向きもしなかった。

「失礼する」

2人組はテーブルを挟むように座った。

そんな中蓮が振り向きもせず2人組に話かけた。

「何故ゆえに食堂に来るのですか、龍先輩？」

「「えっ!？」」

驚いたのは恭子と美里だ。

何せ顔を見てもないのにいい当てたのだ。

「よくわかったな。バレないようにしたつもりだったのだから」

「バツレバレだ。何年あんだと吊るんできてるんだ。後、雅菜。エビフライ持っていくなよ」

「はうっ!!バレた!!」

「あんだってさ、時たますごいよね」

「普通だ」

そう言っただけ蓮は雅菜から取り返したエビフライを口に入れた。

「で、何故来たのです？」

「いや、何。暇と弁当をな」

「弁当は嘘ですよ？作ってませんから」

「違いますよ蓮先輩。私たちが食堂に来た理由はお腹が減ったからです」

「なるほど」

そういうことで5人は昼食を食べ始めた。

5限目が終わる。

美里はくたばっていた。

「大丈夫？みーちゃん」

「だいひょうばない。疲れるあいつ」

「ちゃんと喋れ。後、あの人はあれが普通。情報載ってるだろ？」

「そうだけどさー。疲れるものは疲れるの」

「でも、みーちゃんらしいよね。今日ね。私先帰るね。用事あるから」

「ん、オッケー」

「おう」

恭子はそのまま自分の机に座り予習を始めた。

「ねえ」

「ん？」

「今日残ってて。話あるから」

「ああ」

その会話が終わったところに教師が入ってきた。

「じゃあね。みーちゃん、蓮君」

「うん。また明日ね」

「ああ」

恭子は笑顔で手を振って返って行った。

「また、後でね」

「ああ」

そして美里も教室を出て行った。

そんなことしなくてもいいのにな、と呟いていた。

「さて、どうすっかな」

蓮は中庭にいた。部活へ行くのか忙しく走っていく生徒がいた。中庭の樹々も夕日によってあか橙いろになっている。

「そろそろ行くかな」

教室へ向かう。そうして教室の前に立つ。そこには机に座り窓の外

を観る彼女がいた。

「……………」

そつとドアを開ける。音もなかった。足音もなかった。

「案外早かったね」

「今回は気付くの早いな」

「なんとなく言っただけだけどね」

「そうか」

教室からはグラウンドが見える。生徒が走っている。3階なのに小さく見えた。

「なんて言っただけ？え〜と、う〜ん」

「俯瞰^{ふいかん}か？」

「そう！それ！！」

美里は蓮に向かって指差した。

「本当に知っていたかは置いてやる。で、何のようだ？」

「ヒドイなあ〜。ま、いいけど。……………うん。用はね……………。神鏡戦争うまくいってる？」

「なつ何故！？・・・まさか！！」

「そう。私は代行者だよ。代行者の中でも異端の情報員。私の仕事は名前の通り情報を集めること」

「情報員・・・」

だが予測はしていた。それには理由があった。

「意外に驚かないね」

「確信したときはビビったがな」

「アレ、ビビってたんだ。でもなんで？」

「駆の件でな。好きだったやつがあんな状態なら必ずうるたえるはずだからな。だが、お前は平然としていた。そこでな怪しいと思っただけだ」

「フフ、あははは！なーんだ。そんなことで解るんだ！やっぱり凄いな運は」

「ふん。みんなして俺を騙していた訳か」

「きょうつちは違うよ。あの子は一般人」

「わかった。・・・お前が情報員ならありがたい。教えて欲しいことがある」

「何？」

「一つ。残りのゾディアックの数。二つ代行者の数。三つ駆の状態」

「そんなことでいいんだ。記憶のことは？」

「十二分に教えてもらった」

「そっか。流石だね。もうそんなところまでいったんだ。やっぱり敵わないな。・・・うん。特別に教えてあげる。残りのゾディアックの数は蓮を含めた6人。長刀使いと弓使いと鍊金使いと魔法使いと槍使いと剣使いだね。駆の情報だけど大丈夫。問題ないよ」

「そっか。よかった」

「問題なのはあんた」

苦笑いから真剣な顔付きになる。美里がこのような顔になることは滅多になかった。

いつもは笑顔の人物が真剣な顔付きになるとここまで変わるのかと実感する蓮。

「俺になんの問題がある？」

「兄さんが言ってたの。あいつは危険だって」

「兄さん・・・いたのか・・・」

「蓮も見ただじゃん。フードかぶって顔に刺青入ってる」

「ああ、あの代行者か」

「うん」

フードをかぶった刺青の入った代行者。

それは駆が死にかけたときにきた赤い刺青の男である。

あの時その人物は恐怖を覚えたという。更にあの時、蓮の後ろに修羅が見えたらしい。

「あれほどの魔力は見たことないってさ」

「・・・そうか」

「うん。だから気をつけね。あ、そうだ」

美里はゆっくり立ち上がると蓮に迫って来た。ゆっくりと虚ろな瞳で。

「み、美里?!」

おもわず倒れる蓮。それに覆い被さるように迫る美里。なんだかいけない光景に戸惑う蓮。クスリ、小さく微笑む美里。吐息がかかる距離にまで追い詰められていた。

本当に寒いなら白い息が見えたであろう。美里の頬は少し桃色あかくなっていた。

「ねえ、この戦争の秘密、教えてあげようか?」

「ひ、秘密?」

「そ、この戦争を終わらせるひ・み・つ」

「！？お前知ってるのか！」

一気に退く蓮。それは縮地と言われる瞬間移動術の一つ。

「そんなこと、出来るようになったんだ。凄いね」

「凄くないから！頼むもとに戻れ！」

「つままないなあゝ。でもまあいつか」

慌てる蓮を見て少し微笑む美里。

スツと立ち上がるとスカートに付いた埃を払う。

手を後ろで組み、黒板の前に立つ。お

もむろにチヨークを手に取りと何か年表らしきものを書きだした。
最初に空欄があり、その隣りに1386と書いてありその下に開始
と書いてある。

一番最後には1986年現在。見ただけでは一般人には何の年表か
分からないだろう。

現に蓮にも分からないのだ。一通り見渡すとチヨークを置く美里。
前を向き身を翻した。

「これ、何か分かる？」

もちろん蓮は首を横に振った。美里は意外そうな顔をしたが、元の
表情に戻った。

「へゝ意外。あんなならすぐに分かると思ったのに。でもそっか。
これ教会の人しか知らないだっけ」

蓮はどちらかと判断するなら教会に近い存在だが、教会には所属していない。協力はしているが実際の『本部』には入ったことはない。大抵龍が仕事を持つてくる。

「これね。神鏡戦争の年表。今までに10回起こってる。平均して60年。こんな戦争が起こってる。悲しいよね」

「悲しいことは分かるがなんの秘密がある？」

眉間に皺がよって行く。蓮は焦らされるのが嫌いなのだ。

「ほんつとにせっかちなね。……これはね。神鏡戦争の歴史。そして秘密というのがコレ」

そうして美里は最初の空欄を指指した。

「全く意味が分かん」

「人の話は最後まで聞く！ここにはね、この戦争を初めた人の名前が入るの」

「待て。神鏡戦争は神・オーディンの怒りから来たんじゃ」

「それは嘘。あの見聞は嘘しか書いてない。神鏡戦争を初めてたのは一人の大魔法使いなの。その魔法使いが……。世界最強にして最古の魔法使い ナナルカ・カオス・ユーリア。そして、魔剣士一族・七瀬家の先祖」

「俺の先代……。だが、それが何の秘密に……。まさか」

「そう、そのまさか。この戦争は七瀬のものによって始まるの。まあ、必要なのは七瀬の血だけだね」

「血？」

「そ、七瀬は神鏡に血を捧げる。そして七瀬は戦争に参加しない。それがルールで神鏡戦争の秘密。でも今回変わった。七瀬の者が参加した。つまりこの戦争を終わらせることが出来るのは蓮、貴方」

突然の言葉に困惑する蓮。

そんな秘密はどこにも書いてない。

おそらく龍も雅菜も知らない神鏡戦争の秘密。

それがいつもいるとてもみじかな人物から言われた。整理がつかない。

だから簡単な言葉しか思い浮かばなかった。

「そんな。終わらせると言ってもどうすれば」

「簡単だよ。蓮が記憶を思い出せばいい。……私が言っている情報はここまで。後は記憶を思い出せばすぐに分かるよ」

そのようなことを蓮に伝えた後、美里は手を後ろに回した状態で教室を出て行った。

困惑した蓮を置いて。

赤く灯った教室は冷えていた。

窓を開けてグラウンドを見つめている。

グラウンドを活発に動いているのは野球部だ。

陸上部、サッカー部、ソフトボール部の面々は早々に切り上げたようだった。

冷たい空気が身体を冷やす。そんな中声をかけられた。

「何だ。まだ残っていたのか」

「沼地先輩」

「いつもの呼び方でいい。ここには俺たち以外誰もいないんだ」

「そうか。龍兄も残っていたのか」

「生徒会長だからな。そういうお前はなんで残っている？」

「美里と話してた」

「そうか。お、そうだ。お前に情報をやる」

「情報？」

視線だけを向ける。

「そうだ。戦争戦争の情報」

「残りのゾディアックの人数か？」

「ああ。残りのゾディアックは6人だ。もうすぐで終わるだろうな」

「終り……か」

「なんだ空しいな。もっと喜ぶかと思ったんだが、そうか。スロ―ダーでか」

むっ、と唸る蓮。どうやら凶星らしい。

そんなこと思春期特有の行動をとったのだが、また夕焼けを空ろに見つめた。

「違うのか？」

「分からないんだ。確かにスローダーは近くにいてほしい人だよ。けどそこに好きっていう感情がない。友達以上恋人未満ってやつ？ 雅菜にいたってはただあいつの夢を叶えるっていう逃げるだけの手段でしかなかったと思う。……俺、冷めた人間なのかな？」

「かもしれないな。けどなそれも勘違いだと思うけどな」

「何故？」

「じゃあスローダーから考えてみるぞ？ 結論から言ってやる。お前がスローダーに対して持っているのは『尊敬』だ。自分の道を標してくれた者。簡単に言うとな恩師だ。だから『愛情』はない。雅菜に至っては『救い』もしくは『同情』だ。だが、それはお前の優しさだ。だから気に病むことじゃない。人からは駄目なやつだと思われるかもしれないがな、お前を知っているやつは誰もそうは思っていない。確かに冷めたやつかもしれない。だが勘違いはするな。それはお前の優しさなんだから」

「そう、か。ありがとう。龍兄」

顔は見ない。2人は揃って夕日を見つめる。

蓮は安心を龍は信頼を胸に抱え歩きだそうと決心した。

家に帰ると雅菜がテレビをつけて笑っていた。

その笑顔はまさしく少女のものだった。美しく儚い薔薇というのか一瞬の煌きだった。

「あ！龍兄、蓮兄！おかえりー！」

「すまん。遅れた」

「今から準備すつから少し待っててくれ」

「何？夕食の準備？なら私も手伝うよ。どうせ暇だし」

「ん？そうか。なら頼む」

蓮と雅菜は自分用のエプロンを着ける。

そのままキッチンに向かう。そ

れに対し、龍はテレビのチャンネルを変えていた。スピヤーが隣に座る

。皆に聞こえないように会話をしだした。

「そろそろ来ますかね？残りのゾディアックは」

「来るだろうな。速くて今日当たりだ。恐らく、あの長刀使いは来る。もしかしたら他のゾディアックと手を組んでるかもしれない」

「何故そう思うのですか？」

「あの長刀使いは頭が切れる。あのタイプは自分が有利になるように仕向ける。そんな奴が3：1で向かってくと思うか？来るとしたら3：3だろう。俺たちが単体で動いていれば1：1で確実に取

つてくる。だが、俺たちは単体ではあまり動かん。それも奴は承知しているだろう。なら手を組んで1：1に仕向けた方が殺りやすいだが、そうなると手を組む奴だが、それも決まってくる。残りのゾディアックの数は6人。その内俺たちを除けば簡単だ。俺たちを抜かした3人。長刀使い、弓士、錬金術師だろう」

「なるほど、ということは戦ってくる相手も・・・」

「無論決まってくるだろうな。長刀使いは確実に蓮だろう。あの遊撃手は俺を狙ってくる。残りの錬金術師は雅菜しかないのだから決まってくる」

「私たちの相手は弓士ですか・・・」

「どうした？不安か？あの戦争で相打ちになったのがまだ引っぱっているのか？」

対立戦争で有名な戦いがいくつかある。

その中でも2番目に有名なのが、カルデア軍の槍士・ディラムンスとエグナ軍の遊撃手・ムスクの対決である。

2人の対決は1週間にも及ぶ激しい戦いなのだ。

丘という丘を周り、町という町を壊し、森という森を焼き払ってき

た。

2人は互いに自分の敵しか見ていない。

そんな敵対意識がもたらした無差別破壊。
2人の首領の為に命を削ってきた。しかし、2人は『英雄』にはなれなかった。『英雄』になるためのものを彼らは持つてはいなかった。

それが『関係ない物を傷つけない心』。

そんなものを持っていなかった2人には別の名前が付けられた。そ

れが『悪魔』。英雄が倒し、敵対する邪神。そんなものに2人の戦士はなっていた。

「いえ。あの戦争で私と彼は相打ちでした。ですから今度は負けるわけにはいきません。主、私に力を貸してください」

「……当たり前だ。お前のパートナーである俺が拒否するわけがない」

「ありがとう」

スピヤーは初めて龍に対して笑顔を見せた。おそらく最後の笑顔。

「ほれ。出来たぞ。帰って早々物騒な話するなよな。気分落ちるって」

パートナー2人と雅菜を連れてお盆に夕食を乗せた蓮が話す。

もちろん雅菜もスローダー、マジシャンのエランド組も食器を持っている。蓮に至ってはお盆×2を手に持ち、両腕に食器を乗せる神業ウエイターのようなことをしていた。

「む。聞こえていたのか。お盆を貸せ。手伝う」

「なら私も」

テレビの電源を落とし、お盆を取ろうとする龍とスピヤー。それを口で制する蓮。

「待て。持つなら腕にある食器にしてくれ。お盆でバランスとってんだよ」

「そうか」

「失礼しました」

そうして晚餐。

いつもの定位置に座り食べ始めた。その日は珍しく誰も喋ることはなかった。

「ねえ、さっきの話だけど」

「ああ。あいつらが来るという話か？恐らく確実だ」

「何故だ？」

「この前お前がこの町で昏睡事件が起きていると言っただろう？あれはどうやら神鏡戦争が終り始める合図らしい。神鏡が魔力を集め始めている。だが未だに神鏡がどこにあるのかも分からん。しかもだ。集まる時間が決まっているらしく、12〜3時の間の3時間だけらしい。それだけの時間で集める量は普通の魔導師1人にも満たない数だ。そしてその魔力を集めている源はこの近くらしい。まだ分かってはならないが。そして奴らもそれは分かっているはずだ。あの長刀使いと弓士にいたっては残りの3人がここにいることも分かっているだろうからな。好戦的ならすぐに来るはずだ。だから速くて今日当たりだろうと予測しただけだ」

「なるほどな。だがその予想は当たりだと思っぞ？」

「どうして蓮兄？」

「駆事件の後に結界をこの町に張っておいたんだ。何かあればすぐに分かるからな。そうしたらだ。6つの魔力がこの町にあった。俺たち3人と奴ら3人の魔力がな。今確実なのはこっちに向かっている。後1時間いや、それ以内にここにくるさ」

「そういうことは早く言え」

「問題ないだろ。俺たちなんだから」

「根拠が見当たらんが、そうだな。準備がないのはいつものことだ」

微笑む龍。

もしかしたら最後かもしれないこの幸せな一時、そんな時間を大切にはしたかったが、そういうわけにもいかなかったようだ。

もうすぐで今戦争中最凶の林昴がもうじき来るのだ。

あの冷徹なまでの眼差しは何度思い返しても気味が悪い。だが、あの時の3人とは違う。彼等も成長した。

この戦争で学んだことは多い。蓮は一步成長し、龍も大きくなった。雅菜も使命を果たそうとしている。

そんな彼らを誰が止めることが出来るだろうか。

否、誰にも止めることは不可能だろう。どんな過酷が待っているとも。

魔力を感じる。気配は3つ。龍の予想したとおり3人がかりで来たようだった。

立ち上がる6人。

敵が近付いているのにゆうちよに話をしている場合ではない。

これが3組が協力できる最後の闘いになるだろう。

この闘いが終われば敵になる。分かっているからこそ誰も話さない。互いの勝利を祈りながら自分の闘いをするだけとなる。

居間を出る。

初めは龍・スパーク組、次に雅菜・マジシャン組そして最後に蓮・スローダー組となる。蓮は居間を出るとき背中にいるスローダーに話した。

「すまない。……学校見せれなかったな」

そんな悲しい言葉をスローダーは打ち消した。

「いえ。大丈夫です。この闘いに勝ち、その後に見に行けばいいだけです。それともなんですか。貴方はこの闘い負けるとでも？」

「え？あ、いや。勝つさ。俺とお前で勝ち残るさ」

「そうです。ですから目の前の敵を倒しましょう」

微笑む笑顔。

今までこの笑顔にどれだけ支えられて来ただろう。多分数えれないくらい助けてもらった。

彼女の言葉はいつも頼りがいがあった、とてつもないくらいの味方だった。

「あ」

出ようとする蓮が何かに気付いたようで自分の部屋へと走っていた。

すぐに戻ってきた。

手には剣道場に忘れてきた小さな箱を持って来た。

「一体なんなのですか？それは」

「これは俺の宝物」

箱を開ける蓮。

中には大切に保管されていた直径が掌に収まる長方形の箱だった。なんなのか分からなかったスローダーだったが、蓮はそれを取り箱の一部を抜いた。どうやら鞘のようだった。その箱の正体はナイフだった。

「こいつは俺がここに養子来る時に唯一手に持ってたものなんだ。一体こいつをいつらか持っていたかはわからない。だが、俺の過去の品物なんだ」

「そう、ですか」

「行くぞ」

「はい」

庭先で3組の戦士が揃う。残りの戦士を待つために。

月光が輝く中、堀の上に3人の戦士が並んだ。右端に女が膝に手を置き、中腰で立っていた。左端の男は蓮たちに垂直になって腕を組んで立っていた。一番最初に出会って龍と闘い、そして逃げた藤波だった。そして中央に堂々と佇む冷徹な仮面の鬼神・林昴がいた。

「へーこいつらが残りのゾディアック？弱そうなやつばかり。楽勝だね」

「舐めないほうがいいぞ。あの黒髪の男、かなりのやり手だ」

「お前が弱いだけではないのか？」

「失礼だな。リン。あの時と比べて俺も強くなったこと知ってる？」

「それでも弱い」

「うわ。きつつー。でもま、さっさと殺ろつか。行くよマジシャンの主！」

雅菜と錬金術師アルケミストは同時に地を跳ねた。

「あんにやろー。殺る気満々かよ。なら俺らも行くか！スピアーの主！」

龍と藤波は雅菜たちと逆方向へ跳んだ。

残ったのは蓮と林だけだ。2人は数秒睨み合った後、昂が口を開いた。

「あの馬鹿2人はむらっけが多いみたいだな。しかし暇だな。場所を変えるぞ。ここでは闘いにくい」

昂は塀を飛び下りる。蓮もそれに続いた。

2人がたどり着いたのは廃墟だった。

その廃墟は元はマンションだったしいが、ちかじか取り壊しが決まったのである。

「なるほどな。ここなら邪魔も来ないな」

「それだけではない」

「では他に何かあると？」

「貴様の死体の処理が楽だ」

昴の態度も目付きも声も雰囲気までもが冷酷だった。

人を人と思っていない殺人鬼に蓮は見えた。だからこそいつは、林昴は止めなければいけないのだ。破壊者や狂戦士とはまた違う悪鬼の戦士を。^{つき}^あ

「そうかよ。そんな減らず口叩けるようなら楽勝なんだろうな?!」

「フン。五月蠅い奴だな。さっさと息の根を止めるか」

そう言つて昴は長刀を抜いた。

同じく蓮も剣を抜いた。

もちろん魂の共鳴は終わっている。

緊迫な空気が頬から感じる。

2人が放出する魔力が反しあつて大気を振わせる。

冬も近いと言うのに廃墟の周りが熱く感じる。いや、違う。自分自身の身体が熱くなっているのだ。

冷や汗が流れる。

沈黙が続く。

両者は動かない。

いや、動くことが出来ないのだ。本物は相手の力量を図ることが出来る。2人は相手の力量が判ることが出来るからこそ動かない。動いてその後失態を犯せば自分の命が無いのだ。

動いたのは2人同時だった。

タイミングも息もピッタリだ。

2人の刀と剣がぶつかりあい火花を咲かせる。

切り合いの衝突で互いの衣服が千切れる。

だが、浅く血はまだ無い。着地と同時に跳ねる。

火花という閃光は周囲の目を引き寄せる。

動物が虫が樹々が2人を離れたところで見守る。

そして、2人が引き寄せたのは有るものだけでない。

幽霊が精霊が存在を露にする。

ぶつかりあい会うまで4、5メートルあった間合いは跳ねる度に縮んでいった。ついに間合いは刀一本分になり、刃をぶつけあった。

2人の魔力と剣気で2人を中心にし、地割れが起こる。

ギリギリと武器が鳴る。弾けた。両者は砂煙を上げて離れた。

「うむ。やはり貴様は面白い。俺と同じだな。刃を振うことでしか力を表すことが出来ない。愚かな行為を繰り返す人形。それが人間^{おれたち}だ」

「なんだお前が愚かってこと識ってるんだな。だが、間違ってることがある」

「何が間違っているの？」

「俺は人形ではないし、刀を力の象徴としていない。お前のような殺人試行と一緒にするな」

「どうか。少なくとも本物の殺人鬼には言われたくはないな」

「何？どういうことだ！？」

「お前には理解できんよ」

昴は一気に距離を詰める。

その時間はコンマ1秒。

蓮も使うことが出来る瞬動術・宿地だが昴の瞬動術は一段階上の瞬歩と言われる芸当だった。

瞬歩は瞬地より早く動くことが出来る。しかも、移動した後の気配も消すことも消すことが出来るのだ。

だが欠点もあるそれは必ず足の裏が地面に着いていないと出来ないということだ。それに比べて瞬地は魔力を身体の何処かに溜めて魔力溜りを爆発させることで異常は早さを得るのだ。

昴は左足を軸にし回転切りをかました。

刃の軌道は袈裟切り。とっさの判断で蓮は刃を剣で止めた。

これがスローダーの第六感の直感である。

「ほほう。さすが剣士だな」

そう発言したあと昴は長刀を振り回した。

だが、出鱈目ではない。

左袈裟から右払い左下から右上に向かつての切り上げそして縦切り。途中で突きを加えながら逆の動作を繰り返す機械的な動きだった。

しかし、蓮はそれを全てを避けて見せた。

やられてばかりの蓮ではない。

剣道のとくと同じような手段をとってきた。

相手を見極め次の次、相手の裏の裏を詠み、一手を取る冷静判断一撃型。それが蓮のスタイルだ。

昴の大きく踏み込んだ袈裟切りを紙一重で交わし、逆袈裟を切り付

けた。

だが、蓮の下方から銀光が向かってきた。そして受け止められた。

「なにっ！！」

信じられない光景だった。

右手の長刀を避けた。

しかしその反対の左手にも長刀が握られおり、その刃が蓮の剣を止めたのだ。

「2つの長刀……。2刀流だと？」

そう昂の長刀は2本あったのだ。

右手に持つている長刀は柄が赤く、刃が黒い鍔のない長刀だった。

そして左手の長刀は柄が黒く、刃が白の鍔のある長刀だった。

「それがお前の魔具か」

「如何にも。右手の72の技物・黒刃繚朱雀^{くろはらうしゅく}。そして23の大技銘刀・白刃夢玄武^{はくはむげんむ}だが？」

「黒刃繚朱雀と白刃夢玄武……。たしかその長刀は夫婦剣だったはず」

「確かにこの刀は対立戦争でエグナ軍の四天王・嵯峨宮幸司郎^{さがみやこうじろう}の銘刀だ。その刃は鬼神の如く。その軽さ故に日本刀を超える最強の刀。だがそれも使い手しだいで変わる代物さ。いくぞ」

刀をしまわず両手で向かってきた。

向かってくる姿は鬼よりも翼を大きく広げる鳥に近い。

黒刃の閃光が横から向かってくる。受け流す蓮だが、白い閃光も違う箇所からその首を狙ってくる。

いくら蓮でもモノクロの刃の連撃を防げる訳ではない。

相手はこの戦争中最強を誇る林昴だ。一本でどうともなるわけでもない。距離をおく蓮。さその距離は元の位置になっていた。

「何故に距離をおいた？」

「お前に相応しい剣を用意してやるためさ。」

いくぞ。

『来い』」

氷帝の剣が光となって消えていく。

その後蓮は両手を広げる。

金色の光が手に集まって剣の形を成していく。黄金の光は環刀に変わっていった。

双剣。

それが蓮いやスローダーに残された武器だった。銀白の刃に黄色の外装。紛れもなくそれはスローダーの扱う武器の中でも最速を誇る雷帝の剣。

「そついえばそんなものもあつたな。2刀流なら双剣か。……つまりらん考えだが貴様ならそれも悪くはあるまい」

「いちいち五月蠅いな。やっぱさつさと倒すわ」

今度は蓮から仕掛けた。出鱈目な剣さばき。蓮は片手で扱う剣は得意だが双剣は使ったことがない。ただ振うだけ。絶対当たらないだろう。蓮ならば。

（わかる。スローダーの感覚が）

シンクロ率が高まるに連れて蓮の動きも変わってゆく。
出鱈目だった軌道は形を成して敵に向かって猛威を振う。

（動きが変わった？）

「くっ！」

力と力がぶつかりあい両者を引き離す。

砂煙を上げて後退する両者。

だが休む間もなく、踏み込んだ。

身体が閃光となりぶつかりあう。

「ハアアアア！！！！」

「タアアアア！！！！」

体重に乗せた縦切り。

全く同じ二つの円弧は2人の手前でぶつかりあった。

「くっ！」

「っ！」

距離を置く2人。

息遣いも荒くなっている。

「ハア、ハア、っ、きりがなし」

「ハア、ハア、まったくだ」

「シンク口率100%。次で決める」

「ハハ。こつちもだ。俺たち似た者同士ってのも頷ける。だが、認めない」

昴と蓮。

陰と陽。

肯定と否定。

共通していてしていない。

それが2人だった。

そして今その決着をつけようと構えた。

昴は黒刃繚朱雀を純手に、白刃夢玄武を逆手に持ち直し大勢を低くした。向きは正面。

それに対し蓮はどちらとも逆手。直立していた。向きは真横。ピンと張った糸のようにすぐに切れてしまいそうな張り詰めた空気。間合いは10メートル。

「いくぞ」

「こい！」

駆けた。

一気に縮まる間合い。そして2人の刃が牙を剥く。

「邪を断ち切る混沌の弑刀」
カオス プレイク

「麒麟が生み出す光の剣！！！！」
イグニション

八方向から一斉に刃が向かってくる。

それが昴の魔具の能力。速さの極み。

いや、多重屈折現象。

身体を捻らせxの軌道を持って抜群の破壊力と速さの技を5度繰り出す。

それが蓮の3つ目の魔具の能力。瞬間破壊剣。2つの大技は廃墟を屑へと変えた。

（同調完了。共鳴終了。開放開始）

2人の戦士が蓮と昴の身体から剥れてゆく。金色の髪と藍色の髪の人物となって現われる。

「待たせたな。さて、ここから本領発揮といこうか」

「望むところだ。レン一人で大丈夫ですか？」

「無論だ」

「なら刀を」

「いらない」

「馬鹿な！！！素手で闘うというのですか！！！無謀です！！！」

そう彼は今まで剣で闘ってきた。

しかし、今の彼はそれを拒んだ。

「無謀じゃないよ。俺は魔導師なんだ。剣で戦うことが間違いだっただ。魔導師は魔法で戦うしかないんだよ。でなきゃ紅蓮鬼神の意味がない」

「分かりました。でも、死なないで下さいね」

「ああ。また後でな」

スローダーは深く頷いた。

これが2人の初めての約束。無言で交わした約束。

そしてスローダーと長刀使いは姿を消した。激しい闘いを行なうために。

その光景を見ていた昴が口を開いた。

「貴様なめているのか？」

「いや、そんなことないさ。だが、俺は剣を持つわけにはいかない。俺は魔剣士だが魔導師でもある。だからこそ創らないといけない。解るか悪鬼。俺たちは創ってそれを扱う。それが魔剣士の道理なんだ」

空中に何かを描いていく。

ルーンとは違う蓮独自の魔術。それが空陣ルーン魔術。

魔術を基とし、極め神秘とさせる。

それが魔法。だが、蓮は魔法使いではない。

誰も使えないからと言ってそれが魔法と呼ばれるわけではない。

しかし、蓮の魔術は神秘に近い魔法の原石だろう。

空中に描いたものは魔方阵。

サラムンドラを象徴する豪炎のルーン。

「緩いというなら受けてみたらどうだ？火竜の吐息を」

魔方阵は形を崩し、炎の竜と化した。

その火竜の吐息。生きている物を塵とする地獄の豪火。そんなものが昂に襲いかかる。

その光景をもつとせず、黒刃繚朱雀を振う。

横一閃。

黒い刃が火竜を切り裂いた。火の粉となって空中に舞い散った。

「ルーン……いや、違うのか？よくわからん魔術だな。独自魔術か」

「ああ。ルーンを元とし、覆しの魔術を応用してルーンの弱点である書かなければ発動出来ないを克服した。俺のルーンは空中に仮想ルーンを描き、魔方陣と組合せ、魔術を限界まで引き出す空陣ルーン。それが俺の奥の手だ」

「空陣ルーンか。似たような魔術を使う聖職の魔導師がいたな。あつちのほうがかもしいないな。いや、やつは錬金術師だったか」

昂はいつこうに動かない。その瞳は蓮をずっと見ていた。

（ルーンを使う聖職の錬金術師？）

その人物に心当たりがあった。

魔導師ならば師の1人はいるもの。

蓮とて例外でない。

彼にもいた隣町に一つだけある教会。その神父が蓮の師だった。その神父の扱う魔術がルーンと錬金術だったが、蓮にとってはどうでもいいらしく、すぐに指を空中においた。

「いいや」

指を泳がせた。

描いたのは魔力増幅の魔方陣。

書いた文字は雷のルーン。

一本の電気が昂に向かって落ちてくる。黒い閃光が雷を裂いた。

「魔術を切る。・・・なるほど、そういうことか。虚無の魔法か。だが、虚無の魔法はたしか簡易魔術ぐらいにしか効かないはずだが・・・ってことはやつの刀、魔術倍加の能力でもあんのか？試してみるか」

そうして両手を空中に差し出す。

全く同じ魔方陣を書く。

その後、全く別の魔方陣を書く。

書いたのは炎と水。対の2つのルーンは相殺せずに威力を増して渦となり昂を包みこむ。しかし、黒い閃光が魔術を刻む。

「やれやれ。複重ルーンとは。心底驚かされる。だが、貴様は分かっているのだろう？私には魔法と呼ばれる神秘でも切り刻む。」

「やっぱりか。なら仕方ねえ」

蓮は掌で自分の顔を隠す。指の隙間から見えるは真紅の瞳。禁忌の魔眼・呪力眼。

（なんだあの眼は？）

（くそつ。やっぱり気持ち悪い。なれないことはするもんじゃねえな）

ドロドロの紅い空間。

それが蓮が見ている風景。

その中でサーモグラフィのような昴と血管のような魔力の流れ。風景がドロドロなのは魔力を直接見ているせいだ。

オドより膨大なマナ。

それを視力化すると脳が認識出来ずにゲル状になる。つまりマナを認識しようとすれば脳の限界を超えて脳が破壊される。蓮にとつてはこれが限界。この境界線を超えれば蓮は蓮でなくなるのだ。

「何なのかは分かんが、何をしても同じだ」

瞬歩によつて距離を詰める昴。

刀一本分の距離になつて重い一撃。そんな必殺の一撃を容易く避けた蓮。偶然ではない。呪力眼によつて先を詠んだ。魔力の流れを感じ、その情報から先詠みする。

それが蓮の切り札ジョーカー

「！」

驚きの表情を見せた。

なにがあつても驚くことがない昴が驚いた。

一瞬の有表情もすぐに無表情へと戻り2撃3撃と繰り出す。それをもとめせず避ける蓮。鬼神の刃を神の瞳が見切る。

昴に勝目などない。

そう彼は悟つた。

「どういった仕組みか分からんがこのままいけば待っているのは敗北もしくは死か。ふむ。だが、死ぬわけにはいかな」

刃を上向きに柄を顔の横にもつてきて突きの構えに入った。

蓮は見た周りのマナが刃に吸われて行くのを。

「本当に避けることが出来るなら避けてみよ」

スー、と動く。突きから上段の構えに入った。

「秘剣、獅子刀・華月鏡夜」

重い縦切り、すぐさまくる左横払い。

全て避ける。動きがわかる。2 撃目が終わった瞬間、風景が元に戻った。

「えっ？」

右からの横払い。

見事に胴に入った。血しぶきが上がる。力が抜け地面に倒れる。鮮血が地面を朱に汚す。ゆっくりと地を流れる自分の血。

他人事のように朱い水を見る。

自分の体が冷たくなっていくのがわかる。

目の前が白い霞で覆われてゆく。

（やば。意識が朦朧してきやがった）

「解せぬな。何故に第壹之太刀、第貳之太刀は避けて一番重い第参之太刀は避けぬ？ いや、違うか。避けることが出来なくなる何かがあった、のほうが強いかな」

勘ずかれた。

だが今更ばれたところで意味はない。

黒木蓮はこのまま死ぬだろう。悔いが残ってもそれが運命だ。そんな中白い靄からなにが見えた。

それは楽しい風景。七瀬の一族。

そんな幸せな風景が地獄に変わる。紅い赤い地獄絵図。血の海に立っているのは1人の少年。体は赤に塗ぬれている。

その周りに倒れているのは人。バラバラな身体やそのまま残っている死体。

そこは

[illegible]

死
し
か
な
い。
目
が
虚
ろ
だ。

[illegible]

壊れてゆく少年の心。

乱れてゆく精神。

取り戻すことが出来ない日常。

腐れきった自分自身。

彼はその日から人間でなくなった。

なんの躊躇も無く、人を人とも思わず、殺人を快楽行為と考えている『殺人鬼』に彼はなった。

薄れてゆく記憶の中で蓮が見たのは、自分にソツクリの赤い涙を流した鬼の姿だった。

•

髪に隠れて目元が暗い。

昂がゆつくりと歩いてくる。刃は抜いたままだ。

「死んだか。あっけないな。」

刀を鞘に収める。蓮に背を向けて歩き始める。
蓮の死を惜しむように雨が降り出す。
血によって汚れた地面を洗い流す。

「待てよ」

「！」

「！」

冷たい視線を浴びせたがら振り向く。

そこには殺したはずの男が立っていた。

血は流れていない。

雨によって彼に付いた血も流れ落ち、傷も塞がっていた。

男がどんな顔をしているのかは分からない。前髪に隠れて目元は見ることが出来ない。だが、何かが違っていた。

さっきのあの男とこの男何かが違う。

左手で握り拳を作る。残った右手をみる。その手は震えていた。

（怯えている？私が？このような男に何を怯えるというのだ！死に際すれすれの男になんの恐怖があるというのだ！！）

ゆつくりと男の口が開いた。

確かに俺は死にそうになった。
だが生きている。

雨の冷たさが、自分自身の暖かさが感じとれる。
アイツが震えている。愉快だ。

さっきまで俺を殺そうとした馬鹿が俺を見て震えている。

楽しい。

あいつが泣きそうだ。

もっと見たい。弱いあいつを。

恐れている。俺を。

ザマアみる。

自信過剰で高飛車なあいつを……。

殺したい!!!!!!!!

ゆっくりと口を開いた。

「思い出した。そうだ。俺は魔導師じゃない。俺は
狂っ
た殺人鬼さ」

やつは言った。

自分は殺人鬼だと。冗談で私は奴に殺人鬼と言った。だが、私は奴
の能力が殺人鬼級だと言う意味で言ったのに。

この世知払い世の中で殺人鬼など沢山いる。しかし、それも『表』の殺人鬼だ。そんなもの可愛いものだ。

だが、目の前のアレはなんだ？アレは真正銘の殺人鬼ではないか。自分より強いとか弱いとか関係なしの化け物だ。アレに比べたら吸血鬼のほうがまだいい。あの化け物は全てを破壊出来る。魔物だろうが幻想種だろうが魔法使いだろうが同じ化け物の吸血鬼でさえ殺せる。そんな化け物を私はどう倒そというのだ。

「どうした？さっきまでの威勢はどこ言っただ？俺たちは同じなんだろう？ほらどこに問題がある。同じ化け物じゃないか」

懷から箱を取り出す。

ゆっくりとその箱の一部をとる。

ナイフの刃が出てきた。俺は寒気を覚えた。

やつのナイフを見た瞬間感じ取れた。『殺される』と。

本来ならナイフで人を殺すことは難関だ。

確実に殺すならその刃を心臓に届かさなければならぬ。

だが、アレに至っては心臓とか関係ない。

どこを斬られようが死ぬ。逃げることなんて出来ない。そうだ奴の場合刀のほうがまだ良かった。

刀ならナイフに比べて大振りになる。その軌道を見極めれば逃げることは可能だろう。

「そらどうした？早く構えろよ。つまらないじゃないか。楽しませてくれよ」

ニヤリ、と悪魔が笑った。

そこで恐怖は頂点に達した。

そうして俺は刀を構えていた。

俺の神経は奴によって殺されていた。

奴が刀を構えた。

やっとだやつと俺は人を せる。

見たい。

奴の血を。泣き叫ぶ顔を。

味わいたい。

快楽を。

さあ、殺ろう。ここに血の海を生み出そう。

ナイフを逆手で構える。

重心を前方へ。

左足を3歩前へ。

イメージは爆発。

観るは奴の魔力。

操るは大気の魔力。

ナイフに己の魔力を。足の裏に大気の魔力を。

大勢を低くし、爆ぜた。すれ違えば奴を切る。

信じられない速さ。昂の目には青黒い何かが影となってすれ違える
と認識しただろう。

自分の体に切り傷が出来ていることも気がつかずに。

無数の牙が昂を襲う。

鳥のように舞い獅子のように攻める。昂が避けることはない。蓮が
引いた。

「やれやれだ。本当に鬼なのか？つまらないんだよ。今のお前は」

ナイフを降ろし睨みつける。そこに込められているのは殺気。

「まあ、いつか。抵抗しないのなら。楽しませてもらうだけさ。

しかし、この世界は住みにくいな。こんな世界、俺が殺してやるよ」

空中を切る。

瞬く間に世界が死んだ。

硝子が割れるような音と共に空間このセカイが死んだ。

ここには何も無い。

生きているのは蓮と昴だけ。生物も精霊も浮遊体も一瞬で死んだ。

死しか見当らない。

赤く、憎しみの世界。

それが惨殺空間レンのセカイ。

「この世界は脆いな。魔力溜まりを切っただけで、この空間を創ることが出来る。こんなつまらない世界なら滅びても誰も文句は言わないだろう。だってそうだろう？幸福と歓喜、不幸と憎悪まったくかみ合わない対の世界」

立場が逆になって余裕を見せることが出来なくなった昴。

アレと殺りあうのはごめんだがもう逃げることは出来やしない。

なら覚悟を決めて挑むしかない。

「私が何故貴様を気に入ったのかようやく分かった」

昴の顔つきは元に戻っていた。

残虐な暗殺者がこの地に舞戻ってきた。静かに忍び寄り喉を裂くアサシンが蘇った。

「そう。私は求めていたのだ。私の感情を変える誰かの存在を。お前を見た時本能が分かっていた。『こいつがお前の本当の敵だ』と

な。貴様を倒すことで私は報われる。だからお前はここで死ぬ。殺
人鬼」

長刀を構える。

あるのは殺気。

首を取ろうと刃を向ける。

構えは突き。

彼の最後にして最強の技が牙を覗かせた。

それを見た蓮は顔を隠し、高らかに笑った。

「ククク、あはははははははははは！……！！なんだ！！！！やろう
と思えば出来るんじゃないかねえか！……いいぜ。命のあるかぎり
お前を食らい尽くしてやる。」

さあ、殺し合おう」

長刀が踊る。

それに合わせてナイフが食らう。

無数の斬激。

長刀は獅子のように大地を抉り、破壊する。

ナイフは蛇のように自由自在に刃の軌道をくねらせ、必要な物を滅する。

真紅の瞳と金色の瞳。

2つの瞳は違うものを観る。

金色は相手を。真紅は魔力を。2人の体は互いに自らの血で赤に染める。

辺りの破壊から見れば激しくはない。だが、一点においてはなによりも死の極地だった。

昂は一直線に狙う。

蓮はそれを先詠みし、受け止め反撃を狙う。

2人の速度はもはや音速。瞬歩で移動し蓮が跳ぶ。昂の頭上に来るまでに身体を回転させ逆さまになる。頭上に来た瞬間ナイフで弧を描いた。身体をのけ反らせぎりぎりに避ける。しかし、胸を裂かれた。

「クッ！」

胸を押さえる。

手は溢れ出る血で真っ赤だった。

切った蓮本人は頭から落ち、左手で着地した。

腕で反動をつけ身体を浮かせ両足で地に着いた。

「う………」

滝のように流れてくる。

傷口は浅いたが、切られた場所が悪かった。

蓮が観たらそこは魔力の流動力所。魔力が流れているところを切られればダメージは大きい。外だけでなく内も蓄積される。外傷の内臓のダメージが一緒にくるのだ。

「ちっ、本当は頭の『線』を狙ったんだがな。それたか。くそ。腕が墜ちたな。」

あれだけ適格に線を切っておいて腕が墜ちたと吐かす。

ゆっくりと殺人鬼が歩いてくる。

逃げなければ次こそは確実に死ぬだろう。それが判ってるのに体が動こうとしない。

いや、出来ないのだ。

大量出血に魔力の流動を止められた昂には打つ手がなかった。

大量出血が問題なのではない。問題は魔力の流動を止められたことだ。

「なかなか面白かったが、まだまだだな。本物の殺人鬼と殺り合うには早かったってことだ」

ヤメロ

「お前も本物になれば知ることが出来るさ」

コロスナ

「ちっ、……アイツがうるさくなってきたな。もうしばらく押さえれると思ったんだがな」

蓮はナイフを逆手から純手に変えた。歩を進める。

フザケルナ。

「ちくしょう。もう限界か」

空いた左手で頭を押さえれる。

脳に語りかけてくる声は頭痛に変わる。

モドレ。

「……もう無理だ。さっさと殺す」

ヤメロ。コレイジヨウツミヲカサネルナ。

「そうか。なら、急ごう。危険だ」

「うん」

2人は駆けた。

ここからなら廃墟まで5分とかからない。森を抜け廃墟の正面まで来た。

「ここだよね？」

「ああ、確かにここのはずなんだが・・・」

「うあああああああ」

廃墟の中から叫び声が聞こえた。

「「！」「」」

「中か！？」

中に入ると入り口に誰か立っていた。

「蓮兄・・・っ！」

口を塞ぐ。何故なら彼は血塗れで彼の足元には人間の肉片が転がっているのだ。

「蓮、お前・・・」

「ちっ、一番会いたくない奴等が来たな」

どうすっかなあ、と頭を掻きながら悩む。そんな時彼女が来た。

「龍！雅菜！」

金色の彼女が走ってくる。

「まだ闘っていたんですが、いきなり消えたのですがどうしたのですか？」

「スローダー……。ちっ、タイミングがワリイ」

「蓮！」

スローダーが蓮に向かって走りだそうとした。だが、龍がスローダーの手首を捕まえて制した。

「何故です止めるのですか」

「行かないほうがいい。今のあいつはまともじゃない」

「何故そう言いきれるのですか！」

怒りに感情を任せるようにスローダーが吠えた。

冷静でいられないスローダーは珍しい。

それだけ早く蓮の元に行きたいことが龍にも分かっていたがやはり制した。

「じゃあ、あれを見ろ！」

龍は蓮の肉片を指した。

「あれは？」

「蓮に切られた。人間さ」

「そんな。嘘ですよ？」

スローダーは今にも泣きそうな声で震えていた。

「嘘じゃないよ。これは俺が殺った」

「何故ですか！！！！」

最初に吠えたのはスローダーだった。

「何故？理由なんてないさ。人を殺すことに理由なんているかい？
話すの面倒だし殺すわ」

「蓮・・・・・・・・。蓮！蓮！」

力を込めて叫ぶ。

瞳には涙が溜っていて目を瞑った時にその雫が跳んだ。

「うつ、うつ」

突然蓮が苦しみだした。何かを抑えるように。

「は、早く、にげ、ろ。・・・・うつ」

さつきと違つことを言い出した。

頭を押さえて苦しみながら膝を折り、座った。

「にげ、ろ。おれ、が、抑えて、いるうちに」

「何言ってるの蓮兄」

蓮は片目だけを龍に向けた。

皆を逃せと。

その意思を受け取った龍は雅菜の手首を捕まえた。

「行くぞ」

「……でも」

「早く。ここで俺たちが死んだら意味ないだろ！」

「分かったよ。行くよ。スローダー」

雅菜は手を伸ばす。

しかし、スローダーは蓮に向かって駆け出した。

守らなければならない。ここで彼を救わなければ、彼は廃人になる。

あ

の笑顔がなくなるのが怖い。

ただ一心に走った。

「スローダー！」

片膝だけをついていたのだが、それも限界のようで両膝をついた。もう駄目だと自覚した時後ろから腕が伸びて来て抱きしめられた。

白い腕、細い指。

ほのかな甘い香り。

背中から感じとることができる暖かい何か。
それは正真正銘スローダーだった。

「……スローダー？」

「大丈夫です」

「え？」

「大丈夫ですよ。あなたには仲間がいるではありませんか。なにがあっても私が側にいます。例えあなたがあなたでなくなっても私が守ります。あなたは1人じゃない。リュウもマサナもカケルも私もいる。ですからその苦しみを一人で背負わないでください。十分に戦ったのですから今は体を休めてください」

強く抱きしめる。

その瞳から一滴の雫が零れおち、蓮の肩に落ちた。

「……ああ、そうさせてもらつよ。実はもう限界なんだ」

「はい。そうしてください」

蓮はスローダーに抱かれたまま意識を失った。その数分を見ていた
龍と雅菜。

「龍兄、これって……」

「ああ。どうやらこいつには俺たちの知らない闇があるみたいだな」

龍はスローダーの側により、蓮を抱き抱えていた。
体重が女の子と変わらないほど減っていた。

原因は容易に予想がつく。

さっきの状態からだろう。

瞳を閉じた蓮を見つめながら呟いた。

「本物の化け物じゃないか」

3人＋半死人は自分たちの砦へと向かった。

運命はたった今変わった。噛み合わなかった永遠の終焉
の歯車は回り出した。

カタカタカタ。

金属たちのフルスコア。
旋律たちのパレード。

カタカタカタ。

歯車は止らない。

意味深な声を木霊して。

止めることは誰にもできない。

第九章 終焉

なつかしい夢を見た。

それはまだ自分が小さくて興味でしか動けなかったときだ。10年くらい前の忘れた記憶。

暗闇を歩いた。

何も覚えてない。

何も感じる事ができない。

何を見ているても何も想わない。

その時私は死んでいた。

身体は生きてる。生命活動もしている。でも死んだ。

私には心がない。無心ではない。

何も想うことが出来なくなった。もちろん何故そうなったか分からない。

今より前の記憶がない。

だから暗闇を彷徨った。いや、彷徨ようしか出来なかった。食事はしていたと思う。だって今生きてるんだから。いつものように暗闇を歩いていた。心がなく。ただただ彷徨っていた。

その時、俺は出会った。

黒いスーツに、黒のマントそして深々と被ったシルクハット。

「
」

「君魔法に興味はないかい？」

何故かは分からない。

魔法には興味はなかった。

ただ近かったからだと思う。俺はその男に付いていった。

その男は武家屋敷みたいなところに入っていた。

どうやらそこが男の家らしい。

屋敷は広がった。

そんな屋敷の中で気に入った場所がある。それが白銀の庭。俺は毎日のように見に行った。いつものように白銀の世界を見ていた。

そんなとき訪問者が来た。

「こんにちわー!!」

「お邪魔します」

元気な少女の声とクールな少年の声。
歳は同じぐらいだった。

だが、心のない彼には関係なかった。
また白銀の世界に視線を戻す。

「やあ、いらっしやい。久しぶりだね。何時以来かな？」

男の声。自分を拾ってくれた黒の男。

「1ヶ月です」

「そうか、1ヶ月か。そんなことより上がって行ってくれ」

「初めてからそのつもりです。師匠」

上がってきた。

でも、自分には関係ない。空ろな心で白銀の砂を見ていた。
少女の聞こえた。

「アレ？あの子……」

「ん？ああ。あの子はね、養子だよ」

「いつの間に？」

「ん？1週間前にね。町で彷徨よってたからさ。危ないと思ってね。
……でも面白いだろ？」

「確かに」

男と少年が話している時に少女がトコトコと歩いてよって来た。

「ねえ、遊ばない？」

少女は膝に手を付き、中腰で聞いて来た。
俺はただ彼女の顔を見るだけだ。

「名前は？私は白城雅菜」

「沼地龍だ」

いつの間にか少年もこっちに来ていた。
俺は男の顔を見る。男は笑顔で頷いた。

「レン。黒木蓮」

「よし。蓮ちゃん。行こ！」

雅菜は手を前に出し笑顔で言った。

雅菜の後ろにいる龍も笑顔だった。

そんな2人を見ていた蓮は自然と手を出していた。

「う、うん。・・・懐かしい夢だったな」

眠気眼を擦りながら呟いていた。

「うわっ。雪だ」

部屋を出るとそこは一面銀色だった。

既にかなり積もっている。

居間に入る。そこにはテレビを見ていた4人がいた。

「おはよう。マジシャンは？」

「起きて早々凄いことを聞くんだなお前は」

「昨日の戦いで引き分けちゃったの」

「えっ、あっ、そうなんだ。残念だったな」

「うん」

雅菜は笑顔だった。

夢で見たような笑顔ではなかったが。

「そうなるとは俺達二人か」

「そうだな。その前に聞いておかないといけないことがある」

「なんだよ」

「……昨日のアレはなんだ？」

「昨日のアレって？」

蓮は首を傾けた。

本当に何が怒ったのか分からないみたいだ。

「蓮。本当に覚えていないのですか？」

「ああ。全く。俺なんかしたのか？」

全員で顔を見合わせる。

どうも蓮が嘘を言っているようには見えなかったからだ。

「蓮兄、本当に覚えてないの？」

「たから言ってるだろ。知らないって。何があったのさ」

「殺したんだよ」

「え？」

「だからお前が林昴を24個の肉片に変えたって言ったんだ」

「ど、どういうことだよ。いつ？俺が？そんな馬鹿な。だって俺が死にそうになったのに……」

蓮は狂ったように呟きだした。
しばらくはこのままだろう。

「雅菜、スローダーちょっと来い。スパイヤー、蓮を頼む」

龍と雅菜とスローダーを連れて廊下にでた。

「龍。どういふことでしょう？」

「恐らく。かいりせいどういふじせいいしやうがい乖離性同一性障害だろ」

「か、かい？」

「乖離性同一性障害。簡単に言うと二重人格だ」

「なんだ。二重人格か。簡単な方と言ってよ」

「それで、その、二重人格というのは大丈夫なのですか。私生活に異常をもたらすということはないのでしょうか」

不安そうに龍を見るスローダー。

彼女にとっては彼という存在が無くなるのが一番の恐怖だった。

「二重人格は乖離性障害の中でもまともな部類だろう。酷いものになればストレスの強い自らの個人情報を広い範囲にわたって想起で

きない状態に陥る解離性健忘や突然放浪して過去の出来事に関する想起は不能になり、自分が自分であることに混乱する、または新たな自己同一性を装う解離性遁走みたいなものがあるからな」

「そう、ですか」

龍は居間を通り過ぎてゆく。

「龍兄、出掛けるの？」

「ああ。敵である俺たちがここにいるわけには行かない。情が出れば闘えないからな。行くぞ、スピヤー」

「はい」

蓮を看病していたスピヤーも龍の後について行く。

ふと何かを思い出したように立ち止まり不安な顔をした雅菜たちに言った。

「今のあいつに言っても無駄だからな。……蓮に伝えておけ。……これからは敵だと」

そのまま龍は黒木邸を出て行った。

それから蓮が正気を取り戻したのは2時間後の9時だった。

スローダーと雅菜は龍と話していたことを蓮に伝えた。

蓮は胡座をかいて座り真剣に聴いていた。

「乖離性同一性障害……二重人格か……」

「はい」

「確かにそれなら説明がつく。だがな。それじゃおかしいんだ。何故俺は今まで普通に生活できたんだ？今までそんなことはなかった」

「それは……なんでかな？」

悩み二人だったが、スローダーは違った。

何かを知っているみたいだった。そして決心したように話して。

「おそらく過去が原因なのでしょう」

「え？」

「あなたはここに養子に来る前のことは何も覚えていない。元々有った。しかし、記憶が無くなったときに知らず知らずのうちに抑制力によって抑えられていた。しかし、自分に何か起きたことで抑制力が無くなった。それで二重人格が戻ったと考えるのが妥当でしょう」

「なるほど……。でもねスローダー、それには無理があるんだよ」

蓮は優しく答えた。柔らかな笑顔と共に。

「元々から二重人格ってことには無理があるんだよ」

「なんで？」

「二重人格にはね、条件がつくんだよ。それはね、トラウマなんだ。過去に暴力的行動を受けたとかからくるトラウマ。それから逃げる

ためのものが乖離性同一性障害。元々から二重人格を持つのは血ではない。その家系の血筋が二重人格で産まれてくるなら話はつくけど、七瀬は有り得ない。七瀬は二重人格より異端な物を持って産まれてくるからね。異端を持って産まれてくる血筋に更に異端を受け持って産まれてくることはない。軀は一つだからね。一つに二つは入らない。だから、俺が、七瀬の血筋が二重人格を持って産まれてくるということは無い。それなら説明がつくだろ？」

「では、一体何故二重人格が急に出たんでしょう？」

「分からない。なにかヒントになるようなものがあればいいんだが・
・・」

2人が考えこんでいるときに雅菜が話だした。

「多分、死に関係してるんだと思う」

「「え？」」

あまりにも意外だったのか蓮とスローダーが目を反転させていた。

「途中まであつてると思うんだ。蓮兄の二重人格は過去のトラウマからであつてはらず。で、記憶を失つて以降、何かが二重人格を抑えてるまではあつて。問題はその後。『何故、急に二重人格が現われたか』だよな？多分、死を体験することで二重人格を抑えてる抑制力が働かなくなる」

そんな推測でしかない雅菜の意見を真面目に二人は聴いていた。話が終わると蓮は頷いた。

「なるほどな。だが、違うところが一カ所あるな」

「どこですか？間違いなど無かったように聞こえますが……」

「雅菜の考え方は死を体験することで抑制力が無くなるだったな？」

「うん」

「俺は違うと思う。抑制力を殺すのは『死』ではなく『血』だ。現に俺が昂に斬られたとき最後に見た風景は赤だった。人間の血のような真っ赤な朱。それから俺は記憶が無くなった」

「そうなんだ」

暗くなっている雅菜とスローダーだったが、次の言葉で愕然とした。

「でもな。……悪い気分では無かった。逆にそれを見続けたいとさえ思った。あの眩むようなあか朱。最高だった」

顔をにやつかせる蓮。

それを見た二人は寒気がした。

今まで見たことのない悪魔の顔。

血を求めて彷徨う血を吸う鬼。

残虐非道な殺人鬼。

そのような人外の生物に見えた。固まった二人を見て首を傾ける蓮。

「どうした？顔色悪いぞ。休んだらどうだ？」

「ううん。なんでも無いの。気にしないで」

「ん？そうか」

スローダーと雅菜は向き合った。

そう二人は確信した。

さっきのレンはこの蓮ではないと。

憂鬱なまま昼食にした。

昼食後の紅茶も飲まずに3人して俯いていた。そんなとき。

トゥルルトゥルル。

電話がなった。

「私出てくるね」

少しの間をおいてから雅菜が帰ってきた。

「・・・・・・・・」

「どうした？」

「龍兄が今すぐに学校にすぐ来いって。今、決着をつけようって」

雅菜は暗く俯いて言った。

その言葉を聞いて蓮は決意したように、スローダーは不安気に立った。

蓮とスローダーの2人で屋敷を出た。

雅菜は留守番だ。蓮と龍の戦いなど見たくないらしかった。屋敷から学校までの道のりを2人は黙ったまま歩いてゆく。

学校に近付くにつれて足取りが重たくなっていった。

気分がすぐれないのはスローダーだけではないらしい。

蓮の顔も憂鬱だ。

昼間なのに暗い。雨雲が日の光を遮っている。

校門に着く。

不安なまま着いてしまった、と少し後悔しているスローダー。

悲しい顔をしているスローダーに蓮が彼女の顔を見ずに言った。

「すまない。こんな辛い戦いに巻き込んで」

「いえ、巻き込んでしまったのは私です。ですから、謝らないでください」

表情を変えずにスローダーは返答した。沈黙が続く。

「レ……」

「本音言つとさ。嫌なんだ。龍兄と戦うのは。出来ればどちらかがリタイヤしないかって考えてた。でもあの人は簡単に勝ち上がった。情を捨てるのが一番なんだろうけど、無理だった。……だから決めた。情を持って、それを殺すって。日が進むにつれて分かったことは俺が『殺す』って行為に長けているってこと」

「蓮……」

「情を殺せば間違いなく俺は理性を失う。それが分かったから龍兄や野菜とだけは戦いたく無かった。でも、不安になる必要はないことも分かった。だって俺にはスローダーって人が側に居てくれる。そしてその人は俺を救ってくれるってことを」

頬に赤みがかかる。

照れくさそうに蓮は笑った。

そんな蓮をみてスローダーの頬にも赤みが現れる。

しかし、そこは騎士として凛々しい顔に変えるが、頬には赤みがかかったままだ。

「んじゃ、行くか」

「はい」

歩き始める。

校門に体を入れると同時に魂の共鳴を行なった。

龍は1階の廊下にいた。

「やっときたか」

その低い声からは殺意や冷たさといった負しか感じとれなかった。

「待たせたな。決着をつけよう。龍」

同じ殺意を持って睨み返す。

「無論だ。ここがお前の終点だ」

黒い槍を取り出す。

「それこそ御免蒙る。俺はまだ生きる」

同じく剣を取り出す。

剣を中腰で構える。

それに対し龍は極力低く槍の刃先がギリギリ着くくらいまで低くなつた。

槍の角度は30°。

「はっ！」

漆黒の槍が白銀の槍に変わった。

「シルラボルク空間を穿つ神速の槍！！！」

爆ぜた。

だが、一步も進まない。

理由は簡単だ。蓮の腹に白銀の槍が穿っていたのだ。

「な、ぜ……」

構えはした。

しかし、動いていない。体勢すら変わっていないのに、その手には槍がなかった。

シルラボルク空間を穿つ神速の槍は光速すら超えた神の槍。発動した時にはもう身体に槍が穿っている。

「この槍とやり合うなら先手を後手にする剣ぐらいは用意するんだな。……お前のことは調べさせてもらった。一族のこと。一族の能力のこと。その瞳のこと。結果、貴様は危険だ。時間をかければかけるほど俺が不利になる。貴様はまだその瞳を使いこなせていないのだから。貴様が瞳を使うまで最低でも5分はかかる。本来ならすぐに使えるらしいがな」

ゆつくりと歩いてくる龍。

足音がカウントダウンのように聞こえた。
目の前に立ち、槍を抜く。

「貴様の乖離性同一性障害のスイッチは血だ」

「……血……?」

「ああ。しかも、それが死に繋がる血でなければならない。たがら
外した。あんなのとは殺りあいたくないからな。さて、時間だ。・
・・逝け」

槍を心臓に突き刺そうとしたときだった。

「信頼アクトウォルカされし不敗の剣ああー！！！！！！」

金色の波が外から押し寄せ、龍を飲み込もうとした。

「!」

ギリギリよける龍。

金色の波と共に蒼い騎士が飛んで来た。

「レン!」

スローダーは蓮を抱き抱え破壊した壁から逃げた。持ち上げた蓮の
身体は軽かった。

「む?逃した。同調を完了していたのか。アイツめ、咄嗟に共鳴を
といたな」

皮肉な言葉の裏腹に顔は笑っていた。

子供の成長を見守る父親のように。

スツ、と龍の身体からスピアーが剥される。

「逃してしまいましたね。しかし、いいのですか？」

「なにがだ？」

「アレだけ喋ってしまったのに追わなくていいのですか？」

クスツ、と笑った後振り返りスピアーの横をすれ違いながら囁きかけるように。

「いいんだよ。こうしないと……いけないからな」

龍を顔で追っていたスピアーは驚かされた。

「は？」

「行くぞ。今度会ったときは奴も違つかもしれんからな。休養だ」

「は、はあ」

間抜けな声を出しながら龍についていく。
ボソリ、と

「今度こそ終わらせろよ」

と龍が言ったことは誰も知らない。

俺はアイツに負けた。

そして奴は言った。

俺の乖離性同一性障害のスイッチは死に繋がる血だと。

しかし、乖離性同一性障害に条件付きなどそうそうない。

なら俺は乖離性同一性障害などではないのかもしれない。

なら、一体なんなのか？それは判らない。

だが、一つだけ言えることがある。そ

れは俺が『死』というものを知っていて死に敏感ということだ。

確かに俺は死を知っている。毎晩見たあの赤い風景。自分の幼少のころにそっくりで、でも何かが違う少年が立ったいる。肉片の真ん中で。アレが死なのだろう。

俺は死を知ってはいるが、俺は「死」について考えたことはあるだろうか。幼い頃「人は死んだら何処に行くのか？」なんてことはよく思った。天国や地獄に行くのかなんてことをよく考えた。幼い少女の定番の考え「死の後」のことは関心・興味を持つものはいらる。しかし、「死」そのものに関心・興味を持つものはいらるだろうか。俺自身この世界で生きていて死を考えたことはない。死ぬとは何かを尋ねられたら人は必ず「手の届かない遠くへ逝ってしまふ」とか「いなくなる」と答える。なら死とはなに、と訪われると答えられるだろうか。死後の世界を人は黄泉と言う。黄泉の世界に「死」はない。確かにそこに「或る」のに死は無いのだ。なら黄泉に「或る」と地上の「有る」とは何が違うのか。考えれば簡単なことである。つまり黄泉とは「無」。「」とは違う「無の世界」。そう考えたら納得できるだろう。死とは無なのではないだろうか。だから元々ない或る

では無を作り出すことは出来ない。「無」は「有」があるからできる。無いと零いは違う。零いは足せば増やすことはできる。しかし、無いは何を足しても無いになる。だからこそ「無」は何もないのだ。

そんなことが暗闇の中で頭に浮かぶ。

水中にいるような感覚。

彼はゆっくりと上がっていった。

光が漂う海面目指して。

ゆっくりと暗闇から光が入ってくる。視界を脳が理解する。

どうやら俺は生きているらしい。

「レン、気が付いたのですか」

スローダーが安心した表情をしている。
どうやらずっと看病してくれたらしい。

「おはよ。スローダー」

なんて間抜け。

看病してくれた人物に対しての第一声が「おはよ」とは。

「ここは？」

「貴方の部屋です」

「俺の？………ああ、そうか。俺刺されたんだっけ。
で、スローダーがここまで運んで来てくれた訳か」

冷静でいられる。

頭の中がスッカラカンだと言うのに心が落ち着いていた。

「はい」

「そうか。………ありがとう」

笑顔で返した。たちまちスローダーの顔が赤くなる。そして俯いてしまった。

「あ、い、いえ。あ、主を守るのが私達の役割ですから」

などとブツブツと喋っている。

そんな可愛いスローダーをまだ少し見ていたかったが、今はそれどころではない。今の現状を理解しなくてはいけない。

「スローダー。今何時？」

「もうすぐで10時です」

「それじゃあ、5時間も眠っていたのか」

「はい」

起き上がろうとする。

「よつと。ってアレ？」

身体が動かない。上半身すら動かない。

「くっ。この動け！」

「無理しないほうがいいよ。蓮兄」

ガラリと襖があく。廊下から雅菜が入ってきた。

「雅菜……」

手を前において、ゆっくりと歩いて蓮の隣りに正座で座る。

「蓮の傷を治したのは雅菜です」

「そうなのか。で、どうなってるんだ」

「うん。傷は治癒魔術で塞がったんだけど、神経のほうが……」

「神経？」

コクリ、と頷く。

「神経も千切れてるの。しかも、かなりボロボロに」

「でも、神経なんだろう？身体全体が動かないのはおかしいだろ？」

「蓮兄、何勘違いしてるの？私が言ってるのは魔術神経だよ。つまり、魔術を使うときに使う神経回路。それが千切れてるの。魔導師にとってその回路は身体を動かすのにも使う。その状態で無理に動かしたら身体も千切れる。勿論、魔力を流せば神経が破裂する。そうなればどうなるかわかるよね？」

低くなっていく声色。二人は背筋に寒気を感じた。

「分かったね？無理に動かさないこと！絶・対・安・静！お腹減ったよね。お粥作ってくるね」

笑顔で台所に向かった。カチカチと時計の音だけが木霊している。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

カチカチカチカチ。

「ちと、怖かったな」

「そうですね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

会話が続かない。

しみみりではないし、暗いとかではない。

どういえぱいいのかわからないので暗黙。そんな雰囲気だった。それを壊したのは蓮だった。

なんか似たようなことがあったようななかったようなと思う蓮。

「スローダー」

「はい」

「過去、少し思い出したんだ」

「本当ですか!」

「でもな。雅菜には知られたくない」

その言葉にスローダーの眉は八の字になっていく。
不服なのだろう。だから、冷たく言った。

「好きだからですか？恋人だから知られたくないと？」

「違うよ。恋人じゃないから知られたくない。この過去は一緒にいてくれる、生涯を共に歩いてくれる人しか話したくない。だから君に話したい」

その意味が分かったのかスローダーの顔が再び赤くなっていく。

「え、あつ、ちょ、そ、その。そう言っていただけなのなら幸いです」

慌てふためくスローダー。

そんな彼女を見ているのもよかったが、もうすぐで雅菜も来る。
その前に思い出した記憶を話したかった。記憶が曖昧になる前に。

「で、続きいいか？」

「はい」

視線を彼女の顔から天井に変えた。

「思い出したって言うても少しだけなんだ。……………」

「どうしたのですか？少しでも構いませんが……………」

「家族を殺した」

「は？」

いきなりの発言に戸惑うスローダーだったが、冷静に持ち直した。

「何かの間違いでは？」

首を横に振る。

「アレは間違いなく俺だ。けど、何かが違う。違うけどアレは俺なんだ。血塗れになって、肉片を見てもなんとも思わず、ただ笑っている壊れた少年。俺もこれがなんなのかさえ解らない。それが俺が思い出した過去。いや、アレは少し前から見ていた夢なのかもしれない。だけど、アレは実際に起きていたんだから否定しようがない」

黙っているスローダー。

それも当たり前か、と視線を彼女から天井に戻そうとしたときだった。

彼女の口から意外な言葉を聞いた。

「その夢なら知っています」

「え？」

間抜け面をかましたのち、真面目な顔できいた。

「どういうことだ？」

「私達エランドは霊体であるために夢を見ることはありません。で

すから、アレは貴方の過去と解ることが出来ました。ですが、そのことを言うのは躊躇われました。ですが、貴方から聞いた以上黙っている訳にはいきません。……貴方が不安に思っていることは確かだと思えます。ですが、大丈夫です。貴方のことは私がよく知っています」

安心出来る本当の微笑み。

自分も同じ気持ちになる。

この人は本当に自分にとって必要な人なんだと改めて思った。

龍は言った。それは尊敬だと。だが、それは違うと思う。なぜならば彼女となら共に分かち合える喜怒哀楽があるからそれを『愛情』と呼ぶずなんと言う。

蓮は冷めてたのではない。愛情を知らなかったのだ。だが、なんと伝えればいいのかも解らない。

そんなムシヤクシヤ気持ちが身体中に行き渡る。

むゝ、と唸る蓮。

「？」

彼女は首を傾げた。

トントン、と誰かが襖を叩いて開けた。

「お粥作ってきたよ。起きれる？無理かもしれないけど」

身体に力を入れる。

自然に上半身は起き上がった。だが、他は動かない。腕も左しか動かせない。

「上半身と左腕だけなら」

「ふうん。結構早いね。スローダーのおかげかな？後でお礼言っておきなよ。じゃあたしも夕食食べてくる。こゆっくり」

意味深な笑顔を残し出て言った。

「あいつめ。でも、助かってるからな。文句も言えないな。ちゃんと二つあるし」

そう言ってお盆を引き寄せる。

スプーンを左手で持ち、掬おうとしたがこれがなかなか難しい。

「難しいな。でも、食べれないわけでもない」

そんな食事と苦闘しているところを見ていたスローダーは蓮のスプーンを取った。

「スローダー？」

彼女はお粥を掬い蓮の口の前に差し出した。

「あ、あゝん」

慣れないのか頬は真っ赤だった。

つられて蓮の頬も赤くなる。恥ずかしがってる場合ではないので素直に応じた。

「あ、あゝん」

スプーンをくわえ、お粥を綺麗にとる。

「美味しいですか？蓮」

「あ、ああ」

ぶっちゃけ味はしなかった。スローダーの行動にびっくりして。蓮が終わった後、スローダーも食べ始めた。

食べている姿も優雅だった。そんな姿を眺めつつも何も考えてなかった。

虚無の心。

養子に來た時からそうだった。

ガランドウの自分。

今やっと思ひ出した。自分がなんなのかを。それは……。

「ごちそうさま」

礼儀正しく合掌を済ませる。

「おや、まだ起きていたのですか？」

「ああ、なんだか眠れなくてね」

「そう、ですか。ではお話しでもしますか？」

「そう、だな」

賛成したときちょうど雅菜が入ってきた。

「ご飯終わった？食器下げに來たんだけど」

「ああ、ありがとう。美味しかったよ」

「お粗末様でした」

布団の横にあるお盆を手を取った。

「後で診察するからおとなしくしててね。くれぐれも無理はしないように」

人差し指だけを立てて小さな子供を叱るように話す雅菜。

「無理もなにも動かないって。てかさ、お前診察とか言ってるけど、資格あるのか？」

キョトンとした顔で首を傾げる雅菜。

「ないよ」

と、真面目な顔をして爆弾発言をした。

「な！お前そんなんで人の身体調べんな！！普通に怖え！」

「失礼ね。医師免許はないけどそれに近いものなら持つてるんだから！」

「はい？」

「そんな間抜けな顔しない！私、元々衛生魔術師だから、身体や回路には詳しいの」

衛生魔術師。

それは魔導師の中でも2番目になるのが難しい。ちなみに一番難しいのは司祭魔術師だ。魔術という魔術の知識を持ち、身体とう軀を知らなければならぬ。彼女はそれだと言う。

「納得した？それじゃ、眠ってね。じゃないと診にくいから」

「眠ってって。眠くないんですけど」

「ん？大丈夫。さっきのお粥に眠り薬入れておいたから」

「な！待て！このヤ……」

ヤブと言おうとしたが彼の瞼は強制的に閉じられた。

「蓮の身体はどうなのですか？」

頭に言葉が響く。

「なんともないみたい。この回復能力は異常ね」

まったく人の体いじって何が異常どころ。

そして意識すら途絶えた。

蓮は眠ってしまった。

彼の体を調べる雅菜。

「蓮の身体はどうなのですか？」

心配そうに聞くスローダー。雅菜は体を調べながら答えた。

「なんともないみたい。この回復能力は異常ね」

「はあ」

「多分スローダー。貴方と蓮兄が契約してるからだと思う。でないと説明つかないしね。はい、終わり。スローダーはどうする？」

「このままいます。心配ですから」

「そっか。じゃあ、後よろしく。おやすみ」

笑顔の挨拶。

「はい。おやすみなさいマサナ。ありがとうございました」

ニコ、と微笑み雅菜は蓮の部屋から出て行った。

「さて、私も休むとします」

蓮の横で眠りについた。

スローダーが眠りについた1時間後に蓮は目覚めた。

「ん、あいつふざけんなよ」

だが、身体は動く。
。

「まあ、動くんだから礼は言わないとな」

背伸びをして、手を置く。置いた後なにかにぶつかった。そこにはスローダーが眠っていた。

「うわあああ、す、スローダー、って寝てるのか？」

「・・・・・・・・」

スローダーの顔の前で手を振ってみる。

起きる気配はなかった。

溜め息をつき、自分にかかっていた布団を被せた。

「風邪ひくつての」

あぐらで座り、スローダーを見る。

彼女を見ると今までにあった出来事を思い出す。俺は彼女に何度守られただろう。

「ありがとうな。スローダー。何度もお前に助けられた」

彼が初めて言った彼女に対する本当の気持ち。

「礼を言うのは私のほうです。私が巻き込んだと言うのに文句も言わずに戦ってくれたのですから」

「ありあ？起きてたんだ」

「はい。ですが、嬉しい。貴方の本当の気持ちが聞けて。貴方はなかなか言ってくれませんかね」

部屋は暗いのに彼女の笑顔はハッキリみえた。

「ああ。俺は弱いからな。自分の気持ちを伝えるのが怖いんだ。だけど君と出会って変わった気がする。ありがとうな、スローダー」

「いえ、こちらこそ」

そうして俺は彼女の柔らかい唇を閉じて、初めて彼女を抱いた。

朝がくる。

居間には珍しく雅菜がいたのだが、

今朝は朝の9時。

平日にもかかわらず、この時間まで寝ている蓮が珍しいのだ。勿論学校はサボる気でいた。

「珍しいね。ここまで寝てるなんて。なんかあった？」

「な、なんもないぞ。なあ、す、スローダー」

「え、ええ」

「ふん、まあ、そういうことにしとく。後連絡。今日学校休みね」

「何故？」

「蓮兄の血がベツトリとついてるから。片付けと原因を探るんだって。生徒には絶対他言厳守で」

バレバレなのにね、と笑顔で嘲笑う雅菜。

2人には別のほうかとも聞こえた。

「それじゃ買い出し行ってくるね」

鼻歌まじりに買い出しに出かけた。

「んじゃ、俺らも出かけるか」

「どちらにですか？」

「ん？デート」

玄関に鍵をかけ、門に錠をかけた。
行くとしたら何処だろう。

いきなり思いついて口にしてしまったから場所まで決めていない。
まずは定番の映画館だろうか。ということで黒帝市の映画館まできた。

「映画ですか？」

「ああ。で、何を見ようかと思ったんだが、なんだこれ？」

最新上映されているのは『行け！僕らの黄金期』と『天空の使者・イマイロス』だ。

「どれ見る？」

「あなたに任せます」

「ん？そうか」

そうして2人は『行け！僕らの黄金期』を見た。
映画館から出て、隣町の街中を歩いていた。

「微妙だったな」

「そうですか？私は感動しましたが」

「・・・どこで？」

「ラストです！貴方は感動しなかったのですか！手を取り合って戦った友との別れ。それに戦闘もよかった。あんな戦い方があるとは！勉強になりました」

こうも力説しているスローダーも珍しかった。

新たな一面を見て嬉しいのだが感動の理由が最後まで分からなかった。

その後、いろいろ徘徊した。

そして喫茶店で昼食にした。

「午後からどうする？」

「基本は貴方に任せますが、出来ればゆっくりしたい。午前中はハイスピードでしたから」

「同感だ。それじゃ午後は店は控えよう。疲れるしな。ゆっくりできるところでも探すか」

「はい」

満面の笑み。今日はこの笑顔が見たくて彼女を連れ出した。

今後どうなるか分からない。

だからこそこんな些細な生活を大切にしたかった。

彼女の笑顔を見てそれを宝物にしたいと思った。

紅茶の味もなかった。

足取り軽く2人は手を繋いで歩いていた。

「どこに行くのですか？」

「海浜公園。この町で静かなのあそこしかないから」

予想通り海浜公園には人がいなかった。

手すりまで行く。

蓮は手すりに身体を任せ、スローダーは手を前において立っていて冷たい海を見ていた。潮風が冷たい。

「綺麗ですね」

「海が？」

「この地域が、です。黒帝市も三波町どちらとも人や風景、街全体が澄みきっている。貴方たちはこんな町に住めて羨ましいです」

「そう、だな」

今の蓮にとってスローダーの言葉は身に染みた。

もうすぐでお別れだと確信してしまう。

こんな幸せな時間が終わりを告げる。そんなことしか生まれてこない。

そう思うと不意に涙が出てきた。それに驚くスローダー。

「蓮！どうしたのですか！まさかまだ傷が?!」

「違うよ。ただ嬉しかったんだ」

「え？」

「君と出会えて、君と戦って。共に笑ったり、泣いたり。いろんなことを思い出す。俺にとってこの数日はとても深い。沢山失って、多くを得た」

意味のある蓮の言葉たち。スローダーは何も言えなかった。

「だから、決めた。この残り少ない時間を君と行く。よろしくなスローダー」

「はい。私も楽しかった。残りとは言わず全てを貴方に捧げます。こちらこそよろしくお願いします」

お互い笑顔で握手を交わした。

お互いの思いを伝え、誓いをたてた。

もうじき紅色に変わる太陽を横で感じながら。

「さて、行くか」

「家にですか？」

「いや、教会さ」

「何故？」

キリスト教信者でない限り一般人には結構無縁な聖域。

行くとしても結婚ぐらいだろう。

だからキリスト教信者でない蓮が立ち寄る意味が分からなかった。

「龍兄がいるんだ。まだ微弱だけど、魔力を放ってる。誘ってやがるな」

「教会にいるのですか。しかし凄いですね。私では感知できません。どうやら貴方は魔力の探知が凄いです」

「多分それは七瀬の血のせいだと思うけどな。七瀬は魔剣士だったし、魔力を感知するのは得意みたいだ。……さすが魔の鬼だな」

幾分解らないところがあるが、そこは聞かないほうがいいのだろう。下手をしたら蓮の奥まで行くみたいで怖かった。

ゆっくりと歩く。

一歩一歩を踏み締めて行く。

大切な時間を身体で感じて。

共鳴を完了させ、教会へ続く道に行く。

丘の上に建つ神の礎。

その聖域の真前にその男はいた。

漆黒の髪に普段はかけていない伊達眼鏡。

出会ってから戦ってきた沼地龍が悠々と立っていた。

「来たか」

「来たかって……お前が誘っておいてそれか」

「確かに魔力を放出して誘ったのは俺だが、別に来ないという選択もあったはずだ。だから来たかというのは」

「あゝはいはい。来ていきなり説教かよ。相変わらずうるさいな」

む、軽く唸る龍。

「ふむ。では長話は無用だな？」

「当たり前だよ。そのつもりで来たんだから。決着をつけよう。龍」

長年の

剣と槍を構える。

「スピアー。行け。シルラは借りるぞ」

「はい。黒槍さえあればいけます。ではご武運を」

「スローダー。お前も行け。悪いけどさ、太剣は借りるよ」

「はい」

跳ばうとしたとき、蓮の言葉に止められた。

「スローダー」

「はい。なんでしょうか」

「ちゃんと戻ってこいよ」

「無論です」

彼女は微笑み、跳んだ。

地上に残ったのは蓮と龍。

沈黙の後、龍が先に突っ込んだ。

90°に曲げた右腕をバネのように押し出した。

その速さは尋常ではない。

訓練された師範や達人でも避けることは不可能に近い。顔を狙った突き。しかし蓮は意図も簡単に交わした。そのままボディブロー。みぞうちを狙ったのだが、龍が反射的に引いたので浅く入った。

「くっ！避けられたか」

蓮を見る。

数秒前は蒼だった瞳は真紅になっていた。以前の蓮なら戦いが始まって最低5分は必要だった。魔眼発動はものの1秒で出来るようになっていた。

（呪力眼……使いこなせるようになってたのか）

更に跳ぶ。

凄まじい連突き。

最後に振り下ろすが全てかわされた。

距離をおく。

「あんだなら分かっているはずだ。この瞳がある限りあんだの攻撃は効かないと」

「どうやら本当のようだな。だが何故に剣を使わぬ？」

「太剣だからな。すきが多い。槍と争うならあなたにすきができた一撃を狙うしかないだろう?」

「なるほど。流石に戦い慣れてるな。なら、俺も出すしかあるまいて」

ゆっくりと瞼を閉じる。

閉じた時同じ早さで開いた。

そこには右目に二重の輪、左目には十字架の瞳があった。とても奇妙で人間ばなれしたその瞳に蓮は引き寄せられた。

「こいつはな、沼地一族の血による魔眼だ」

「魔眼使い……」

「ああ。お前も聞いたことはあるはずだ。伍鏡魔眼を」

「伍、鏡魔眼だと? 呪力眼には及ばない魔眼だが、禁忌でない魔眼の中で最強の魔眼か」

「ああ。第壹の眼・心眼、第貳の眼・狂眼、第参の眼・歪眼、いびつがん第四の眼・魔郷眼、第伍の眼・まんげつ卅月を持つ最古最強の魔眼さ」

「いいのかよ、そんなに情報をもらして」

「なに支障はないさ。現にこれで平等だ」

景気の親父のように振る舞う龍。

そんな龍も珍しく少し見ていたかったが、

今は戦いの真最中だ。

そんな邪念は消していたかった。そして蓮は情を殺した。

「後悔すんじゃないぞ」

「後悔など私にはない」

「よく言った！ならこい！龍！」

「ハッ！！」

挑発に乗った龍。

それも自信の現れ。

第貳の眼・狂眼の能力は身体能力向上。つまり、狂戦士状態。

己の精神が弱いと理性が無くなるだが、それをものにすれば強靱な能力を持つことが出来る諸刃の剣。先ほどよりはるかに速い突きのラッシュ。

（身体能力が変わった？）

感覚でその能力を把握した。一瞬ぐらついた。

「もらった！」

太剣を振る。

しかしその時には龍の姿は無く、龍は蓮の後ろに回っていた。勢いに任せた突き。

それはかわされるわけでもなく簡単に太剣に止められた。

「な！」

「厄介だな。伍鏡魔眼つては。どっちだ？どちらかが身体能力向上でどちらかが先詠みのはずだ」

「やれやれ、そんなことまで分かったか。二重が先詠みだ」

「なるほどな。だが、いくら先を詠んでも無意味だ。俺の瞳はその先も観る。マナを見ているんたからな」

「。さすが禁忌の眼だな。なら心眼は意味ないな。変えるか」

右目を閉じる。

すぐに開ける。

そこには勾玉が二つあった。

そして直感した。あれはマズイと。能力は解らないがとにかくアレはマズイ。

「第参の眼・歪眼。避けれるかな？」

空間を観る。

マナが急激に変化してゆく。

自分の顔のマナが挟じれてゆく。

「！」

縮地で避ける。

螺旋状となりナマが凶る。^{まが}そしてマナが死んだ。だが、すぐに戻って行った。

「今の一体？」

「別に。その眼を持つているお前なら分かるはずだ。世界は歪だからな。それに関与することで、物を曲げる」

「世界に関与する？いいのかよそんなことして。自然の摂理を壊すぜ？」

「別に。この眼は関与はするが破壊はしない。なにしろ世界の協力を得て物を曲げる。自然を操るのと大差ない。それに……………」

世界の摂理を壊すのは、お前だろう？」

「どういうことだ？」

訳が分からなかった。

自分の何処に摂理を破壊する物があるというのか。

「一つ聞く。お前にとって世界の死とはなんだ？」

「世界の死？それは……………アレ？」

浮かんでこない。

死とは何か知っているのに分からない。

世界の死とはなんだろう？

「そういうことだ。お前は観えすぎている。だから世界の死が分からないんだ。お前は死をいつでも観ることが出来る。マナを観ることが出来ればそれを切るだけで世界を殺すことが出来る。あまりにも身近にありすぎて分からないんだよ」

龍の言ってることはわかる。

だが俺が摂理を破壊すると言うのはどういうことだ？

「お前の瞳は死を軽くする。だから摂理を殺し易い。それだけだ」

マナが変化していく。

それが世界の歪を利用し空間を曲げる前兆。

「く！これならどうだ！」

作り出すはギリシアの英雄ヘクトルの盾。それを硬質化のルーンと守護魔方阵の組み合わせ。蓮が持つ守備最強の魔術。最強種である竜の吐息すら防ぐ無敵の盾と化した。

しかし、それも無駄。マナを曲げる歪眼。意図も簡単に穴を開けた。

「くそ！」

後ろに跳ぶ。蓮を追うように無数の螺旋が並ぶ。

「マジかよ！」

跳ぶ。今度は後ろでなく、上。

「いいのか？そこで？動けんぞ？」

円を描くように螺旋を並ばせる。

螺旋は重なり合い巨大な螺旋を作り出した。

「あの野郎、無茶苦茶だな！」

空中ルーンを描く。幾多の魔方阵が蓮を取り囲む。

「錬金の王よ。我に力を与えよ。錬金の賢者よ。知識を与えよ。ウロボスを滅する最古の系を。我は生み出す。聖なる領域を。精霊の加護を用いて聖域を我に預けよ。土台は我の腕に！」

蓮の師匠が与えた唯一の錬金術。

それが砦を創る錬金の系。

瞬く間に大聖堂を創り出した。

天井が龍を向く。この場にある教会の2倍くらいの大聖堂は巨大な渦によって消された。

「嘘だろ！大聖堂の砦まで消しやがった！」

破片と一緒に落ちてくる蓮。

着地したとき龍の姿はいなかった。

「どこいった？魔力ばつかで特定できねえ」

辺りを観渡す。やはり龍の姿はない。

「やはりな。これだけ魔力が散らばっていれば分からぬということか」

声だけが揺れる。

「どこだ！」

「ここだよ」

不意に後ろから龍が現れた。
まるで敵に対して行なう暗殺者アサシンのように。
魔力溜まりを展開し、体に入れようとする。
入れる直前になって白き槍がそれを貫いた。

「ばか」

「くらえ。メテオ！」

ばかな、という言葉をかき消した呪文とともに豪火球が蓮を襲った。
爆煙が広がる。

魔力の気配も敵意も感じない。

「死んだか。ふむ、なかなかだったが、まだ未熟みたいだな。楽しかったよ。……、嗚呼、そうだな。屍でも見ていくとするか」

爆煙の中を進む。

黒い何かがある。

蓮で間違いはないだろう。

だが、こういうことか。ソレは動いていた。

「！」

後ろに跳ぶ。

霧のような爆煙がはれていく。

中心に蓮が立っていた。

ゆっくりと立ち上がり顔を上げる。

そこには虚ろだが、真紅と蒼碧の瞳をしていた。

「なんだあの眼は？」

水晶体が動く。その瞳が龍を捕えた。
すると、巨大な殺気が蓮から放出されていた。ただの眼飛ばしなのに
躯が震えていた。

（罵伽な！これがあいつというのか！あいつは敵意はあってもこれ
だけの殺意はもったことなどない。あそこにいるあいつは一体誰だ
！）

ゆらりと動く。

屋気楼のように。

懷に隠していたナイフを抜く。
そして消えた。

「！」

キン！という金属音になる。蓮は後ろにいた。

「へえ、やるじゃん。あんたが初めてだ。これを受けたのは」

蓮の声だが、蓮ではない。

どちらかと言うと林昴を肉片に変えた方に似ている。

ゆっくりと回れ右。

ナイフを逆手に持ち、顔はニヤけていた。

「そう、だな。暇だし暇つぶしをしようじゃないか。聞きたいけと
があるなら聞け。答えてやる」

「聞くことなど沢山あるさ。だが、初めに聞くことがある。・・・
・お前は誰だ？」

「だろうな。ああ、いいぜ。俺は七瀬レンさ」

「それはあいつだろう？お前だ」

「意外に理解力ないんだな。だから、あいつは黒木蓮だろ？俺は七瀬廉。書かないと分からないだな。あいつはハス科の蓮だろ？俺はカドの廉」

「七瀬廉？」

「そ。．．．．．うん。そうだな。暇つぶしに話してやるよ」

ナイフをしまい、腕を広げ、腕を下げた。

何もしないという意味だ。

龍も武器をしまう。

頷いて話し始めた。

「とある一族に赤子が生まれた。その赤子は天才と言われた。両親、兄弟ともに心から喜んだ。赤子はすすく育った。ただ心が鈍いというか、寡黙だった。たがそれは問題ではなかった。なぜならその子は殺しの能力に長けていたから。一族にとってそれは喜ばしいことだった。だが、その子にとある思考が生まれた。それが殺人衝動。子は耐えた。だが、その衝動が耐えれなくなって人間以外の動物や植物を殺した。人間を殺さなかった理由は『自分』を保ちたかったからだ。しかし、そんなものは消えてついに．．．家族を殺した。そして心が壊れた。残っていたのは殺人衝動だけ。その子は最悪の殺人鬼になるはずだったのだがとある抑止力が働いた。それが紅蓮鬼神という魔力だった」

「なに？どういうことだ？」

「おいおい。人の話は最後まで聞くもんだぜ？まあ、いつか。説明してやる」

「伝承に依ると紅蓮鬼神は紅い鬼だった。だが軀の中に入れたことで鬼の体が耐えきれなくなった。そして魔力になったのさ。で、話に戻るが、魔力になった鬼神は鎖で殺人鬼の心を殺した。そして子は死んだ」

「何故そうなる？」

「体が生きてても心が死んでりや死ぬと同じだろ？俺の先入観だがな」

「その先入観は確かだろう」

「ありがとよ。続きに戻るぜ？」

「ああ」

「子は死んだはずだったが、そこに入ってきた物があってな、それであいつ、七瀬蓮が生まれた。そしてランドウのあいつに正義を教えた奴がいる。それが・・・」

「黒木孝良」

「ああ、そして今に至るってことだ」

話は終わったようで、深呼吸する廉。

未だに真紅と蒼碧の眼は発動したままだった。
龍は混乱したままだ。ならあの見聞録はなんなのか。

「ちなみにあの見聞録は黒木の偽装文だぜ」

なるほど『賢者』の黒木なら変えることもできるだろう。

「もうひとつ言うとな。俺とあいつの名前には由来がある」

「由来？」

「そ。あいつが何故蓮か？それはな、植物の睡蓮に理由がある。睡蓮は沼地のような汚い場所に咲く。そして水を綺麗にする。だからこの世界を救う為の存在それがあいつ。そして俺の「廉」にはな『ある事柄の原因・理由となる点』っていう意味もある。つまり、一族を滅ぼす原因の点。それが俺だ。ちなみに言うとなハスの花言葉は『遠くに去った愛・雄弁』だそだ。俺にも関与してるみたいだな」

「なるほどな」

「なあ、もういいか？さつきから殺したくてうずうずしててな」

いつの間にかナイフを構えていた。

今度は逆手ではなく純手。決意したように純白の槍を構える。

その瞳は最強の組み合わせの心眼と歪眼。

意識を集中させ、廉の右腕を見つめる。

空間を曲げて右腕を折ろうとする。

だが、すぐさま瞬歩で逃げる。むなしく空間だけが擦じれる。

「ハハ！無駄無駄！呪力眼を扱う俺には無意味！」

「ならこれでどうだ！」

顔面に向けて意識を集中させる。

右向き螺旋。だんだん曲がっていく廉の顔。

だが、焦る雰囲気でもなく逆に笑っていた。

蒼碧の眼の水晶体が靄がかかったようになる。

そして右向きの螺旋が、戻っていく。そして空間が戻った。

「馬鹿な！何故だ！」

「知らないだろうけどさ。呪力眼には二つ能力があるそれが観ると操る。理屈が分かれれば歪眼など意味もなし」

そして消える。

心眼によって先を詠むことで何処にくるかわかるが、問題は体がついて行くかどうかだ。顔面に向かつての切り。それを受ける。

「ほう。やるな」

蜘蛛のように空中を這う。

すれ違いざまにナイフを振るう。

心眼で捕えるが、体が動かない。

前に来ると見えた。その時には後ろにいる。

「天地皆無。獄に墜ちろ。……八纏衝」

目の前に現れて切り刻んだ。

腕が見えない。

残像に残り、腕が蛇のようにになる。

たった3秒で30力所は切られていた。

勿論龍にそれを避けれるわけがない。

切り刻む事に笑いが酷くなる廉。

「……こいつに人の心は解らないか」

ただボソリと言っただけなのに廉は止って悲しい顔をした。

「人の心は昔に無くなったさ」

「何？」

「言っただろ。心が壊れたって。その時に情も無くなった」

悲しい顔をした彼は歳相応の少年に見えた。

だが、一気に顔の表情が変わった。元の殺人鬼に変わった。

「奈落に落ちて山河を渡り業を成して罰を下す」

「は？」

「つまりだな。俺は生きていても死んでも罰が下る。生きてれば殺人罪なんていう法律によって罰がくだり、死ねば閻魔によって蘇りの罰が与えられる。なら俺はこの世界で行為として殺人を犯す。快樂を求めてじゃない。快樂ならどこぞの女を捕まえて犯せばいい。殺人を快樂と考えてる奴は三流だ。一流になりたいとか戯言じゃない。俺はただならなきゃいけないんだよ」

まただ。ときたま少年の顔に戻る。
何かを悔いるように。

「だから手加減はしない。

殺す」

そうして殺人鬼の顔に戻る。

そして分かった。蓮がこの感情をどんなに耐えていたか。

この戦争にいや、嫌のことを思い出さなければここまで苦しまなかっただろう。

どちらにしても、苦しめたのは自分自信。
なら……。

「俺が終わらせないといけないよな。蓮」

「無駄だ」

爆発したように消えた。

そして感じた。

自分はもう無理だと。自分はここで死ぬと。だが。

「ここで詫びれるなら、喜んで受けよう」

目を閉じた時頭に響いた。

「いいわけないだろ！……！」

「え！」

「うっ、ヴウウ、また、か。また邪魔をするのか！蓮！……！」

吠えて倒れた。倒れたというより立ったままからだをふとっとうな
なっている。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ないだろ」

ボソリとレンが喋る。

だが、龍にそれが聞き取ることが出来なかったみたいで、何も喋ら
ずただ黙っていた。

「いいわけないだろ！！！！この馬鹿！！！！！！」

別の意味でレンが吠えた。涙という水を瞳に溜めて。

「レ、レン？」

「いいわけないだろいが。あんたとの決着はまだ終わってないんだ。
このままあんたを死なせる訳にはいかねえ！」

咆哮のような訴え。それが龍には重く感じた。

そう、彼はまた蓮という少年を傷つけるところだった。

少年を助けようとしたことが結局自分から逃げるための抜け道で、
自分しか救わないと彼は実感したのだ。

ふと自然に涙が流れてきた。

「あんたは俺の存在意義だ。だからあんたは俺が倒す！」

オドの奔流。滝のように暴れるそれは竜にも見える。

（紅蓮鬼神を打ち破ったのになんて魔力だ！）

そつ黒木蓮には紅蓮鬼神なんて魔力はいらない。

彼自信の内なる魔力は計りきれない。その魔力は雅菜を凌ぐ。

「いいだろう。なら！返り討ちにしてくれる！！来い！！！！蓮！！！！！！」

互いのオドがぶつかり合い豪風となり大気を揺らす。

龍の手には槍。

蓮は腕を上げ構える。

「刀は抜かんのか？」

「俺達は魔導師だ。なら正当なやり方であんたを倒す。七瀬の力やスローダーの力じゃなく自分の力で」

「そうか。なら俺もそれなりのやり方でないと失礼だな」

槍を戻し魔眼を発動する。

第一と第三の瞳。

意識を集中し蓮の背後に歪みを創る。

だが、瞬時に避け、2つ目の歪みをルーンの剣で切断した。

「馬鹿な。何故分かった？背後は廉でも時間がかかったのに！」

「俺とあいつはミエテルものが違うからな」

「は？」

「説明は出来ない。だが、あんたの第三の瞳までは俺には効かないよ。開けよ。第四の眼を」

「生意気言いやがつて。．．．．いいだろう。見せてやるよ。禁忌に近い、第四を、な」

緊迫したこの空気をずっと見ている者がいた。それが2人とずっと一緒にいた雅菜。

「蓮兄．．．．龍兄．．．．．」

心配そうに見つめる。

「大丈夫よ。あの2人は殺しても死にはしないって」
背後に女性が立っていた。

「さ、桜さん！！」

黒髪の女性。龍の実の姉、沼地桜だ。

「ま、見てようよ。2人を信じてさ」

そうして2人は戦いを見つめた。

「行くぞ。修羅・開眼」

第四の瞳が発動する。
水晶体が無くなり、虚ろになる。

そして、龍の背後に巨大な瞳が現れる。冷や汗一つかかない蓮。その光景をじっくり見ていた。瞳から黒い霧が現れ、2人を包む。

「・・・・・・・・・・」

霧が晴れてゆく。

そこにあつた光景は、氷点下100。以下の氷の世界。だが、寒くはない。

なぜなら、ここは有るのではなく創られた世界。

世界の規則、理、秩序。

全てを無視し、関与せず、2人の周りにしかない特別な空間。それが禁忌の魔法とされている魔法。

「固有結界・・・・・・・・。まさか禁忌とはな」

「いや、これは禁忌でない。未完成な結界。一個人が創った物でなく、媒体を用いた結界。簡単に言うといエローだ」

「なるほど」

腕を上げる。

氷が砕け、武器や獣が生まれ、砕けた氷の場所からまた氷柱が生える。

そう、龍の固有結界の能力は創造。

「創造か。厄介だな。ルーンの剣じゃ負けるな。・・・・・・・・な
ら」

考えた後で決意したように頷いた。

空中に指を動かす。描くルーンは炎と創造。

右腕を横に広げ、手を開く。掌から炎の塊が生まれ、形を創る。現れたのは鳥の翼の形をした刀・左翼刀。更に硬化と軽量のルーンで本物の刀に近付けた。

「飛べ」

龍の一言で武器と獣は蓮に向かって飛ぶ。

片手剣で打ち砕いていくが、流石にキツイ。同じ順序でもう片翼を創る。

双剣。

防御を無くした速さの武器。

「双剣………双翼神………鬼神の聖刀か。………
………飛び狂え」

剣や槍、獣達が速度を増して襲う。

だが、円舞の如く。見事な体術と剣捌きで踊るように全てを打ち砕く。

打ち砕いた後、跳躍し、双翼神を背中であ差させる。

その姿は鴉の如く。龍の背後にある目に向かって飛ぶ。

「だいくえんげき
大翼円撃」

frisbeeのように軀を回転させ縦一文字に切り裂いた。

「うぐっ！」

右目を抑える。その瞳には血が流れていた。

「ちつ。原形を殺された。しばらく魔郷眼が使えないな」

「やっぱりか。あんたが使えないなら」

双剣を地面に刺す。

「The body is made of blades（身体は剣でできている）」

「まさか！させるか！」

縮地で近寄ろうとしたが、鎖が脚に捕まって動かなかった。

「鍊金行使・封鎖束縛」

そして脚に絡みついていた。

「しまった！！これだけは気をつけていたのに」

「絡み縛れ」

脚に絡みついていた鎖は龍の軀の全部に絡んだ。

「くっ！」

「As for the blood, as for the heart, it is steel by flame（血潮は炎で心は鋼）」

Retire from many devils and is unrivaled（幾多の魔を退け無敵）」

詠唱続ける蓮。

それをただ見ているわけにはいかなかった。

「刻め！風鎌！」

風で作られた死神鎌が蓮に振るわれる。

だが、効くわけでもなく。全て避された。

「There is never merely the tears without one regret（一度の後悔も無く
唯一度も涙は在らず）」

His person is always alone I
watch the moon in the hill of
the sword（彼の者は常に 一人剣の丘で月を見る）
Late; is similar, and do not
need to dream of transmigration
（故に転生を夢見ること も無い）」

「くそ！解ける！」

「The body was（その体はきつと）」

「“last arc limited works（刃と炎で
出来ていた）”」

火竜が3頭現れ2人を包み登ってゆく。

作られたのは龍とは反対の炎、獄炎の世界。

「固有、結界……」

「ああ。これが俺の魔力の基。おれは詠唱をもって世界に働きかけ結界を創る特別な禁忌の存在。だから、親父は俺を教会に置かずフリーにした。禁忌をもつ者には自由がない。研究材料として扱われる。それぐらいあんたも解るだろ？」

無言で頷く。

炎が飛び散る。火の粉が集まり刀や槍、櫓、斧などの武器を生み出した。

幾多の武器が生み出されてゆく。

「お前の固有結界の能力はまさか……」

「ああ。生産操作さ。パツと見ただけでは創造に近いけどな。ゼロから創るのとイチから作るとは全く違う。空間は武器を作る。俺はそれを操る」

腕を振り回す。

無数の剣が踊る。だが当ててはない。

「ラック」

断絶の詠唱で鎖が断ち切られる。

「さあ、勝負だ」

「そう言いたいところだが、生憎自分の不利な場所では戦わないと決めているのでね」

目を瞑り詠唱を唱える。

「消えよ。異様なるもの。封鎖駁嘆^{ふうさばくたん}」

固有結界が硝子のように消え去った。

「封鎖駁嘆……。どんな魔法も一つだけ封印する異術か。欠点は一人に対して一つだけしか出来ないことだったか？」

「ああ。だが、これさえ封印すれば問題ない」

「……。それは違うな」

「何？」

「あんたは封印するものを間違えた」

結界を張り呪文らしきものを唱え始めた。

「奈落を這いて山河を超えて、大路によりて判を下す、閻魔を絞めて炎獄を解く、鍊金の蛇を砕く槍、倍返し of 法典によりて万象の理を表す。……。万象環殺・炎獄剣！！！！！！」

火の玉が中を舞い、剣を作り出す。瞬く間に蓮の周りは無数の剣でうめ尽くされた。

「さあ、御見受けいたすは一万の剣。あなたは どうする？」

「まさかこんな奥の手があったとは。マズイな」

だが、焦ることはない。なぜなら……。龍の奥の手も残って

いるからだ。

「炎獄剣・時雨」

剣が龍の上へと移動し、銃声の音と共に雨となって振りかかる。

「心眼発動」

心眼で先詠み状態で雨を避ける。

「炎獄剣・旋風^{つむじ}」

次は螺旋状に龍を襲う。

「炎獄剣・火崩^{なだれ}」

龍に対して垂直に刃先を向け炎を纏い放たれた。

「シルラ・無限突」

矛盾複製で炎獄剣を突き弾く。

「やっと溜まった」

龍が笑った。蓮は右側の眉を上げて問うた。

「なにがだ？」

「魔力が。やっと開ける。伍鏡魔眼の中で禁忌に近い魔眼。……
・・第伍の眼・卅月」

炎の剣が風化してゆく。

蓮にはこう見える。

黒い靄が剣を包み、引き込まれて消えてゆく。

「どういうことだ？何故消える？」

「朧月の能力さ。朧月の能力は奈落。全てを奈落到落とす能力」

「奈落だと。それは禁忌のはず！」

「伍鏡魔眼ならならぬのさ。この魔眼は媒体にしないと発動出来ない代物だね。取扱い厳重注意ですんでいる」

「媒体？」

「ああ。俺達沼地一族に伝わる伍鏡魔眼の媒体は水晶体だ」

「水晶体？」

「そう。体の中で一番魔力が通り易い場所」

「水晶体か、ならほぼ封じたんだな」

「そういうことになるな」

蓮は掌底の構えで、龍を睨み付けた。

「体術か。まだ魔術が残っているだろうに」

「無駄だろ。あんたの心眼も、俺の呪力眼も魔術を見通すんだからさ。なら、残っているのはこれしかないだろ？」

「ふむ。そういうことか。なら相手しよう」

握り拳を作り我流の構えに入る。

間合いを詰め、右拳を顔面に入れる。

紙一重でそれを避ける。

呪力眼を使つてではない。直感というやつだ。

体術と魔術は根本的に違うというのはこういうことだ。

魔術なら「時間」を必要とする分避けることは困難ではない。だから魔術にとつて1秒というものは重要なのだ。

それに対して体術に必要なのは「時間」ではなく「瞬間」。コンマ1秒の世界で動く体術は先が詠めようと体が動けなければ意味はない。

だから、2人の魔眼は重荷でしかない。

なら、後頼れるのは直感でしかない。

右拳を避けることは分かっていた。

だから、第2撃目を用意していた。右脚を軸にした後回し蹴り。それを脇腹にあてた。だが、それを蓮の右の掌底が受けた。脚をかけるようにする。軸脚一本で立っている龍にとつて決定的だったが、脚を空中に投げ出し、体を回転させ蓮を挟んだ。

「なに！」

「ロールツイスト！！！」

挟んだまま体を回転させる。蓮の体も回転したまま落とされた。

「いてて、あんにやろ。あんな投げ技ありかよ」

「当たり前だ。打撃だけが格闘とおもふなよ。詰めが甘い」

だが蓮はニヤリ、と笑った。

「詰めが甘いのはあんたも同じだ。」

「なに！？」

「胸元、見てみな」

自分の胸元に視線を落とす。
そこには4本の直線状に焼け焦げた後と一緒に破けていた。

「なんだ、これは？」

「俺が炎のルーンが得意か知ってるだろ？」

「まさか……！！！」

「ああ。そのまさかさ。俺の特性は刃と炎獄。刃は固有結界。そして炎獄は……」

右腕を軽く上げる。その腕は炎に包まれた。

「な！」

「どこぞやの町では混血の一族がいるという。そして俺も混血。能力は『発火』。矛盾脱衣と同じ現象を起こす『略奪』とはまた違う。俺特有の先祖返り」

「混血か……。なら一つ聞く。お前はそれに勝てるのか？」

「まあな。伊達に紅蓮鬼神を身体に持ってないぜ？それに……。俺の混血は不完全だから」

「なに？」

「俺は何でも入れすぎているからな。廉に紅蓮鬼神、そして混血。全て混ざり合い、打ち消し合い、形を作る。だから優先順位が決まってくる。一番が廉。二番目に紅蓮鬼神。混血は空しく片隅にいる。だから力が弱い。俺には衝動がないのさ」

「そうか」

「いくぞ」

腕を振るう。

爆炎の爪。発火の恐怖。

幾多の恐れが龍を猟りだたせる。

恐ろしい、だが、打ち勝ちたい。

この恐怖を超えたら何があるのだろうか。

さあ！俺に魅せてくれ！

4本の朱の爪が低く入って90°に曲がる。

バックジャンプで避けるが、身体を半回転させ跳んだ蓮が降り下ろした。

「くっ！」

2回連続のバックジャンプ。それでも避けることは出来ず、紅い液

体が零れた。

「綺麗な朱だな。美味そうな色」

「まさか、お前……」

「ん？ああ、安心しろ。本能から来る欲求だ。比較的浅いから問題はない」

「そう、なのか？」

「ああ。後、気いつけねえと燃えるぞ？」

「は？」

どういうことか考えていると、急に熱くなった。

「燃える」

裾に火が灯る。

「！」

すぐさま燃えている裾を破り捨てた。

（一体、何が起きた！？）

「燃える」

龍の5mくらいから炎が渦巻き、4方向に別れ、螺旋となって向か

ってきた。3秒ほどそれを見て横に跳ねる。

「それで逃げれるとでも？」

腕を振り払う。

そんな簡単な動作で逆の裾に発火した。
裾を破り取る。

「熱っ！」

火傷を負っていた。
火傷の中に何か細い物が縛りついた後がある。それで確信できた。
それが糸であると。

「見破ったぞ。その遠距離発火をな」

「口だけなら何とでも言える。……燃えろ」

（もらった！）

懷に持っていた短刀を一直線に振るった。
キン、という音と共に何かが落ちた。

「これがお前の遠距離発火の正体。お前の師匠直伝の錬金術の糸。
違うか？」

「まさか見破られるとはな。だが、見破ったところで問題はないが
な」

「どついつことだ？」

「こついつことさ」

何かを潰すように握る。龍の隣りで爆発が起こった。

「遠距離爆発！？魔法か！？」

「いや、ただ魔力溜まりに発火させただけ、遠距離発火の能力は今や魔術でも出来るからな。つまらないさ」

「なら、注意すれば問題はないと言うことが」

確信した龍は刀を造り出し、突っ込んだ。そのままレイピアの如くついた。感覚はあった刃先が何かに当たったのが。だが、その当たったはずの蓮はピンピンしていた。そしてそこに刀身はなかった。

「無駄だ。こっちはマナを燃やして高温の火を作ることが出来る。しかも大気には酸素っていう媒体もあるからな。この温度は軽く摂氏1000°は超える。試したことはないけどな、頑張りや10000°。超えるだろうな」

「製鉄所より高いのか？ええい、厄介だ」

「ちなみにこんなことも出来るぞ？」

「そんなことされる前にやる」

太剣を降り下ろし、蓮の右腕を切断する。

「・・・・・・・・」

「これで少しは・・・って、何?!」

蓮の腕は炎となり切断された片腕を繋げた。
切断された部分は壊死などしていなかった。

「ちなみに俺に切断はきかんど。どうする?」

反則級的能力に龍はいきずまった。

物理的な物は全く効かず、魔術も燃やされ、灰になるだけだろう。
そんな怪物にどう対応すればいいのか。
そんなときだった。

蓮の異常に気が付いたのは。

「お前、さっきより顔、白くないか?」

そう。蓮の顔は死人のように蒼白だったのだ。

「気のせいだ」

強がる蓮だったが、息遣いも荒く、体がふらついていた。時折、顔を抑える。重度の貧血のように。

（貧血? 血が足りていない? まさか・・・・・・・・）

「お前、媒体はなんだ?」

「は?」

「それだけの能力だ。何か媒体が有るはずだ」

「まあ、ある、はな」

「お前の媒体、血だろ？」

「！！」

目を丸くした蓮を見るのは久しぶりだった。

「やれやれ。一体なんなんだ？その洞察力は？……確かに俺の媒体は血さ。血を蒸発させて熱を作る。その分血が足りなくなる」

「血を蒸発をさせて熱を作る……蒸気機関の原理か……」

「こいよ」

挑発する蓮。

だがその顔はもう戦えるようには見えない。

「旋律・神風」かみかぜ

風が吹き、さらされるだけで切り傷が生まれる。

それが風の魔術特性を持つ龍の秘技だった。切り傷が生まれても蓮には血が出ることは無い。

（そこまで蒸発させたのか）

「手、抜いてんじゃないよ!!」

蓮が消える。

動こうとした時には龍の首は蓮の右掌の中だった。

「なめてんのか？最後の最後でそれか？ふざけんじゃねえぞ!!!!」

「ふつ。ふざけてなどいない。俺もお前と同じでほとんど動けないのさ」

「……一緒にするな」

蓮の髪が赤くなってゆく。

蒸気が見えた。しかし、そこに生きている感じなど無いくらいに弱っていた。

それが分かっているにも龍もまた弱っていた。

「織螺旋・死炎の旋律!!!!!!」

龍の体が燃える。発火させたのは龍自身。

それだけではない。地面から炎の円柱が発生し、龍を包みこむ。

「ぐっ、あああああああ!!!!」

手を離す。黒煙を上げて龍が落ちる。

「かはっ、……………っ……………痛っう」

起き上がる。

（結界を燃やしただけか）

「あんなのありかよ」

「くそつ、完全に仕留めたと思ったのに……！」

向かう2人。

魔力もつき、体力もほとんどない。恐らく次が最後と覚悟を決めた。

「長かったな」

「いろいろとな」

「これであんたとの終止符をうたせてもらうよ。龍」

「望むところだ」

握り拳を握りいかにも殴るためだけの剛の構えの龍に対して、掌を開き、身体全体で動ける体勢の柔の構えをとる蓮。どちらが強いかわからない。

縮地で距離を詰めようとする龍に対して低い体勢で待つ蓮。右掌を放つ。だが蓮は更に体勢を低くした。

「何っ！」

「言つたろ？詰めが甘いつて」

龍の下方に潜り込み、掌底を構える。身を乗り出した龍が避けれるわけではない。

「忌流・掌底」
きりゆう

突き上げの掌底がみぞおちに入る。
その反動で空中に放り出される。

「がつ！」

蓮はもう龍の上にいた。

「二打掌」

右掌底が背骨に当たる。

「ぐっ！」

地面に叩きつけられる。体の節々に激痛が走る。

「ハアアア！！！！ラスト終了・圧迫掌底！」

ただの圧迫なのになんかの重さを感じる。それだけ弱っていたのだ。

「ハアハアハアハアハアハア」

「・・・・・・・・」

頭から血を流し、瀕死の龍の首もとを左手で鷲掴みにする。
その手は震えている。限界が近い。

「俺の、勝ちだ」

返事はない。右手を胸に添える。
吸い込み音が聞こえる。モーターが回転している音のようにも聞こえる。

「軌道・空圧掌」

砲撃の爆音とともに龍が螺旋を描き飛んで行く。
壁にぶつかる。そしてそのまま落ちて行く。

全く動かない。だが動けないのは蓮も一緒だった。
ヨロヨロな体を引きずるように歩く。

目が霞む。倒れたい。

だが、今倒れる訳にはいかない。

そう、自分の勝利を感じとるその時まで。

「ハア、ハア、ハア、ハア」

「蓮!!!!!!」

彼女の声が聞こえた。

まるで幻聴を聞いているかのように曇った声。

だが、わかる。彼女はそこにいる。

幻想でない本物のあの人。

「スローダ……………」

「大丈夫ですか！？ボロボロでないですか!!!!」

「ん？多分、大丈夫。それよりあいつのところまで連れてってくれな
い？」

「は、はい」

スローダーの肩を借りて龍の元へと向かう。

スローダーは小柄で肩は小さく、170cmを超える蓮には厳しかったが、側にいれるのだから問題はない。

龍はぐったりと大の字になって寝そべっている。死んでいるかのように静かだが、胸が上下しているので大丈夫と分かった。

「強いなお前」

龍の第一声。

蓮は反応しない。

「いつの間にか抜かれていたんだな」

「あんたが蓮君を甘く見ていたってことね」

「蓮兄、龍兄、大丈夫?!」

西の方向から2人の女性の声が聞こえる。その2人は蓮も龍もよく知っている人物だった。

「姉貴」

「雅菜。2人とも見ていたのか」

そう。

その2人と言うのは幼馴染みの白城雅菜と龍の姉、沼地桜だった。
「まあね、っとその前に雅菜ちゃん、蓮君の治癒頼める?」

「はい」

桜は龍の雅菜は蓮の治癒に向かった。治癒魔術を受けながら話を続けた。

「俺はそこまで強くないよ。あんたがいたから限界を超えたんだ。あんたってゆう『理想』がなけりや今ごろ廃人になってたろうから呪力眼だつてあんたの伍鏡魔眼と打ち合わなければ扱いきれぬ代物じゃない。固有結界もあんたじゃなきゃ存在すら分からなかったはず。判るだろ？俺はあんたという『理想』を超えるっていう信念だけで生きて来た。まだ強くなれる。俺もあんたも。いや、強くならなくてはいけないんだ」

「かもしれないな。だが、この先は何を夢見る？何を理想に今後を生きる？その理想を超えた今何を求む？」

「まだ、超えてない。俺の理想はあんたを超えることじゃない。信念だから。俺の理想は………あんたになること」

「何？」

「俺はあんたという『人間性』を自分に入れたい」

「だが、それなら………」

「ああ。俺っていう『人間性』が無くなるだろうな。だけど、その理想は叶わないから抱いているんだ」

その凛々しい表情に龍は微笑んだ。
いつの間にこれだけたくましくなったのか。

つい最近まで後に付いて来ては自分と同じことをして笑っていたあの餓鬼はどこに行ったのだろうか。

もう雛ではない。

なら手放さないといけない。

だが離れないだろう。

ならせめて立派な燕になったこいつに言葉を送ろう。

「お前に伝えたいことがある」

「なんだ？」

深呼吸で肺に溜まった熱い物を吐き出す。

青く透き通った水晶のような大空を暖かな眼差しで見つめながら言
った。

「It is used to have a dream as
for the person in pursuit of
an ideal

The person in pursuit of a dr
eam does not understand an ide
al

However, the person in pursui
t of an ideal can get a dream
The person in pursuit of a dr
eam finishes being a dream」

「!」

英語だ。

だが、解る。伊達に学年2位はとっていない。その言葉を聞いただけで涙が溢れてくる。

蓮はその塩っ気が入った水を拭うことはない。

心に響いた物は決して無くしてはいけない。

それが宝物になることが分かっているから。

「強くなれ。蓮」

「ありがとう……ひつく……ありがとう……龍兄」

治癒をとくに終えた桜と雅菜も龍の言葉を聞いていた。

「どういう意味なんですか？」

「ん？英語分らないの？イギリス英国イギリスにいるのにつて、ああ、対話の魔術か」

「はい」

「理想を追う者は夢を見つけれない。

夢を追う者は理想がわからない。

しかし、理想を追う者は夢を掴むことはできる。

夢を追う者は夢で終わる。

つて意味」

「深いですね」

「だね」

泣き終わったところで集まった。

「さて、帰るか」

「そうね」

立ち上がるが一人だけ様子がおかしい。

「蓮。どうかしましたか？」

「なんか・・・キツイ。うぐっ！」

「蓮！！！」

体を起こす。だが蓮ではなかった。

「やれやれ。やっと出れた。ったく。アイツめ。抑制力強すぎだ。一度捌かねえとな」

「廉！」

「貴様またぬけぬけと出て来たか！！蓮の身体をどうしようと言つか！！」

聖剣を抜く。一步でも踏み出せば、そく殺されるだろう。

「待て待て。今はどうこうしないさ。ただ伝言をね」

「伝言？」

「ああ。とりあえず感謝するよ。やっと自由を手に入れた」

「自由、だと？」

「ああ。こいつは紛い物でね。炎を食らっていた一族を先祖に持つ家計の器でさ。俺が死んだとき蓮の精神だけを引剥がして入れたんだよ。しかしながら、ほんの少し俺の意識が入っていてこの体で成長したのさ。そして育った今、俺は本当の身体に戻ることが出来る。つてことで、アバヨ」

「待て！」

時既に遅し。

廉は蓮との繋がり糸を切った。
もぬけの殻のように崩れた。

「蓮！！！」

スローダーが駆け寄る。

「ん、んん……」

ゆっくり目を開ける。

海のようなコバルトブルーが見える。
安心したスローダーの瞳に涙が溢れてきて、太陽の当たった水面のようになる。

満点の星空と月を背に月光によってとてつもなく綺麗だった。
傍から見れば映画のワンシーンのようにも見える。

「あ……スローダー……」

「はい。なんですか？」

「あ、い、いや。単純に見とれてただけ。．．．凄く綺麗だから．．．」

「くす。一体なんなんですか？それは。心配させといてそれですか？」

「ごめん」

「でも、よかった」

笑顔になる。涙は溜まったままだが。3人がよってくる。

「いいムードのところ悪いけどさ。そろそろ帰らないとさ。蓮君も龍もボロボロでしょ」

「そうですね。ならここから近いのは．．．．．ありや蓮兄の家だ」

「んじゃ、帰ろうか」

蓮はスローダーの龍は桜の肩を借りて戻った。

床に着く為に。

神鏡戦争は終わった。

だが、戦いは終わらない。

そう、この戦争には裏が、秘密が、残酷があった。

今、最終決戦が始まる。

最終章 理想と希望

現在時刻午前9時00。

学校はサボリ。

起きているのは桜と雅菜。他は3人は昨夜の疲れでまだ眠っている。

「暇だね」

「暇ですね」

お茶を啜る。テレビも点けないで誰か起きてくるのを待っている。

「無理もないか。昨日の今日だしね」

それに反応したのか湯飲みを起き真剣な顔になる。

「ねえ、桜さん」

「なに？」

お気楽な桜。

「廉の言っていたことだけど」

「それは皆起きてからでいいんじゃないかな？少なくとも一人は分かっていると思うよ」

「それはどういう」

襖が開く。

「二人とも起きていたのか」

「おはよ。龍兄」

「ああ。姉貴、俺にもお茶」

「はいはい」

「龍兄。昨日のことだけどさ」

「廉のことだろ？それは後だな」

「もゝ龍兄も誑たぶらかすうゝ」

拗ねたみたいに言った。

湯飲みを受け取り啜る。

その15分後に蓮とスローダーも起きてきた。スローダーは1時間前に起きていたみたいだが、蓮が起きるまで待っていたらしい。話を切り出したのは雅菜だ。

「で、昨日のアレだけどさ」

「それは片割れに聞こうじゃないか。え？蓮」

お茶を飲むのをやめる。

「知らんな」

「嘘つけ。おめえは顔に出るからな。すぐ判るぞ」

「実は廉のことを知ってからだ」

「折れるの速っ！」

まあ、しかたない、と言って話だす。喋る者はいない。

「廉を知った後に夢をみた。過去に戻った」

蓮の話はこうだ。

廉は昔からガランドウではあったが、殺人などの殺意など持っていなかった。ガランドウだから殺意はないのだ。もしあればそれは矛盾だ。だがガランドウだった彼になにかを入れたものがいた。黒いシルクハットに黒スーツ、黒マントを羽織った青年だった。その青年に会った後だった。

蓮が生まれ、殺人衝動が始まったのは。蓮は元々いたが、より強くなったのだ。

「そしてその男には見覚えがあつた。あれは間違いない。……
・・親爺おやじだった」

「そんな！何かの……」

「間違いはないだろう。少なくとも親の顔を間違える子などいない」

「続けるぞ。そして昨夜、廉は逃げた。自分の身体の元にな。つまり身体を生かしていた人間がいる」

「誰かわかるの？」

「師匠の錬金術をなめるなよ？すぐに分かった」

「御師匠さんって確か隣町の岬骸教会の神父さんだよな」

「ああ。歴代錬金術師の中で天才と唱われた岬骸こづがい教会の神父・岬骸こづがい幽威いゆゐその人さ。あの人は黒帝市と隣町それを結ぶ霊峰・傭我山おのがやま、鴛山おんやま、深山に探知系たんちしを張っているからな」

「たんちし？」

「漢字で書けばわかるさ。錬金術師が使える探し物を探す系さ。普段は砦や根城に張るものだが、並より少し上の術者なら隣町ぐらいなら張れるらしいが。だがそんな広範囲に張る術者など聞いたことない。それだけあの人は凄い」

「そういうこと。そして七瀬は鴛山に住んでいたからな。事件も関連している人間もすぐに分かったそうだ。ただ今戦争で昂に病院送りにされたらしいが」

お茶を飲む。冷たくなっていた。飲む気も失せたので話に専念することにした。

「で誰なの！その人って」

目を爛々とさせて雅菜が乗り出す。

深い溜め息をして、龍を流し見る。

「龍と桜さんの父親の沼地横臥だ」
おつが

場が凍る。

龍は驚愕で目を見開き、雅菜は固まり、スローダーは目を閉じ、桜は冷静だった。並の術者なら嘘と言えただが魔法使いクラスの診断、嘘と言えない事実。

「何故……親父が？姉貴もそう思うだろ。なあ、なんとか言えよ！！！」

取り乱す龍も珍しかった。そんな龍を尻目に桜は残酷に、かつ冷静に言い放った。

「本当だよ」

「！！！」

「私は幼い頃から本家本元にいた。疑問に思っていた地下に通じる階段。最近になってお父様の目を盗んで地下に言った。そこで見たのはホルマリン漬けにされた蓮君にそっくりな人間だった。多分それが廉の本物の身体」

「知ってて言わなかったのかよ」

「私も騙されていた身。廉を知ったのも昨夜だしね」

「そうか」

立ち上がっていた龍はゆっくりと座る。

「そういうことだ。この戦いには秘密があつた。裏で手を引く者もいた。俺たちは舞台の上で踊らされている操り人形だったってことだな」

お盆を持つて冷えに冷えきつたお茶を流し台まで持つていく。そのまま襖に手をかけて言った。

「蔵の手入れしてくる」

「蓮。私も手伝います」

「おう」

蔵の方角にあるいて行く2人。

「掃除してくるね」

駆け足で出ていった雅菜。それを見ていた桜が言った。

「皆に感謝しなよ龍」

「ああ」

暗い龍は頷いた。

「ふ、ふっふ、ふん」

陽気に鼻歌を歌いながら屋敷の掃除をする。

ハタキを叩いて埃を落とす。その時何かが落ちた。青い表紙の大きな何か。それはアルバムだった。

「誰のアルバムだろ？」

めくっていく。そこにいたのは無愛想な蓮だった。

「きゃ〜！かわいい〜！！」

襖が開く。龍だった。

「うるさいな。一体なんだというんだ」

「ね〜！見て見て！！小さいころの蓮兄！！」

「ん？ほ〜。相変わらず可愛げのないやつ」

「そう？私は可愛いと思うけどな〜」

沢山の思い出たちも急に無くなった。

「え？なんで？」

「貸してみる」

アルバムを取り上げる。いろいろ調べていて分かった。

「魔力をこめてみる。文字が浮かぶ仕掛けだ」

「あ。ホントだ」

徐々に浮き上がってきたのは詩だった。

『遠くへと飛んで行った渡り鳥　心を無くしたあの日に戻れず』

詩らしくない詩。なにかを想って書いたことは間違いなかった。

「蓮の字だな」

「うん」

「多分廉のことを想って書いたんだろうな」

「うん」

「悲しいな」

「うん」

そうしてアルバムを閉じた。また開けられる日がくることを信じて。2人して部屋から出てくる。バツタリと桜と遭遇した。

「あつ、いたいた」

どうやら遭遇ではなく探していて見つけたらしかった。

「どうかしたのか？姉貴」

「新たな情報だよ。すぐに居間に来な。蓮君たちには先に行ってもらってるか」

居間に集合する一同。緊迫した面持ち中、龍が訪ねた。

「なんなんだ。新たな情報って」

「……………今朝早朝に魔法協会から宝剣が盗まれたという情報が入ったわ」

「なに！？」

「宝剣が？」

「……………」

こんな時冷静でいられるのはいつも龍なのだが、今回に限り蓮だった。

関係ないからではない。彼は彼で『理想』を演っているのだ。なることが出来ないことを知っていても。

「一体誰が？宝剣はあの嚴重は降臨の間においてあるんだぞ。支部ならわかる。だが、本部のアレをどうやって」

「簡単だろ」

冷静な一声が周りを冷やした。

腕組みをし、冷たい瞳が辺りを凍らす。それなのに熱いモノを持っている人物。

「ウェールズの本部にいる人物を考えれば簡単だ。行ったことはないが美里から聞いた情報によれば、あの塔にいるのは最高幹部である雅菜と各幹部達それに長老・若長なんだろ？」

勿論、長老・若長が盗むとは考えにくい。ジジイどもは忠誠心が強

いと聞いているしな。雅菜も盗める訳がない。ずっと一緒にいたからな。ほら消去方でやると簡単だろ？残るのは幹部の連中。その中でも怪しい人物が一人いるだろ？」

「……親父」

「そ。それでさ。何を宝剣にしてたんだ？」

「エクスカリバーをモデルにした剣」

「エクス、カリバー……。参ったな」

「なにが？」

「あんたなら判るだろ？龍兄」

流しみる。龍の額にも冷や汗が流れていた。分かっていた。

「あの人はエクスカリバーの模型を媒体にエランドを増やそうとしている」

「そんなこと出来るの？」

「出来るよ。現にね、第3回と第7回の時に起こっている。異例と言えば異例ね。資料も残っているのよ」

「そうなんですか。でも一体誰を呼び出すつもりなんですか」

啞然となっていた。誰もが誰も目を見開いていた。終いには蓮が溜め息をつく。

「あのなあ、盗まれたのはエクスカリバーだぞ。鞘では無く剣のほうだ。なら共通されるのは唯一人。英国はイギリスの英雄。アーサー・ペンドラゴン王だろ？」

「アーサー・ペンドラゴンってあのー！」

「ああ。幾多の戦争を制し、カムランの戦いで傷つき、理想郷・アヴァロンに着き、命をたったイギリスの大英雄さ」

「そんな英雄を呼び出すなんて」

「それにいたっては問題ありません」

今まで静かに聞いていた碧き剣士が静かに言い放った。

「私達エランドは対立戦争の英雄達です。しかし、あの戦争は作り話。今でいうとフィクションと言うのですか？戦争の英雄達は実在した英雄を元に作られたのです。スパアーならばアイルランドのクー・フーリン、マジシャンならばマーリン、アルテミスならばヨハネスト・ファウストⅠ世。そして私はブリテンの英雄、アーサー・ペンドラゴン」

あたかも嘘のような話に皆疑った。だが、絶対服従の契約をしているエランドが嘘を言えるはずが無かった。

確かにあの戦争には疑問点も多いたところがある。一番の疑問点がエグナの死んだと言われる丘が表裏の世界の何処にもないことと、台所を決ったエグナの技の後がないということ。だがあの戦争が作り話なら納得がいく。

「だが、今度の疑問はあの著者はだれかということだな。アレは無著者無出版だからな調べてなければいかん」

「それも問題無しです。アレの著者はナナセ・カオス・ユーリアです」

「「「！」」」

ナナセ・カオス・ユーリア。

蓮の先祖にして最強の魔法使い。全ての魔法を扱えた唯一の翁。

「祖^{げんそじい}爺さんが書いた物か……。あのひとなら簡単か。なにせ『天才』だしな。やろうとすれば親父にも出来たんだろうか？あの人
は『賢者』だし」

「いずれにせよ俺達は賢者や天才、脅威の掌の上の駒だったってことか。ハハ。笑えねえ」

唯の手駒だった神鏡戦争の犠牲者たち。怒りを超え、悔しさしか残らない。皆が皆この現実^{げんじつ}に落胆している中ただ一人違う男がいた。

「別にいいじゃねえか」

立ち上がり笑顔を見せ、障子に手をかける。

「なら見返せばいい。決められた規則に従わなくても今回に限って誰も怒りやしねえよ。終わらせればいいんだよ。こんなつまらねえ死合いなんて……。もう誰も、誰も傷つかないようにさ」

そうして出て行った。何か誰とて近寄らせない何かをかもし出して。

それを見ていた桜は言い聞かせた。誰にかは不明だが。

「あの子は強い。全てを受け止めて、受け止めて尚それを制し、流す。あの子には私達には無いものがある。それは過去から来るものなのかは分からないけど、私達は絶対にあの子には敵わない」

「そんなことはありませんよサクラ」

「何故言い切れる？」

「あのひとは、あの人は弱いです。ですがそれを見せたく無いだけないだけなんです。だから受け止めるのではなく、殺してしまう。あの人に足りないのは心の拠り所なんです」

スローダーは蓮を追うように出て行った。

「・・・・・・・・・・」

二人の女は静かに座っている。

「アイツを一番分かっているのはスローダーみたいだな」

腕を組み瞑想めいそうしていた修羅がとどめを刺した。

昼間の街路樹を歩く。

小川のせせらぎが真冬に近付く気候を更に冷たくする。反対側の柳の葉が冷たい風に吹かれて踊る。賑わいが増える平日のこの時間に蓮は橋の手摺に腕をかけ、川面を見る。小魚達が跳ねて波紋を作る。

「・・・・・・・・・・」

日の光が川面を照らし、鱗を作る。

「ここにいたのですか」

麗しき姫君が歩いてきた。碧き瞳が優しく見つめる。

「探しましたよ。魔力を追ってですけど」

微笑むその姿は百合より美しく、タンポポよりも自由だった。

蓮の横に着き川面を見つめる。その暖かな顔を惚け顔で見つめる蓮。この少しの時間がいかに大切かを知りながらも彼は見ているしかない。言葉などかけることなど出来ない。

見とれるくらい彼女は美しいのだ。戦いの時の凜々しさも控えの時の儚さも彼女の魅力なのだ。

「スローダー」

「心地い風……。この街はいい所だ。出来るならこのまま貴方と。。。。」

「えっ！」

「くすつ。何でも無いですよ」

満開の花びらも顔負けの笑顔。更に加えて風が髪を流し撫でて美しさを倍加させる。たったの1秒のこの瞬間の画が脳裏に焼き付けられた。

「歩きませんか？ここも素晴らしいですけど願わくば歩きたい」

「ああ」

ただたんに川沿いを歩くだけなのに緊張していた。チラッと流し目で見る。穏やかなその横顔を凝視することができない。柳の下を歩く。葉が掠れて蓮を嘲笑うかのように笑う。自分が彼女をどう思っているのかは気付いてはいた。ただ言わなかっただけ。恥ずかしいのだ。彼女に対して好意を持っていることを話すことがこんなにも歯痒いとは思ってもいなかった。

今彼と行くこの道は一体私に何を与えてくれるのか分からないけどこれだけは言える。与えてくれるものはないけれど彼と歩むこの時間が私にとって一番大切。

私に気付かせてくれた側の彼。彼となら一緒に歩んで行けるかもしれない。いや、歩きたい。彼は私に助けられたと言うけれどそれは私にも言えることだ。この戦争は仕方ないことだと思っていた。だけど彼は口では言わないがこの戦争は間違っていると教えてくれた。

ありがとう

この一言を伝えるだけがこんなにも辛いなんて思っていなかった。

（歯痒いけど俺は）

（辛いけど私は）

（（この人が好きだ））

何も話せないままただ時間だけが過ぎる。
辺りは暗いどうやら日陰に入ったようだ。カッン、カッンと足音だ

けが響く。秘めたる想いを考えていて、背後の人物に気が付かなかった。

「よう。あんたらこんな所で何してる？」

「「！」「」

驚愕を隠せず振り向く。

見間違えるわけがない。そこには右腕を包帯で巻いた廉がいた。

「蓮と同じ顔……」

「そりゃそうさ。片割れが違う顔だったら変だろ？」

「そんなことはどうでもいい。何故お前が此所にいる！？」

「そりゃこっちの台詞だね。貴様らこそこんな路地裏になんのように……」

「何？」

辺りを見回す。そこは見たこともない裏路地だった。

「ここは……一体？」

「やれやれ。無意識のうちにここに迷いこんだのか？相当ヤバいんじゃないの？おたくら。ここには長くない方がいい。でなきゃ闇に精神喰われるぜ？」

片目だけ閉じてポケットに手をつ込む。

「何？」

「ここはアイツが創った世界だ。聖人が来る所じゃない」

「ならお前がいれるのは聖人じゃないからか？」

「いやあ、俺は精神だけの存在だからな。いても問題ないんだよ」

今度は両目を開け、両手を仕舞う。今まで思っていたことを聞いた。

「お前はこの戦争どう思う？ 廉」

「別にどうも思っていないさ。まあ一つ言えることは元先祖^{ジジイ}のせいで無駄な血を流しすぎてる。それだけだ。流すなら最小限でキツチリ。それが殺してもんだろ？

己を殺して一人前の殺し屋。己を殺し切れてないアイツは半人前さ。まあ、俺も人のことは言えないけどな。殺しきれなかったからこそあんなのに負けるんだけどな」

悲しい表情を洩^もらす。一瞬にして悟った男。

「廉……お前まさか……」

「ああ、そうそう」

一步跳んだだけで10mあった間合いが無くなっていた。廉の腕が腰へと伸びナイフポケットにあったナイフを取り上げた。

「これは俺のなんぞね。返してもらおう。だが安心しろ。地下宝物庫

に行けば秘宝が眠ってる。多分じっくり来るはずだ」

「お前……」

蓮たちの横を通り過ぎ歩く。何かを思い出したように顔を正面に上半身を斜めで振り向く。

「おい女。早く真名を思い出せよな。でないとあの王に負けるぞ？ 不本意ながら俺が主をやっててね。まだ手は出させやしない」

「私の真名は知っている」

「あんたのじゃない。武器のだ。その聖剣^{えもの}じゃ動きずらいはずだ。じゃあな、今度会う時は血で汚してやる」

暗闇の中に消える。路地裏は跡形も無く消えていた。謎を二人に残して。

先程の小道を抜け、来た道に戻ってまた橋に来ていた。だが、止まらずそのまま通り過ぎ隣町と街を繋ぐ大橋の歩道を渡り、三波町の大通りを抜け、海浜公園のベンチに二人は座っていた。

「……」

「……」

潮風が身体を冷やす。潮の香りは心を落ち着かせる。黙ったままの二人。夕陽が海に沈んでいく。そんな時だった。

「なあ、スローダー」

「なんですか？レン」

「廉のこと、どうおもう？」

「よく、分かりません。最近までは嫌なやつでしたけど」

「アイツは元々いい奴なんだと思う。多分、阿頼耶織あらいやしきによって狂ったんだと思う」

「アラヤ織？」

「人間の思想だよ。人間には五感や六感の他に八織が存在する。五感に値する眼識げんしき、耳織にじき、鼻織びしき、舌織ぜしき、一身織いしんしき。その上に存在する第六織目の意識。人間は気付いてここまでなんだ。その上に悪念の集結潜在力である第七織の末那織まなしき。最後が人が辿りついてはいけない織それが睡眠中でも深層において働き続け、審つまひらかに根源的な心である阿頼耶識。人間の奥深くにある織のことさ」

「よ、よく知ってますね」

「心理学を学んでるしな。それに理系で得意なのは生物学だし。でも、難しいよ人間は」

「難しい？どういう意味ですか？」

「どれだけ学者が心理、身体を学んだところでそれは見解にしかない。なぜなら人間は深くて分からないところが多い。学んでも学んでも謎が謎を呼び新たな疑問を生む。その度に学者達は時間を費やす。解けたところでまた新たな謎が出て来る。イタチごっこなんだよ。人間つてのは……。」

「クスッ、クスクス」

手の横で口を押さえ笑い始める。蓮にとってそれは意外でしかなかった。

「な、なんだよ。いきなり笑いやがって」

「クスクス、いえ、すみません。レンが真面目だからつい。フッフ。確かに人間は難しい。でもそんな人間だから面白いのではないのですか？人間は奇怪で面白い。だからこそ妖怪のようなモノノケに興味をもたれるのです。そして人は脆い。だから人は美しいのです」

「そんなもんかな？」

「そんなものです」

夕陽を背にする彼女は観音菩薩かんのんぼさつのように神々しくきらびやかだった。顔を赤くし、呆然と立ち尽くす蓮。不思議に思い、覗き込む。縮地を使い距離を離す。

「美事です。が場所と時を分かってほしい」

「あ、ああ」

「では戻りましょう。皆が待っている」

ゆっくりと海浜公園を後にした。

デートとは言い難いが、たった数時間の出来事は二人の思い出にな

ったことは確かだった。

時間は過ぎる時も過ぎる。神鏡戦争が始まって早二週間以上。色々
と変わった。関係とか人生とか。巡る々日々の中で人間は成長する。
そして子供達は大人に変わり、大人達は老いる。それを循環してい
るのが人間の一生。人はそれがつまらないと感じ、現実から逃げる
者もいれば感じながらもしつかりと歩む者もいる。現は夢か幻か。^{うつ}
そんなのはどうでもいい。大事なのはその現を楽しめるか、だ。少
なくとも彼らは楽しんでるだろう。楽しみつつも現実を哀しむ。
矛盾してはいるが。それが人間。人間は矛盾の生き物。業を求める
この世で最も汚らしく、美しい存在。壊れやすい生き物なのだ。

「結局学校を案内してやれなかったな」

「いいではないですか。私にとってはこの時間が重要なのですから」

「そうか。ならよかった」

家の前の坂道を登る。

門をくぐり中に入り向かったのは地下室。研究室を通り過ぎた奥の
奥。そこが黒木邸の宝物庫だ。ちなみに一回居間に入ったがその場
は戦場と化していた。戦っていたのは龍と桜。酒瓶やらつまみやら
が散漫していた。簡単に申すとハードな兄弟喧嘩だ。

「さてと、廉はここにあるって言ってたけど本当にあるのかよ」

「予測は出来ないのですか？」

「つくと言えばつくがなにしろここは親父しか触らなかったからな。
多分酒、煙草、非常食、宝物、資料の順であると思うがな。宝物と
資料は逆かもしれんが」

「何故酒と煙草が先に？」

「親父の好きな順」

「なるほど……」

奥へと進み宝物と書かれている棚に辿り着いた。呆れているのはスローダーだった。

「まさか当たるとは……」

「やっぱりな。酒、煙草、非常食、宝物だったろ？」

「はい」

廉の言っていたナイフを探すが一向に見当たらない。念のため他の棚も探す。だが掠りもしなかった。

「何処にあるのでしょうか」

「わからん」

真四角になっているこの部屋で探していない場所がある。そこが北北東の位置にある。資料の場所だった。

「まさかな」

資料の場所に行くとすぐにあった。マル秘の棚その中心にそれはあった。

「マジかよ」

手にとつてみる。廉の言う通りそれはしっくりきた。試しに刃を出し、空中に刃を振う。書いた文字は永劫。信じられないくらいに簡単に動いた。

「驚いた。こんなにしっくりくるなんて」

「何故このことを彼が知っていたのでしょうか？」

「さあな、言えることはこれでアイツと互角に戦える」

意気揚々とナイフを見つめる。それをなにかを訴える目で見つめるスローダー。二人は鍵となる宝物庫を後にした。

現在時刻午後9時。

戦場だった居間はきれいさっぱり片付いていた。今日あったことを皆に話した。

「なるほど。阿頼耶織に取り付かれた哀れな少年か」

「でもそう仕掛けたのは」

「そう。私達のお父様ね」

「どうするんだ？蓮」

「どうするもこうするもない。出来ることをする。それだけ。後のことは知らない」

「言つと思つたよ。なら嫌と言つても手伝わさせてもつぞ」

「龍兄」

「もちろん私も」

「雅菜」

「皆の問題だからね」

「桜さん」

決意が一致したとき急に襖が勢いよくあいた。

「話は聞かしてもらつたよ。情報員だけど協力させてもらつよ」

「お前だけにかつこつけさせるかよ!」

「美里! 駆! 何故ここに!? お前怪我は?」

「問題ない」

「私達はその色っぽいお姉さんに呼ばれただけ」

差したのは桜。

「彼女達も必要だと思つたからね」

「そうでしたか。ありがとうございます。来てくれてありがとうございます」
人とも」

「私達の中じゃん気にしないの」

「そうだぜ」

「一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「泊まるのか？」

「うん」

「もちのロン！麻雀しねえか！みんなで！」

顔から血の気が引き爆発した。後ろは後ろで龍、桜が嬉しそう。

「麻雀か。いいな。賭けるか？」

「賭けるもんなんてないくせに。雅菜ちゃん！お酒持つて来てー！
！飲み麻雀よ！」

「麻雀はしません。出来ないの。お酒は飲みますけど」

「じゃあさ。雅菜ちゃん私とトランプしない？」

「美里さんと？もちますかね？」

「持たせる」

「うおっしゃーーーー！蓮！牌持ってこーい！後雀卓も！！」

「ふざけるなーーーー！！！！！！」

結果、一位蓮、二位駆、三位龍、四位桜で蓮、駆の圧勝。

蓮と駆は1000点差だった。宴会もそそくさと終わり皆各自の部屋に行った頃、龍と蓮は庭にいた。

「なあ、蓮」

「なんだ？」

「これを幸せと言うのならいつまで続くと思う？」

「あの時間が幸せと言うのならいつまでも続くさ。結局出会いによって幸せは変わるし時間によって幸せは変わる。時間や出会いなんてものは運命なんだ。俺は運命なんてものは信じたくないけど実際は運命で決まっちゃってしまっているのかもしれない。阿頼耶織が人間の奥底に眠るものならそれは間違いなく運命を感じとれる唯一の織なんだと思う。廉は阿頼耶織に支配されているからね。運命を分かっちゃった。だからその運命から逃げるために殺人を犯した。アイツは物事を感じ易かったらしいけど、あそこまで酷くはなかった。ただど横臥や親父によって刺激され狂った。つまり彼も被害者だったんだ。話変わったけど、運命が俺の考える幸せ。哀れなのは廉。間違ってるかな」

「さあな。それがお前の考える幸せならそうなんだろう。よく考えたら幸せは皆違う。考えるだけ無駄だった。だが廉のことは俺もそう思う。同情はするよ。アイツがああなったのは親父のせいだからな」

「龍兄」

「親父は許されないことをした。断罪しなければいけない。同じ沼地の者として」

天を見上げる。無数の星達が地上を照らし、罪を問う。人は有能だが無能。人は人を裁き罪を償う。

「勝てるのか？あの人に」

「分からない。相手はあの『脅威』だ。幾多の猛者が挑み散った錬獄をたった三日で終わらせた。あの子は本物の化け物だ」

「・・・・・・・・」

「それでも勝たなきゃ駄目だ。もうこんな過ちを繰り返さない為に」

「大丈夫。俺たちは負けやしない。俺たちには仲間がいる。何もない平和なときはさつきみたいにドンチャン騒ぎになって、戦いになると助け合えるアイツらがいる。アイツらも強いからさ背中を任せられる。だけど廉や親父さんは孤独じゃないかも知れないけど一人なんだ。俺たちは3本の矢のようになれるさ」

「そう、だな」

まだ風に当たるということで龍は庭にいた。

天を見上げている。なにも考えない。ただ思ふ。自分たちの今後を。

「何瞑想してんのさ」

「姉貴」

「つらいかもだけどさ。戦うしかないよ。だってあんたはあの日から一步も動いてない。お父様の反感を買って本家から追い出された日から成長してない」

「分かってるさ。俺は俺の道を行くために俺を引き止めている者を破らないといけない。俺は恐れていた。変わることを。だけど恐れていただけじゃ意味ない。自分から動かないといけない。蓮から教わったこと。……改めて分かったよ。アイツがどれだけ強いかな」

「それは違うよ」

「何？あんたもスローダーと同じことを言うのか？」

「あの子みたいには言えないけどね。さっき話してたの。それでね、あの子は自分が強いなんて思ったことないんだって。自分はまだあんなを超えていない。超えることが出来ていないって。『龍兄は強い。止っているかもしれないけど歩き出せば追いつけない。自分が行くべきところを見つけたら誰も追いつけない。だから俺はあの人を追い続ける』だってさ。あの子の中では最強はあんた。だからちやんとしなよ」

「ああ」

「最後だね。これでやつと終わる。長い戦いもやつと。最終戦」

「向かうは最強の奮迅と天武の才である七瀬、アーサー王。対する

は魔術協会最強のチームか」

「まあそうなるね。あんたたち3人でさえ強いって言われてるのに前線の駆君とスローダーさんに情報員の美里ちゃん、補助・治癒の私。それだけで上位魔術騎士団を超える実力になる」

「相手は最高位魔術騎士団団長だけだな」

「大丈夫よ。大丈夫」

幾多の星々が光り輝く。その中に月が君臨し、世界を朧気に照らす。世界の一角で始まり、そして終わる。最終戦争の始まりの鐘の音がなった。

午後5時。

蓮たち一行は三波町の寺前にいた。膨大な魔力を感じ取ったからだ。

「悪いけどさ。廉とアーサー王は俺たちだけでやらせてくれないか？アイツだけは俺の手で終わらせないといけないから」

「無論だ。親父は俺たちで片付ける」

「ありがとう。死ぬなよ皆」

「お前もな」

また会うことを約束し、散らばった。

蓮とスローダーは正門にいた。5時だと言うのに辺りが暗い。たっ

た二人＋１の魔力で空は曇天と化した。

境内は火を連想させる赤で満ちていた。朱はあんまり好きじゃない。過去を思い出すから。

でも、挫けそうな時、悲しい時、絶望を感じた時俺の側には彼女がいた。高貴だが身近にいて、手をとってくれた人が側にいる。自分も悲しい過去を背負っているのにそれを感じさせない強さがある。だがそれは強さであり弱さ。辛かったはず、悲しかったはず、だから今度こそ終わらせる。醜く儚いこの戦争を。

「・・・不安ですか？」

「いや、お前と一緒にだから不安はないよ。・・・行くか」

「はい」

合計１０８段。長い石段を登る。待つのは栄光か絶望か。そんなことは誰も知るよしもない。

正門に立つ。石畳の先に２人悠々と立っていた。

「よう。待ってたぜ。俺の片割れ」

「廉」

漆黒の衣服を纏った廉。その隣で金髪で金と青の鎧を着た剣士がいた。イギリスの大英雄・アーサー王。

「アレがアーサー」

「彼の相手は私に」

「ああ。・・・行け！」

「はい！！必ずや貴方に勝利を！！！」

スローダーの跳躍と同時にアーサーも駆けた。

目の前には激しい切り合い。その戦地から少しずれた場所に2人は闘っていた。

呪力眼と呪力眼の詠み合い。ナイフとナイフの切り合い。戦いのスタイルは全く同じ。

「ハハハハ！全く鈍らない！やはり貴様にはその武器がピッタリか！！！」

「ケツ！ナイフを子供のように振り回してるあんたに言われたかぁないね！！！」

常人では考えられない速さで切り合う。

銀の閃光が縦横無尽に走る。命と命の削り合い。たまに掠る刃が肉体を抉る。鮮血が進み、辺りを真紅に染める。

（やっぱり上手いな。廉コイツのナイフ捌き。追いつくだけで精一杯か）

（実力はこっちが上のはず。それをな。全く不思議な奴だよコイツは）

致命傷はなかっただ切り合いが続いている。

しかし、まだ始まったばかりだ。

火柱が舞う。蓮たちの少し離れた戦地で二人の騎士は殺し合っている。

た。

全くの互角。外鎧は傷が一つもない。いや傷など着くわけがない。2人は人を越え神の領域に最も近付いた英雄なのだから。

「ハアアア!!!」

重みのあるスローダーの刃を意図も簡単に受け止め流す。反撃として剣を翻し打った。スローダーは受けるのではなく避ける。スレスレなのだが。

「何故他の武神を使わぬか。使用すれば我とて苦戦するかも知れぬぞ?」

「苦戦?冗談。貴方はわたしの原形。ならどつくるのかも承知しているはず。双剣は速すぎる。太剣は遅すぎる。隙を作るだけだ」

「……ふむ。一筋ではいかぬということか。面白い」

ふっ、と自然に構えに入る。熟練の賜物と言えるだろう。

「我はブリテンのアーサー・ペンドラゴン!ソナタに勝負を挑む!いざ!!」

「その勝負承った!いざ!」

「勝負!!!」

二つの刃が交差した。

それは唐突だった。

互角だったのに蓮が押されてきていた。決定付けたのは魔力。力を抑えるために半分近くの魔力を消費しているのだ。いつもの半分以下で戦わないといけない中、最高実力者の廉は強敵で短時間で決着をつけたかったのだ。何かに気付いたのか離れた。

「ふざけてんのか？お前。源祖返り。やらねえのか？紅蓮鬼神は死んで魔力になっちまったけどよそいつなら出来るだろ？強がるなよ。一杯一杯のくせに」

「・・・・分かってたのか？」

「当たり前だ。10年近くも一緒にいれば分かりたくなくても分かっちゃうんだよ」

「本当は被害が大きくなるからなりたくは無かったんだがな。・・・
・仕方あるまい」

目を閉じ、意識を研ぎ澄ます。

真紅の髪へと変化していく。蓮の身体の記憶が持つ特殊体質。発火の先祖返り。蓮はその上の発火の源祖返り。源祖返りは先祖返りの何万倍の力を発揮出来るという。

「やっと出て来たか。化け物」

「殺しを行為としてやっている奴に言われたくはないな」

「さてと行くかね」

駆けた。だが目の前には火の海が広がっていた。

「なっ！」

「やめておけ。お前では進むこともままならないはずだ」

「ちっ！」

ナイフを振るい空間を殺す。炎は消え、生まれるは惨殺空間。だが廉の体は炎の爪で燃えていた。一瞬で裂いたのだ。

（速いっ！）

「お主が遅いのだ」

突かれる。間合いを取り逃げる。

「どうした？逃げてばかりではつまらないだろ？殺しはお前の定義であり肯定のはず。逃げは否定になるのではないのか？」

「うるせえよ。時期に殺してやるよ。殺すならじっくりと痛め付けながら最後まで、な」

表情が変わり、紅と碧の瞳が敵を見定めた。

「ハアアア！！！！」

「フンッ！！！！」

剣と剣が交差する。打ち合い火花を弾かせ大気を揺さぶる。地面は

挟れれば跡形も無くなっている。

「くっ！」

「これで終わりか？おれの偽物。力を使う必要もない。つまらん」

「つまらないと申すのなら私の力食らうがいい」

剣が青色に光る。巻き荒れる旋風。

「たった一度の魔法武具を使用する気か？勿体ないと思うがな」

「これで決めれるなら本望です。こんなところに時間をかけている場合ではないのですから」

「なら私もそれなりの物で対応しなければならないな」

剣を高く上げるアーサー。剣は金色に光る。

「参る」

「こい！」

「信頼アクトウォールカされし不敗の剣————！！！！！！」

「約束エクスカリバされし勝利の剣————！！！！！！」

二つの大波がぶつかり合う。轟音と共に黄色と青の波は消え去った。

「相殺！？」

「当たり前だ。お前のアクトもわたしのカリバーも同じ物。どちらかが強いわけではない。そして……」

いつだろうか。腹部に激痛が走ったのは。暖かい赤い水が垂れ始めたのは。気付いた時には遅く、自分の腹部には細身の剣が突き刺さっていた。

「私にはまだ魔法武具がある。気は抜かないほうがいい。でなければこの様なことにはならなかったものを。我がカリバーの糧となるがいい」

「うあああああああ！！！」

刀身が光りスローダーを飲み込んだ。

アーサーが剣を抜き光が無くなったスローダーから血がまつた。

「去らばだ。英雄エグナよ。安らかに眠れ」

鞘に収め口を笑わせた。

二人の戦地から大分離れた処で蓮と廉は戦っていた。

劣勢。今の蓮には適格な二文字だ。呪力眼を開眼したことで廉が有利になっていた。源祖返りしたとしても魔力で有る限り呪力眼の前では無力も同然だった。

「そらどうした？さっきまでの威勢はどこに行った？」

「なろう。余裕ぶっこきやがって」

ナイフを取り出し刃を向ける。だが掠りもしない。

「ははっ、当りもしねえのか？ナイフならあっちのほうがましだな。源祖返りもその程度か」

「これを避けてからいいな」

廉の全包围頭上には炎で造られた跳擲槍が16本並んでいた。

「炎槍擲・十六矢」
えんそうてき

一斉に廉に向かい槍が放たれた。巨大な爆音と共に黒煙が辺りを汚す。魔力が途絶える。

だが、まだ何か薄く鋭い魔力がある。微かに煙が揺れた。

「アイツ……！！！」

歩いて来たのは廉。だが持っているものが違う。
日本刀。漆黒の刀だった。

「無駄だ。俺にはこのびんちやう板鳥・ホムツノサラムントラ焰蜥蜴刀がある。コイツが有る限り負けることはねえよ」

朧となって消えた。

「抜刀・朧月」

銀の閃光となって腹部を斬った。動きを見極めようと速さについていけなかった。

膝を折る。腹部の傷を治癒しようとも追いつかない。

（確かに傷は浅いはずなのに・・・）

「無理はしない方がいい。確かに物理的な刃は浅い。だが、魔力で創った刃は深い。神経系をも傷つける代物。避けることは愚か受けることも無意味」

死神の足音が近付く。
血の気が惹いていく。

「アバヨ。俺の片割れ」

辺りに血が飛び散った。

横に臥せるスローダー。剣を鞘に収める。二時の方角を向く。

「予想以上にかかってしまったな。速く廉の元に行かねば」

「ま、待て。ソナタを、行かせる、訳には、ハア、ハアいかぬ。あの人と・・・ゴフツ・・・約束、したのだ」

青き少女の剣士は傷ついた身体で剣を杖代わりによるめきながら立った。腹部から血が流れて鎧を赤く染める。アーサーはそれを見て鼻で笑った。

「フンッ、今のお前に何が出来る。そのように傷ついた身体では存分に戦えまい」

「いや、まだっ……だ。わたしはまだ……戦える！」

「お前が戦えても戦う武器がない。決定的だ」

「フフ……。アレがわたしの武器と思いか？ならそれは間違いだ」

傷が癒えてゆく。そしてスローダーの周りには3種の武神が存在していた。スローダーを守るかのように回る。

剣達は光り輝きだした。

「氷帝、炎帝、雷帝よ。ソナタらの力を解放し、我に新たな力を分け与えよ。愛する者を守ることが出来る力を与えよ！！！」

三つの光は一つとなり新たな刀を生み出す。それが戦乱を生き抜いたエグナの本当の武具。

神の領域に到達した秘宝。紅・焰ホムラノオウエントウ乃桜炎刀。エグナがこよなく愛した紅い漆塗りの日本刀。

「なっ！？」

「どうした？アーサー？怖じ気づいたか？」

「まさか。武者震いだよ」

「参る」

「来い！エグナ！！」

吠えた時だった。自分の身体から血しぶきが飛んだのは。

「く！」

音速の領域に到達しているアーサーの剣はスローダーに全く当らなかった。それどころか自分に傷がつくだけだった。

「ええい！忌々しい！！なら受けてみよ。エクスカリバーを超える呪いの力を――！」

エクスカリバーが黒くなってゆく。

「呪いの約束されし勝利の剣――――！！！！！」<sup>エクス
カリバ</sup>

「哀れだな。アーサー。国に滅ぼされし王よ」

鞘を投げる。暗黒の津波は消え去った。まるで鞘に取り込まれたように。

「何っ！どうゆうことだ！？」

「理想郷に辿り着いた貴様には分らんよ。辿り着いていなければ理解出来たかもしれないな」

「はっ？」

スローダーの姿が消え、アーサーの前に立っていた。

「安らかに眠るがよい」

紅の刀身が光る。

「これがわたしの求めていたものだ。世界の果てにある平和の楽園。誰もが夢見たユートピアだ」

柄をしつかり握り振り下ろす。

「エヴァン光輝く理想郷！！！！！」

鎧を突き抜け見事に入った。こうなれば助かる見込みはない。

「まだ贖うか。幾らお前が罪を許して貰おうとも世間からは認められることは決してない。それが分かっているが尚終わらせることが出来る我に齒向かうか」

「私は世界から見ればどうしようもない一人の女だ。だが、それでも私を必要としてくれる人がいる限り私はもがいてみようと思う。過去とか罪などどうでもいい。神鏡などいらぬ。ただ私が望むのは蓮がいるという事実だけ。彼以外は何も要らない。彼が教えてくれた。過去は過去で認めないといけない。大切なのは今を生きること。口にしなくても彼の行動から学んだこと。それをかみ締めながら私は行きたい。そう願っている」

「叶わぬ願いでもか？」

「それでも私は彼を愛している。それだけは断言出来る」

「クッ……あはははは！！全くだいい女に想われてあやつは幸せだな」

「下らんと言わぬのだな」

「言えるか馬鹿者。そんな幸せそうな顔をしていて下らんと吐けば私がつまらぬ男に成り下がるだけだからな」

アーサーの身体が透けていく。

終わりのも近い。光の粒となってゆく自分の手を見つめ溜め息を吐いた。

「やれやれ。時間か……。一時だったがこの世界を見れてよかった。また相手になろうぞ。それまで幸せでいるがいい。エグナ大帝よ。さらばだ」

そうしてアーサー・ペンドラゴン王は天空の彼方へ消え去った。儚い蛍のように。星達と共に闇夜に溶けた。

「一体何なのだろうな。お前という男は」

たった一言吐いて夜空を見上げた。闘いの戦慄が終わる鐘の音が身体奥底から聞こえた。

よろめき膝を折る廉。胸には浅く刺さったナイフがあった。

「まだ動けたか。貴様」

「悪いね。幾ら神経系を斬ろうとも回復しちまうのでね。伊達じゃないぞ。源祖返りは」

「それはおかしいぞ」

「何?!」

「あくまでもお前の源祖返りの能力は『発火』。『治癒』じゃない。よく考えてみる。今までお前は紅蓮鬼神の魔力で治癒していた。だが紅蓮鬼神は龍が殺し、お前の魔力となつて溶けた。深くいくとなら紅蓮鬼神は破壊の鬼だ。決して治癒の鬼ではない。なら治癒しているのは別の存在。勿論俺じゃない。俺や鬼神を凌駕する別の何かだ。それは昔の縁に係る物だな」

「それは、一体……」

「俺が知るか。お前の方が判るんじゃないか？」

「かもしれないけど、気付かないほうがいいのかもしれない。そんな予感がする」

「気付かないと前に進めないぜ？避けることが出来ない代物だ。……絶望か希望か。どっちでも良いけどな」

「行くなら彼女と共にってな」

「御愛好め」

ナイフを抜き、背後に回るが距離を放される廉。

その時驚いたことがあった。それは蓮が蓮自身に戻っていたことだ。本来廉が蓮に劣るということは有り得ない。有るとすれば紅蓮鬼神状態か源祖返りだけなのである。だが、今の蓮は廉と同等、いやそれ以上だった。

「どういうことだ？」

怒りと驚愕の混じった低い声。

「俺が知るか。でもな急に来たんだよ。呪力眼しか開いてないのにな」

「ほざけ！カスが！！！」

柊鳥・焰蜥蜴刀が刃を振る。鉄同士がぶつかる音が響く。柊鳥は二つの双剣の交点によって挟み止められていた。

「双翼神！！馬鹿な！それは固有結界でないかぎり造れぬはず！？なのにな何故！！！」

力と力が押し合い剣同士が震えていた。廉と蓮の顔は30cmにも満たない距離で睨みあっていた。

「お前が創り方を俺に教えたんだろうがっ！！」

弾き飛ばす勢いで後ろに飛ぶ。

そして前方で双翼神を合わせる。翼を作るように。

「それとコイツの造り方も教えてくれた」

「何？」

「我が身体カゲノオオミカミの記憶に残る源祖。火久乃大神よ。我が剣を媒体としその姿を我に見せよ！汝の敵は我の敵。その牙をもつて敵を裂くがい。我はそれを手助け致す！！」

炎に包まれ、次第に炎は双翼神を包みこみ、溶けていく。刃は赤く

光り、柄は一つになる。そして一つの形を作る。蓮は嫌味な笑みを浮かべ。言い放った。

「御開帳・・・・・・・・紅・焰乃桜炎刀！！！」

炎は消え、蓮の手にあるのは廉と同じ型の日本刀。だが色は朱に染まっていた。

「紅・・・・・・・・焰乃桜炎刀・・・・・・・・。栞鳥つがいの番の太刀を何故貴様が？」

「やっぱり夫婦剣だったか。恐らくこれが治癒の元。魔力、妖力、霊力どれをとっても一級品。最高だよ。コイツは」

「だが紅の防御の主は吸収！治癒じゃない！」

勢い良く吠えた。オマケに刀を右下・4時の方角に向け振り下ろした。その反応を見て微笑んだ。

「やけに詳しいな廉。俺はコイツに触らないと何も解らなかったのにな。・・・・・・・・何を知っている。？・・・・・・・・言え・・・・」

冷たく言い放つ。その表情もいつもより冷たかった。

今の蓮を表すなら『絶対零度』がお似合いだろう。それに影響されたのか廉の態度や表情が冷たくなる。

「紅と栞鳥は世界で唯一の日本刀の夫婦剣でそれを所持していたのは一人の『大帝』と呼ばれる剣士だった。その刀も脅威だったが一番恐ろしかったのは鞘だ。紅と栞鳥を収める物だ並大抵じゃあない。紅の鞘はあらゆる物を吸収し、蓄え、剣に力を与え、補佐する。そ

れに対し、柢槁の鞘は万物全てを弾き返す主人を守る。そして二つの鞘が一緒に存在するとき初めて『治癒』が起きる。それに対し刀は反発しあった時、使用者を傷つける。大帝は夫婦剣で無敗だった。だが、ある日、柢槁が盗まれた。柢槁を盗まれた大帝は大戦で破れ死んだ。ここまでくれば判るだろ？俺の片割れ。4つの武神を扱い、一つの夫婦剣を扱った人物」

「エグナ・カルデフィート」

「そう。エグナが破れ、武神は大帝と共にブリテンの墓に埋められた。夫婦剣は西洋と東洋の大陸へと渡り、鞘は二つとも消えた。柢槁は短刀へ紅は双剣へと姿を変えた。賢者と脅威は世界の平和のために探した。そして見つけた。夫婦剣と鞘、それを扱える一族を。だが問題があった。それが一族には乖離性同一性障害を持つ子がエグナの血を濃く持っていた。だから分けたんだ。俺たちを。一人には短刀を精神のみになった一人は精神を双剣に移し、鞘の力で身体だけを生かした源祖返りの末裔に双剣を入れた。双剣は魔力となし、禁忌になった。だが脅威は悪を成そうとしていた。だから賢者はそれを止めようとした。結果は賢者の惨敗。死が分かっていた賢者は子を見守る者を探し、その者に預けた。そしてこの世を去ったって訳だ。納得したか？ええ？」

右の眉を上げ、聞いた。

「なるほど。そんなことがあったか。だが今は関係ないな」

左足を半歩前に出し、上段の構えに入る。

「ああ。そつだな」

右脚を直線になるよう下げ、刃を上に向け、顔の横に構え、突きの体勢に入った。

「終わりにするか。廉」

「同感だ。この世に同じ人物はいらない。なあ、蓮」

蓮の回りには螺旋の旋風が。廉の回りには螺旋の炎が生まれた。

「「参る！」」

廉が弾けた。

「カグノカズチ火精靈竜の剣！」

「コノヨノオワリ天空龍牙神殺斬」

「その技はエグナの！！！！」

「散れええええええええええ！！！！！！」

蓮の刃が廉を貫く。だが、血はでない。その変わり魔力が翻弄する。廉は崩れ、血に臥せる。

「一つ聞かせる。なぜ俺はお前を捕えることが出来ぬのにお前は俺を捕えることが出来る？」

近寄り、見下す。

「俺とお前は見えてるものが違うんだよ。お前は魔力の流れと視界

に入っている魔力を動かすことが出来る歪みを見ている。俺は視界に無いものも見る。だから背後だろうが、地中だろうが、別空間だろうが“空間”が或る限り俺は魔力を捕える」

「ケツ。結局お前のほうが化け物じみた魔眼を持っていたってことか」

苦笑い。

今の廉に唯一出来る抵抗で強がり。魔力もほぼ空になりつつある。だからくたばる前に聞いておきたいことがあった。

「貴様何を望む？」

「悲しみが少ない世界」

「何を求める？」

「愛する者と共に人生を歩くこと」

「何を嫌う？」

「虚無」

「それらは叶わぬ理想。それでもお前は追うのか？」

「叶わないのは承知の上。大切なのは理想を持って生き、その想いを絶やさないこと。自分と仲間。そして愛する者の為に」

鼻で笑う。

「それは綺麗事だ。愚かな偽善者が持つ……願いだ」

「構わない。今を大切にしたいからな」

「ふん。………最後だ」

声の質が落ちる。もう長くはない。朽ちる前に本当に聞きたいことを聞く。

「その眼で……何を見る？」

「……生と死の境界」

目をかっぴらいて笑った。無念などなにも無いかのように。

「くたばれ。糞が。精々もがき苦しむがいい。………幸せにな。片割れ」
あこぼれ

瞼を閉じる。魔力は尽きた。息をすることも無い屍。彼を繋ぎ止める物は蓮との魂の糸。

「向こうじゃ幸せになれよ。廉。……さよならだ」

ナイフを取り出し呪力眼でしか見えない糸を見る。涙を堪え、齒を噛み締め断った。何も無くなった彼は光となりて逝った。逝く末は天国か地獄か。そんなものは知らないが、蓮は願う。

「彼に幸あらんことを」

涙を流し、冥福した。風が彼の髪を流す。涙と共に彼を癒す。

彼の足元には一本のナイフと一組の夫婦剣が転がっていた。

蓮とスローダーに別れを告げ、他のメンバーは反対側にいた。

見事な庭園の中に悠々と煙草を吹かしつつ座っている人物がいた。

それが今回の黒幕、龍と桜以外見たことない人物。最高位魔術騎士団団長にして戦闘部門幹部、龍と桜の実父、沼地横臥。龍たちの正面500m近く離れて隠れている。

「よう。やっと来たか待ちくたびれたぞ。龍、桜」

龍たちに気づいたようで、にこやかに笑って此方を振り向いた。

「私達に気づいたというの？速すぎる！」

「これくらいは予測できたよ」

そう言つて龍は横臥の前に跳んだ。

「久しいな。親父」

「よつと。．．．そうだな。我が息子よ」

腰を上げ、ポケットに手をつ込む。煙草はほとんど無くなっていた。

「嘘付け。今まで俺の事を息子と思ったこともないくせに。．．．
・今までどこにいた？ここ半年近く協会にすら帰ってないそうじゃないか？」

「もう一人の息子とな。・・・旅だ」

笑顔で煙草を噴出し、軽やかに言った。

「廉のことか？」

「ああ。てか、俺がここにいる理由しってるんだろ？ここに来たってことは？」

「ここに何があるのか知らないがな。ここの本堂に用があるんじゃないのか？」

「正解だ。正確にはここの仏像にようが、な」

「仏像？そんなものに何の用がある？」

「仏像の持っている経にようがある。その経はあのノア一族ですら恐れをなして避けた魔経よ。世界を破壊できる『救い』ではない経をな」

「・・・・天解経か」

「おうよ。あいつも蓮と戦えばどうなるかわからんからな。一応よ一応」

「ちっ、結局廉も信頼されない駒ってことか」

眼鏡を外し、戦闘態勢に入る。懷から何かを取り出した。それはリボルバーだった。

「古代戦慄回転式拳銃か。そんなものが効くとも思ったか？」

「気休めにしかないだろうな。だが何もやらないよりはマシだろ？」

方眉を上げる。

古代戦慄回転式拳銃は実の銃弾もしくは魔力で作った弾つまり魔弾を撃ちぬくわけなのだが銃身が回転するたびにその威力を挙げる魔具。マグナムなどは非にならない威力なのだが横臥にしてもそんなものは玩具にしかない。

引き金に指をかける。

「ロックオン
標的捕捉」

銃身が回転し始める。風を巻き起こし、巻き込む。その小ささからは考えられない轟音を鳴らす。

「ダブルアクションだったかそれは。だが、当てることが出来るのか？お前は槍、もしくは剣専用の修行しか受けてなかったはずだが？それなのにシングルをすつとばしてダブルか。難しいぞそれは」

「五月蠅い」

引き金を引く。銃弾が勢いよく横臥にむかって飛ぶ。音速を超える銃弾を軽々とよける。それを予測したように2発目が飛ぶ。それも避けられ3発目。飛び魚のように地面を跳ねて避ける。40を超える運動神経とは思えないほどに。

「どうした！当たらんぞ！？」

「龍兄、どいて！」

雅菜が飛び出してきた。

「イグニション！！！！！」

その数12。3種の雷が落ちる。

「天ノ裁キニ悶エヨ。我ハ天地ノ姫巫女也。雷神ノ怒リ汝ニ与エル
！」

「古代最上級呪文！」

「晴天ノ調・業雷！！！！！」

直径15mの雷が横臥に直撃した。

「今のが竜リウですら一撃で倒し得る神雷か。晴天なのに前触れもなく
落ちるとは……いや晴天でないと落ちないのか」

白煙が視界を鈍らせる。だが分かる。白い世界に一つだけの黒い陰。

「そんな！」

煙が薄れて行く。

羽根が横臥を包みこんでいた。中心に横臥が立ち、周りだけ抉られていた。電気の残りが波となり大地を走る。

「天照あまてらす之守護符。天の裁きなら天の守りを」

どうだ？見たか？と言うような表情。

手も足もでないようだ。が手はまだあった。

龍達の1km後ろで物静かに爪を隠す狙撃者がいた。本来なら前線として立っているはずの駆だった。駆の所属は戦闘部門射撃専門特講部。つまり銃を専門とする部隊。駆は中でも短銃から狙撃銃まで扱う実力者。

この黒帝市は上級者の中でも上の者がいるので協会からも厳重注意とされている。ちなみに危険度は7/10。イギリス、スペイン、アメリカに次ぐ第4位。スコープで敵を捕える。

（距離1k、南西の風、風力2。普通に撃つても支障は無し。）

PGM U l t i m a R a t i o（魔力弾丸用補正済）を構え補足する。ボルトを引き弾を、込める。狙いを定め、引き金を引いた。風の魔法補正^{エンチャントスキル}を用いて弾の速度を上げる。その速さ時速1000k。螺旋の風を巻き起こし、刃を生む。マッハに近い弾を横臥は難なく避けた。弾の方向から敵を探しているようだった。

「くそつたれ！！！」

小声で叫ぶ。

今度は方向を変え、木に向かって撃つ。弾はバウンドし結果的に横臥に向かう。跳弾。対象物とは違う方向に撃ち壁などに当て、弾の進行方向を変え、対象物を狙う高等技術。だがそれも避けられる。

「あんにやろう！！！！！」

最大弾倉数の7発を打ち切る。

（なんて野郎だ）

弾を込め直す。

（銃撃が終わった？打ち切ったか）

「狙撃者か。スナイパー 姑息な手を使うじゃないか。ええ？」

「奇襲じゃないと駄目だと思ったんだがな。奇襲すら無意味か？」

組立て式の槍を取り出し組立てる。中国の武人が使うような槍だった。

「家宝の方天櫓まで扱うか。一杯一杯と言ったところだな」

懷から短銃を取り出す。

（デザートイーグル！？なんちゅうもん持ってやがる！）

弾を込めている途中で見えた。彼は千里眼能力者だった。

込める手に焦りが見える。龍が駆ける。横臥の指がトリガーを引く。だが龍は屈することなく銃弾に向かった。確實だった横臥の弾は何かに弾かれた。龍は隙を突くように方天櫓を突き出した。

「甘いな」

横臥は後ろにいた。背中に拳を置いた。

「寸頸」

「がつ!!」

ドン、という爆発音と共に背中に衝撃を受けた。血を吐き、50m近く跳んだ。

「あつ……がつ……つ痛ッ……」

痙攣しているかのように震える。

「龍兄!!」

「龍!!」

雅菜と桜が飛び出す。雅菜は龍を守るように前に立ち、桜は治癒を開始した。雅菜は片腕を天高く上げた。

「来ヤレトコシエ闇。雪ノ息吹ヲイザワン。我ハ氷ノ女神也。終焉ノ業火。大地ヲ焼キ天ヲ乖離。森羅万象全テヲ包ミ込ミ汝ノ糧シ死ヲ招ケ。我ハ破壊ノ王也。光ヲ滅スル牙。世界ヲ碎ケ!!!!」

氷が炎が風が闇が一つとなり、球体となって雅菜の掌に集まる。球体は雅菜の掌の上で渦を巻く。その正体を知っていたのは龍一人だった。

「禁忌・混沌の門か!？」
カオスゲート

「これぐらいしないと殺せないから」

「禁忌か……。雅菜ちゃんじゃないと使えない技か……」

「六芒星ノ型・開ケ！混沌ノ門！！！！」

渦を巻いていた球体は六芒星の頂きの場所に別れた。六つに別れた球体は拡大し、孔あなを開けた。

「破滅ノ吹雪・連雀豪れんからじゅう」

孔一つ一つが回転する。回転した孔から剣、氷柱、炎を纏った飛礫が現れ、マシンガンのように放たれた。大雨のように横臥に降り注がれた。その後、雅菜の目の前に魔方陣が現れ、孔たちから光の線が現れ、魔方陣の中央に集まる。ビュオー、という音と共に巨大なレーザー光線が横臥に向けられた。

「終わったな。いくら化け物とは言え、アレではタダでは済むまい・・・だがなんだこの違和感は？」

肌を刺す妙な空気。無風であるのに判る何かの流れ。暖かくもなく、冷たくもない。そう、これは。

（魔力の波動！？）

「皆逃げっ・・・！！」

気付いた時は手遅れだった。

「流動寸頸！！」

目には見えない魔力の波が津波のように押し寄せる。速さ故に避けることは不可能。桜、雅菜、龍は直撃を受けた。

「がつ!!」

「あああああ!」

「きゃあああああ!!」

3人は地面にバウンドし、倒れた。息はまだある。終始見ていた美里は駆け出した。今もまだ戦ってる蓮の元へ。

カツカツ、と足音が聞こえる。

顔を上げたのは龍。横臥は見下した。無様な息子を。

「哀れだな龍よ。これが力だ。お前では一生辿り着くことは出来ない神の領域だ。」

「くっ、糞があ」

「先ほど駒の魔力が消えた。……所詮七瀬の天武も棄て駒だったというわけだ」

「オメエ、アイツのことどう思ってた?」

「騎士^{ナイト}……の駒」

「なっ!」

これがこの人の誠の姿。闇の、漆黒の心を持った殺戮者。これが自分の実父。そう思うと涙が出てきた。

「嘆くがいい。この世はこんなものさ。裏切り裏切られ、信じる仲

間すらない。それが条理。信頼？絆？友情？馬鹿馬鹿しい。それはつまらぬ理想だ。そんな綺麗事は棄てるがいい。この世は条理と不条理。条理を棄て不条理に生きることです。平和を造る」

「・・・それは、破壊、だ」

「そうだ。破壊を持って平和を造る。あの堅物のように生産することです。平和を得ようとは片腹痛い現実だ」

「だがそれでも・・・俺は貴孝さんを尊敬する。お前は廃^{はて}ろ。横臥」

「言うだけなら簡単なのだ。だが、見るこの世界を。あるのは憎悪、憤怒、邪悪。希望や理想は花のように散るだけ。なら消えても誰も怒るまい」

「憎悪や憤怒があつたって人はこの世界に生きることを決めた。希望を追って」

睨み付けるだけで動くことはない。
^{デザートイグル}愛銃の銃口を龍の頭につける。

「哀れだな。我が息子よ」

（終わったな）

瞼を閉じ、覚悟を決めた時だった。

「何勝手に腹括ってんだ！！！」

銀の閃光が龍と横臥の間に割り込んだ青い鎧姿。金髪をなびかせ、悠々と佇む英国騎士。

「大丈夫ですか？ 龍」

「す、スローダー」

黒い陰が目の前に現れ胸ぐらを掴む。黒い陰は説教するかのように叫ぶ。

「テメエ！ ふざけんじゃねえ！！ 勝手に死ぬなんて許さねえ！！
！ いいか！ あんたが死んでいいのは俺に超えられた時！！ あんたが・・・理想を超えることが俺の行動原理！！」

そこにいたのはボロボロになった蓮だった。

蓮は胸ぐらを放し、横臥に向く。

「俺の行動原理は死んでも守る！！！」

「愚かな。死んでは行動原理も無くなるというのにな。その矛盾、打ち碎いてくれる」

拳を地面につける。

「流動寸頸」

地面を砕く音と共に衝撃波が皆を襲う。

「無駄だよ。横臥。幾ら魔術を使っていないとは言え、大気には魔力がある。俺には見えないとは言っても俺には術がある！！！」

脇に挿してあつた黒刀を構える。

「あれは！」

「七瀬流・雪月花」

居合いだつた。波動はドライフラワのように音も無く散つた。

「何故だ！」

「ああん？何故ってそりゃ使い主が近くにいるからだろ」

横臥は訳が分からないような顔をしている。溜め息が自然と出る。

「鈍いなあんた。………駆！任せた！！！」

後ろに跳ねる蓮。それと共に駆の声が木霊した。

「合点承知の助！！大封印・第六起点！天の鎖！！！！！」

六角形の頂点に魔方陣が描かれ、鎖がその姿を現し、横臥を縛る。

「魔牛ミノタウロスを縛った鎖さ。幾らあんたでも解くことは厳しいだろ？しかも暴れれば暴れるほど締まる補助魔法付き」

蓮達の反対側から駆が歩いてくる。横臥の横を過ぎるとき流し見て嘲笑つた。びくともせず目を瞑つたままの横臥。

「？」

「遅い。時間かかり過ぎた馬鹿」

「これぐらい我慢しろって。気付かれずに魔方陣書くの大変だったんだぜ？本来なら賞讃者だろ」

「いや」

龍が暗く冷たく答えた。

「あの男は気付いていたさ。少なくとも駆にはな。天の鎖もわざと受けたにすぎない。蓮もこれが詰めとは思っていないのだろう？」

「まあな」

「マジで！？俺、ちとショック」

「時間が稼げればよかった。その点から考えれば天の鎖は最良だな」
左足を軸に背後にいるスローダーに向く。
左手に持っている黒刀を突き出す。

「これはお前のだ。だから返す。檣橋と焔。二つあって本当のお前なんだろ？」

「・・・・・・はい」

凜々しくなるスローダー。檣橋を受け取り横臥に向かって歩き出す。すれ違った時だった。

「ありがとう」

穏やかな清流のような声だった。

「ああ。どういたしまして」

振り向き横臥と対峙した。右手を上げ命令した。

「契約に従い我に従え！・・・行けスローダー！あの野郎を切りふせろ！」

「はい！！」

蒼と銀が入り交じった閃光が跳んだ。本来の力を得て目の前の敵を討つ為に。

「私を切り伏せる？ふん。戯言を吐かすな。刀が二本になっただけの果てた剣士など敵ではない！」

拳を地面に突き付け魔力を拳に溜める。その膨大さに旋風が巻き起こる。

「流動寸頸・悶絶一門」

悶絶一門。一カ所に魔力を送り込み、狙った場所より強大な波動を起こす横臥最大の体術。だが、紅と槇橋がそろったスローダーの前では無力同然だった。彼女は幾多の戦地を駆け抜け、紅・槇橋番ノ刀があれば無敗を誇る大剣士なのだ。

「やれやれ。このような技でしか出来ぬとは。失望です。これなら

我が主のほうが無断強い。ソナタのようなただの武人が一わたしスローダー・ナイト《わたし》に勝てると思いか？」

二刀を前で交合わせ×を造る。

「雪月花」

そのまま刀を振り下ろした。硝子と共に魔力を破壊した。

「ば、馬鹿な。幾ら破壊の黒刀でも悶絶を滅するなど！」

「それは違う。我が刀は生成の白刀と破壊の黒刀で一つ。私の意識で滅することも蘇生することが可能。双刀の鞘が無くとも・・・貴殿に負けることはない」

「鞘が欲しいのか？」

「出来れば、ですが。アレがあって初めて私になる。しかし、そこまでは求めません。それに鞘はこの世にはもう現存していないでしょう」

「お前の鞘ならある」

「は？」

スローダーの間抜けな顔は新鮮だった。

「そんなはずはない！あの鞘は！」

「お前の鞘ならここに^{ある}ある」

拳を握りしめ胸板を叩く。

「お前の鞘はこの身体を生かすためにこの身体の中に入れられた。今はもう魔力となつて形を失い、取り出せなくなっている。だが、安心しろお前の鞘は俺が造る。龍兄、雅菜、馭。暫くこの身あんなたちに任せる！」

「おう！」

「任せて！」

「了解した」

三人は蓮とスローダーを背にし、武器を構えた。

（こいつらの背中……暖かいな）

そう感じながらも、魔方陣を展開し、連想した。

（イメージするは英雄の鞘。魔力を持つてイメージを再現。理の中で肯定。因果を乖離し構築。長い年月を獲て構成。原子を織り成し中を構造。過去より能力を再現。構造構築を凌駕し年月を翻しここに……）

「幻想をもつて鞘と成す！！！！」

生まれ出るは紅と蒼の鞘。英雄エグナが持っていた武神の一つ。黒刀・板橋、白刀・紅、天武の鞘。この三種の神器が揃ってエグナ、いや、スローダーは完璧になる。

「受け取れ！」

鞘を放り投げた。鞘は回転しながらアーチを描く。スローダーは掌で回転を抑えつつ受け止めた。

（ありがとう。蓮、貴方が私の主でよかった。貴方がいたからこそ私は私でいられた。この恩今返さなくていつ返す！約束したこの闘い必ず勝ち取ってみせると。だから私は蓮の為、自分の誇りの為に……）

「私は命を賭けて貴殿を倒す！！！」

「賭ける必要なんてない。コイツの実力は分かったはずだ。お前なら負ける分けない」

「そう、ですね。しかし、私一人では不安だ。協力して下さいませんか？」

優しく微笑む。恐らくもう見ることが出来ない彼女の笑顔。その光景を明確に記憶に残した。二度と忘れないように。

「もちろん」

スローダーは紅と檼檣を天高く掲げ、交差させた。蓮は氷帝の剣を造り出し、同じように掲げた。

「馬鹿め！そんなことをして何になる！！皆消してくれる！！！」

拳を地面に……。付けることが出来ない。いや、それ以前に身体

が動かないのだ。よく見ると魔力の線が地面を這っていた。

「！」

線を辿れば線の頂点に龍、雅菜、桜、駆、美里が12時、2時、5時、7時、10時の方角に立っていた。

「伍芒・織封神、おりかみ檻守。幾多の魔、邪、人の精神を封印し、動きを制限する極東の秘術。あんたを動かす訳にはいけないのね」

「あんたの負けだよ横臥。仲間のいないあんたに初めから勝目は無かった。いや、少なくとも廉はあんたの仲間だったろうさ。そんなアイツを捨てた。その時点であんたの負けさ」

「貴方は協会わたしたちの鏡でした。しかし、法に背いた。覚悟は決まっていますね」

「お父様、あなたは道を謝ったのです。その過ち、もう取り返すことは出来ないでしょう。……。さようなら」

龍、蓮、雅菜、桜の順に想いを吐いた。

最後に7人同時に敵意を表した。

「「「「「「「お前は無に帰れ！！横臥！！！！」」」」」」」

「LAST GAME」

蓮の冷たい一言。氷帝の剣を空中に放り投げる。腕を交差させ、紅・柁嶋を身体で隠す。

「コノヨノオワリ 天空龍牙神殺斬」

「セカイノハジマリ 天空龍牙神殺斬」

見事な円を書きながら落ちて来る氷帝の柄を取り、掌に溜めた魔力を刃と共に突き出した。発せられた魔力は長槍の形を成した。

スローダーは抜刀のように切り伏せた。つがいから生まれるは刃の津波。モノクロノームで別れた津波は突きの魔力を中心とし、螺旋状に纏わりついた。強大な魔力の塊は横臥に衝突し、轟音を発生させた。

辺りにある物を薙払いながら。流石の横臥も煙を身体から発たせた。倒れる。息はまだあった。

「とどめをさすのは俺たちではないからな」

アイコンタクトをとる。

（あんたが行け）

（すまん）

龍は横臥の側によった。

昔と比べ変わり果てた父親を見つめる。いろんな体験をした。思い返す。最後に浮かんだのは、家族が笑い合っている遙か昔の風景。何時からだろうかこうなってしまったのは。だが、もう引き返すことは出来ない。最後に実の父親に慈悲をかけた。

「最悪な父親だったけどさ。あんたがいたことでここまで来れた。皆にあえた。それは感謝している。けど、あんたがやったことは許されることが出来ない過ちだ。その罪、自分で償ってくれ。俺や姉

さんはあんたが兜卒とそつの天に逝けることを願っているよ」

造りだした。短刀を構える。

「アバヨ。親父」

その心臓にナイフを突き刺す。塵になってゆく横臥。魔法界で罪を犯した者の成れの果てだった。完全に塵になる前に言った。

「それは無理だ息子よ。私が逝くのは奈落だよ」

嫌味な笑顔を残し消えて逝った。横臥のいた所には新たな緑が生えていた。幾多の罪を犯した一人の男の罪滅ぼしなのかもしれない。

「お父様は……いえ、何でもないわ」

朝日が昇る。傷を負った7人の戦士は何を思っているのだろうか。勝利と別れを意味する黄金の光。7人は噛み締める。それぞれの想いを秘めながら。そしてその中でより深く思う蓮とスローダー。雅菜は蓮たちに話かけようとするが、龍がそれを首を振って制す。

「2人にしてあげよう」

「……うん」

「いや、いいよ龍。あんたと雅菜ちゃんは側にいてやんな。あの子達を支えて上げたのはあんたたちだからさ。私たちは先に帰ってるよ」

「それじゃ行きましようか。美里なんかもうんな遠くですよ」

指を差した遠くで美里がスキップしていた。指を差されたことに気が付くと手を振っていた。

「ありやま。速いね」

駆と桜も歩き出す。

「帰ったら飲もうか！！！」

「ハハハ……。付き合いますよ。飲み過ぎないでくださいよ」

などと雑談をしながら帰って言った。2人して見送るが声をかけられて振り向く。

「帰ったのか」

「ああ」

太陽を背に蓮とスローダーは立っていた。

「お別れだねスローダー。色々辛かったけど、楽しかったよ！忘れない貴女のこと」

少し照れながら告げた。

「はい。私も楽しかった。雅菜には相談を頼んだりとお世話になりましたね。ありがとう。私も忘れない」

「……………うん」

目頭に涙を溜める。それを人差し指で掬ったがどれだけ掬っても目頭の涙は溜まったままだ。

「蓮が世話になったな。始めはこのようなか弱い少女で大丈夫かと思っただ、しっかりと大役をしてくれたな。感謝する」

相変わらず素直ではないが、どこことなく優しさが籠っていた。

「礼を申しあげるのは私の方です。貴方のような素晴らしい師に出会えたことは幸福だと思っています。ありがとうございます」

「ん？ああ、そうか」

頬を人差し指で掻く。

「あー龍兄い、照れてる」

「なっ！馬鹿！うつさい」

「フフフ」

微かに微笑み蓮と向き合った。

「もう、逝くんだな」

「ええ。貴方が神鏡に願いを叶えて貰ってからです」

「え？ああ、神鏡な。でも何処にあんのかしらねえや」

少し悩む。

「神鏡ならあるよ」

横から伝えられた。雅菜だった。

「何処に？」

「ちよつと待っててね」

瞳を閉じ、両腕を広げ大空に舞う鳥のようになった。

更に、彼女から光が現れ、青白い光の球体が雅菜の頭上に上がる。その球体は人の姿を成し神々しい女神となった。その姿を呆気からんと見ていた龍は一言発した。

「……神鏡……」

「神鏡！？この女神様が！ウソオ！！神鏡って手鏡みたいなんじゃないのえの！」

女神を指挿し目を丸くした。

「神鏡は元々オーディンの妻の持ち物。この人はオーディンの奥さんだよ」

「マジで！？」

驚いている所に頭上から声が聞こえた。

『ソナタが今度の勝者か？』

驚愕していた蓮が真剣になる。

「ああ」

『全て見ていましたよ。雅菜カノジヨの中で。貴方のような人は始めてです』

「かもな」

『フフ……。それではソナタの願い叶えてあげましょう。さあ、申しなさい。勝者であるソナタの願いを』

蓮は皆を見る。それぞれの反応をするが、皆の目はお前の好きなようにしろと言っているようだった。

最後にスローダーを見る。その瞳は優しく、微かな微笑みは女神のよう。そんな彼女は優しく頷いた。

『で、ソナタの願いは？』

「俺の願いはもう叶えることは出来ない。昔、親父が生返ればいいなって思ったけど、親父や神父の爺さんが言ってた。蘇らせることは死者への冒瀆だ。確かに残された者は辛いかも知れないけど、それでもそれを乗り越えなければならんって。なら俺はそれとおりにしてみる。それを背負って生きていくよ。屈するかもしれないけど俺には仲間がいる。こんなに素晴らしい仲間が。だから恐れない。……。俺の願いは……。彼女達エランドを解放しろ」

「なっ！何を言うのです！蓮！」

一番動揺したのはスローダーだった。いや、スローダー一人だった。スローダー以外の面々は予想していたらしい。

「そんなたった一度しかない神鏡の願いを私達の為になどと馬鹿げてる！！それこそ私達への冒瀆だ！エランドはこの戦争の為に生まれた物だ。戦うことが宿命とされて……」

精一杯力説しているが耳に通すことなく話を続けた。

「彼女たちはあんな無意味な戦争を体験して、今もこんな下らない戦争の為に闘っている。そんなの可哀想だろ？彼女たちも被害者なんだ。もう十分なはずなんだ。彼女たちの願いを叶える訳でもなく、ただ物として扱われる。それなのに報われないなんて嘘だ。もう、許してもいいはずなんだよ。これは俺の我儘かも知れないけど、でも、それでも彼女たちは解放されるべき人たちなんだから我は願う。……契約に准し、我は請う。彼女たちエランドを解放してくれ」

誰も止めることはなかった。ただ一人スローダーは泣いていた。悔し涙が嬉し涙かは彼女の表情を見ればわかる。笑っている。それで十分だった。泣きながらだが確実に蓮に聞こえるように言った。

「仕方の、ない……人だ。……ありがとう」

それを見た神鏡は頷いた。

『法に従い、我、勝者・黒木蓮。ソナタの願い、承り、叶えよう。エランドたちをこの神鏡の轍から外し、神鏡戦争を終戦とする』

女神によって大気は賛同し、辺りを、いや、世界を金色の光で包ん

だ。そして金色の光から歩いてくる陰が三つ。それは見覚えのある姿だった。この戦争で散ったスピアー、マジシャン、ホースライダーだった。

「えっ？なんで？」

「ただいま。雅菜」

「こりゃあ驚きだ」

『蓮の願いはエランドを解放すること。ですから、バーサーカー及びデストロイヤーなどの危険分子以外のエランドを解放しました。更に今回はプレゼントで常時実体化、貴方たち主と同じ寿命をあげました。死ぬときは仲良くと言うことです。さて、わたしの役目も終わりましたね。これでやっと休むことが出来ます。感謝しますよ蓮』

「いや、感謝するのはこっちだ。ありがとう」

笑顔のまま女神は黄金の光と共に消えた。そうして実感を得た。長かった神鏡戦争も終わりを告げ、対立戦争と共に幕を下ろした。多くを犠牲にしては来たが、何かとても大事な物をえることが出来た。そんな清々しい朝を迎えた。

10人は寺に別れを告げ、安息の地へ脚を運んだ。人の中には必ず闇がある。その闇を克服してこそ意味を成す。だから忘れないでほしい。辛く崩れそうなとき仲間を頼むということ。そうすれば彼らのような幸せが待っているはずだから。神鏡は心からそう想う。わたし

最終章 理想と希望（後書き）

次の話で最後になります

エピソード migratory bird 光り輝く渡り鳥

その後、俺たちはちゃんと学校に通うことになる。

暦は2月。最上級生は進路も大体決まり、決まっていなかった人たちもゼンター試験へと勤しんでいる毎日だ。

我らが沼地龍は横臥の後任としてイギリスに留学することが決定されている。表向きでは海外留学となっているわけだが。そんな自分も龍兄の推薦後任として新生徒会長になる。と言っても副会長に美里。会計に駆と恭子。書記に涉と久美と言う一年生が入り、生徒会はTHE・魔術会になっている。ちなみに久美も涉も魔術師ということとは後に知ったことだ。副会長はもう一人いる。それは……。

「こらー蓮ー遅刻するよー！生徒会が遅刻したら面子丸潰れだよ」

遠くのほうで美里が叫んでいる。その傍らには先日自分たちの正体を話し、

「やっぱり？そんな感じした」

とあっさり流した大物の恭子がいる。

「放っておけ。あんな奴」

「龍兄い。それじゃ可哀想だよ」

「大丈夫。アイツに可哀想とか同情かける必要ないよ」

「そう、ですね！」

「ふざけんな！ 駆！ 龍！ 雅菜！」

3人して駆け出して行った。

「なるー！ なめやがって」

「いいではないですか。いつものことです」

横から聞こえる清流のような声。 きめ細かい細髪の女性。 スローダ
ーである。

あの一件以来彼女たちエランドは普通の人として生活している。 ス
ピアーはマジシャンと共に教職員となっている。 スローダーは年相
応に編入試験に合格し俺たちと同じ黒帝学園の副会長として通って
いる。 ちなみに3人の頭はずば抜けてよく、苦勞はしなかったそう
だ。

今でも想う。 辛いからこそ、仲間を信じるべきなんだと。

「蓮、皆が待っている。 行きましょう」

「ああ」

俺は、いや、俺たちは進む、愛しい人と頼りになる仲間と共にこれ
から先どんなことが待ち受けようとも進んで行こう。 素晴らしい未
来を夢みながら、皆の理想郷にいつかみんなと共に辿り着く日まで、
愛しき人と歩いてゆく。

風が舞う。 開け放した窓から肌寒い風が入り、出しっぱなしのアル
バムをめくる。 止ったのはみんなの笑顔の写真と字余りの一つの詩。

『渡り鳥私の元に帰ってきた新たな光り翼貯めて』

FIN

エピソード migratory bird（光り輝く渡り鳥）（後書き）

皆さん、「ブラットオブゾディアック」いかがでしたでしょうか。
私がこの小説を書こうとしたのは約2年前にfateをやってから
です。とてもおもしろいと思い、type-moon作品すべてを
プレイしました。暇な時間があれば書いていたもので完成に長い時
間をかけてしまいました。

皆さんに楽しんでいただき、type-moon作品を少しでもプ
レイしていただければ幸いです。

この作品になにか意見があればぜひ書いてください。
では、次回作でまた会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1516f/>

ブラットオブゾディアック

2010年10月9日06時39分発行